愛知県東海市

平成 28 年度

畑間遺跡発掘調査報告

2018 年

東海市教育委員会

愛知県東海市

平成 28 年度

畑間遺跡発掘調査報告

2018 年

東海市教育委員会

１　２地点全景　大田川旧流路一帯と木田丘陵地を望む（西から）

２　方形区画溝群と大量出土銭Ｂ（南西から）

巻頭図版２　大量出土銭

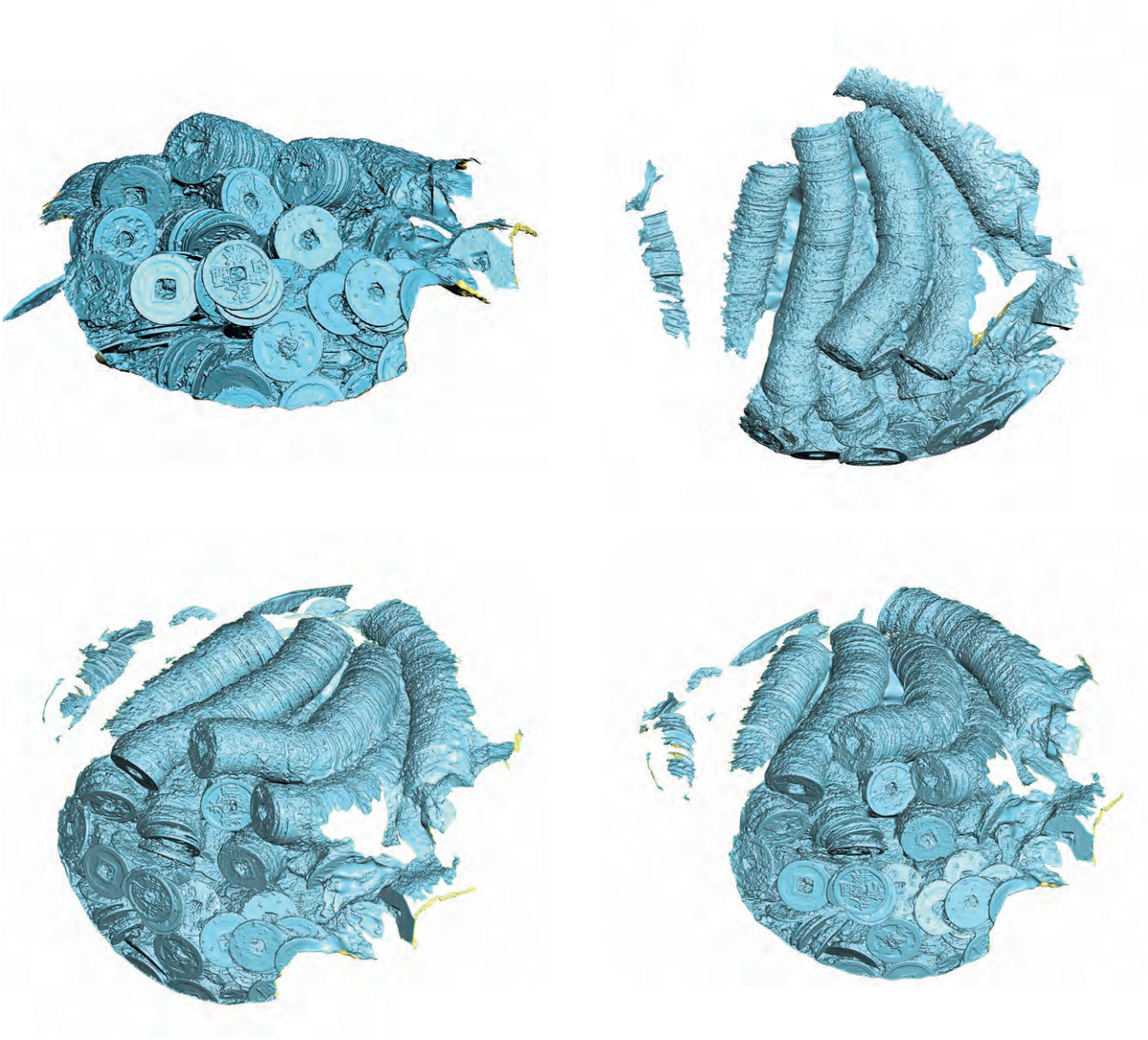
１　大量出土銭Ａ（南から）

２　大量出土銭Ｂ（西から）

1　大量出土銭 A 壺内部の銭貨

2　大量出土銭 B 壺内部の銭貨

1　大量出土銭Ａ壺内部の銭貨（３次元計測によって銭貨のみの陰影図を作成）



2　大量出土銭Ｂ壺内部の銭貨（３次元計測によって銭貨のみの陰影図を作成）

巻頭図版5　大量出土銭の壺と独鈷杵

1　大量出土銭の壺

2　独鈷杵

序

伊勢湾に面した知多半島西岸の付け根に、愛知県東海市は位置しています。はるか昔には、あゆち潟と呼ばれた遠浅の海が広がり、その沿岸には多くの先人たちの暮らしがありました。現在、あゆち潟はわが国有数の工業地帯へとその姿を変え、海との関わり方も漁業から工業へと変わっていますが、本市にとって昔も今も海との関わりは切っても切れないものがあります。

こうした海との関わりの中で形成された先人たちの暮らしの跡は埋蔵文化財という形で現在も残されています。

東海市では名古屋鉄道常滑線太田川駅を中心とする区域を中心市街地と位置づけ、平成４年度から土地区画整理事業を実施してきました。教育委員会では、本事業区域内に所在する埋蔵文化財について、平成１１年度から記録保存を目的とした発掘調査を実施しています。

本書ではこの土地区画整理事業に伴う平成２８年度の畑間遺跡における発掘調査成果について報告します。平成２８年度の調査では、中世の大量出土銭を２基確認することができました。発掘調査による出土例は県下初であり、今後の研究の進展が期待されます。

今後、本書が既刊の報告書と合わせて地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

なお、調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成３０年３月

愛知県東海市教育委員会

教育長　加　藤　朝　夫

例言

1．　本書は、愛知県東海市大田町に所在する畑間（はたま）遺跡の発掘調査報告書である。

2．　本調査は東海太田川駅周辺土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、東海市教育委員会が同事業施行者である東海市長から依頼を受け、平成 28 年 5 月 18 日に株式会社アコード名古屋営業所と業務委託契約を結び、「畑間遺跡発掘調査業務委託」として実施した。

3．　現地調査は、平成 28 年 6 月 8 日から平成 29 年 1 月 23 日まで実施し、遺物洗浄・注記等の 1 次整理作業は現地調査と併行して実施し、平成 29 年 3 月 28 日に終了した。

4．　遺物実測等の 2 次整理作業および本書の作成は、東海市教育委員会が株式会社アコード名古屋営業所と業務委託契約を結び、「畑間遺跡発掘調査報告書作成業務委託」として実施した。

5．　報告書作成業務は平成 29 年 5 月 26 日から開始し、平成 30 年 3 月 30 日に本書を刊行した。

6．　発掘調査面積は 1239.4㎡、各調査地点の面積は以下の通りである。

　1 地点＝ 225.0㎡　2 地点＝ 222.5㎡（西区）・353.2㎡（東区）3 地点＝ 135.2㎡

　4 地点＝ 135.9㎡　6 地点＝ 74.2㎡　7 地点＝ 83.8㎡　8 地点＝ 9.6㎡

7．　現地調査および整理作業は東海市教育委員会（社会教育課主任宮澤浩司・主事補安津由香里）監督のもと、中村毅（株式会社アコード調査技師）が担当した。

8．　現地調査における測量業務および遺構図作成は星英司（株式会社アコード測量士）が担当し、測量助手の稲垣耕作・田邉好（株式会社アコード測量助手）がこれを補助した。

9．　遺物整理作業においてはナカシャクリエイテブ株式会社の協力を得た。

10.　本書は東海市教育委員会監督のもと、中村が編集した。

11.　本書は第 1 章第 1 ～ 3 節を安津が、第 1 章第 4 節～第 5 章は中村が執筆した。

12.　付論の科学分析は株式会社パレオラボに依頼し、付論 1 は藤根久・竹原弘展、付論 2 は小林克也、付論 3 は竹原が執筆した。

13.　本書で掲載した遺構と遺物の写真は中村が撮影した。

14.　出土遺物と図面、写真、台帳等は東海市教育委員会が保管している。

15.　調査ならびに報告書の作成にあたって、下記の方々および機関からご指導とご協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略　50 音順）

　石黒立人　鬼頭剛　真田泰光　嶋谷和彦　鈴木正貴　中野晴久　中村賢太郎

　愛知県教育委員会　公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

　知多市歴史民俗博物館　東海市中心街整備事務所　名古屋市工業研究所　法海寺

凡例

1．　遺跡の略称はこれまでの略称に今回の調査年度（西暦）を示す 16 を付したＨＭ１６を使用した。遺物注記や図面等の記録および本書の記述においても、上記の略称を用いている。

2．　遺構番号は地点（調査区）ごとに通し番号を付けた。

3．　遺構の種別記号は『発掘調査のてびき』文化庁文化財部記念物課編 2010 に従った。以下に主なものを記す。

ＳＫ＝土坑　ＳＰ＝柱穴（柱痕跡や形状から判断）　ＳＤ＝溝　ＮＲ＝自然流路

ＳＡ＝柵列　ＳＢ＝掘立柱建物　ＳＩ＝竪穴建物　ＳＸ＝不明遺構・落ち込み等

4．　大量出土銭は遺構としてはＳＸの記号を用い、2140SX と 2190SX としたが、それぞれ大量（出土）銭Ａ・大量（出土）銭Ｂや壺Ａ、壺Ｂとも呼称する。

5．　本書で使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、世界測地系にて表記している。方位は座標北を示す。標高は東京湾平均海面（T.P.）を使用した。

6．　層・遺構埋土および遺物胎土の色調は『新版標準土色帖』2015 年版　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を基準とした。

7．　土質に関しては、粒子の大きさで区分し、小さいものから以下の通りとした。

粘土→シルト質粘土→粘土質シルト→シルト→砂質シルト→

極細粒砂→細粒砂→中粒砂→粗粒砂→礫砂→砂礫

8．　本書における既往調査の記述は本書末に記した参考文献 1 ～ 14 による。

9．　本書で用いた遺物の年代観・用語等に関しては参考文献 15 ～ 39 による。

10.　本書の遺構図は 1 /100・ 1 /50・ 1 /20 を基本とし、一部にその他の縮尺を用いている。

11.　遺物実測図は 1 /4 を基本とし、一部にその他の縮尺を用いている。

目次

第１章　序章

第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第２節　位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第３節　既往の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第４節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

第５節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第２章　遺構

第１節　遺構の概要と基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

第２節　１地点の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

第３節　２地点の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

第４節　３地点の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50

第５節　４地点の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

第６節　６地点の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

第７節　７地点の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58

第８節　８地点の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60

第３章　遺物

第１節　遺物の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61

第２節　弥生～古墳時代の土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

第３節　古代の土器・陶磁器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64

第４節　中世の土器・陶磁器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

第５節　瓦・土製品・石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71

第６節　金属製品（銭貨・独鈷杵・和鏡）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73

第７節　自然遺物（貝・骨類）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76

第４章　考察

第１節　畑間遺跡大量出土銭の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

第２節　畑間遺跡出土の独鈷杵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94

第３節　調査成果からみた中世大郷郷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96

第５章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110

註・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111

付論・・ 117

遺構一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127

遺物一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 145

挿図目次

第 1 図	調査地の位置	1
第 2 図	遺跡周辺の環境	3
第 3 図	遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第 4 図	調査区配置図	7
第 5 図	調査区・グリッド位置図	10
第 6 図	基本層序模式図	15
第 7 図	1030SD	18
第 8 図	1040SD・1050SD	19
第 9 図	1060・1102・1108・1160・1152SK	21
第 10 図	1062SX・1150SX	23
第 11 図	1180SX	24
第 12 図	1186SK	24
第 13 図	2100SD	26
第 14 図	2120SD 断面図	28
第 15 図	2120SD 平面図	30
第 16 図	2120SD 遺物出土状況図	32
第 17 図	方形区画溝群模式図	34
第 18 図	方形区画溝群と大量出土銭 A・B・2156SK	36
第 19 図	方形区画溝群断面図	37
第 20 図	2135・2136・2137・2144SD	38
第 21 図	2180SD	39
第 22 図	2010・2065SK・2200SK	40
第 23 図	2221SK・2222SK	40
第 24 図	2022・2170・2172・2182SK	42
第 25 図	2160・2165・2186SK	43
第 26 図	2153SX 遺構群	44
第 27 図	2156SK	45
第 28 図	東部柱穴列	47
第 29 図	2140SX（大量出土銭 A）・2190SX（大量出土銭 B）	49
第 30 図	3001・3002SD	50
第 31 図	４地点西壁断面図	51
第 32 図	4065SD	52
第 33 図	4011SD	53
第 34 図	4043SD	54
第 35 図	4060SD	55
第 36 図	4012SK・4090SK	56
第 37 図	4030・4052SK	56
第 38 図	6010SD	57
第 39 図	7001SX	58
第 40 図	7010・7011・7015・7016SD・7012SX	59
第 41 図	８地点平面・断面図	60
第 42 図	弥生前期～中期前半の土器	62
第 43 図	弥生前期～中期の条痕文系土器	63
第 44 図	2221・2222SK と 6010SD 出土土器	63
第 45 図	製塩土器	64
第 46 図	灰釉陶器	64
第 47 図	1060SK 出土の土器・陶磁器	65
第 48 図	方形区画溝群出土の土器・陶磁器	69
第 49 図	大量出土銭の容器壺	69
第 50 図	包含層･その他の遺構出土の土器･陶磁器	70
第 51 図	瓦（１・２・４地点出土）	71
第 52 図	土製品・石製品	72
第 53 図	独鈷杵・和鏡	75
第 54 図	壺内銭貨３次元計測図	81
第 55 図	大量銭 A 壺内銭貨実測図	82
第 56 図	大量銭 B 壺内銭貨実測図	83
第 57 図	愛知県内大量出土銭出土地点	89
第 58 図	大量銭容器壺甕実測図	89
第 59 図	独鈷杵実測図	95
第 60 図	畑間遺跡の溝・区画	102
第 61 図	周辺環境と溝・区画	103

表目次

表 1	既往の発掘調査報告書	8
表 2	遺構数一覧	14
表 3	時期区分	15
表 4	２地点遺構編年	25
表 5	中世遺物編年対照表	61
表 6	2120SD 破片数	66
表 7	2180SD・2153SX 破片数	68
表 8	銭貨種別出土数	73
表 9	出土銭貨一覧	74
表 10	出土貝類	76
表 11	出土骨類	78
表 12	大量出土銭編年	82
表 13	愛知県内大量出土銭一覧	89
表 14	独鈷杵の法量と年代	94
表 15	大郷郷に関する文書記録	97
表 16	町単位溝一覧	99

写真目次

写真１	現地説明会	11
写真２	報道関係取材	11
写真３	１地点機械掘削状況	12
写真４	６地点調査状況	12
写真５	４地点調査状況	12
写真６	２地点西区調査状況	12
写真７	２地点東区調査状況	13
写真８	２地点東区調査状況	13
写真９	大量出土銭 B 調査状況	13
写真 10	７地点調査状況	13
写真 11	１地点北側検出状況	16
写真 12	1022SX	16
写真 13	1102SK	20
写真 14	1108SK	20
写真 15	1062SX	22
写真 16	1150SX	22
写真 17	2060SX	26
写真 18	2180SD 断面	39
写真 19	2182SK	41
写真 20	2164SP	41
写真 21	2153SX	41
写真 22	2186SK・2172SK	45
写真 23	2165SK	45
写真 24	2156SK 断面	45
写真 25	東部柱穴列	46
写真 26	2119SP	46
写真 27	2105SP	46
写真 28	2140SX 壺内部	48
写真 29	2140SX 検出	48
写真 30	2190SX と 2157SK	49
写真 31	4043SD	54
写真 32	4060SD	55
写真 33	８地点	60
写真 34	出土貝類	77
写真 35	大量銭 A 壺内上部 CT 撮影	80
写真 36	大量銭 A 壺内下部 CT 撮影	80
写真 37	大量銭 B 壺内上部 CT 撮影	80
写真 38	大量銭 B 壺内下部 CT 撮影	80
写真 39	大量銭 A 壺内部	81
写真 40	大量銭 B 壺内部	81
写真 41	大量銭 B 出土銭	82
写真 42	一遍聖絵	84
写真 43	大量銭 B 検出状況 1	85
写真 44	大量銭 B 検出状況 2	85

図版目次

図版１	１地点　調査区平面図（全体）
図版２	１地点　調査区平面図（北部）
図版３	１地点　調査区平面図（南部）
図版４	１地点　土層断面図１
図版５	１地点　土層断面図２
図版６	１地点　土層断面図３
図版７	２地点　調査区平面図（全体）
図版８	２地点　調査区平面図（西１）
図版９	２地点　調査区平面図（西２）
図版 10	２地点　調査区平面図（東１）
図版 11	２地点　調査区平面図（東２）
図版 12	２地点　土層断面図１
図版 13	２地点　土層断面図２
図版 14	２地点　土層断面図３
図版 15	２地点　土層断面図４
図版 16	３地点　調査区平面図
図版 17	４地点　調査区平面図
図版 18	４地点　土層断面図
図版 19	６地点　調査区平面図
図版 20	６地点　土層断面図
図版 21	７地点　調査区平面図
図版 22	７地点　土層断面図
図版 23	弥生時代の土器
図版 24	古代の土師器・須恵器
図版 25	2120SD 出土の土器・陶磁器
図版 26	2120SD 出土の土器・陶磁器
図版 27	2120SD 出土の土器・陶磁器
図版 28	2120SD 出土の土器・陶磁器
図版 29	2120SD 出土の土器・陶磁器
図版 30	2120SD 出土の土器・陶磁器
図版 31	2180SD 出土の土器・陶磁器
図版 32	2153SX 遺構群出土の土器・陶磁器
図版 33	中世の土器・陶磁器
図版 34	瓦（2120SD）
図版 35	瓦（2120SD）
図版 36	金属製品（銭貨）
図版 37	金属製品（銭貨）
図版 38	金属製品（銭貨）

写真図版目次

写真図版１　１　１地点全景
　　２　１地点全景（北部）
写真図版２　１　１地点西壁（北端）
　　２　１地点西壁（北部）
　　３　１地点東壁（北部）
写真図版３　１　１地点西壁（南部）
　　２　１地点東壁（南部）
　　３　１地点南東部北壁
写真図版４　１　1030SD
　　２　1030SD 検出
写真図版５　１　1040SD
　　２　1050SD
写真図版６　１　1060SK
　　２　1060SK 遺物出土状況
写真図版７　１　1152SK
　　２　1160SK
写真図版８　１　1180SX
　　２　1186SK
写真図版９　１　２地点東区全景
　　２　２地点東区全景（東部）
写真図版 10　１　２地点東区全景（西部）
　　２　２地点西区全景
写真図版 11　１　２地点西区西壁
　　２　２地点西区北壁
　　３　２地点西区南壁
写真図版 12　１　２地点東区東壁
　　２　２地点東区北壁（東部）
　　３　２地点東区北壁（中央部）
写真図版 13　１　２地点東区北壁（西部）
　　２　２地点東区南壁（西部）
　　３　２地点東区南壁（西部）
写真図版 14　１　2090SD・2100SD・東部柱穴列検出
　　２　2100SD
写真図版 15　１　2120SD 検出
　　２　2120SD 遺物出土状況
写真図版 16　１　2120SD 遺物出土状況（南西側）
　　２　2120SD 遺物出土状況（北東側）
写真図版 17　１　2120SD 遺物出土状況（北東側）
　　２　2120SD 遺物出土状況
写真図版 18　１　2120SD 断面
　　２　2120SD 断面
写真図版 19　１　2135・2144SD ほか検出
　　２　2135・2144SD ほか
写真図版 20　１　方形区画溝群と大量出土銭 B
　　２　方形区画溝群南西部検出
写真図版 21　１　2148SD
　　２　2115SD
　　３　方形区画溝群と大量出土銭 B
写真図版 22　１　2115SD・2199SD ほか断面
　　２　2205SD 断面
　　３　2205SD 遺物出土状況
　　４　2205SD 遺物出土状況
写真図版 23　１　2180SD
　　２　大量出土銭 A と方形区画溝群検出
写真図版 24　１　大量出土銭 A
　　２　大量出土銭 A
写真図版 25　１　大量出土銭 B
　　２　大量出土銭 B
写真図版 26　１　大量出土銭 B
　　２　大量出土銭 B
写真図版 27　１　2156SK 独鈷杵出土状況
　　２　2156SK 独鈷杵出土状況
写真図版 28　１　2153SX 遺構群検出
　　２　2153SX 遺構群断面
写真図版 29　１　2010・2065SK
　　２　2200SK
写真図版 30　１　３地点北部全景
　　２　３地点北部検出
写真図版 31　１　４地点全景
　　２　４地点全景（中央部）
写真図版 32　１　４地点西壁
　　２　４地点南壁（西部）
　　３　４地点南壁（東部）
写真図版 33　１　4011SD 検出
　　２　4011SD
写真図版 34　１　4011SD 断面
　　２　4030・4052SK
写真図版 35　１　６地点全景
　　２　６地点検出
写真図版 36　１　６地点南壁
　　２　６地点東壁
　　３　６地点東壁（北部）

写真図版 37　1　6010SD
　　2　6010SD 遺物出土状況
写真図版 38　1　７地点全景
　　2　7010・7011SD・7012SX ほか
写真図版 39　1　７地点北壁
　　2　７地点南壁
写真図版 40　1　７地点検出
　　2　7001SX
写真図版 41　弥生土器・土師器
写真図版 42　土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗
写真図版 43　山茶碗
写真図版 44　山茶碗
写真図版 45　山茶碗・常滑焼
写真図版 46　古瀬戸・土師器皿
写真図版 47　土師器鍋釜
写真図版 48　弥生土器・製塩土器
写真図版 49　古代と中世の土器・陶磁器
写真図版 50　中世の土器・陶磁器
写真図版 51　中世の土器・陶磁器
写真図版 52　中世の土器・陶磁器
写真図版 53　中世の土器・陶磁器・土製品
写真図版 54　瓦
写真図版 55　大量出土銭・壺
写真図版 56　大量出土銭 B・壺と蓋
写真図版 57　銭貨
写真図版 58　和鏡・独鈷杵

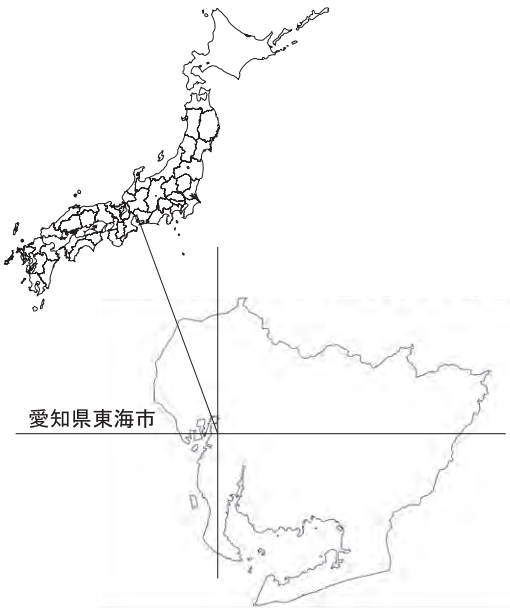
第１章　序章

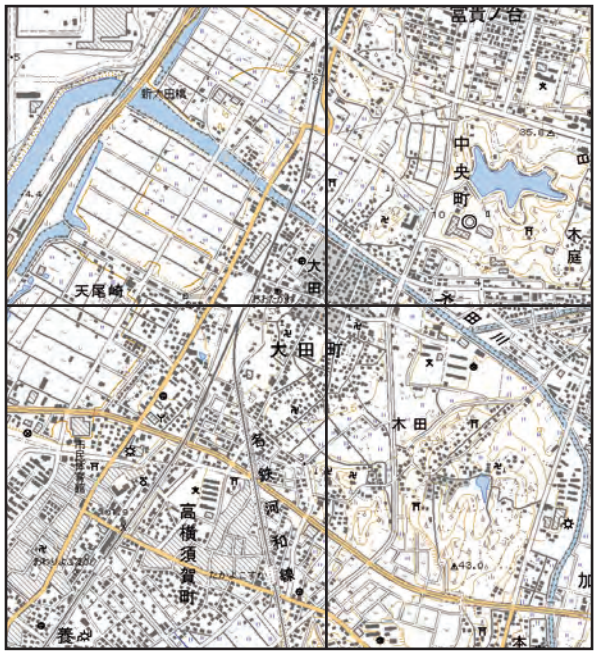
第１節　調査に至る経緯

畑間遺跡は愛知県東海市大田町に所在する（第１図）。平成８年度から10年度にかけて愛知県教育委員会が実施した知多半島遺跡詳細分布調査（註１）によると、畑間遺跡は古墳時代から中世にかけての遺物散布地とされている。

本市では、名古屋鉄道太田川駅周辺地区を東海市の玄関口として位置づけ、中心市街地としての整備を進めており、平成４年度から土地区画整理事業、連続立体交差事業及び市街地再開発事業の三つの事業を実施している。これら事業のうち、土地区画整理事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、その範囲および性格を把握するため、平成８年度に試掘調査を実施した（註２）。この調査によって、事業区域内には畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡をはじめ、後田遺跡、龍雲院遺跡が存在することを確認した（第３・４図）。試掘調査の結果に基づき、土地区画整理事業担当部局である都市建設部中心街整備事務所と協議・調整をはかり、平成11年度から東海市教育委員会によって、主として道路整備用地において記録保存を目的とした緊急発掘調査を継続して実施している。平成28年度末時点での調査済面積は23,590㎡である。

平成28年度の調査は、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から平成28年４月８日付けにて文化財保護法第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知があり、平成28年４月28日付け28教生第380号にて愛知県教育委員会教育長から発掘調査指示があった。畑間遺跡範囲内の計７地点1,295㎡については、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から平成28年４月８日付け中第９号にて発掘調査依頼があった。平成28年４月８日付け社第26号にて東海市教育委員会教育長から発掘調査を実施する旨回答し、現地調査業務及び１次整理作業について、平成28年５月18日に株式会社アコード名古屋営業所と業務委託契約を締結した。





第１図　調査地の位置

第２節　位置と歴史的環境（第２・３図）

東海市は、北側が名古屋市、南側が知多市、東側が大府市と知多郡東浦町、そして西側が伊勢湾に面している。東海市の所在する知多半島は伊勢湾と三河湾に挟まれ、海と密接な関わり合いを築いてきた地域である。また知多半島は尾張丘陵部から続くなだらかな丘陵地（知多丘陵）が中央部を貫き、沿岸部には数段の段丘面や小規模な沖積平野が形成されている。東海市を始めとする半島北部の丘陵部は第三期中新世の常滑層群に属している。常滑層群は砂層、粘土層、シルト層を中心に火山灰層や亜炭層を含む地層で、この粘土が古代末に始まる常滑窯（知多窯）の陶器原料となってもいる。知多半島は平坦な土地が少ないことが特徴的であるが、畑間遺跡の所在する海岸平地は知多半島で最も広い面積を有している。半島の市町は海に面し、また豊富な粘土を有する丘陵部という立地条件や環境を活かした生活が営まれていた。つまり、古来より海浜部では漁業や製塩、海運、また海浜部の背後に形成された平地では農業、丘陵部においても農業と常滑焼等の窯業が盛んに行われ、生活を豊かなものとしてきた。

今回報告を行う畑間遺跡をはじめ、大田町に所在する遺跡は全て砂堆上に立地している（第２図）。砂堆とは、河川の流れや波による陸地の浸食に伴い伊勢湾に供給された砂が沿岸流等により運ばれ、海岸に沿って蓄積され、形成された浜堤状の地形である。市内にある砂堆は南北方向に延びるものが三つ形成され、海岸より奥に位置しているものから順に第一砂堆、第二砂堆、第三砂堆と呼称している（註３･４）。このうち畑間遺跡は、最も東西幅が広く規模が大きい第一砂堆上に立地している。第一砂堆は南北方向が丘陵部に規制されるために長さは１㎞程にとどまり、その北側丘陵部頂上には真言宗弥勒寺、同南側には天台宗観福寺が所在する。

東海市では、古くは縄文時代から人々の痕跡を確認することができる。最も古いのは大田町に所在する高ノ御前遺跡である。高ノ御前遺跡では縄文時代前期から中世にかけて集落が営まれてきた複合遺跡で、縄文時代晩期を中心とした土器と石器が出土している。知多半島では旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡数や調査事例は少なく、高ノ御前遺跡は知多半島における縄文時代の様相を考察する上でも貴重な遺跡である。同じく縄文時代について、郷中遺跡と東畑遺跡でも朧げながらその様相を垣間見ることができる。平成 17 年度調査の郷中遺跡Ｊ区では縄文時代中期から晩期、平成 21 年度調査の東畑遺跡２地点では、縄文時代晩期の雷Ⅱ式を中心とする縄文土器片が 100 点程まとまって出土している。断片的な資料であるものの、高ノ御前遺跡と旧河道を挟んで所在するこれらの遺跡間に関係性があったことは想像に難くない。

弥生時代になると畑間遺跡と東畑遺跡を中心に、住居址や方形周溝墓を伴う集落が形成され始める。集落は古墳時代前期にいたっても砂堆上で地点を変えながら形成されている。縄文時代以前は僅かであった遺跡数であるが、弥生時代は市内北部に位置する名和町塚森遺跡や、今回報告を行う大田町畑間遺跡はじめ東畑、郷中、龍雲院遺跡、市南部では高横須賀町柳ケ坪遺跡、高横須賀町烏帽子遺跡等、一挙に増加する。最も新しい時期に形成された第三砂堆はこの頃になると安定的に見られるようになり、高横須賀町烏帽子遺跡や知多市細見遺跡を中心に遺跡が形成される。東海市では弥生時代の人々の生活の中心が第一砂堆である一方、同じ時期の知多市では第三砂堆が生活の中心となっていたようである。これについては、当時の大田町は内陸側に奥まった谷状地形であったため、第一砂堆が発達し、居住に適していたことから積極的に利用された結果であると考えられる。

市沿岸部については後述するが、江戸時代に行われた新田開発に伴い埋め立てられている。現在も伊勢湾に面し、鈴鹿山脈を望む風光明媚な土地ではあるが、遺跡が形成された当時の海岸線からは変容し、

第２図　遺跡周辺の環境（航空写真）

撮影　国土地理院
年月日　1961 年 5 月 1 日
高度　2000m
周辺の状況を加筆（上が北）
参考文献６より引用

その様相は大きく異なるものである。砂堆に立地するいずれの遺跡の地層も基本的には砂層で形成されており、現代の普段の営みでは気付きにくいものの、遺跡の形成された当時は近くに海岸線があり、海と非常に密接した生活を営んでいたことが発掘調査から分かる。

古墳時代は第三砂堆に位置し、古代製塩遺跡として著名な松崎遺跡が代表的である。松崎遺跡をはじめ沿岸部に立地する各遺跡では製塩土器が大量に出土しており、伊勢湾奥部における古代土器製塩の核となる地帯であったと思われる。大田町には王塚古墳と神宮前遺跡があり、王塚古墳では昭和初期の道路工事の際に石室と短頸壺や坏蓋等の須恵器が見つかったとされているが、詳細は不明である。現在は改修された大田川により遮断されているが、第一砂堆は畑間遺跡からその北側に位置する王塚古墳と神宮前遺跡も含んでおり、当時は一連の遺跡であったと言える。市内全域に目を向けると前・中期古墳は少ないものの、名和町兜山古墳（前期古墳）で三角縁神獣鏡が出土している。後期になると古墳の数は増加するものの、大田町王塚古墳や荒尾町丸根古墳等は、簡易な記録と僅かな遺物を残して滅失している。高横須賀町にある岩屋口古墳は知多半島で最大規模の横穴式石室である。6 世紀末頃のもので、7～8 世紀にかけての追葬品と思われる須恵器も出土している。古墳時代の集落遺跡は前代に引き続き沿岸部での形成が顕著である。海岸線を南北に辿ると大田町上浜田遺跡や同下浜田遺跡等、製塩土器や須恵器、土師器が出土する遺跡が多く所在している。

古代は第三砂堆上で製塩活動が活発な遺跡を多数確認することができ、平城京出土木簡からも調として塩が献納されていた様相がうかがえる。平安時代の知多半島にはいくつかの荘園や国衙領が記録に残り、知多半島南部では野間内海荘等の荘園があった。半島北部は国司の支配下であったが、平安時代末から鎌倉時代には大田町にあった大郷郷は熱田社領に属していたとされる。

古代寺院としては第二砂堆上にあり、弥生時代から近世まで続く複合遺跡である知多市法海寺遺跡が挙げられる。法海寺遺跡は発掘調査の結果から、塔心礎や礎石、白鳳期の瓦が出土している。瓦には中島郡や海部郡の諸寺と同笵・同文関係が指摘されているものがある（註 5）。東海市でも名和町トゝメキ遺跡や岡前川遺跡の周辺に名和廃寺と呼ばれる古代寺院の存在が想定されている。トゝメキ遺跡では白鳳期の軒平瓦と鴟尾の破片が出土した瓦溜まりが見つかっている。

中世には知多半島全域で山茶碗を中心とした窯業が盛んになる。製品は県内のみならず東海地方、全国へと出荷されている。市内でも加木屋町を中心に隣接する大府市の古窯と関係を持ちつつ窯業が営まれてきた。この古窯跡群には瓦も焼成された加木屋町の社山古窯等があり、熱田神宮寺や京都法金剛院、鳥羽離宮東殿安楽寿院へも供給されていたことが分かっている。畑間、東畑遺跡でも過去の調査でこれらと同笵と考えられる瓦が出土している。この時期の集落は古代から引き続き、連綿と生活が営まれる遺跡が大半である。畑間遺跡等では、弥生時代や古墳時代の遺構・遺物が東畑遺跡と畑間遺跡の中心部～西側に集中するのに対して、中世の遺構・遺物は畑間遺跡と東畑遺跡、郷中遺跡、龍雲院遺跡の広い範囲で確認することができる。畑間遺跡ではいくつかの区画溝や、龍雲院遺跡では区画溝を有する居館跡と思われる遺構も見つかっている。他方、大田町から富木島町の一部にかけて広がる木田丘陵では、中世城館である木田城跡が存在する。木田城跡は主郭を中心に曲輪が形成され、現在でも堀跡と思われる地形を確認することができる。

江戸時代は横須賀町において尾張徳川家２代藩主の徳川光友の浜御殿（別荘地）である横須賀御殿が建設された。これを期に横須賀町は町方として発展し、尾張万歳や名古屋型の山車等、名古屋の文化も取り入れるようになり、独自の文化として栄えていった。横須賀御殿を軸にその南側には町割りが整え

36	浜新田堤防	**50**	**畑間遺跡**	59	前畑遺跡	123	弥勒寺遺跡
37	松崎遺跡	**51**	**龍雲院遺跡**	60	北広遺跡	133	丸根古墳
41	後浜新田堤防	**52**	**東畑遺跡**	62	烏帽子遺跡	134	大池北貝塚
42	下浜田遺跡	53	高ノ御前遺跡	116	上前田遺跡	135	上浜田遺跡
43	**後田遺跡**	54	太田川第3踏切貝塚	117	西広１号遺跡	136	御州浜庭園跡
44	神宮前遺跡	55	庄之脇遺跡	118	西広２号遺跡	140	川南新田堤防
45	王塚古墳	56	木田城跡	119	山畑遺跡	143	滝川半斎屋敷
46	峰畑貝塚	57	木田遺跡	121	横須賀御殿跡	144	横須賀代官所
47	北屋敷遺跡	58	下畑遺跡	**122**	**郷中遺跡**		

第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡

られ、江戸時代初期には馬走瀬（まはせ）と呼ばれていた地域は町方へと変貌を遂げる。また横須賀御殿に伴う大規模回遊庭園として計画された御洲浜は、旧大田川河口に位置しており、河川氾濫の影響を受けやすかったと思われる。こうした影響を排除すべく藩主徳川光友の命により、大田川の流路を砂堆北側へ新たに開削し、旧河道一帯は湿地や田畑へと変化した。元の流路は第一砂堆列東側の後背湿地から南端を迂回し、横須賀御殿のすぐ脇に河口を開いていたと考えられる。横須賀町烏帽子遺跡では横須賀御殿に関わる遺構や遺物が出土している。光友の死後は廃止された横須賀御殿であったが、その後は横須賀代官所が設置されたことで、横須賀町は知多半島西岸唯一の町方として栄えた。

また市の沿岸部一帯は江戸時代～明治時代を通じて新田開発とそれに伴う埋め立てが行われた。大田地区では浜新田が 1770 年に、南側の後浜新田が 1797 年に築立された。沿岸部が埋め立てにより新田へと変貌したことを除き、少なくとも昭和初期までは中世、江戸時代以来の集落構造がそのまま残存していたと考えられる。

第３節　既往の調査（第４図・表１）

畑間遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地として知られてはいたが、土地区画整理事業実施以前は試掘調査も含めて発掘調査は実施されていなかった。初めて調査が実施されたのは、第 1 節のとおり平成 8 年度の土地区画整理事業に先立つ試掘調査である。調査は土地区画整理事業の予定区域内に 20 箇所のトレンチを設定して行った。このうち畑間遺跡、東畑遺跡に関係するトレンチは 12 箇所に上る。この試掘調査によって分布範囲が不明であった各遺跡について、概略ではあるが範囲を特定することができた。各遺跡の時期については畑間遺跡が中世から近世、東畑遺跡が弥生時代中期から古墳時代前期と古代から中世であることが推測された。

その後は平成 11 年度からの本調査によって、畑間遺跡、東畑遺跡それぞれの遺跡の様相が明らかとなってきた。既往の調査地は第 4 図に示した通りであるが、各年次の調査は土地区画整理事業に伴う家屋移転の進捗状況に応じて調査を実施しており、進捗が進んでいなかった初期段階の調査は小規模なものとならざるを得なかった。このため調査当初は遺跡全体の様相のみならず、近隣調査区の遺構との整合を図ることすら困難であった。

発掘調査は駅前から延びる街路（駅前線）を中心に着手し始めたことから、南北方向に長く延びた畑間遺跡の中央部を東西方向に横断して調査する形となった。その後は周辺の街区道路の調査を順次実施している。これまでの調査では、主に縄文時代から近世にかけての幅広い時期の遺構・遺物を確認している。特筆すべき事項としては、1 点目に縄文時代後期以降の縄文土器がまとまって出土したことである。畑間・東畑遺跡が立地する砂堆の形成時期を示唆する新たな知見である。2 点目に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての時期毎の生活域が分かってきたことが挙げられる。近年は街区道路部分の調査も進んできており、朧げながらではあるが遺跡内での集落の消長をたどることができるようになってきている。

なお、調査開始時の平成 11 年度から平成 19 年度までは東海市教育委員会直営で調査を実施した。この間の調査成果については概要報告（註 6）と並行して整理作業を実施し、平成 25 年度に報告書を刊行している（註 7）。平成 20 年度以降は民間調査機関の支援を受けて調査を実施しており、民間支援の調査で刊行した発掘調査報告書は表 1 のとおりである。

大田川
郷中遺跡
22-1
21-6A
17-1
25-1
21-6B
22-2
21-5
25-2
23-3
26-1
25-2
20-4
20-3
1地点
8地点
24-3
27-1
常蓮寺
23-2
24-1・2
23-1
龍雲院遺跡
7地点
22-3
畑間遺跡
2地点
13-1
22-4
26-2
24-4
19-4
15-1
23-5
19-3
14-1
19-1
18-2
18-3
17-2
東畑遺跡
18-1
14-2
13-2
3地点
12
11-2
19-2
14-3
17-3
13-3
11-1
16
24-5
20-1
15-2
27-4
4地点
17-4
26-6
20-2
18-4
27-8
26-3
25-3
6地点
24-6
26-4
26-5
27-5A
23-4
27-5B
21-2
21-2
24-7
21-1
21-3
27-6
21-4
27-7
毘沙門寺
28年度調査
過去の調査区
表記方法
年度　地点
15 - 2
遺跡区分
事業区域
0
(1:3500)
150m

第４図　調査区配置図

調査年次	書名	発行機関	編集機関	発行年
平成20年度	愛知県東海市畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際航業株式会社	2009年(平成21年)
平成21年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	安西工業株式会社名古屋支店	2012年(平成24年)
平成22年度	愛知県東海市平成22年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	2012年(平成24年)
平成23年度	愛知県東海市畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	2013年(平成25年)
平成24年度	愛知県東海市平成24年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	2014年(平成26年)
平成25年度	愛知県東海市平成25年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社アコード名古屋営業所	2015年(平成27年)
平成26年度	愛知県東海市平成26年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	2016年(平成28年)
平成27年度	愛知県東海市平成27年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田組中部営業所	2017年(平成29年)
平成11年度～19年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告－平成11～19(1999～2007)年度調査－	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	2014年(平成26年)

表１　既往の発掘調査報告書

第４節　調査の方法

遺跡略号・調査区

遺跡調査略号は既往調査を踏襲し、2016 年を示す１６を付し、畑間遺跡 2016 年として「ＨＭ１６」とした。図面や遺物注記などの記録にこの略号を用いている。

今回の調査区はすべて畑間遺跡に位置していた。１～８地点が設定されているが、５地点の調査は中止となったので、調査を行なったのは計７地点である（第４図）。

２地点は排土置き場の不足などから東西に分け、それぞれ西区、東区として調査した。さらに、東区は一部拡張（調査時には拡張区と呼称）したが、調査記録や本報告では基本的にすべてを合わせた一つの地点とした。

遺構番号・遺構種別

遺構番号は各地点で種別に関係無く通し番号を付けた。遺構種別は凡例に示した通りである。遺構番号は作業上の絶対性があるが、遺構種別は考古学的にも相対的であり、調査時と整理作業時で変更したものもある。よって遺構表記は 0001SK のように、先に番号、後に種別を付した。また調査時に一つの遺構としていたものを、後日分けた場合にはａやｂなどアルファベット小文字を付した。なお、遺構番号は４ケタで、最初の数は地点番号を示し、１地点は 1001 ～、２地点は 2001 ～となる。

調査記録

遺構の図面記録は基本的に電子平板によるデジタル測量を行ない、写真測量も併用した。重要な出土遺物は、出土状況図の作成や出土地点を座標で計測し、それぞれの遺物に取上げ番号を付けた。

写真記録は 35 ｍｍフィルムのカラーリバーサルと 1000 万画素以上かつ撮像素子フルサイズのデジタル一眼レフカメラを使用した。調査状況の記録はデジタルカメラのみを使用した。

測量・グリッド設定（第５図）

調査における測量は２級基準点を基点とし、従来通り世界測地系座標による。また、遺物の取上げや遺構位置の記録等に、これまで同様にグリッドを５ｍに設定した。この５ｍグリッドは国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を基軸とし、７Ｊ 10 ｔのような４ケタのアルファベットと数字で表記される。この表記は、国土座標において 1,000 ｍ× 1,000 ｍの大区画を設定し、その中での位置を示すものである。大区画をさらに 100 ｍ× 100 ｍに分割し、北～南方向を１～ 10 の数字で、西～東方向をＡ～Ｊで示す。この一例が７Ｊである。次に、各 100 ｍグリッドをさらに５ｍ×５ｍの小グリッドに分割し、北～南方向を１～ 20、西～東方向をａ～ｔで示した。

遺構の検出・掘削および撹乱

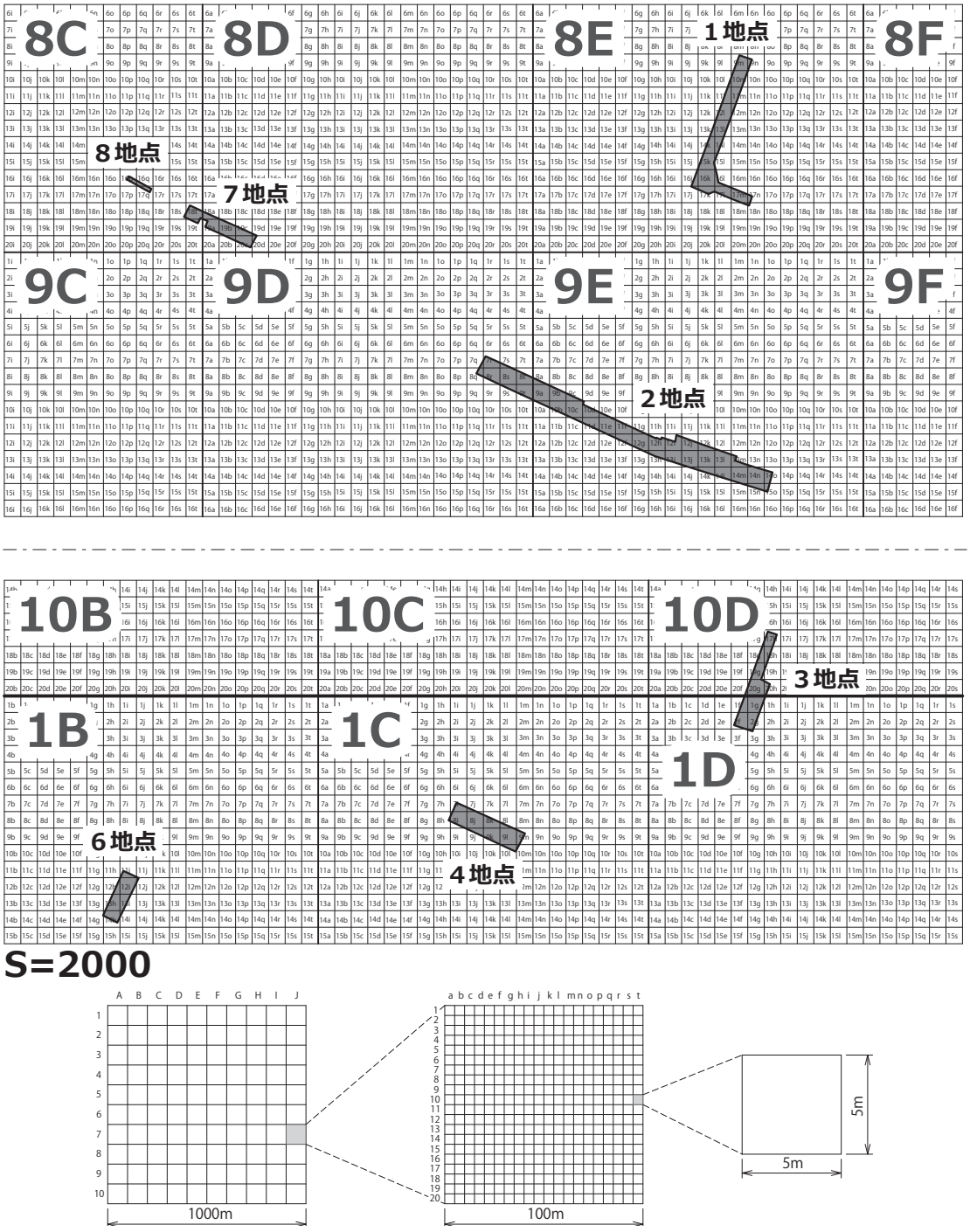
既往調査と同様に基本的には１面調査である。層序については第２章を参照されたいが、まず表土や客土などの近現代層（Ⅰ層）と近世層（Ⅱ層）の大部分を重機によって掘削し、以下包含層（Ⅲ層とⅣ層）を人力によって掘り下げ、地山面（Ⅴ層上面）を調査面とした。ただし、Ⅱ層とⅢ層の分別が困難なところも多く、包含層として人力掘削したものはⅡ層を含んでいる。

今回の調査でも遺構と撹乱の分別は不明確になってしまった。上層からの掘り込みが層位的に確認できたものや近世～近代の陶磁器や物品が出土するものは撹乱としたが、時期不明の遺構の中には撹乱とすべきものも含まれているだろう。また、遺構として調査・記録したものが、出土遺物から後日撹乱と判明したものもある。現地調査中に判明した場合は撹乱としたが、調査終了後については近世もしくは近現代遺構として記録に残している。

記録整理・遺物整理・報告書作成

写真や図面等の整理業務および遺物洗浄は現地調査と併行して実施し、現地調査終了後に校正等を行ないまとめた。遺物への注記はジェットマーカーの自動注記マシーンを用い、遺跡略号とグリッド、遺構番号・種別を注記した。取上げ番号を付けた遺物は、取上げ番号も注記した。

遺物整理においては接合・復元を行ない、抽出した遺物は記録化を行なった。遺物の実測は通常の手測り実測であるが、トレースはデジタルトレースを行なった。報告書の作成においては、遺構図、写真図版も含め、すべてデジタル編集で行なった。



第５図　調査区・グリッド位置図

第５節　調査の経過

委託契約後の平成 28 年５月 19 日から準備作業を開始した。調査は最も北に位置する１地点からであり、東海市社会教育課職員の監督の下、６月８日に開始した。１地点の調査は７月５日に高所作業車からの全景撮影を行ない、７月７日に終了した。続いて、最も南に位置する６地点の調査を行なった。６地点は面積も狭く７月 11 日に開始し、同月 19 日には調査を終えた。続いて４地点の調査を行ない、夏季休暇前の８月８日に終了した。６、４地点調査時は毎日が猛暑日であり、こまめな休憩と水分補給を心がけ、日よけシートを張るなど熱中症対策にも留意しながら調査を進めた。

写真１　現地説明会

写真２　報道関係取材

夏季休暇明けからは２地点の調査を始めた。２地点は排土置き場の問題から東西に分け、西区を先に調査した。８月 22 日から重機による表土掘削を行なったが、大部分が撹乱であり、遺構面は東西両端にわずかに残るのみであった。西区は９月９日に調査を終え、埋め戻しやフェンス移動などの後、９月 26 日から東区の調査を開始した。２地点東区は最も成果の得られた調査区であった。特に２つの大量出土銭の発見は特筆に値する。この調査区では 10 月 29 日に現地説明会を開催し、60 名ほどの参加を得た。11 月１日に高所作業車による全景撮影を終え、その後埋め戻しを行なった。なお、２つの大量出土銭がともに北壁付近から出土したことから北側にトレンチを開削（拡張区と表記）して追加の調査を行なったが、残念ながら新たな発見はなかった。大量出土銭については 12 月９日に報道陣が取材に訪れ、東海市長も視察に訪れた。

次に３地点の調査を 11 月 21 日から開始したが、２地点西区と同様に大部分が大規模な撹乱を受けており、北端に遺構面が残るのみであった。そのため 11 月 28 日には調査を完了した。その後、５地点の調査がなくなり、替わりに７地点が設定された。しかし、年内は成果品の整理等の室内業務を行ない、年明けの平成 29 年１月 10 日からの開始とした。７地点は湧水レベルが検出面とほぼ同等の TP2.5 m であったため複数の排水溝を掘削し、常時ポンプを稼働しながらの調査となった。７地点は１月 23 日に埋め戻しまで完了し、同日にさらに追加となった８地点の調査も行ない、遺構・包含層が無いことを確認し、調査を終えた。

出土遺物と図面等の整理作業は現地調査と併行して開始した。遺物の洗浄は現場事務所にて雨天の日等を利用して行なった。遺物の注記作業および図面の整理･校正は平成 29 年１月～３月の間に行なった。同年３月 28 日付けでこれらの成果品を納入した。

２次整理作業及び報告書作成業務について、東海市教育委員会と株式会社アコード名古屋営業所は業務委託契約を平成 29 年５月 26 日に締結した。その後社会教育課職員の監督の下、遺物の接合や実測等の記録化作業などの２次整理作業及び報告書作成業務を実施し、本報告書の刊行に至った。

《調査日誌抄録》

160608（水）晴れ
　１地点の重機による表土掘削を開始。南東部から開始したが撹乱で地山まで壊されていた。その後西に進めると TP3.7 mほどでⅢ層と思われる包含層が検出された。
160614（火）晴れ
　表土掘削は終了した。北側は既往調査成果の通り、TP3.9 mくらいで包含層が見られた。南側よりも掘削時に遺物が多いように思われる。
160627（月）晴れ
　調査区南側の壁面土層の観察と記録を行なった。1030SD は少なくとも２条に分かれる。東西壁面で埋土や断面形状に相違がある。
160630（木）晴れ
　1146SX を掘り下げたところ径１mほどの円形土坑が検出された。さらに周辺を精査すると埋土が斑土の掘り方らしきものが検出された。1152SK は井戸かもしれない。
160705（火）晴れ
　１地点全景を 12 時頃に高所作業車から撮影した。明日、補足調査を行ない１地点の調査は終了する予定である。
160711（月）晴れ
　６地点の調査を開始。地表下 60cm 程度でⅤ層が検出された。赤褐色の耕作土とⅤ層の間にわずかに包含層らしきものがあるが、遺物は微小なものが少量あるのみ。
160714（木）晴れ
　6010SD から小型の長頸壺と小型丸底鉢が２個体寄り添って出土した。周溝墓の可能性もある。大部分の遺構の調査を終えたので、明日全景の予定。
160719（火）晴れ
　６地点の埋め戻しを完了。東海市関係者（社会教育課と中心街整備事務所の職員）の立ち合いのもと午後には確認して頂き、６地点の作業を終えた。午後からは４地点の表土掘削を開始した。
160728（木）曇り
　調査区南壁から西に弧状に延びる 4011SD の掘削を行なった。黒色の埋土が特徴的である。２か所深いところがある。出土遺物は弥生時代中期を主とし、当該期の遺構であろう。
160804（木）晴れ
　４地点の全景撮影を行なった。4011SD や 4052SK などの遺構の配置は方形周溝墓のプランを思わせるものがあり、昨年の隣接調査区の成果と合わせて、この一帯が墓域の可能性がある。
160810（水）晴れ
　２地点のフェンス設置を行なった。明日から 15 日まで夏季休暇なので、周辺の片付け等を行なった。
160822（月）晴れ
　２地点西区の重機掘削を西から開始。結局大部分が撹乱（近代以降の大規模な掘り返しと客土か）であり、西端に一部遺構面が残るのみであった。
　既往調査成果を見ると、集落中心部、常蓮寺の正面に位置する南北に延びている道一帯は大きな撹乱でこれまでも遺跡がほとんど残っていない（22 年度の４地点、23 年度の５地点など）。
160905（月）曇り
　調査区東側の遺構調査を行なった。地山砂層の酸化など二次的変化が著しく、遺構の認識が困難である。遺構と思って掘削したものが、二次的変化層に過ぎないものもある。
160909（金）晴れ
　調査区西側の完掘状況と西壁等の撮影・測量を行なった。これをもって２地点西区の調査完了。

写真３　１地点機械掘削状況

写真４　６地点調査状況

写真５　４地点調査状況

写真６　２地点西区調査状況

160926（月）晴れ
　２地点東区の重機による表土掘削を東側より開始した。この一帯のＶ層は数ｍｍ程度の小礫が混ざる粗粒砂層であり、湿り気がある。
161004（火）晴れ
　先週以来の重機による表土掘削と人力による包含層掘削を西に進めた。少しずつＶ層は上がっている。調査区中央北壁際に瀬戸の壺瓶が埋まっている。頸から口縁部は失われている。下部まで残っているのかは不明だが、優品である。
161013（木）曇り
　調査区中央部の遺構の掘削・調査を進めた。埋納瀬戸三耳壺は銭貨が詰まっていた。紐で結ばれた一単位 10cm 程度の緡銭がらせん状に詰め込まれている模様。銭一枚一枚はさびのため判別できない。紐は一部観察できた。
　黒色土の 2114SD は現代の２次的な影響で溝状に黒色化していただけで遺構では無い。
161014（金）曇り
　隅丸長方形の土坑 2156SK から独鈷杵（密教法具）が出土した。ほぼ土坑の底部に無造作に埋まっていたようだ。この土坑はプランから土壙墓の可能性も考えられるが、他に目立った遺物や埋土の特徴はない。
161019（水）晴れ
　貝を含む土坑の下から山鉢の破片を蓋にした常滑壺が埋納されているのが発見された。埋納銭の可能性がある。
161028（金）雨
　雨天のため調査休止。明日の現地説明会のための準備、特に遺物展示の準備を行なった。
161102（水）晴れ
　常滑壺の一帯を拡張し、平面記録を完了し蓋を外した。その結果、やはり埋納銭であることが判明した。
161107（月）晴れ
　本日より西端から埋め戻しを開始。中央部は 2120SD のベルトの記録と掘削を行なった。東側は北壁の記録を行なった。
161115（火）曇り時々晴れ
　２地点東北側の拡張区の重機掘削を行なった。最大の目的である埋納銭はなかった。３地点はフェンス設置等の準備工を午前中のみ行なった。
161122（火）晴れ
　３地点の表土掘削を行なう。２地点西区のような大撹乱となり、褐色の小石の混ざった粗粒砂で埋められている。その砂も２地点西区と同じ様相である。
161128（月）晴れ
　３地点の全景と壁面の記録（撮影と測量）を行なった。これをもって３地点の調査は終了した。
161209（金）晴れ
　埋納銭の取材に記者が来訪。遺物の撮影等が行なわれた。東海市長も視察に訪れた。
170110（火）晴れ
　７地点の表土掘削を開始。TP2.4 ｍまで達するとＶ層が検出できるが、湧水もひどく、まともに検出できない。
170116（月）晴れ時々雪
　午前は湧水と雪による水の排水を行ない、調査は出来なかった。午後からの調査で、大型遺構 7005SX と 7010SD の掘削を行なった。
170123（火）晴れ
　追加でトレンチ調査を行なうこととなった８地点の調査を行なった。その後、７地点も含め埋め戻しを行なった。これをもって現場調査業務は完了。

写真７　２地点東区調査状況（2120SD）

写真８　２地点東区調査状況（2120SD）

写真９　大量出土銭Ｂ調査状況

写真 10　７地点調査状況

第２章　遺構

第１節　遺構の概要と基本層序

１．遺構の概要

今回の調査で検出された遺構の総数は 542 基になる。調査区・種別の遺構数は表２の通りである。遺構密度は 1㎡あたりの平均遺構数である。１地点が最も密度が高く、４地点も高い数値を示す。３地点は大部分が撹乱であったので参考にならないが、２、６、７地点は同程度である。

種別では柱穴と土坑が多いが、柱穴は明確に建物を構成すると判断できるものはなく、土坑の多くは性格不明である。これらに対し、溝は多くの遺物が出土した 2120SD（調査全体の３割強）や大量銭を伴う区画溝群などがあり、中世の畑間遺跡について考える一定の成果を得られた。また、弥生時代の方形周溝墓と思われる溝もある。よって遺構の記述は溝を中心としたものになる。また、SX とした遺構はプランが不整形な遺構などを含むが、厳密な分類となっていない。大量銭が出土した二つの遺構も SX とした。それぞれ調査時の遺構番号・記号は 2140SX、2190SX であるが、本報告では 2140SX を大量（出土）銭Ａもしくは（銭貨）壺Ａ（古瀬戸三耳壺）、後者の 2190SX を大量（出土）銭Ｂもしくは（銭貨）壺Ｂ（常滑壺）とも呼称する。大量出土銭という名称は遺物名称であって遺構名称としては、大量銭出土遺構や銭貨埋納遺構とすべきと考える。しかし、今後の調査研究や活用に向けて、一般的な大量出土銭という名称を用いる（註８）。

遺構の時期であるが、出土遺物や層位･切り合い関係から判断できた遺構のみを当遺跡の区分案（表３）に沿った時期を一覧表に記しており、各調査区の時期別の遺構数は表２の通りである（註９）。古代以前の遺構は 23 基と少ないが、１地点は古代、４地点は弥生時代の遺構が比較的多い。ただし、まとまって遺物が出土した遺構、竪穴建物といった性格が明確な遺構は無い。

中世（Ｖ期）の遺構が最も多く、その中でも、鎌倉時代にあたるＶ－２期（山茶碗第５～７型式期）と室町時代中期にあたるＶ－４期（山茶碗第 10 ～ 11 型式期）の遺構が多い（註 10）。中世の時期区分に関しては、第３章に主要な遺物編年との対照表を提示している（表５）。なお、第６～７型式期の山茶碗のみが出土する遺構が多いものの、これをそのまま遺構の年代と判断できるのか難しい。多くの遺構は帰属時期の決め手に欠ける。

次に基本層序と調査面について説明し、次節からは調査地点ごとに報告してゆく。まず概要を述べ、次に主要な遺構について種別ごとに記述する。紙幅の関係ですべての遺構を詳述できないが、他の遺構に関しては、遺構一覧表と全体図を参照されたい。

	種別遺構数								時期別遺構数					
	SD	SE	SK	SP	SX	遺構数	面積(㎡)	密度/㎡	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
1地点	10	0	54	110	13	187	225	0.83	0	0	0	7	87	16
2地点	32	0	62	104	14	212	575.7	0.37	0	2	3	0	100	3
3地点	3	0	1	0	0	4	135.2	0.03	0	0	0	0	2	0
4地点	9	1	26	52	2	90	135.9	0.66	0	5	1	0	34	5
6地点	3	0	7	15	1	26	74.2	0.35	0	0	5	0	0	0
7地点	5	0	3	7	8	23	83.8	0.27	0	0	0	0	5	9
8地点	0	0	0	0	0	0	9.6	0	0	0	0	0	0	0
	62	1	153	288	38	542	1239.4	0.44	0	7	9	7	228	33

表２　遺構数一覧

時期		時代・土器型式
Ⅰ	1	縄文時代晩期以前
	2	縄文時代晩期末～弥生時代初頭
	3	弥生時代前期（樫王式期～水神平式期）
Ⅱ	1	弥生時代中期前半（岩滑式期）
	2	弥生時代中期後半（貝田町式・瓜郷式期～凹線紋系・古井式期）
Ⅲ	1	弥生時代後期（八王子古宮式期～山中式期）
	2	弥生時代終末期～古墳時代前期（廻間式期～松河戸Ⅰ式期）
	3	古墳時代中期（松河戸Ⅱ式期～宇田式期）
Ⅳ	1	古墳時代後期～終末期（東山10号窯式期～東山44号窯式期）
	2	奈良時代（東山50号窯式期～黒笹14号窯式期）
	3	平安時代前期（黒笹90号窯式期～東山72号窯式期）
Ⅴ	1	平安時代後期（山茶碗第２～４型式期）
	2	鎌倉時代（山茶碗第５～7型式期・常滑窯３～６a型式期）
	3	鎌倉時代末～室町時代前期（山茶碗第８～９型式期）
	4	室町時代中期（山茶碗第10～11型式期）
	5	室町時代後期（瀬戸大窯式期）
Ⅵ		江戸時代

表３　時期区分

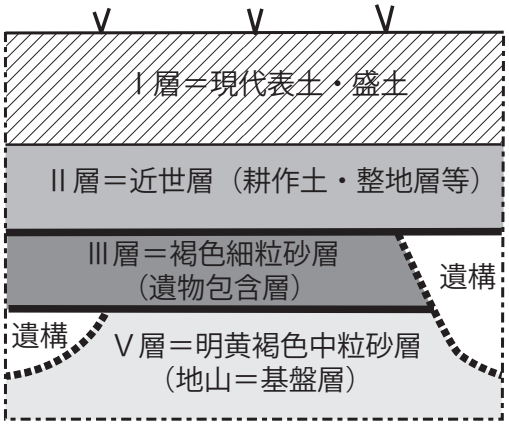
２．基本層序と調査面（第６図）

基本層序は各地点とも共通であり、本節でまとめて記述する。基本的には 2014 年に刊行された平成 11 ～ 19 年度調査の報告書で示されたⅠ～Ⅴ層に分けた層序の通りである。現代表土や盛土がⅠ層、耕作土や整地層等の近世層がⅡ層である。Ⅲ層は褐色～にぶい黄褐色の細～中粒砂層、いわゆる遺物包含層である。今回の調査区では縄文～弥生時代の包含層（Ⅳ層）は４地点の一部（西側）でわずかにみられたのみであった。Ⅴ層が地山（基盤層）であり、明黄褐色の中～粗粒砂層である。

Ⅲ層については、その形成時期を 10 ～ 11 世紀頃とする考えを平成 25 年度調査報告で述べたが、今回の調査において、その点を補強する成果も否定する成果もなかった。ただし、中世遺構はⅢ層上面から形成されており（残っているというべきか）、Ⅲ層が中世以前に堆積した層であることは間違いない。

次にⅤ層（基盤層）の各調査区の平均的な標高を記しておく。南に位置する６地点は最も低く TP2.6 ～ 2.8 mである。狭い調査区内でも南西方向に下がっており、砂堆南西隅の状況を示している。６地点よりも北側にある３地点と４地点はやや高く、TP3.2 m前後である。最も北に位置する１地点は TP3.7 m前後とさらに高い。１地点は南北に長い調査区であるが、調査地内での標高差はほとんどない。２地点のⅤ層のレベルは TP3.3 ～ 3.6 mである。調査区の東西端が低くなっている。その西に位置する７地点は良好に残っている部分では TP2.7 m前後であり、２地点西端より下がる。なお、そのすぐ西の８地点では TP2.0 mまで下げたが、撹乱を受けており、Ⅴ層を確認できなかった。

最後に調査面について述べる。Ⅲ層の形成時期は中世以前と考えられ、よって中世遺構はこのⅢ層上面からの遺構である。しかし、検出の困難さと時間的制約からⅤ層上面で検出を行なった（註 11）。よってⅤ層上面の１面調査である。



第６図　基本層序模式図

第２節　１地点の遺構

１．概要（図版１～６）

１地点では 187 基の遺構が検出された。遺構密度は 0.83/㎡（表２）、最も高い調査区である。その大部分は時期不明の柱穴、土坑であるが、建物を構成する柱穴や性質の明らかな土坑は少ない。柱穴は３基ほどが等間隔で並ぶものはあるが、遺物、深さや埋土なども検討した上で建物や柵を構成していると判断できる事例はない。

主な遺構としては３条の東西方向の溝が挙げられる。これらの溝は調査区の方位（＝近世以後の地割の方位）に沿っており、同様の溝は既往調査でも多くみつかっている。調査区南側で検出した 1030SD は、東で 24 年度１・２地点の SD2010、西では平成 25 年度２地点の 110SD や 160SD と連なる可能性がある。東西方向の溝は調査区中央（1040SD）と北端（1050SD）にもある。1040SD は現代まで残る地境に位置し、ここを境に検出面＝Ⅴ層上面の状況が変化した。南側に比べ北側は高いレベルでⅤ層が残っていた（写真 11）。調査時には微地形の変化とも思ったが、南側もⅤ層が良好に残っている部分は北側と標高差はなかった。よって、この高低差は溝の南北で土地利用が異なった結果（南側は近世以降に大きな土坑の掘削や削平などが行われた）である。1040SD は同じ位置に近代溝もあるが、中世まで遡る溝と考えている。既往調査でも中世から近世を経て現代に至る地境が多く確認されている。1040SD は南の 1030SD、北の 1050SD の中間に位置しており、その間はともに約 16 ～ 18 ｍとなる。特に 1040SD と 1050SD の間は柱穴や土坑が密集する一帯であり、これらは屋敷地などの南北を区画する溝の可能性がある。

調査区南端にある 1022SX（写真 12）は貝殻片を多く含む近世の遺構である。南に隣接する平成 23 年度調査の２地点でも近世の混貝砂層や純貝層が報告されており、それらと一連のものであろう。

調査区北側には 1062SX、1072SX、1146SX、1150SX とした大きい遺構があり、当初は竪穴建物かと考えた。しかし、いずれも１段下げしたところ、土坑など（それぞれ、1190SK、1152SK、1113SK、1194SX）が検出され、これらに伴う窪みと判断した。ただし、1062SX と 1150SX は竪穴建物の可能性があり、これについては個別遺構として報告する。なお、すぐ北の平成 21 年度５地点で古代の竪穴建物らしき遺構が報告されていること、同時期の竈跡と考えられる 1180SX の存在から、この一帯は古代（７～８世紀ごろ）の居住域であった可能性がある（註 12）。

遺構の時期については、中世と近世が多い。1186SK は弥生時代の土器が出土しているが、後述のように遺構としての帰属時期が弥生時代なのか疑問がある。層位的に近世と確認できる遺構においても中世遺物しか見られない場合もあり、その時期決定は難しい。

写真 11　１地点北側検出状況（南西から）

写真 12　1022SX（北東から）

２．溝

１０３０ＳＤ（第７図）

１地点南部で検出した中世の東西溝群である。方位はE-12 ～ 22° -Sである。1030SDは東側は平成24年度１・２地点のSD2010、西では平成25年度２地点の110SDや160SDなどと連なる位置にあり、当初から溝の存在は想定していた。検出段階では、浅い落ち込みのようであったが、平成25年度調査においても複数の溝が重なり合っている状況があったので、同様の状況を想定して慎重に掘削したところ、a ～ dの４条の溝に分かれた。既往調査の溝では一定量の遺物が出土しているが、1030SDからの出土遺物は非常に少なかった。第６～７型式の山茶碗が出土しており、中世の溝と考えているが、同じ場所に近世溝が開削されている事例も多く、1030SDの帰属時期も決め手に欠く。

検出面からの深さは25cm程度、 cは10cm程度しか残っていなかった。これは１地点が砂堆中央部でⅤ層の標高が最も高い地点であり、それゆえに近世以降の開発（削平）の影響を受けやすかった結果であろう。1030SDの底部標高はTP3.35 mであるが、これに対し、平成24年度調査のSD2070の底がTP2.8 m、25年度調査の110SDがTP2.45 mである。底レベルは単純に地形に対応しており、水路として一定方向に水を流すようには開削されていない。

1030SDは東側で収束している。ただし、底部しか残っていないので、これは掘削単位であって、当時の地表面では溝が続いていた可能性もある。仮に1030SDが既往調査の溝と一連とすれば、最長で東西約190 m以上となる。これに対して、1030SDがこの地点で収束しており、これらの溝は１条の溝ではなく複数の溝が同じ方位で軸線を揃えていた場合は、複数の区画が存在したことになるのだろうか。この問題によって、この溝とそれによって形成される区画の性格も変わる。この点については第４章で検討しており、参照されたい。

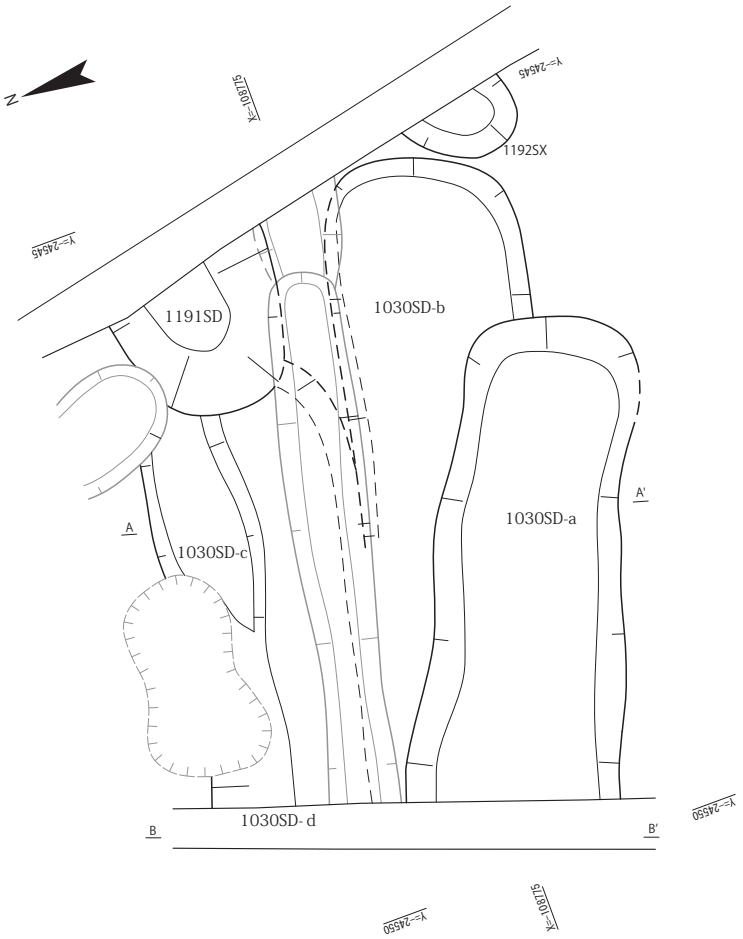
東に続く位置には1191SDと1192SXがある。1192SXは伊万里焼が出土しており、確実に近世遺構である。1030SDとは断面形状が異なることから、これらが1030SDと一連の溝ではないと判断しているが、その位置を踏襲した近世溝の可能性はある。

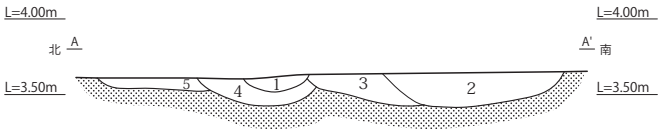
１０４０ＳＤ（第８図）

１地点中央部で検出した東西溝である。方位はE-23° -S、調査区とほぼ直交する。調査時の検出状況は1030SDと同様であった。つまり幅2.7 mほどの幅広に検出されたが、掘削してゆくと２条の溝に分かれた。あまりにも幅が異なるので別の遺構とすべきであったかもしれないが、残っているのは底部のみであり、同じ位置に繰り返し掘削されている溝の事例も多いことから同じ番号とした。第７型式の山茶碗などが出土しており、13世紀の遺構と考えているが、少量であり帰属時期の決め手に欠ける。

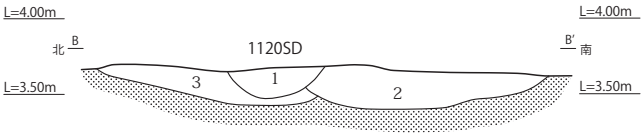
1040SD-aは椀型の断面形状、1040SD-bは皿形の断面で浅い。1040SD-b底部は中央部がくびれるようになっているが、これは掘削単位であろう。

この溝の位置は現代の地境と同じ位置にあり、このような事例は数多く本遺跡で報告されている（註13）。問題となるのは、概要でも述べたように、南北の1030SDと1050SDとの関係である。1040SD-aが1050SDと、1040SD-bが1030SDと同じ区画の溝とすれば、それぞれ断面形状が似ており、ともに間隔が約18 mとなる。逆の組み合わせの場合は距離は約16 mとなるが、これは80 mほど東に位置する平成20年度３・４地点の方形区画（024SDによって形成）の１辺とほぼ同じである。いずれにせよ、この溝の南北で遺構の密度やⅤ層の残存状況が変わることは注意を要する。特に北側の区画は柱穴などの遺構が多く、屋敷地などの区画を形成していたと考えられる。





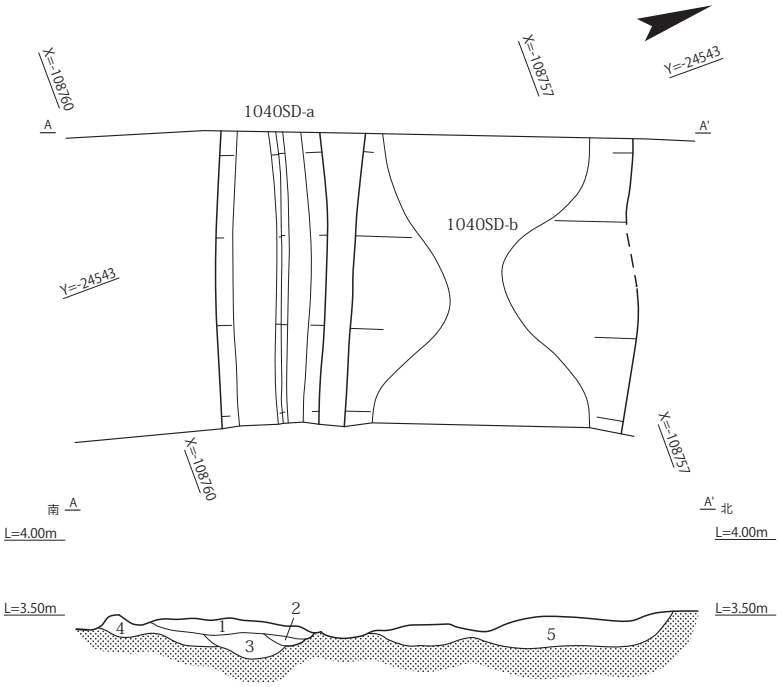
1, 黒褐色(10YR3/1)細粒砂　1120SD
2, 褐色(10YR4/4)中粒砂　1030SD-a
3, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂 1030SD-b
4, 褐色(10YR4/4)中粒砂　1030SD-d
5, 褐色(10YR4/4)中粒砂　V層含む 1030SD-c



1, 黒褐色(10YR3/1)細粒砂　1120SD
2, 褐色(10YR4/4)中粒砂 1030SD-a
3, 褐色(10YR4/4)中粒砂　V層含む　1030SD-d

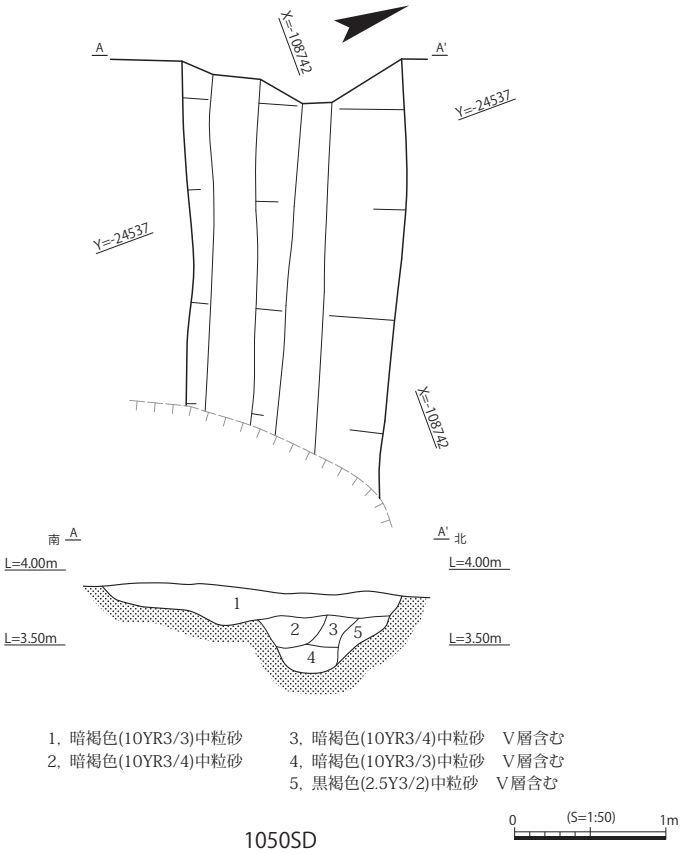
0　(S=1:50)　1m

第7図　1030SD



1，オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂　1040SD　上層
2，暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂　1040SD-a
3，黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂　1040SD-a
4，暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂　1040SD-a
5，オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　Ⅴ層含む　1040SD-b

1040SD



1，暗褐色(10YR3/3)中粒砂
2，暗褐色(10YR3/4)中粒砂
3，暗褐色(10YR3/4)中粒砂　Ⅴ層含む
4，暗褐色(10YR3/3)中粒砂　Ⅴ層含む
5，黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂　Ⅴ層含む

1050SD

第８図　1040SD・1050SD

１０５０ＳＤ（第８図）

１地点北端で検出した東西溝である。方位は 1040SD とほぼ同じ E-26°-S である。既に述べたように 1040SD の北側の溝として区画を形成する溝と考えている。この溝の南側、1040SD との間には多くの柱穴・土坑がある。

1050SD は 1030SD や 1040SD に比べ残存状況は良好である。上層は幅 2.7 m、深さ 20cm ほどの皿形の溝であり、北側に幅 80cm ほど、深さ 40cm 程度の深碗形断面の下層の溝が存在する。出土遺物は少量の中世陶器のみである。

３．土坑・その他の遺構

１０６０ＳＫ（第９図）

１地点北側で検出した径約１ｍの円形土坑である。断面は緩やかなＶ字状をなす。数枚の山茶碗と山皿（第５～６型式＝常滑窯編年４～５型式）が上層部でまとまって出土した。埋土は黒色を呈しており検出時に目立っていた。埋土が黒色を呈する遺構は比較的遺物が多く、同様の土坑は 1152SK や 1160SK などがある。これは有機物も含めた廃棄土坑であり、その結果としての黒色化なのではないだろうか。

１１０２ＳＫ・１１０８ＳＫ・１１６０ＳＫ（第９図）

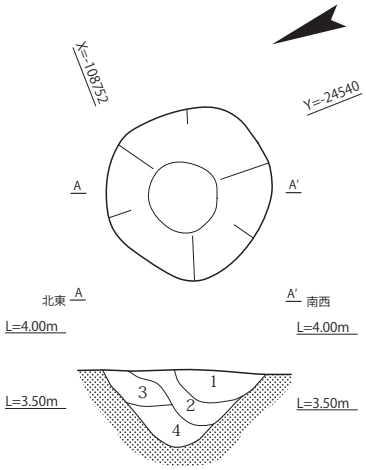
１地点北側で 1060SK の数m北に並ぶ径１～ 1.5 mの円形土坑である。1102SK は深さ 20cm ほど、1108SK は深さ 20cm ほど、1160SK は 30cm ほど、どれも 1060SK に比べて浅い。先述のように埋土は他の遺構に比べて黒色もしくは地山の砂があまり混入していないため暗い色調を呈する。

１１５２ＳＫ（第９図）

１地点北側で検出した円形土坑である。外縁部の埋土が斑土状であり、掘削後すぐに人為的に埋めた、つまり井戸掘り方と考えた。しかし、既往調査事例の井戸をみれば、深さはＶ層上面から１ｍを超え、絶対高でも TP2 m以下まで達し、大きさも径２ｍ以上である。これに比べて 1152SK は小さく浅い。よって井戸とは考えにくい。中央部が別遺構の可能性もあり、本報告では土坑と判断したい。

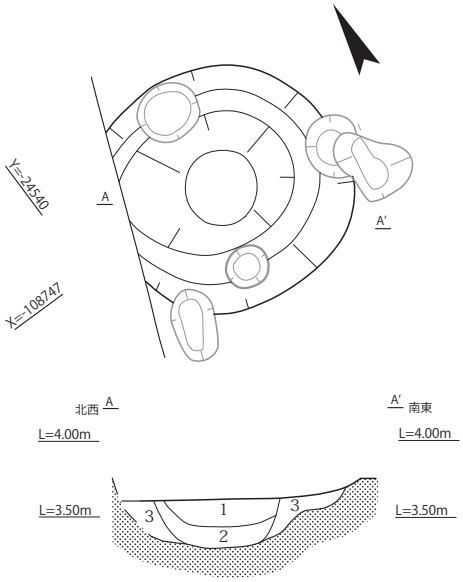
写真 13　1102SK（東から）

写真 14　1108SK（南東から）



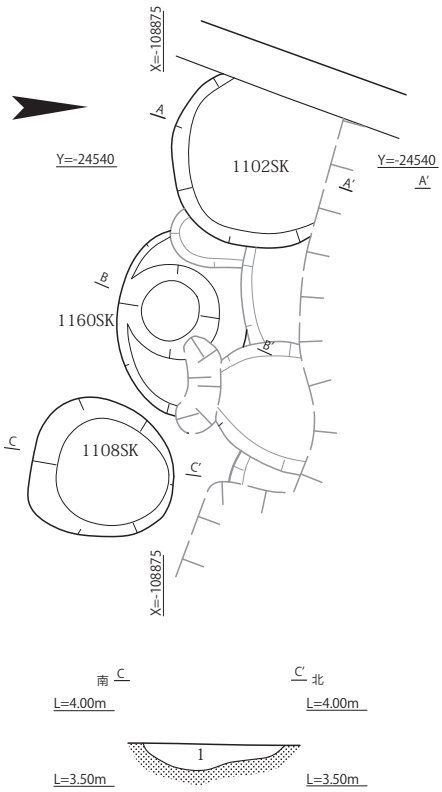
1，黒褐色(10YR2/3)中粒砂
2，黒褐色(10YR2/3)中粒砂と
にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂とⅤ層の斑土
3，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
4，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む

1060SK



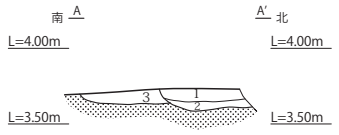
1，黒褐色(10YR2/1)中粒砂
2，黒色(10YR2/1)中粒砂
にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂含む
3，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂と
黒色(10YR2/1)中粒砂の斑土

1152SK



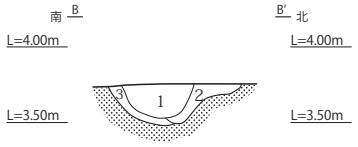
1，オリーブ黒色(5Y2/2)中粒砂

1108SK



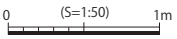
1，黒褐色(10YR3/2)中粒砂
2，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
3，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む

1102SK



1，黒褐色(10YR3/2)中粒砂
2，黒褐色(10YR3/2)中粒砂　Ⅴ層多く含む
3，黒褐色(10YR3/2)中粒砂　Ⅴ層含む

1160SK



第9図　1060・1102・1108・1160・1152SK

１０６２ＳＸ・１１５０ＳＸ（第10図）

1062SXは埋土に焼土片がみられ、少量ながら古代の土器が出土する。多くの中世遺構に切られており、プランもよく把握できなかった。1062SX-bには多くの焼土片が含まれており、目立っていた。この部分からは山茶碗が出土しているが、これは中世以降に撹乱を受けた結果であり、上層や1062SX-bの焼土片や炭化物はかつては存在した竪穴建物に由来するのかもしれない。層位的にみて、中層（断面図の4）と下層（断面図の７～９）は竪穴建物の一部であった可能性もある。

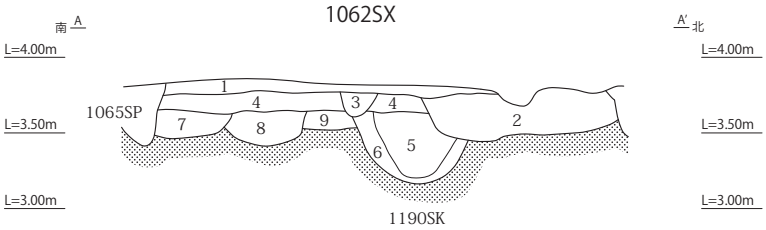
1150SXは焼土片などはないが、周辺の遺構も含め、やはり古代の遺物が出土する。プランも方形竪穴建物を思わせる（写真16）。

ともに中世以降の遺構で大部分が失われており、周壁溝や床面、主柱穴など積極的な証拠は見出せなかった。後述するように1180SXは７世紀の竈や炉跡の可能性があり、すぐ北の平成21年度調査５地点では古代の竪穴建物らしき遺構が報告されている。1062SXと1150SXが古代の竪穴建物であったとすれば、後述の1180SXも含めて、この一帯は古代（７～８世紀ごろ）の居住域と言える。

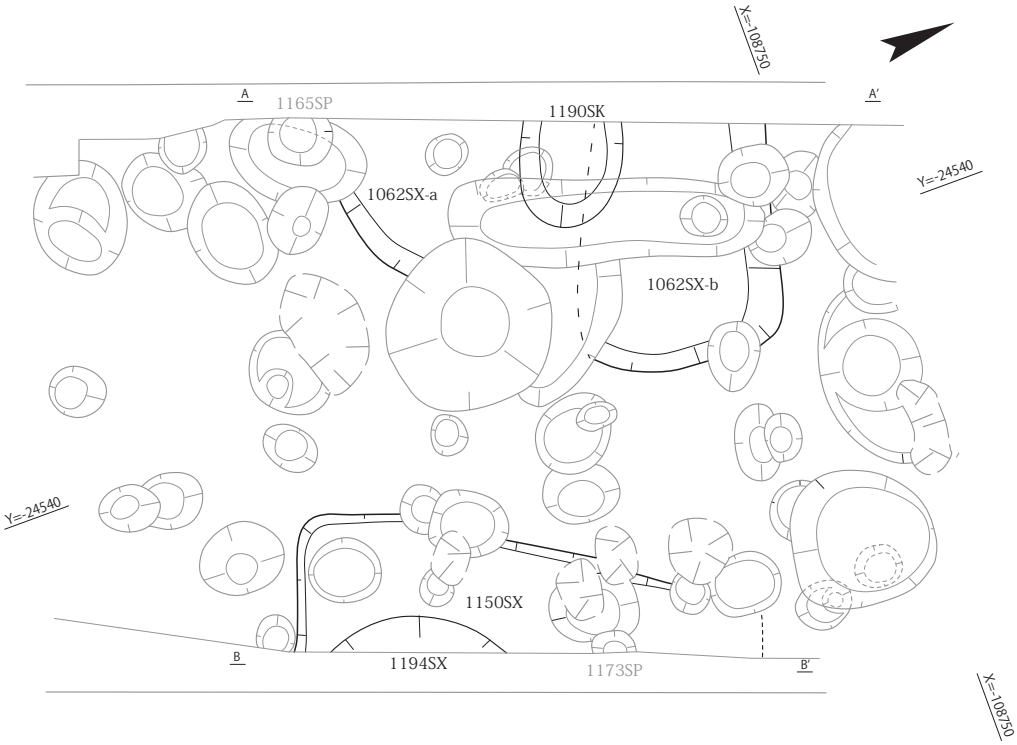
ただし、平成21年度調査の事例も残存状況は不良で、調査時には竪穴建物と判断できず報告書段階で再評価している。いずれも状態が悪い点が共通しており、本遺跡における古代の遺構は弥生時代の遺構よりも中世～近世による撹乱を受けているように思われる。時期ごとの遺構の立地状況とも関連し、今後の検討課題である。

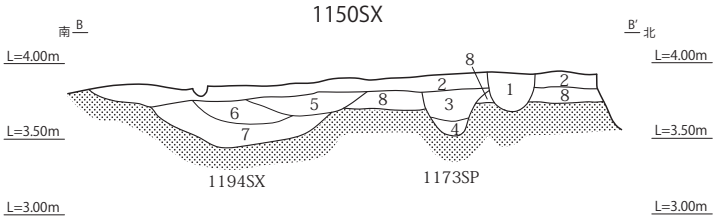
写真15　1062SX（北西から）

写真16　1150SX（西から）



1, 暗褐色(10YR3/3)細粒砂(上層)
2, 暗褐色(10YR3/4)中粒砂　焼土片多量含む
3, 暗褐色(10YR3/3)細粒砂
4, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
5, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂(1190SK)
6, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　Ⅴ層含む(1190SK)
7, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
8, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
9, 褐色(10YR4/4)中粒砂　Ⅲ層





1, 褐色(10YR4/4)中粒砂
2, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層含む
3, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層含む　(1173SP)
4, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層多く含む　(1173SP)
5, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　(1194SX)
6, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む　(1194SX)
7, にぶい黄褐色(10YR4/3)中細粒砂　Ⅴ層多く含む　(1194SX)
8, 褐色(10YR4/4)中粒砂

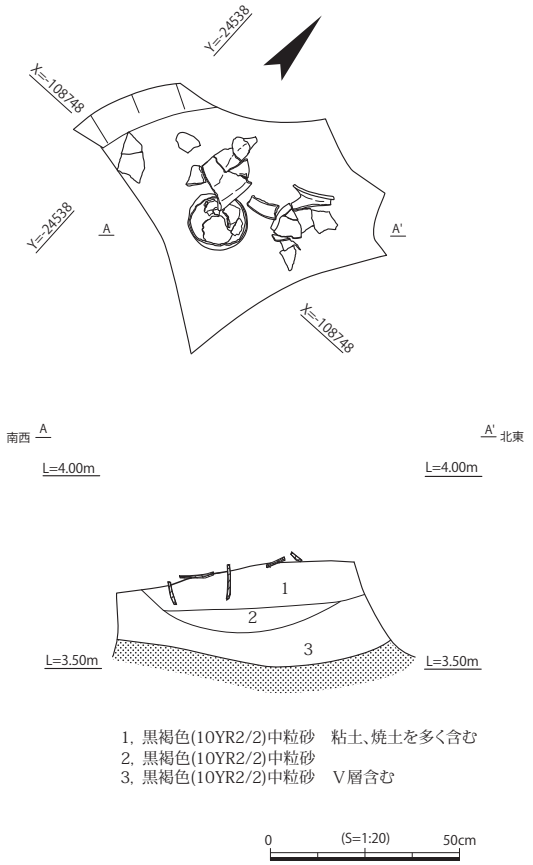
0 (S=1:50) 1m

第 10 図　1062SX・1150SX

１１８０ＳＸ（第11図）

1地点北側で検出した遺構で、竈や炉跡の可能性がある。埋土上層は粘土や焼土片が多く混ざる。竪穴建物の竈や炉跡の痕跡と考えているが、大部分を撹乱や中世遺構で壊されており、詳細は不明である。この遺構が竈や炉の跡と考えれば、先述の1150SXなどが古代の竪穴建物であった蓋然性も高まる。

出土遺物は7世紀代の甕が2点出土している。手づくねの不整形甕（図版24-50）は粘土層に立てられたような状況で出土していた。もう1点の甕（図版24-49）は粘土層の上に散在していた。

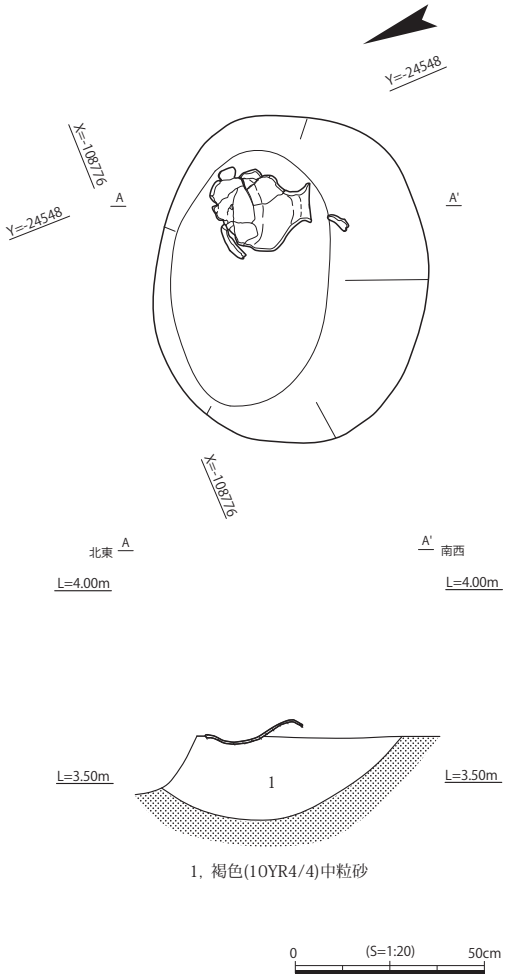


第11図　1180SX

１１８６ＳＫ（第12図）

1地点南側、1030SDの南で検出した土坑である。80 × 60cmほどの楕円形土坑で、ほぼ半分残った1個体の弥生中期の壺（図版23-25）が出土した。横に倒れた状態で上側は失われていた。

出土した壺の残存率は高いが、この遺構の帰属時期が中世以降の可能性がある。完掘後、周辺に残っていた包含層（もしくは遺構の一部か）を掘削したところ山茶碗が出土した。1186SKは山茶碗の出土する包含層（もしくは遺構）を切っていたことになる。そもそも1030SDとの切り合い関係も埋土が類似しており判断に悩んだが、弥生土器の存在から1186SKを古いと判断したのが正直なところである。よって、中世以降に弥生土器を廃棄したものかもしれない。



第12図　1186SK

第３節　２地点の遺構

１．概要（図版７～15）

２地点は本年度の調査において最も広く、かつ最も成果を得た調査区である。西区と東区に分けて調査を行ない、一部拡張部もあるが一つの調査区として報告する。特筆すべき成果は２つの大量出土銭および独鈷杵と和鏡片の出土である。大量出土銭Ａ（2140SX）は古瀬戸三耳壺の中に、大量出土銭Ｂ（2190SX）は片口鉢の破片を蓋とし常滑壺の中に銭貨が納められていた。大量銭Ａは検出段階で上部がわずかに見えていた。大量銭Ｂは壁際の遺構＝2157SKを掘削したところ一部が露出し、壁面部を拡張し調査した。内部の銭貨に対する本格的な調査は実施していないが、大量銭Ｂには永楽通宝が含まれていることが判明した。また、周辺の溝などから出土する銭貨も北宋銭を主としつつも永楽通宝が最も多い。大量出土銭の時期も15世紀以降と考えられる。

独鈷杵は大量出土銭Ｂの近くに位置する隅丸長方形土坑2156SKから出土した。銅製である。伝世品や経筒との共伴例はあるが、集落遺跡の発掘調査における出土事例は少ない。和鏡の破片は調査区東側の浅いくぼみ（2152SX）から出土した。

大量出土銭と独鈷杵は方形区画溝埋没後の遺構に伴っている。これらの溝は区画の南西部にあたる。南北方向の溝（2148、2158SDなど）と東西方向の溝（2115、2199SDなど）、南北から東西に曲がる溝（2105SD）　など10条以上が確認された。区画内の様相は全く分からないが、大量出土銭や独鈷杵がこの区画と関連することは間違いなかろう。

次に特記すべき遺構は調査区中央を斜めに横切る2120SDである。幅４m、深さは70～80cmをはかる。本遺跡では最大規模の中世溝である。方向性と規模から平成24年度４地点の4031SDと同一溝と考えられる。出土遺物は非常に多く、調査全体の３割強を占める。

2120SD以東は遺物の出土が少なくなり、Ｖ層も小礫が混ざり周辺と異なる。遺跡の縁辺部といった様相を示す。ただし、東壁以東にも延びる東西溝2090SDからは多くの近世陶器が出土している。中世以前の遺物が少ないことと対照的である。

主な２地点の中世遺構の年代的な位置付けは右の表４の通りである。溝は時期幅があり、その判断は難しい。2120SD下層については、開削時と埋没時とを表４に記している。第６型式の山茶碗は多く出土しているが、この段階の遺構は少ない。２地点においては、15世紀の遺構が最も多い。

調査区の西側は大規模な撹乱を受けており、西端にわずかに遺構面が残されるのみであった。ただし、大撹乱の中で貝殻廃棄遺構（2060SX）の一部が残っており、ここからは

西暦			
1150	Ⅴ-1	第４型式新	
1200	Ⅴ-2	第５型式古 第５型式新	2120SD下層（開削）
		第６型式	
1250		第７型式	2120SD下層（埋没）→中層 2100SD
1300	Ⅴ-3	第８型式	
1350		第９型式	
1400	Ⅴ-4	第10型式	2160・2165・2186SK 2135・2144SD 2120SD上層 2180SD
1450		第11型式	方形区画溝群（2115・2205SDほか） 2153SX遺構群 2120SD最上層 2140SX(大量出土銭A）2190SX（大量出土銭B） 2156SK（独鈷杵出土）

※畑間遺跡の時期区分と山茶碗編年

表４　２地点遺構編年

常滑焼の水瓶（写真 17・第 50 図 -334）や 13 世紀の山茶碗などが出土している。

2001SK や 2002SX など大型の遺構は近世のものである。大撹乱の東側一帯には多くの土坑、柱穴が密集しているが、明確に建物などを認識できない。この一帯の遺構は出土遺物が少なく、時期は不確定であるが近世の遺構が主と考えている（検出時に近世銭貨＝ 1863 年初鋳の文久永宝が出土している）。また、近代土坑（撹乱）からは、すぐ北に位置する常蓮寺に関係すると思われる近代陶磁器類が出土している。なお、この一帯の地山砂層や遺構埋土には多くの酸化鉄（俗称鬼板）が含まれており、砂層の色調も赤味を帯びていた。

遺構の多くは中世～近世であるが、弥生時代と考えられる遺構は 2010SK、2200SK、2221SK と 2222SK などがある。前２基は黒色の埋土が特徴的で、後述する 4 地点の弥生時代の遺構と類似する。後２基はともに 1 個体の弥生土器が出土したピット状遺構である。

２．溝

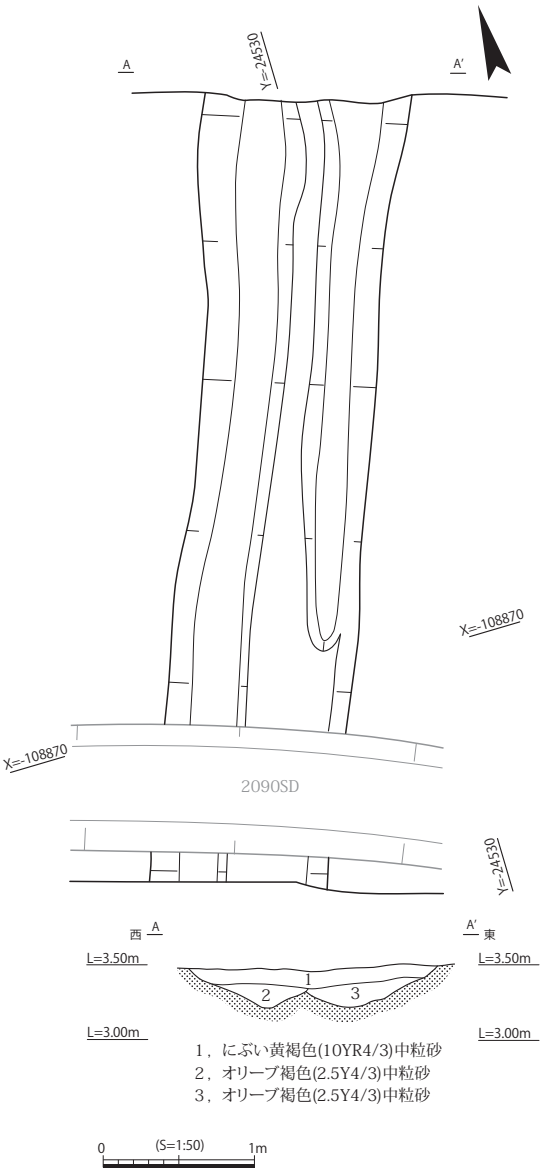
２１００ＳＤ（第 13 図）

２地点東端で検出した。下層は２条の小溝に分かれた。既往調査でも多くみられる調査区と直交する方位（N-20°-E) の溝である。直交する近世の東西溝（2090SD）に切られている。遺物は少量であるが、第６～７型式の山茶碗の小片などが出土している。

2100SD の東側にも遺構は検出されているが、遺物はほとんど無い。遺跡範囲の東端とされる位置にあたり、中世のある時期には居住域の東端であったのだろう。このことから区画溝と考えられる。

平成 26 年度２地点の 001SD、もしくは 002SD と同一溝の可能性がある。002SD 以東からは遺物の出土が激減することから、これらは同様に集落の端を区画する溝と指摘されている。

写真 17　2060SX（北から）



第 13 図　2100SD

２１２０ＳＤ（第 14 ～ 16 図））

２地点東側で検出した幅約４ｍの大溝である。出土遺物は非常に多く、調査全体の３割強を占める。12 世紀～ 16 世紀にわたる遺物が出土しているが、13 世紀代と 15 世紀代が主である。

溝の方位は E-20° -N で、調査区の方位とも異なり、これまでの調査ではあまり見られない方位の溝である。方向や規模から平成 24 年度４地点の 4018・4031SD と連なることが明らかとなった（註 14）。これらが同一溝であれば、畑間遺跡の中央、砂堆くびれ部を東北東から西南西に横断する 250 ｍを超える大溝となる。埋土がグライ化によって暗い色調を呈しており、集落の中央を貫く水路であったと考えられる。この大溝については第４章でも触れており、参照されたい。

溝は最上層・上層・中層・下層の４段階に分けることができる。ただし、これは断面観察および出土遺物の検討の結果であり、調査時の分層とも少し異なる（註 15）。調査時には湧水も多く、正確な分層掘削ができなかった。

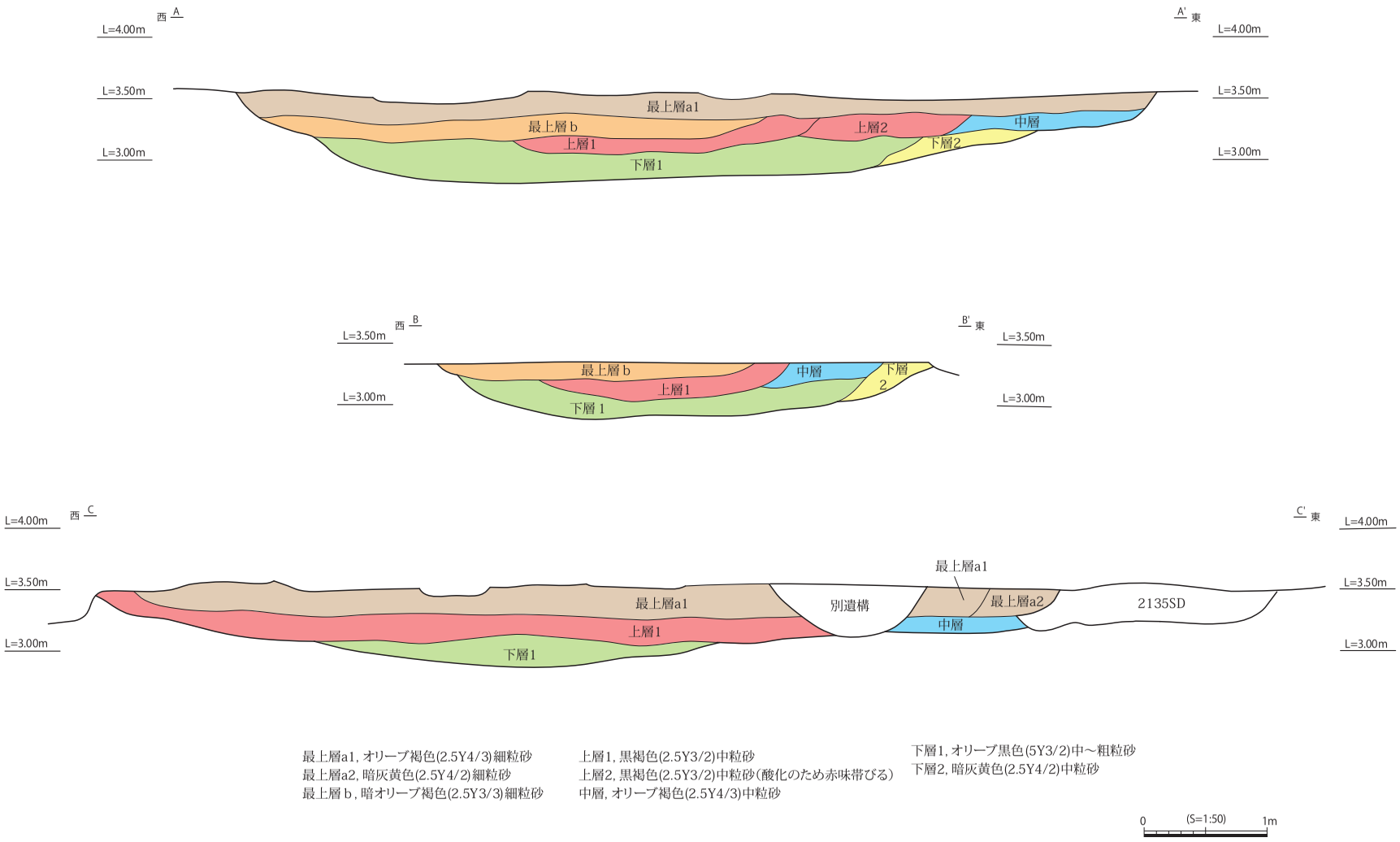
最上層は包含層として掘削している。周辺より暗色を呈し、遺物が多いことから何らかの遺構の存在は認識していたが、Ⅲ層上面での正確な検出は困難と判断し、通常通りⅤ層上面で検出を行ない、そこから溝としての掘削を開始した。そのため断面記録のうち調査区内土層観察ベルトのものは最上層 a がない。

最上層からと断定できる遺物が無いのだが、1433 年初鋳の宣徳通宝が 2120SD 検出段階で出土している。また少量出土している 16 世紀代の常滑焼などを最上層に帰属すると判断すれば、15 世紀後半～ 16 世紀にかけてゆっくり埋没していったと考えられる。最上層 a を一つの溝としてみれば、幅は４ｍと広いが、深さは現状で 25cm ほど、断面形状は皿形を呈する。当時の地表面は不明だが、幅に比して浅い溝であったと考えられる。一方、最上層 b は北西側のみで確認され、南壁面にはみられない。幅 2.5 ｍで、西に寄った位置に同方向で開削された溝と復元される。南側に続いていなかったのか、浅かったため最上層 a によって失われたのかは分からない。

上層は最も多くの遺物が出土した。第 16 図の遺物出土状況図のうち赤色で示した遺物は上層に、青色は中層に伴う。北側は常滑焼の甕片が多く、遺物の密度が高い。南側は貝殻や有機物も含まれている。調査時には、上層と中層のレベルがほぼ同じであるため、同段階の遺物として検出していた。しかし、出土遺物は二つの線状分布を示しており、これと断面観察を合わせて検討した結果、赤色で示した上層の遺物と青色で示した中層の遺物に分かれることが明らかとなった。

上層は断面観察と遺物出土状況から 2120SD 本来の方位とは異なるプランが認識される。上層は調査区北壁では東端に寄り、南壁では最上層よりも西側に広がっている（断面図 C 参照）。この方向性は周辺の溝（2115SD や 2135SD など）とほぼ同じである。本来の 2120SD の方向性（この方位で平成 24 年度４地点の 4031SD と連なる）とは異なる。上層は下層～中層が埋没した段階で別の溝として開削されたのだろう。このように考えた場合、上層段階の溝は平成 24 年度４地点まで続く大溝ではなく、南西側の 2135SD などと同じ一群となる。ただし、2135SD は遺物は少なく、埋土の様相も異なる（註 16）。上層の出土遺物は北側は大部分が常滑焼の破片、南側は鍋釜や鉢や貝類などと様相が異なる。出土遺物の年代は古いものも含むが、14 世紀末～ 15 世紀半ばを主とする。

中層は溝の東側に残る。第 16 図の青色で示した遺物は中層に伴うものである。第７型式の山茶碗を含むが、第５型式の山茶碗が比較的多く、上層の遺物よりも古相を示す。杏葉唐草文軒平瓦はこの層から出土している。遺物の量は上層より少ない。



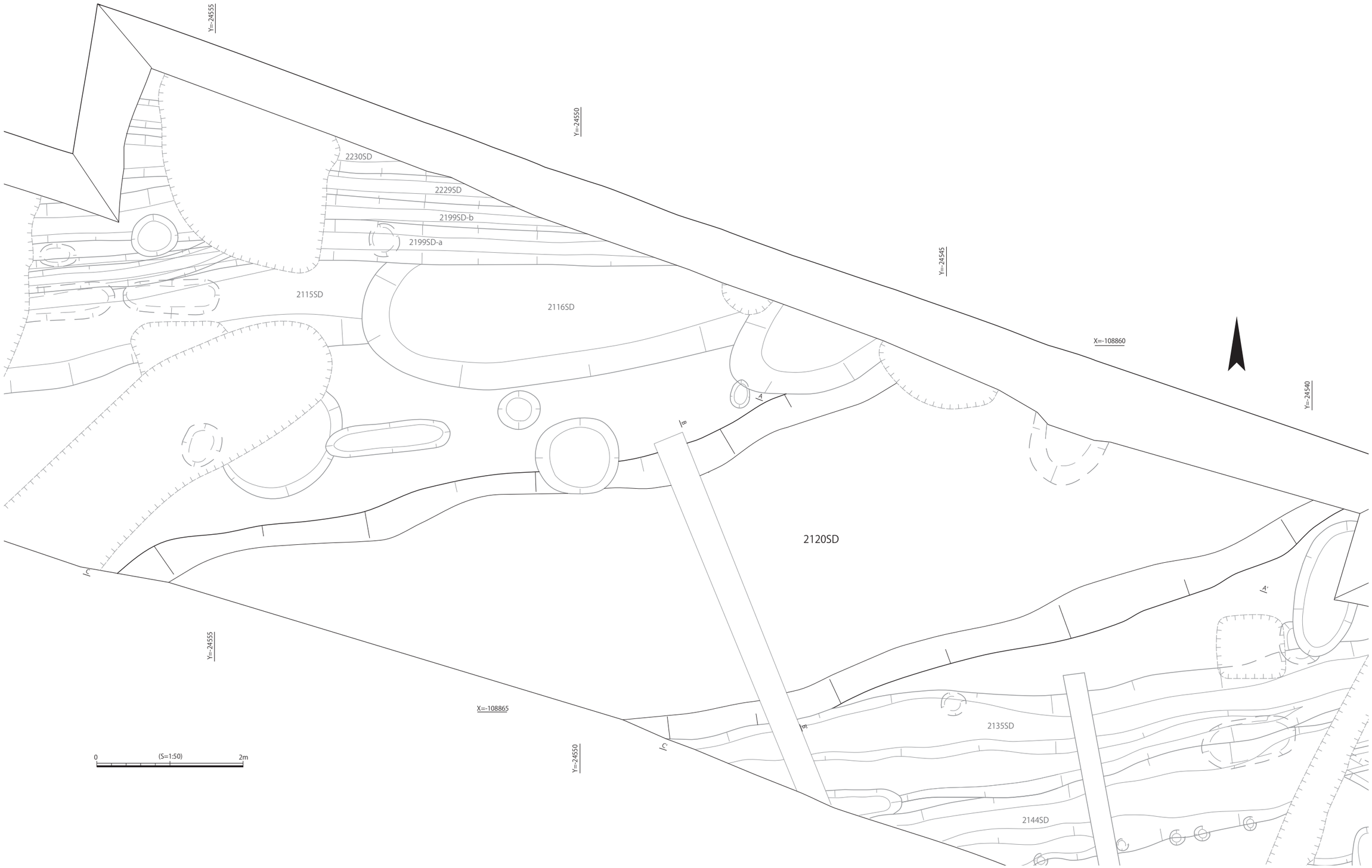
最上層a1, オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂
最上層a2, 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂
最上層b, 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂

上層1, 黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂
上層2, 黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂(酸化のため赤味帯びる)
中層, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂

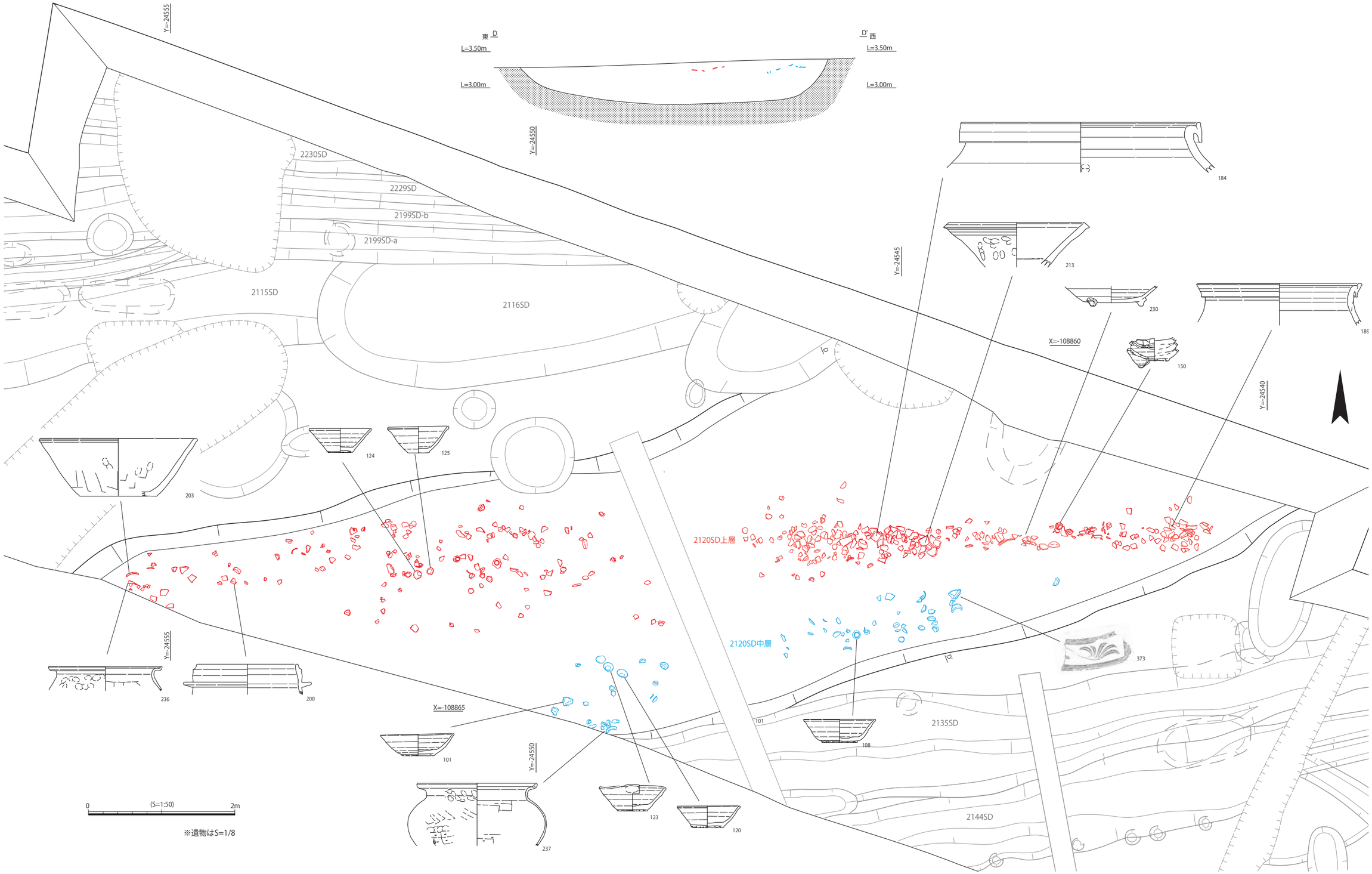
下層1, オリーブ黒色(5Y3/2)中～粗粒砂
下層2, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂

0 (S=1:50) 1m

第14図　2120SD 断面図



第 15 図　2120SD 平面図



第 16 図　2120SD 遺物出土状況図

下層は下層１と２に分かれる。下層２は東側肩部に残る層である。正確な分層掘削ができていないため、確実なことは言えないのだが、数多く出土している第５～６型式の山茶碗は下層に帰属する遺物と考えている。

各層の上記の分析から 2120SD の変遷を述べてゆく。まず、下層～中層の段階である。出土遺物に第５～７型式の山茶碗が含まれることから、12 世紀末に溝が開削され、その後 13 世紀後半までに埋没したと考えられる。この段階では、平成 24 年度４地点まで続く集落を横断する大溝であった。その後、上層が開削されたが、これは 2135SD などと同じ方向性であり、本質的には 2120SD の再掘削とは言えない。第 16 図に示した上層出土の遺物は常滑窯８～９型式の甕や鉢が主で、古瀬戸なども含まれている。14 世紀末に開削し、15 世紀半ばには埋没したと考えられる。その後、再び幅４m以上の大溝として 2120SD 最上層が開削された。少量の 16 世紀の遺物があったことから、16 世紀を最後に埋没したと思われる。

なお、平成 24 年度調査の 4031SD からは第４～７型式の山茶碗が出土し、再掘削された 4018SD からは第９型式の東濃型山茶碗が出土している。よって、4031SD が下層～中層の段階、4018SD が上層～最上層に相当するとみられる。

方形区画溝群（２１１５・２１４８・２１９９・２２０５ＳＤほか）（第 17 ～ 19 図）

２地点中央部で検出した一群の南北溝と東西溝は方形区画の南西隅を画するものと考えられる。これらの溝の上に大量出土銭Ａ（2140SX）と独鈷杵が出土した 2156SK が存在している。南北方向の溝は 2148・2149・2158・2196SD の４条、東西方向の溝は 2115・2198・2199・2201・2209・2211・2223・2224・2229・2230SD の 10 条、南北から東西に曲がる溝は 2205SD の１条、計 15 条の溝からなる。ただし、2224 と 2230 は同一溝の可能性が高く、2205SD と 2199SD は部分的にａとｂに分けている。溝および区画の方位は多少の幅がある。南北溝の方は 2205SD を除きほぼ真北であるが、東西溝はE- ３～８°-N である。2116SD も当初は同じ群をなす溝と考えていたが、深さや形状が異なるので、直接関連しない遺構と判断した。

あまりにも多くの溝があり、個々の溝の形状や数値を羅列しても煩雑であろう。それらは第 17 ～ 19 図などを参照されたい。以下、調査時の所見と溝の埋没・開削過程について詳述する。

溝の埋土はにぶい黄褐色～灰黄褐色の中粒砂で、差異はあまりなく、個々の溝の正確な把握は難しかった。溝の幅は 2115SD が約１m、2223SD は 50cm 以下と少し差がある。2116SD は２mを超えるが、これは同じ区画溝には属さない可能性がある。いずれにせよ、同じ場所に何度も掘り返されており、埋土が類似し、重なる溝と溝の間にあるわずかな底部の立ち上がりを観察し得なかった場合は複数の溝を一つの溝と誤認してしまう。後述の 2144SD と 2136SD・2137SD の検出時の問題と同じである。このように正確さには多少の不安はあるが、遺構の変遷過程を変えるような誤認はないと考えている。以上の点を踏まえて、各溝の層位関係を検討したところ溝群の開削は４段階に分けることができる。第 17、19 図は各段階に溝を色分けして示している。

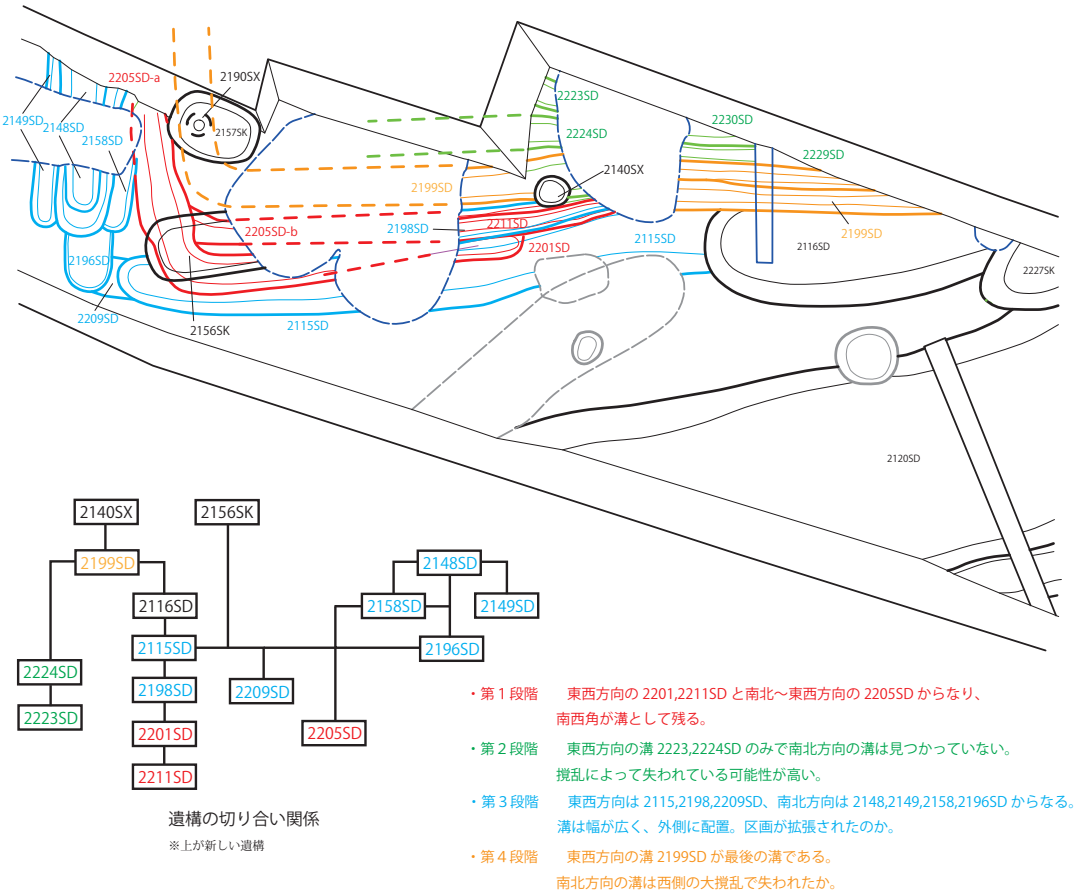
最古段階の溝と考えられるのは東西溝の 2201SD と 2211SD、南北から東西に曲がる溝 2205SD である。これらの溝は底のレベルが TP 約 3.1 mと最も低い群である。しかし、2201SD などは東に向かって浅くなるためか、東では残っていない。2201SD の東にある 2118SK は貝殻廃棄土坑であるが、元来は 2201SD の一部であったのだろう。2211SD はより新しい溝によって失われており東側の様相は不明である。南北溝は撹乱内に位置するか、もしくは新しい溝によって失われた可能性が高い。

第２段階は東西方向の 2223SD（2229SD）、2224SD（2230SD）からなる。その位置は内側に移り、南北方向の溝は撹乱の中に位置していたか、調査区外であろう。

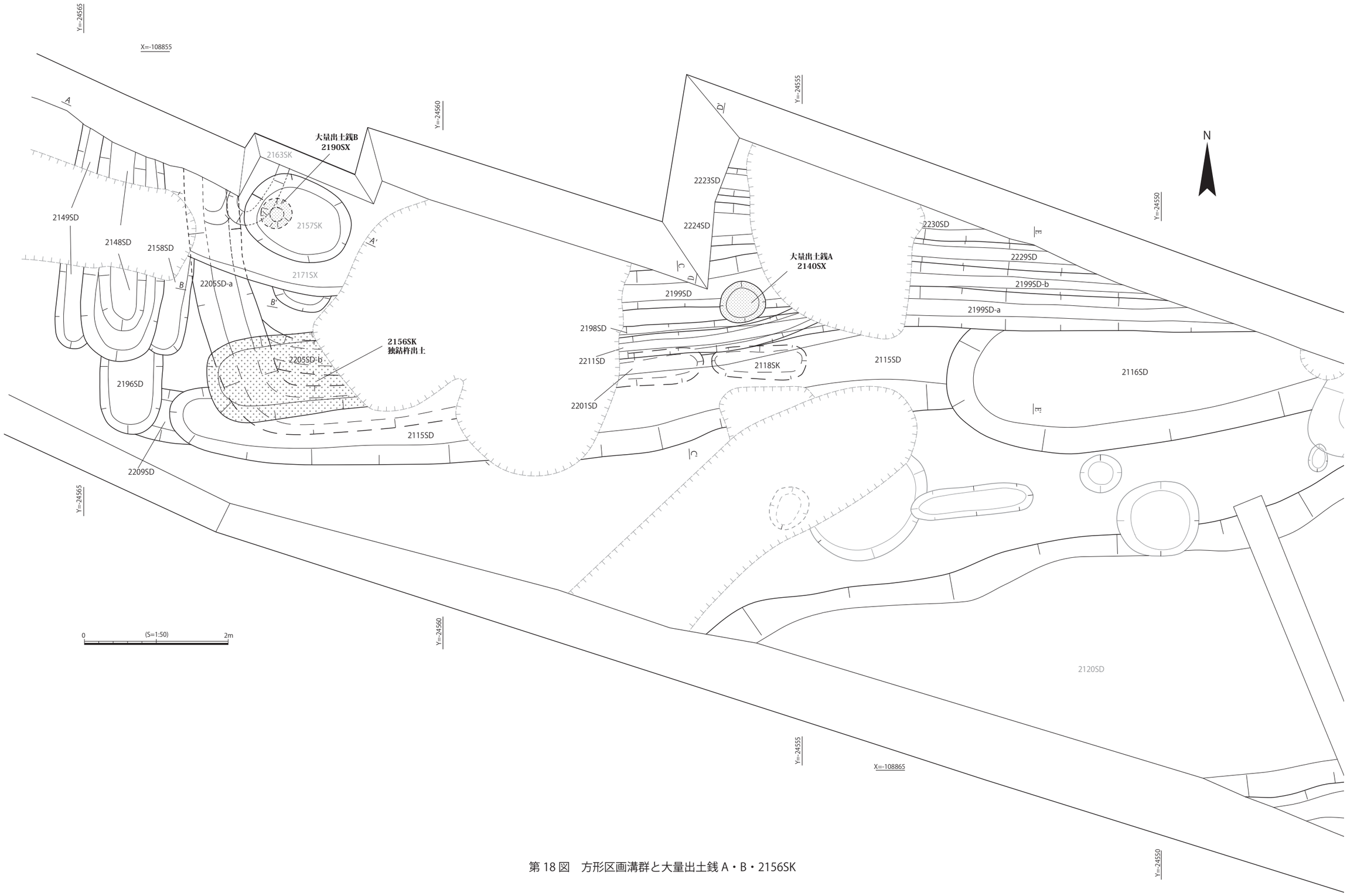
第３段階は東西方向は 2115SD、2198SD、2209SD、南北方向は 2148SD、2149SD、2158SD、2196SD からなる。第２段階の溝とは直接切り合い関係はなく、前後関係は不明であるが、順次溝が浅くなると考えて、より底部のレベルが高いこの一群を第３段階とした。この段階の溝は最も外側に開削されており、区画が拡張されたのかもしれない。溝は浅いが、幅は広い。2116SD はこの段階の溝が埋まった後に掘削されている。

最終の第４段階は 2199SD である。位置はやや内側に移る。後述するが大量出土銭 A は 2199SD の上に位置している。この段階の南北溝は撹乱もしくは 2157SK や 2171SX などによって失われた可能性が高い。なお、この想定位置に大量出土銭 B がある。よって、大量出土銭は同じ段階の溝の上に位置している蓋然性が高く、これらの溝によって形成される区画廃絶後に埋められている。

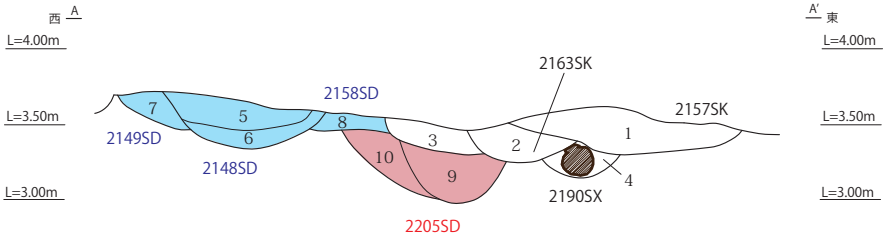
この方形区画溝群からの出土遺物は少ないが、第２段階の 2205SD から 15 世紀半ばの遺物や永楽通宝が出土しており、第１段階＝溝の開削が 15 世紀前葉、最終埋没は 15 世紀半ば～後半と考えている。頻繁に溝を掘り直しているが、人為的に埋めて再開削しているのかは分からない（註 17）。その位置が第１段階以降、→内→外→内と移動するのは、埋没した場所を避けて再開削しているのではないだろうか。２重堀の可能性もあるが、間隔が狭く考えにくい。いずれにせよ、限られた期間に何度も埋没と開削を繰り返しており、大量出土銭の存在も含め特殊な区画を形成する溝群であったと考えている。



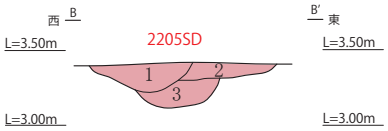
第 17 図　方形区画溝群模式図



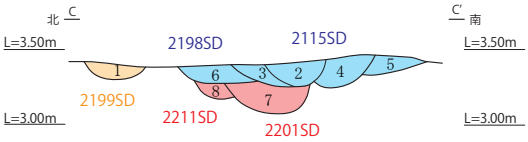
第 18 図　方形区画溝群と大量出土銭 A・B・2156SK



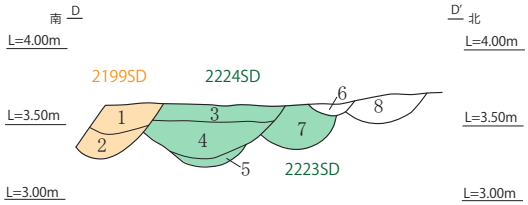
1，暗褐色(7.5YR3/3)細粒砂　貝殻含む　2157SK
2，褐色(7.5YR4/4)細粒砂　貝殻含む　2163SK
3，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　V層含む　2210SP
4，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　V層多く含む　2190SX(出土銭B)
5，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　2148SD
6，灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂　V層含む　2148SD
7，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　V層含む　2149SD
8，褐色(7.5YR4/3)中粒砂　2158SD
9，暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　2205SD
10，暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　V層含む　2205SD



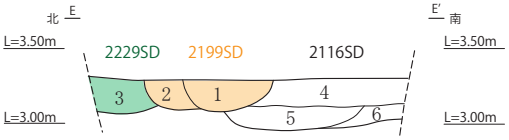
1，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　V層含む
2，灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂
3，暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂



1，灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂　2199SD
2，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　2115SD
3，灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂　V層含む　2115SD
4，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　V層少量含む　2115SD
5，暗褐色(10YR3/3)中粒砂　貝殻多量に含む　土坑か
6，灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂　2198SD
7，暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　2201SD
8，暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂とV層の斑土　2211SD



1，褐色(10YR4/4)中粒砂　2199SD上層
2，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　V層含む　2199SD下層
3，褐色(10YR4/4)中粒砂　2224SD
4，褐色(10YR4/4)中粒砂　貝殻多量に含む　2224SD
5，オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　V層含む　2224SD
6，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
7，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　V層多く含む　2223SD
8，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　V層含む



1，灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂　わずかにV層含む　2199SD上層
2，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　2199SD下層
3，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　V層含む　2229SD
4，暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂　2116SD
5，オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　V層含む　2116SD
6，暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　2116SD

第1段階
第2段階
第3段階
第4段階

0　(S=1:50)　1m

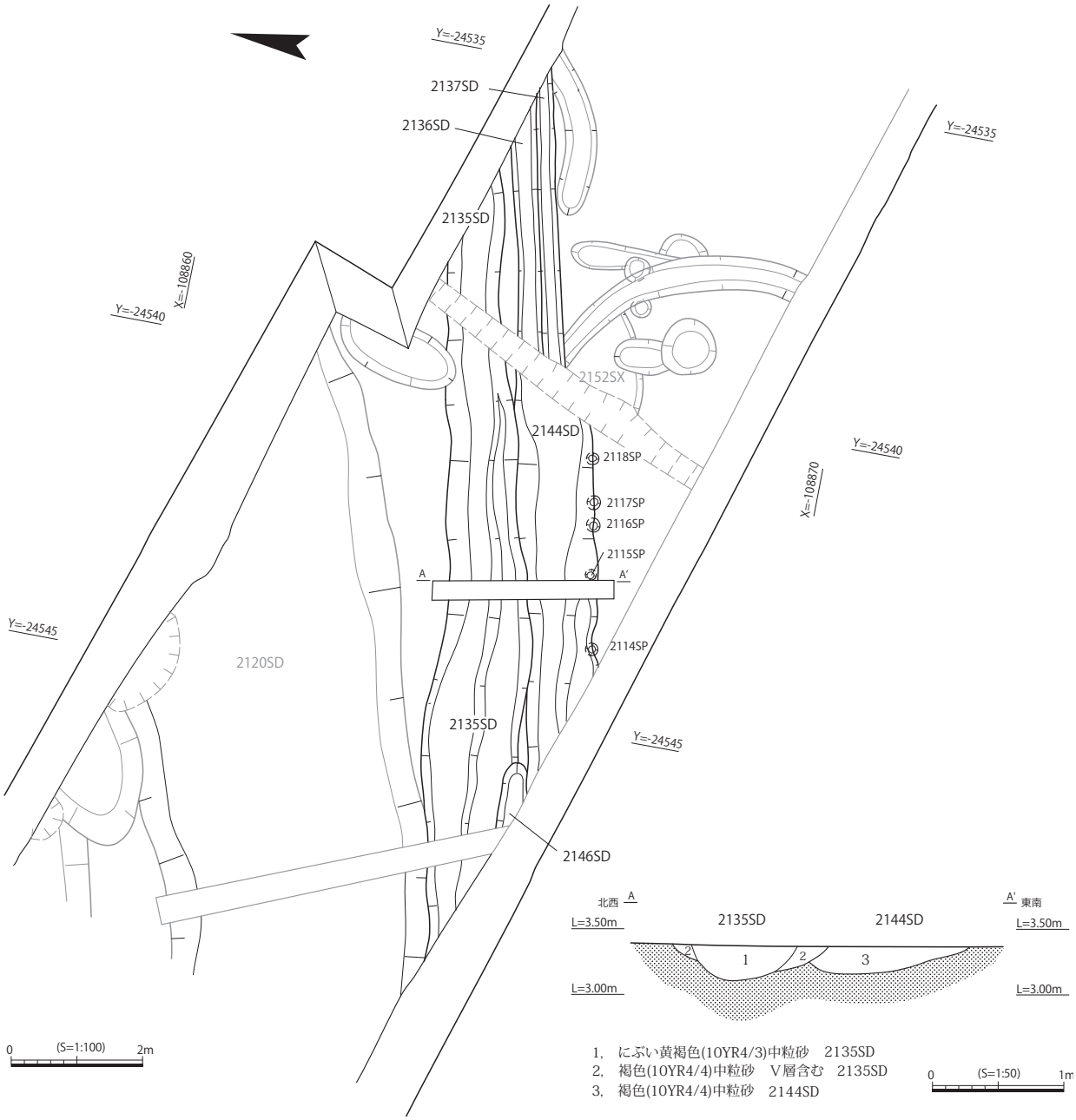
第19図　方形区画溝群断面図

２１３５・２１３６・２１３７・２１４４ＳＤ（第 20 図）

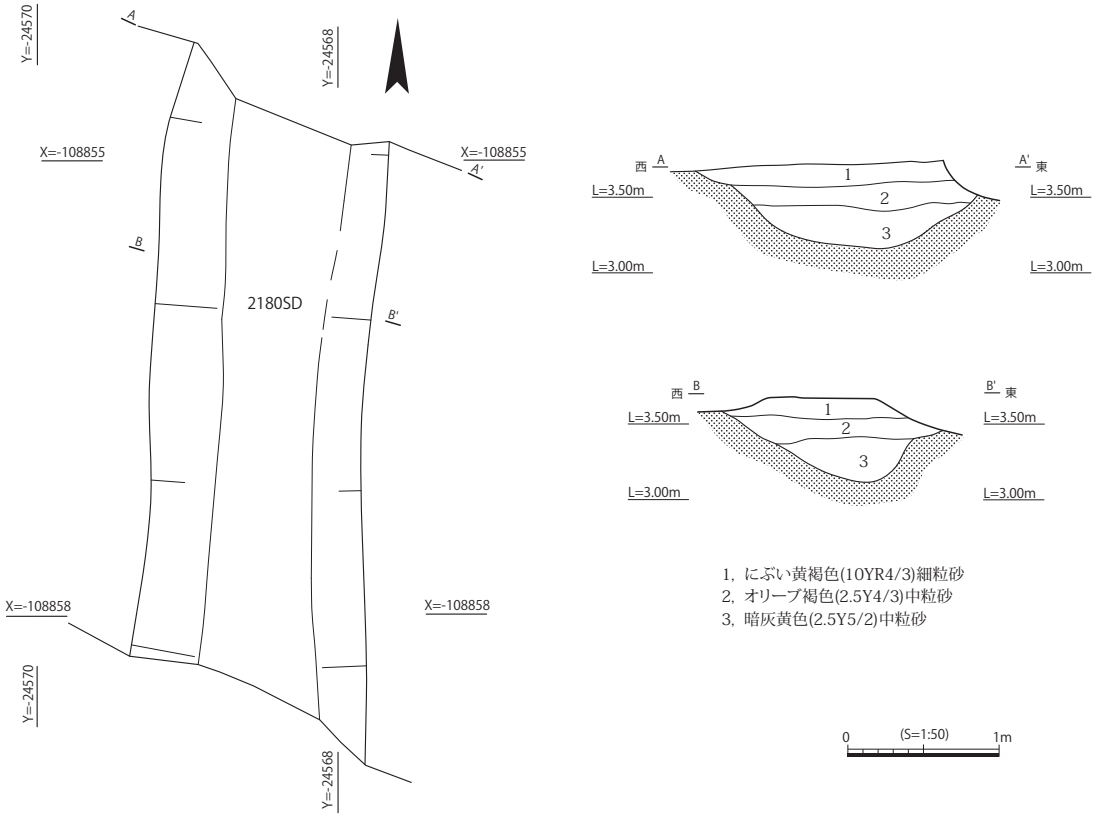
２地点東側で検出した幅１ｍ程度の溝群である。方向性は E-10°-N、先述のように 2120SD の上層と同じである。2144SD の南肩には杭列があり、溝機能時のものであろうが性格等は不明である。

同じ位置に同様の溝が何度も掘り返されたものである。2144SD が撹乱の東側で 2136SD と 2137SD に分かれているのは、深さの差と軸のずれのため底部に溝間の稜が残り、二つの溝と認識できた結果である。2144SD も本来は二つに分かれると考えられる。2135SD は南西側で中段部があり、これも掘削単位の一つであろう。2146SD も同一群の溝と考えている。

出土遺物は少ないが、古瀬戸や第９～ 10 型式の東濃型山茶碗が出土している。調査時は 2120SD に先行する（切られている）とみていたが、出土遺物や断面記録の再検討などから、これらの溝は 2120SD の上層と同時期の溝と判断した。



第 20 図　2135・2136・2137・2144SD



第 21 図　2180SD

２１８０ＳＤ（第 21 図）

２地点中央部で検出した幅 1.5 ～ 2 m、方位は N- ３°-E の南北溝である。埋土は３層に分かれる。上層は明るい色調でⅢ層と類似し、中層もやや暗いが同様の色調である。調査時はこの２層を上層とし、下層と遺物を分けた。下層は明らかに暗い色調を呈する。

遺物はコンテナ２箱分出土し、貝殻片も含まれていた。出土遺物は常滑焼の甕、第７型式頃の山茶碗の破片が多いが、第 10 型式の東濃型山茶碗や古瀬戸中期の碗や盤、15 世紀の土師器羽釜の破片も含まれており、遺構の帰属時期は 15 世紀と考えられる。上層と下層の差異が明瞭であるが、遺物の出土傾向に差はなく、上下層の時期差はないようだ。

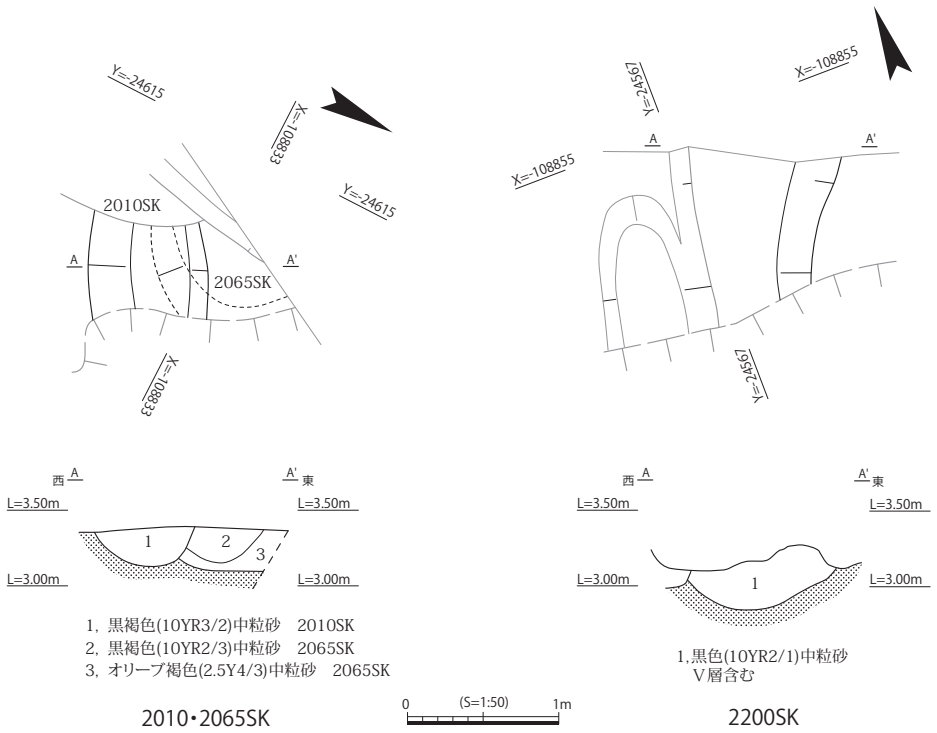
溝の方位は区画溝群の 2148SD などとほぼ同じであり、位置もそれほど離れてはいない。しかし、埋土や断面形状、遺物出土量から同一群の溝ではないと考えている。むしろ、2120SD の上層と埋土や遺物出土量が類似するが、断面形状は異なる。

写真 18　2180SD 断面（南から）

3．土坑（弥生時代）

2010・2065SK・2200SK（第22図）

これらの土坑は、畑間遺跡の弥生時代の遺構で多くみられる黒色の埋土が特徴的であり、2010・2065SKは2地点西端、2200SKは調査区中央部（2180SD近辺）で検出された。2065SKと2200SKからは弥生中期の壺（図版23-23）、2200SKからは後期の壺（図版23-32）が出土している。



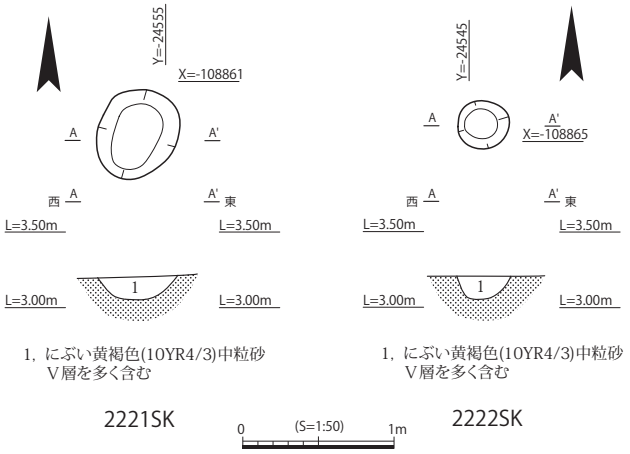
第22図　2010・2065SK・2200SK

2221SK・2222SK（第23図）

弥生時代後期～終末期の土器が出土したピット状土坑である。2221SKからは壺の底部（第44図-36）、2222SKからは小型の長頸壺（第44図-35）が破片状態で出土し、接合の結果、高い残存率の一個体の遺物と判明した。

2221SKは周辺に二次的な変色を及ぼしていた撹乱底部（註18）から検出されたため、そのプランの正確さには不安が残る。一方、2222SKの埋土は基盤層たるV層を多く含み、当初は植生痕か浅い窪みのように捉えてしまい、ともに詳細な観察が出来なかった点が悔やまれる。

調査区の方位＝地形に沿って並ぶかのような配置をなし、ともに壺1個体のみが出土しており、何らかの意味のある遺構とも考えたくなる。2120SDが開削される以前には同じような遺構が列を成していたのかもしれない（註19）。



第23図　2221SK・2222SK

４．土坑・その他の遺構（中世）

２０２２・２１７０・２１７２・２１８２ＳＫ（第 24 図）

２地点中央部東側一帯で検出した楕円～隅丸方形の土坑群である。2044、2045SK も同様の土坑であろう。2022SK はⅡ層から、2172SK はⅢ層からの遺構であることが調査区壁面の観察から分かる。同様の土坑が中世～近世にかけていくつも掘削されたのであろう。

土壙墓の可能性を考えて調査を進めたが、積極的にそれを示すような状況は見出せなかった。出土遺物は第６～７型式の山茶碗や常滑焼の破片が少量出土した程度である。

２１５３ＳＸ遺構群（第 26 図）

２地点中央部で検出した貝殻廃棄遺構群である。広範囲にわたる貝殻の散布状況が検出され、これを 2153SX とした。これを掘り下げていったところ、2204SK など複数の遺構（土坑やピット状遺構）が検出された。

2194・2195・2204SK は調査区外に続くものの、径 2.5 m程度の円形土坑と考えられる。形状や規模は西側の 2165SK などと類似するが、多量の貝殻を含むことが、この一群の特徴である。また、2195SK のすぐ西に位置する 2164SP は、小さい巻貝であるウミニナ、イボウミニナ、カワアイガイがピットを充填するように埋まっていた。ウミニナなどは食用とされるのだが、なぜ、これらの小さい塔型巻貝を集中的に小さなピットに廃棄したのか不明である。その他 2175・2176SK も貝殻を多く含む土坑である。

出土遺物は 13 世紀の山茶碗などもふくまれているが、15 世紀代のものが多く、遺構の帰属時期は 15 世紀後半と考えられる。

写真 19　2182SK（西から）

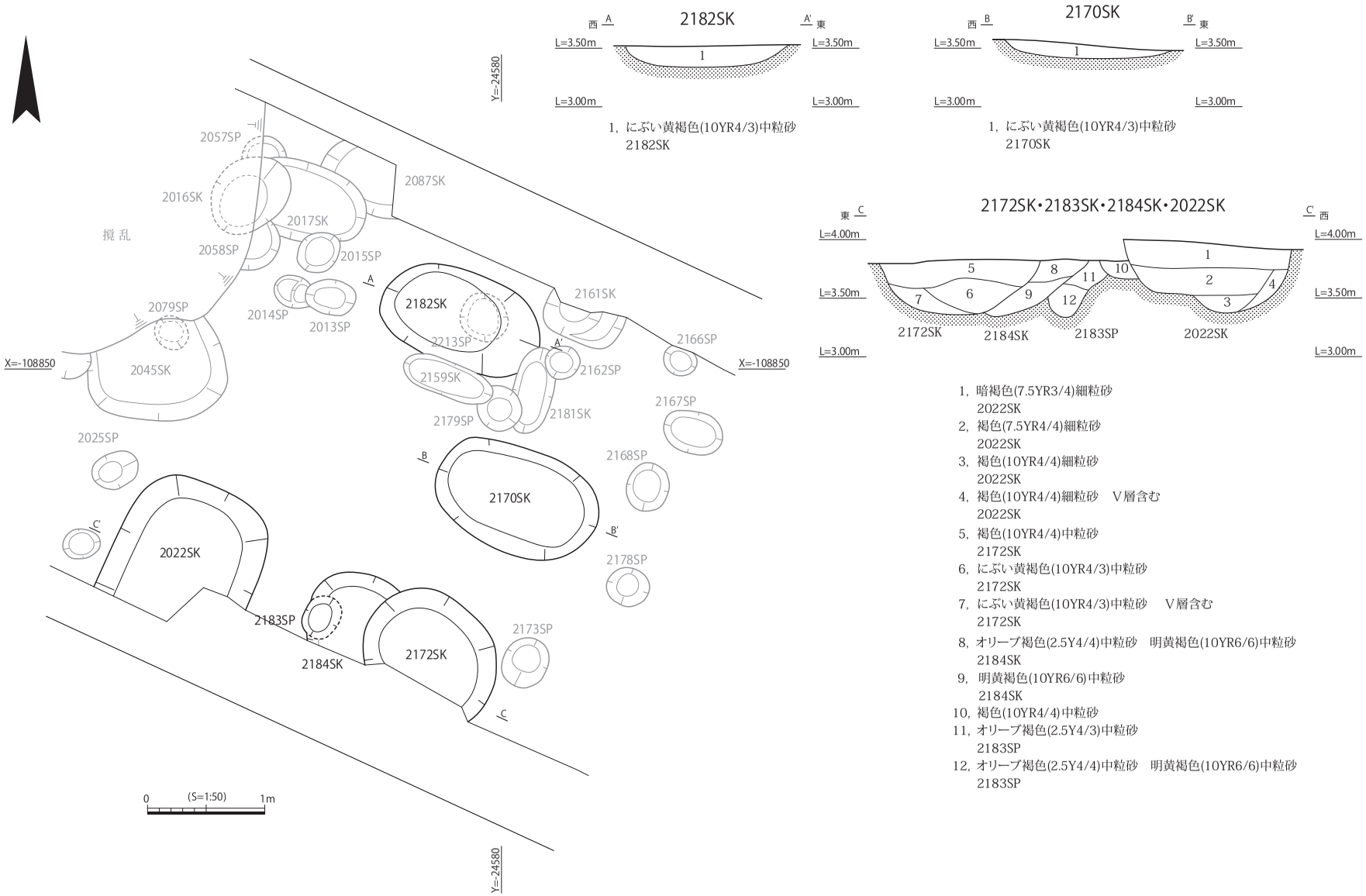
写真 20　2164SP（南から）

２１６０・２１６５・２１８６ＳＫ（第 25 図）

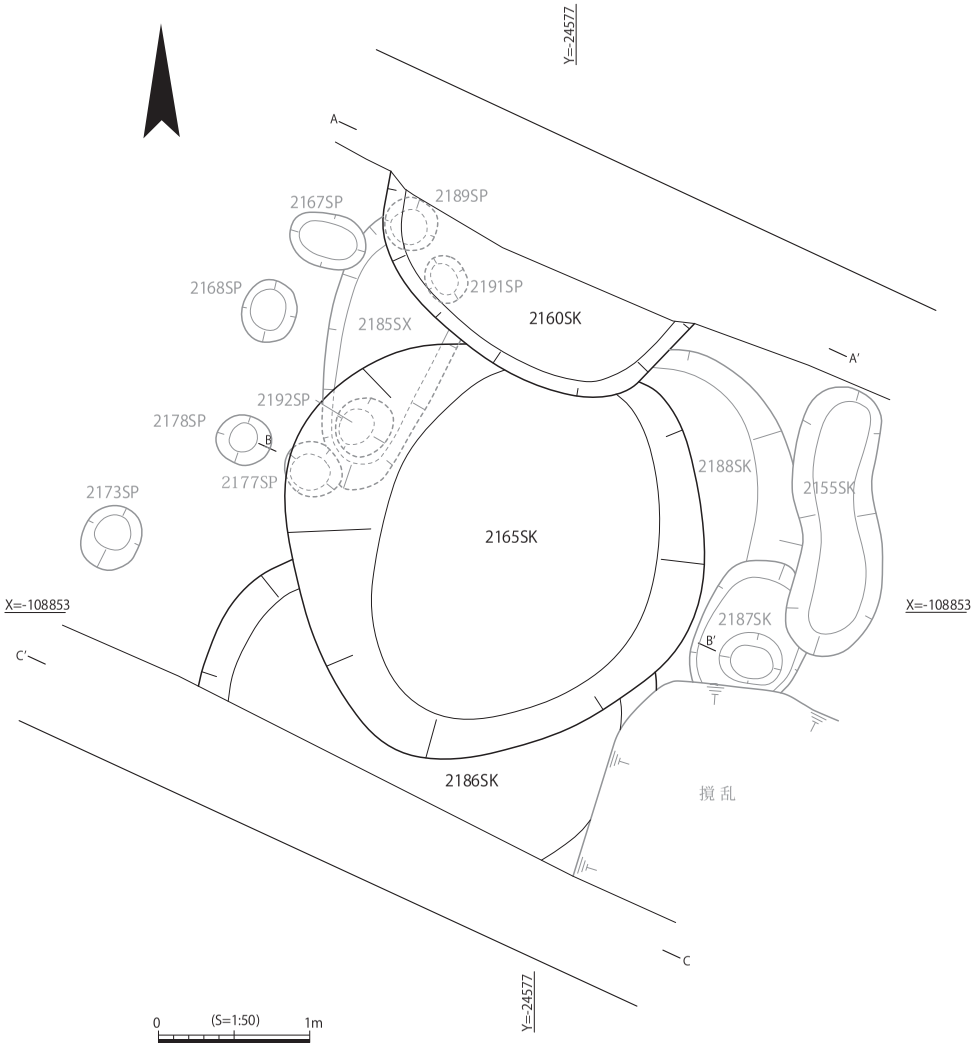
２地点中央部東側一帯で検出した大型土坑群である。すぐ横に近代井戸があり、これらも中世～近世にかけて掘削された井戸とも考えた。しかし、井戸枠は無く、枠内と掘方のような土層も観察されない。先述の 1152SK と同様にこれらの遺構も井戸としては浅い。

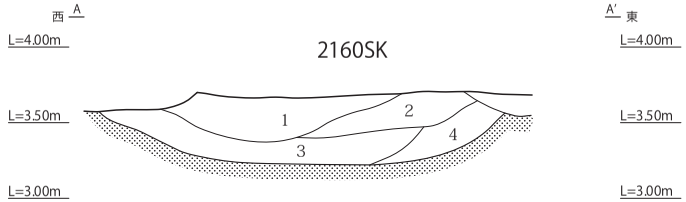
東に隣接する 2194SK などとプランや規模は類似するが、これらの土坑は

写真 21　2153SX（南から）

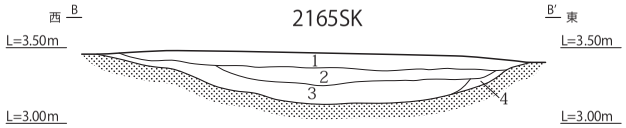


第24図　2022・2170・2172・2182SK

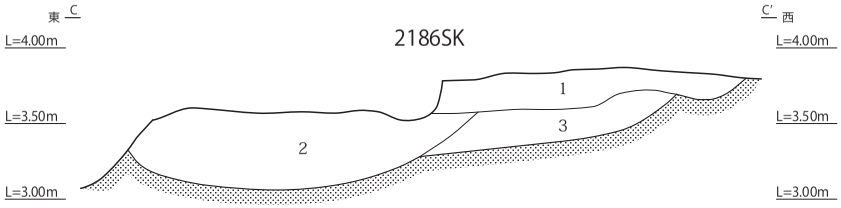




1，にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂
2，にぶい黄橙色(10YR6/4)中粒砂
3，暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
4，暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　粘土とⅤ層含む

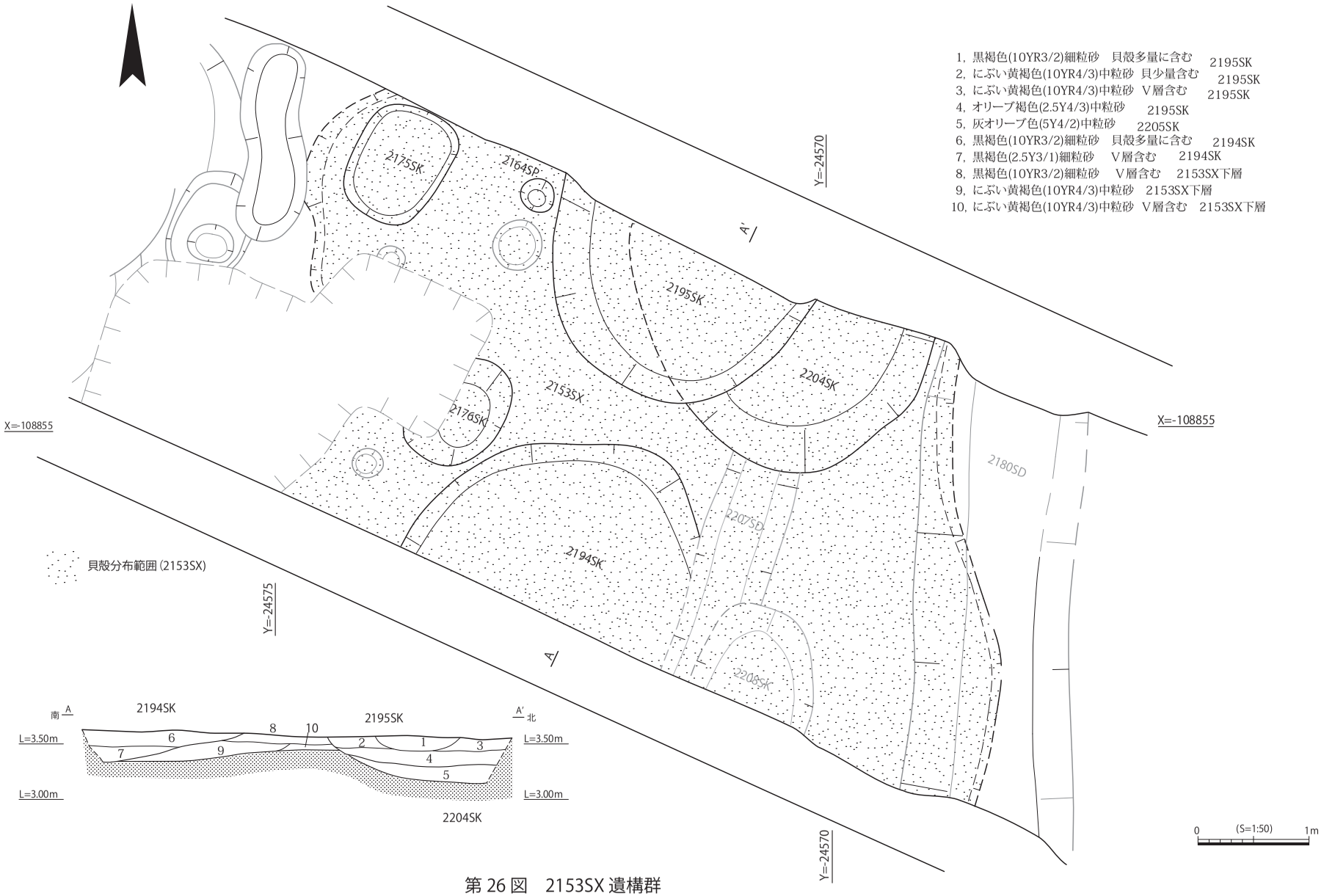


1，褐色(10YR4/4)中粒砂
2，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
3，オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂と灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂とⅤ層の斑土
4，褐色(10YR4/4)中粒砂と灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂とⅤ層の斑土



1，暗褐色(10YR3/3)細粒砂
2，オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　暗褐色(7.5YR4/4)粗粒砂含む
3，オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂

第25図　2160・2165・2186SK



第26図　2153SX遺構群

大量の貝殻片を含むのに対して、2165SK などには貝殻片はほとんど見られない。出土遺物は 2165SK から第 10 型式の東濃型山茶碗や古瀬戸の破片が出土しており、その帰属時期は 14 世紀末～ 15 世紀と考えられる。

２１５６ＳＫ（第 27 図）

２地点中央部で 2205SD などの方形区画溝埋土上面で検出した隅丸方形土坑である。ここから独鈷杵が出土した。埋土は 2205SD などの区画溝と比べて明るい色調を呈する。

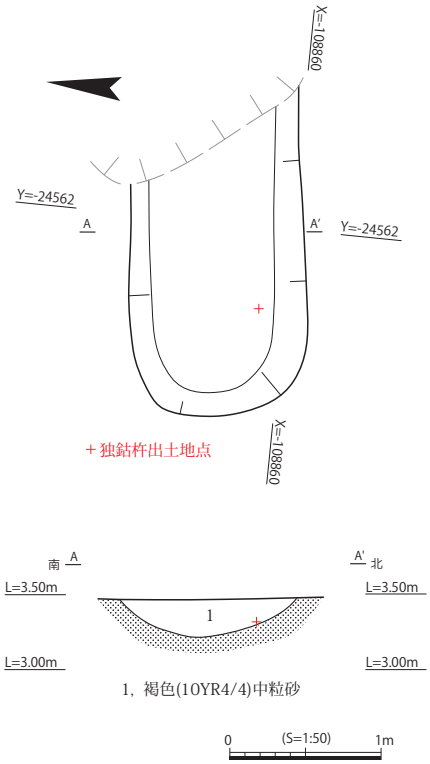
独鈷杵は土坑の北西側、断面形状に沿うように少し斜めに位置していた（写真図版 27）。墓の可能性も考えたが、独鈷杵の出土状況も含め、何ら特異な状況は観察できなかった。

独鈷杵以外には第 7 型式の山茶碗や古瀬戸の破片が出土しているのみである。遺物の年代は 13 ～ 14 世紀頃であるが、遺構の帰属時期は区画溝群よりも新しく 15 世紀後半以降である。

写真 22　2186SK・2172SK（北から）

写真 23　2165SK（南から）

写真 24　2156SK 断面（西から）



第 27 図　2156SK

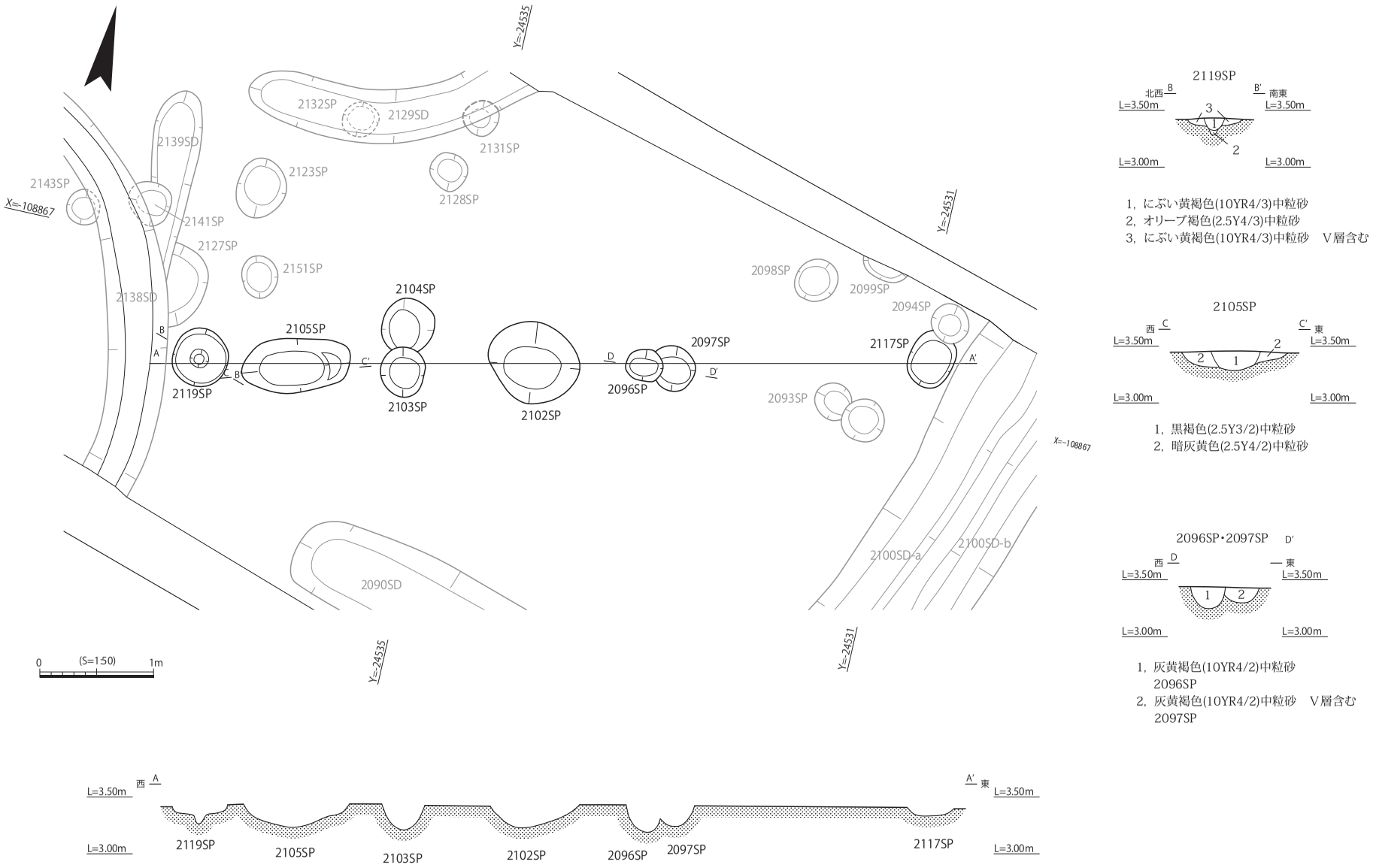
東部柱穴列（２１０２ＳＰほか）（第 28 図）

２地点東部で検出した柱穴は数基が東西方向に列をなす。調査区が狭いため建物を構成しているかどうかは不明である。深さは 10 ～ 20cm ほどしか残っていない。しかし、2105SP や 2119SP のように明らかに柱痕跡の観察できたもの（写真 26・27）もある。出土遺物は第６～７型式の山茶碗や土師器の小片のみである。周辺の包含層からの出土遺物も少ない。列の方位は E-12° -S、2135SD や 2144SD に近い数値であり、同様に中世の遺構と考えられる。

写真 25　東部柱穴列（東から）

写真 26　　2119SP（南から）

写真 27　　2105SP（南から）



第 28 図　東部柱穴列（2102SP ほか）

５．大量銭出土遺構（第 29 図）

２１４０ＳＸ（大量出土銭Ａ　古瀬戸三耳壺）

2140SX は調査区中央部北壁際で発見された古瀬戸三耳壺に納められた大量銭出土遺構である。内部の銭貨は未調査である。

写真 28　2140SX 壺内部

容器の三耳壺は古瀬戸前期＝ 13 世紀の製品である。口縁部と耳を意図的に打ち欠いている。検出時には掘削時に破損したと思い破片を懸命に探したが見つからなかった。しかし、三耳がすべて欠けていることが分かり、口縁部も含め意図的に打ち欠いたものと考えられる。蔵骨器においては、このような意図的な打ち欠きは類例があるが、大量銭の容器では管見ながらこのような例をみない。祭祀的な意味合いが感じ取られる。また、高台部にも複数の傷があり、意図的な打ち欠きをしようとしたのかもしれない。

写真 29　2140SX 検出（南から）

蓋はなかったが、壺内部からは板状の黒い有機物らしきものが出土しており、分析の結果、未焼成の粘土と判明した（付論 1 参照）。検出時の状況から粘土を詰めたのではなく、粘土板を蓋とし、それが割れて壺内に一部が残ったと考えている。写真 28 の内部に見えている黒い物質が粘土片である。内部の銭貨は孔にひも状のものを通した緡銭とバラ銭がともに観察される（写真図版 55）。掘方や周辺からの銭貨の出土はない。

2140SX は方形区画溝群の 2198SD と 2199SD の埋土上に形成された遺構である。特に 2199SD は区画溝群最後の溝であり、ほぼその位置に埋められていたことは、この区画溝と大量銭の関係を示しているように思われる。なお、当初の壁面観察では壺直上の層を包含層と判断していたが、拡張部の観察によって、その層が 2199SD 上層であり、その上から 2140SX が存在すると判明した。第 29 図や図版 14 の掘方破線部はその部分を示している。掘方は失われた当時の地表面も含めれば、80cm 以上の深さと推定される。埋土は他の遺構と同様の黄褐色中粒砂で、特異な状況は何ら観察されなかった。

遺構の帰属時期であるが、2199SD などの方形区画溝から古瀬戸後期後半の皿や永楽通宝（1403 年初鋳）が出土しており、これに後出することから 15 世紀後半以降と考えられる。

２１９０ＳＸ（大量出土銭Ｂ　常滑焼壺）

2190SX も同じく調査区北壁際で検出された。こちらは大部分が壁面内に埋まっていたので、壁部を１ｍほど拡張し調査した。常滑焼壺も古瀬戸三耳壺と同様に口縁部を打ち欠いている。常滑焼編年第９～ 10 段階＝ 15 世紀代の製品である。こちらは蓋がされており、山茶碗系片口鉢の胴部片であった。蓋を外して観察できた内部の銭貨は緡銭であった。11 枚の銭種が判明し、最新銭は永楽通宝である。

壺はやや斜めに倒れていたが、それは上に存在する 2157SK や 2163SK 掘削時の影響かもしれない。2157SK は壺まで達しており、掘削時に壺は見えていたと考えられる。にもかかわらず内部の銭貨が取

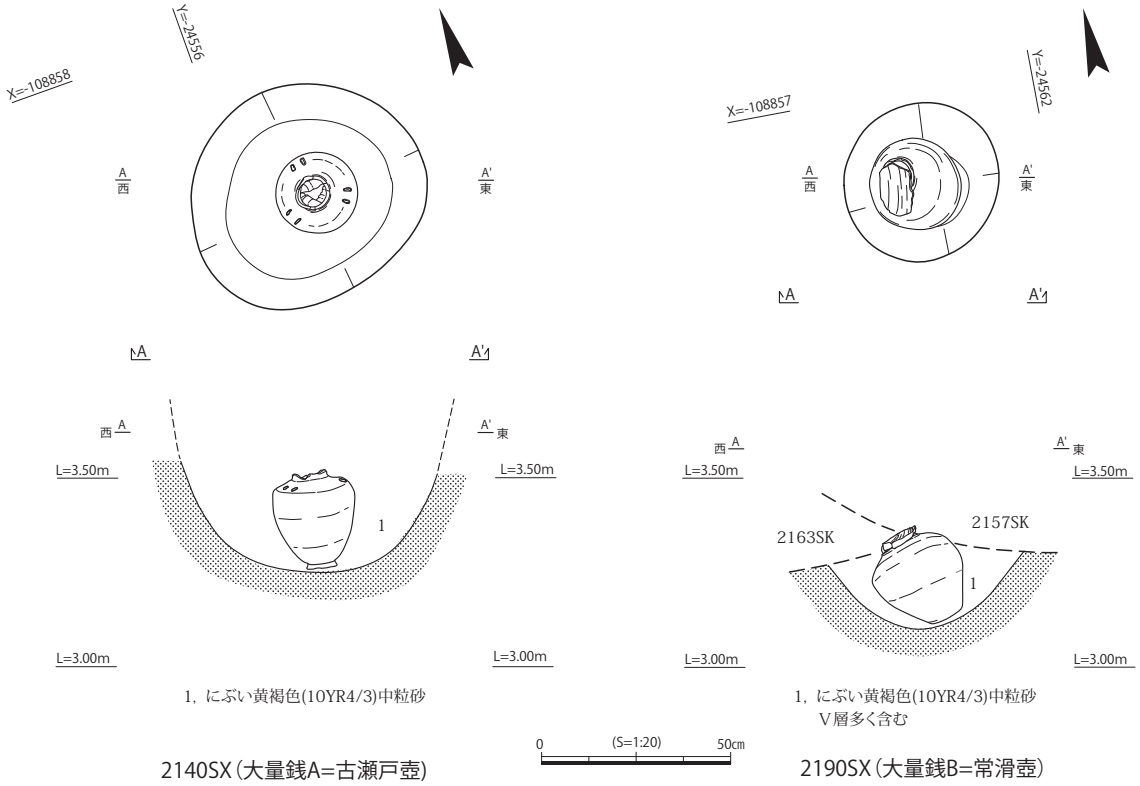
り出されていないことから、土坑を掘った人は壺と銭貨の存在に気付いたうえで取り出さなかった可能性がある。また、壺内に小さい貝殻片が入っていたが、これは 2157SK に由来すると考えられる。

掘方底部のレベルは 2140SX よりも 20cm ほど低い。底部に何か据えていた痕跡など、何ら特異な状況はない。埋土も他の遺構と同じ黄褐色の中粒砂である。

写真 30　2190SX と 2157SK（南東から）

2190SX の位置は、方形区画溝 2205SD のすぐ東である。位置的には区画内とみえるが、先に述べたように新しい遺構や撹乱によって失われた区画溝があった可能性があり、2140SX と同様に本来は溝埋土の上に位置した蓋然性が高い。区画溝と関連性をもってこの場に埋められたと考えている。2190SX の帰属時期も、区画溝群との関係から 2140SX と同じく 15 世紀後半以降と考えている。

また、2190SX の 2 mほど南から独鈷杵が出土している。２地点一帯の遺跡北東部は既往調査において、祭祀遺構や瓦の出土が多いことから、寺院など宗教施設が存在する可能性が指摘されている。独鈷杵の出土も含め、2199SD などによって形成される区画はそうした宗教施設に伴うものではないだろうか。ただし、方形区画溝群から瓦の出土はない。大量出土銭については、内部の観察や分析および出土状況等について、第 4 章で考察しており、参照されたい。



第 29 図　2140SX（大量出土銭 A）・2190SX（大量出土銭 B）

第４節　３地点の遺構

１．概要（図版 16）

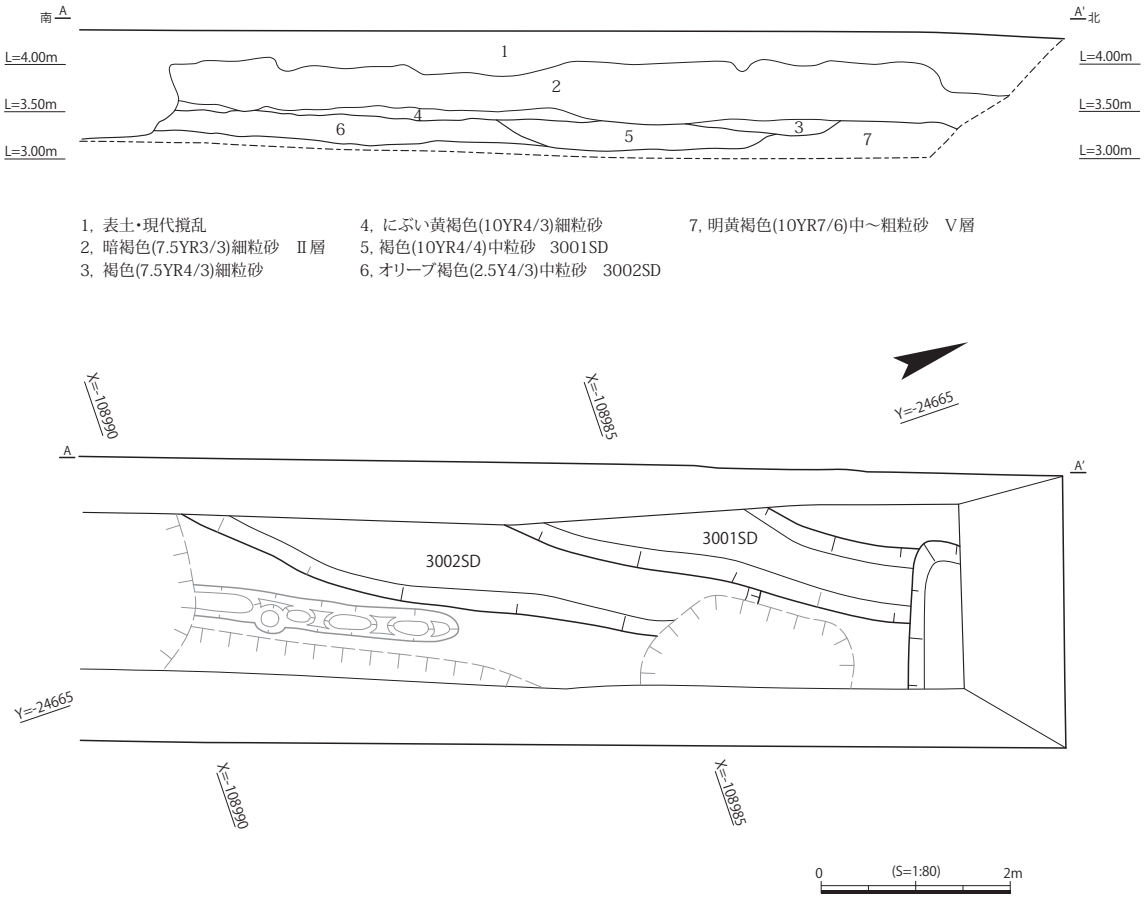
３地点は大部分が撹乱を受け、粗粒砂で埋められており、遺構は北側に残るのみであった。この部分からは３条の南北溝が検出された。

３地点は明治時代の地籍図をみれば、八剣社境内西側の緑に塗られた一帯にあたり、境内を画す樹林があったようだ。明治 42 年に八剣社廃止の際に、境内の巨木が抜かれて競売にかけられたらしく、3 地点の大撹乱は巨木伐採後に客土を埋めた結果かもしれない。しかし、2 地点西区も含めて、これまでの調査でも砂堆中央部では大規模な撹乱が多く存在していた。3 地点以外には、この説明は適用できず、大撹乱の背景は不明なままである。

２．溝

３００１・３００２ＳＤ（第 30 図）

３地点北側で検出した平行する南北溝である。ほぼ現在の地割に沿った（N-30°-E）南北溝である。この方向性の溝は既往調査でも多く見つかっている。ただし、既往調査の溝で 3001・3002SD と連なるものはない。遺物は 3001SD から少量出土したのみで、15 世紀の土師器の小片であった。遺構の帰属時期も 15 世紀頃と考えられる。



第 30 図　3001・3002SD

第５節　４地点の遺構

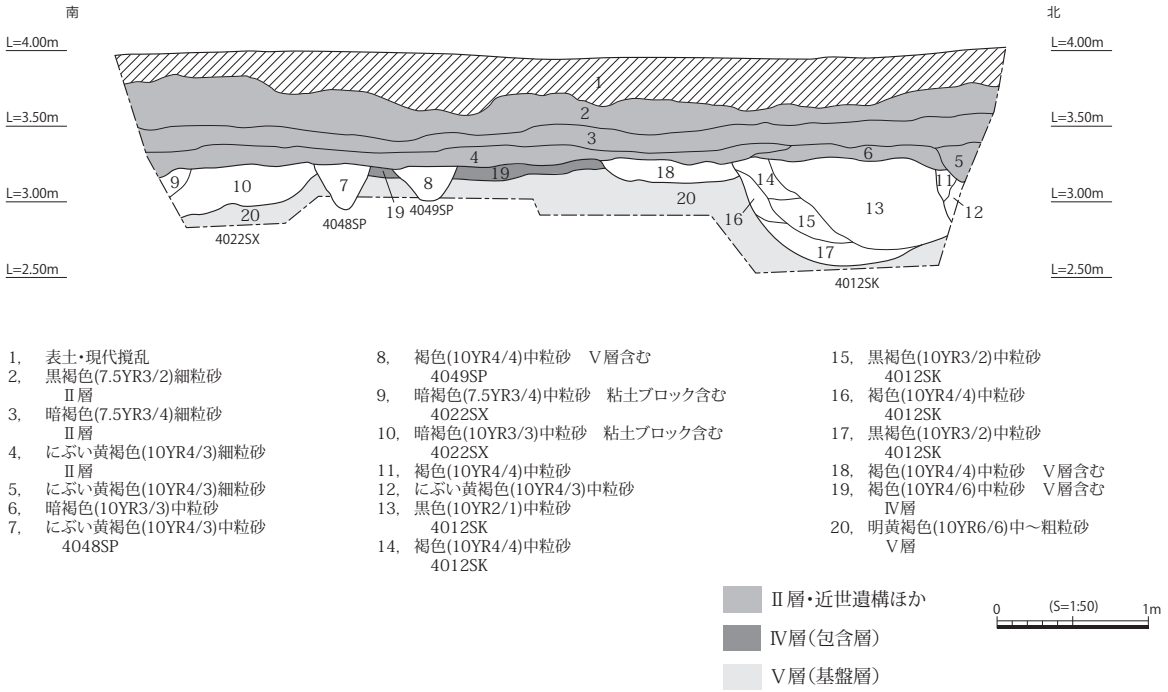
１．概要（図版 17・18・第 31 図）

４地点からは 90 基の遺構が検出された。種別では柱穴が多いが、明確に建物を構成するものはない。調査区中央の南北溝 4043SD の両側に沿って 4071SP など数基の柱穴が並んでいるが、同様に溝に伴う柱穴が周辺の平成 27 年度 4 地点と 7 地点でも見つかっている。

３分の２の遺構から遺物が出土しておらず、多くの遺構が時期不明である。包含層の出土遺物は中世遺物よりも弥生土器片の方が多く、西側にはⅣ層も存在する。しかし、遺構の時期として確実に弥生時代と判断できるのは 4011SD（4016SX）、4012SK、4030SK、4065SD、4090SK のみに過ぎない。4011SD は本遺跡の弥生時代の遺構に特徴的な黒色の埋土であり、弥生中期の遺物を有する。4012SK も類似の埋土で、弥生時代前期～中期前葉の条痕文系の深鉢が出土している。しかし、調査区東隅の 4031SK は同質の黒色埋土であるが、山茶碗や常滑焼が出土している。また、北壁際にある 4028SK は出土遺物はすべて弥生土器であるが、層位と切り合い関係から確実に中世の遺構である。

調査区西端の 4011SD などの弥生中期の遺構は、西に隣接する平成 27 年度 4 地点で検出されている溝とともに方形周溝墓を構成している可能性がある。平成 27 年度調査において、４地点から６地点にかけての遺跡南西部で複数の方形周溝墓が検出されており、弥生時代の墓域が展開していた可能性が考えられる。

一方で中世の遺構と断定できるものも少ない。調査区西側で検出した 4008SE は、出土遺物の多くが中世陶器であったが、底部から近世のすり鉢が出土し、近世遺構と判明した。遺物が少量の遺構については帰属時期の決定は難しいが、北側に位置する１地点や２地点に比べれば、遺物に占める弥生土器の比率は高く、上記の他にも弥生時代の遺構が存在すると思われる。



第 31 図　４地点西壁断面図

２．溝（弥生～古墳時代）

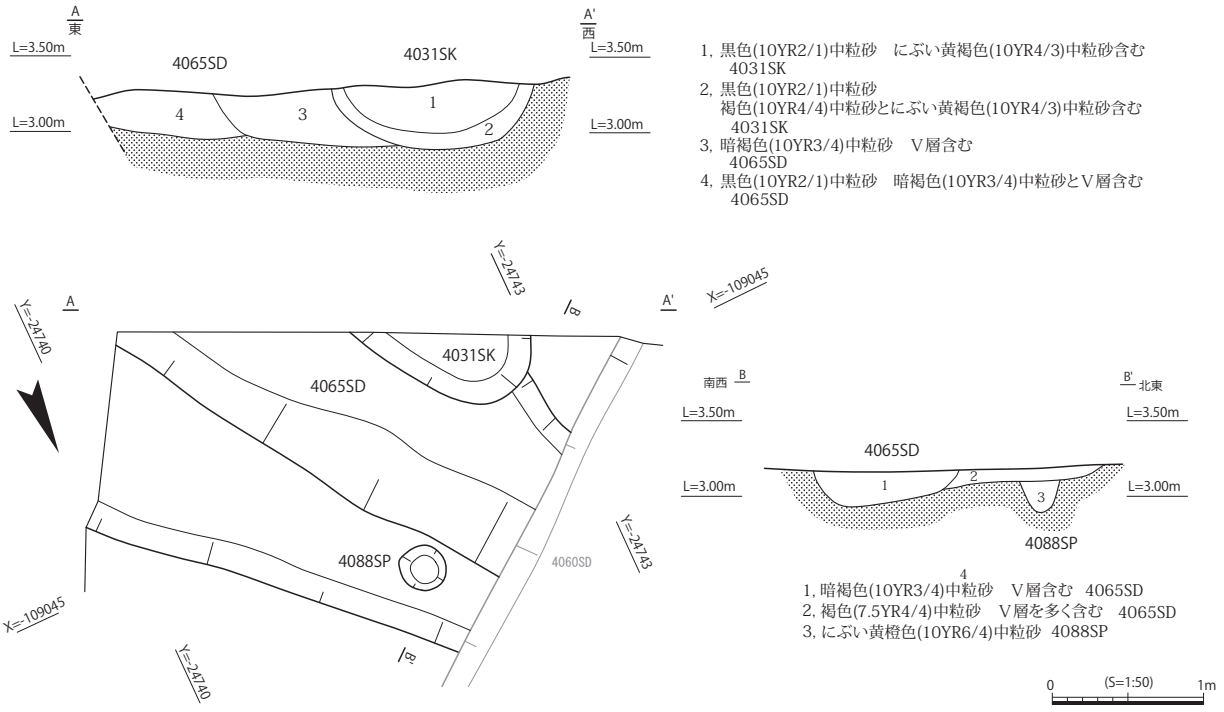
４０１１ＳＤ（第 33 図）

調査区西側で検出した南から北西に湾曲する溝である。ただし、中央部が楕円形の土坑状に深く、北側は浅く広がる（調査時に 4016SX としていた）。南側は一旦浅くなり再度深くなっている。よって複数の土坑が列状をなしているものかもしれない。埋土は黒色を呈し、検出段階から非常に目立っていた。弥生中期後葉の土器が出土している。

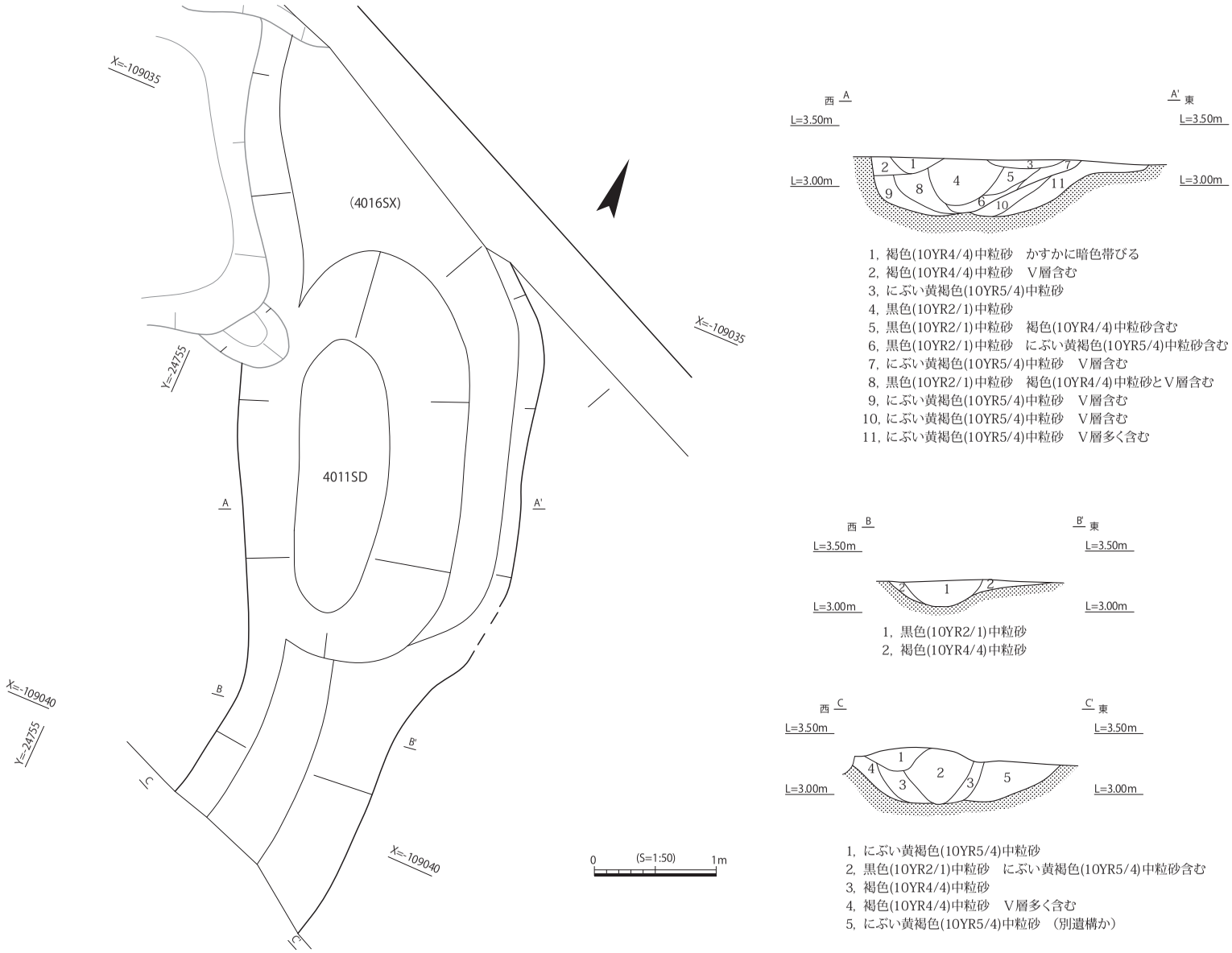
西に隣接する平成 27 年度 4 地点で、類似の遺構（SD4042）が検出されており、方形周溝墓の可能性が指摘されている。その溝を北西部、4011SD を南東部とすれば、15 m程度の方形周溝墓が復元できる。この場合、4011SD の西側が墳丘部にあたる。その一帯には包含層（Ⅳ層）があり、これが墳丘盛土という可能性も意識して観察したが、わずかにしか残っておらず、判断はできなかった。

４０６５ＳＤ（第 32 図）

調査区東側で検出した溝である。西端は 4060SD に切られ、それ以西は続いていない。埋土はＶ層を多く含み、検出時にはあまり目立たなかった。弥生時代の遺構は黒色土で目立つ遺構とＶ層＝地山層と類似して認識しづらい遺構に分かれるように思われる。弥生時代末～古墳時代前期の台付甕（図版 23-33）が出土しており、遺構の時期も同時期と考えている。



第 32 図　4065SD


X=-109035
Y=-24755
(4016SX)
4011SD
A
A'
B
B'
C
C'
X=-109040
Y=-24755
X=-109035
X=-109040
0
(S=1:50)
1m
西 A
A' 東
L=3.50m
L=3.00m
1, 褐色(10YR4/4)中粒砂　かすかに暗色帯びる
2, 褐色(10YR4/4)中粒砂　Ⅴ層含む
3, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂
4, 黒色(10YR2/1)中粒砂
5, 黒色(10YR2/1)中粒砂　褐色(10YR4/4)中粒砂含む
6, 黒色(10YR2/1)中粒砂　にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂含む
7, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂　Ⅴ層含む
8, 黒色(10YR2/1)中粒砂　褐色(10YR4/4)中粒砂とⅤ層含む
9, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂　Ⅴ層含む
10, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂　Ⅴ層含む
11, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂　Ⅴ層多く含む
西 B
B' 東
L=3.50m
L=3.00m
1, 黒色(10YR2/1)中粒砂
2, 褐色(10YR4/4)中粒砂
西 C
C' 東
L=3.50m
L=3.00m
1, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂
2, 黒色(10YR2/1)中粒砂　にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂含む
3, 褐色(10YR4/4)中粒砂
4, 褐色(10YR4/4)中粒砂　Ⅴ層多く含む
5, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂　（別遺構か）

第33図　4011SD

3．溝（中世）

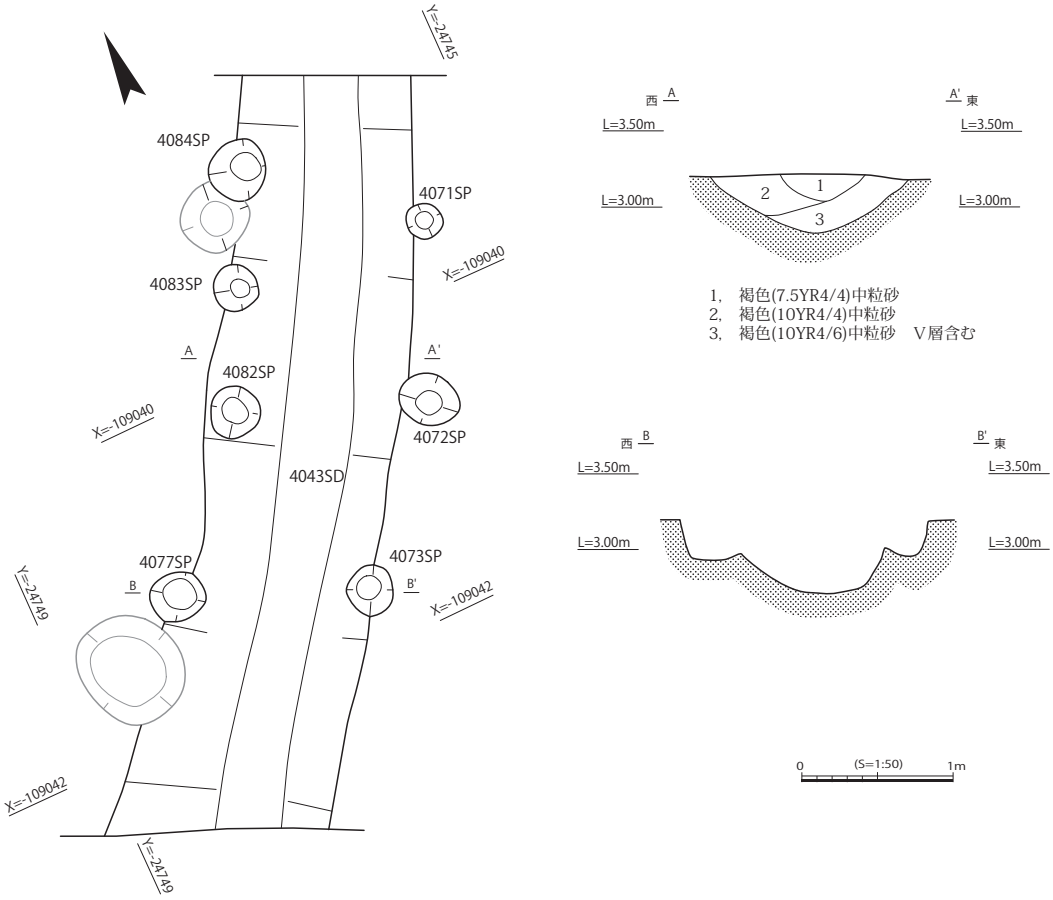
４０４３ＳＤ（第34図）

調査区中央で検出した南北方向の溝である。調査区と直交する方位（N-29° E）は本遺跡によくみられるものである。その両側には柱穴が沿うように存在する。まったく同じような遺構が西に隣接する平成27年度の4地点で検出されている（SD4028）。これらは同じ区画を形成する東西の溝であろう。溝間の距離は東西約30 mである。

同じような柱穴を伴う溝が、さらに南に位置する平成27年度調査の7地点でも検出されており（SD7312）、同じく東西30 mほどの区画を形成している。平成27年度報告では護岸のための杭とされている。しかし、柱穴は溝埋没後に掘削されている。溝そのものに伴うのではなく、溝によって示されていた境界に伴うものであり、塀などの可能性があろう。

遺物は第6～7型式の山茶碗や常滑焼が少量出土したのみであるが、平成27年度調査のSD4028やSD7312も同様で、遺構の帰属時期は13世紀と考えられる。

写真31　4043SD（南から）

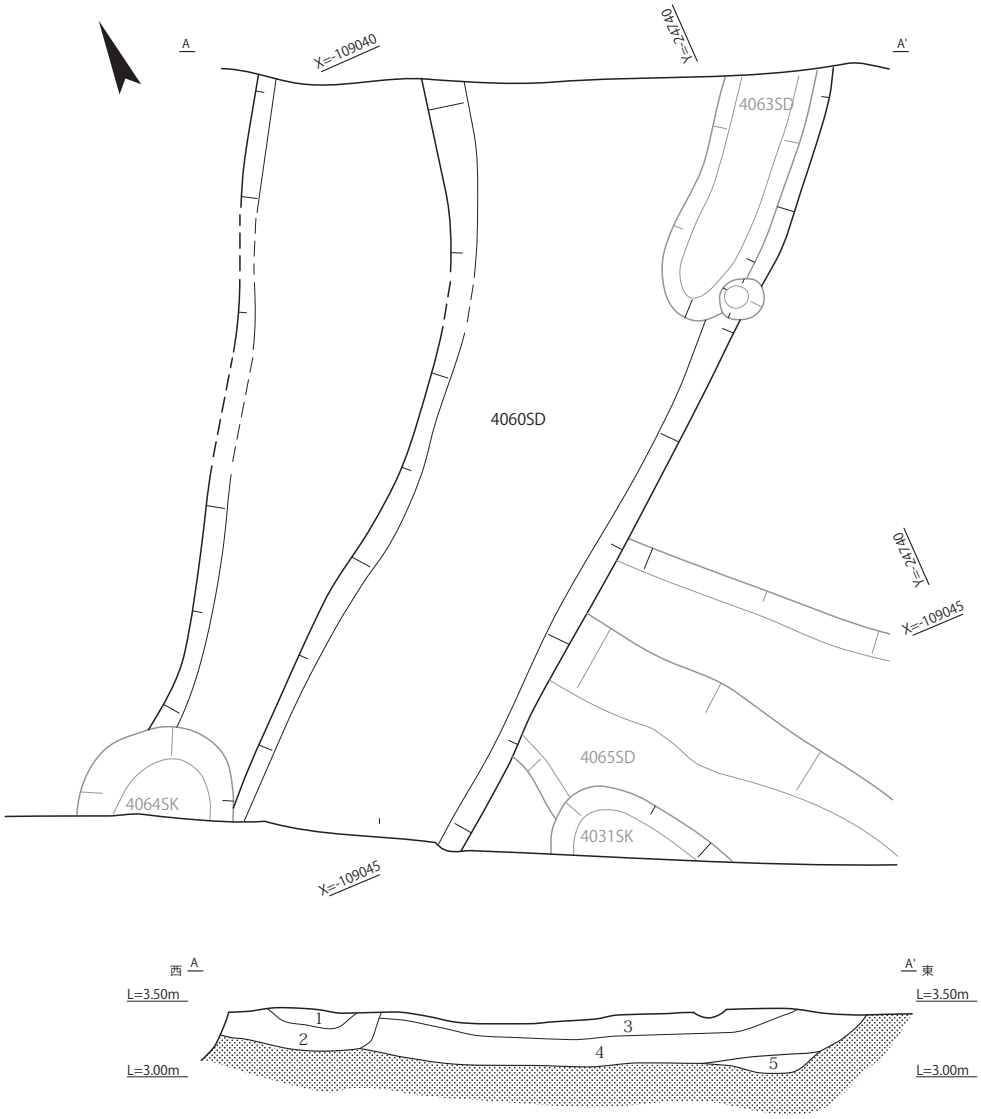


第34図　4043SD

写真 32　4060SD（南から）

４０６０ＳＤ（第 35 図）

４地点東側で検出した南北溝である。幅は２～３ｍと広いが、30cm 程度と浅い。方位は N-30 ～ 45° E でプランも不安定である。第６～７型式の山茶碗や常滑焼鉢の破片などが出土している。13 世紀の遺構と考えられる。



1，褐色(7.5YR4/3)細粒砂　貝片含む　（別遺構か）
2，褐色(7.5YR4/4)中粒砂　（別遺構か）
3，褐色(10YR4/6)中粒砂　4060SD
4，黄褐色(10YR5/6)中粒砂　4060SD
5，にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂　4063SD

第 35 図　4060SD

4．土坑

４０１２ＳＫ・４０９０ＳＫ（第36図）

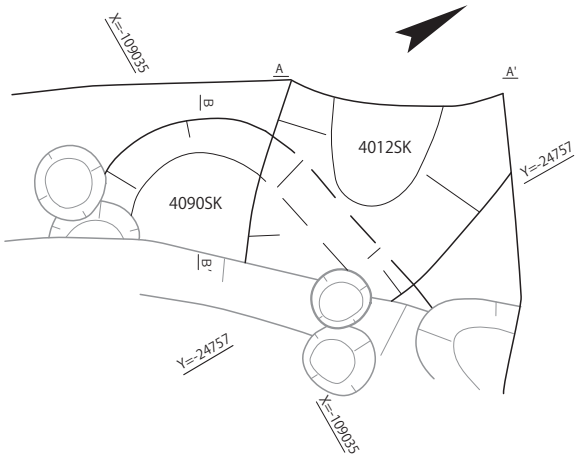
ともに4地点西端で検出され、弥生前期から中期前葉の土器が出土している。4012SKの埋土は黒色を呈し、4011SDと共通であり、土坑ではなく溝の可能性もあろう。先に述べたように4011SDが二つの土坑が連なったものであれば、その位置関係から同一群の遺構に属する可能性もある。

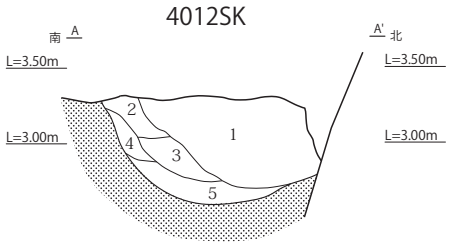
4090SKは大部分を4008SEに切られ、4012SKと一部重なっている。楕円～隅丸長方形の土坑と考えられる。埋土は黄褐色を呈し、地山の砂を含む。

４０３０・４０５２ＳＫ（第37図）

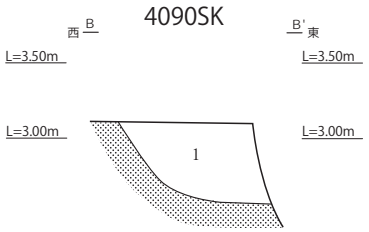
4地点中央で検出された長楕円～隅丸長方形の土坑である。プランから方形周溝墓とも考えたが、東側の溝は検出されていない。また4052SKは深さ10数cmしかなく、既往調査における方形周溝墓の溝に比べれば浅く、底部のレベルも高い。

出土遺物は弥生土器の小片のみであり、方形周溝墓であることを積極的に示すものはない。





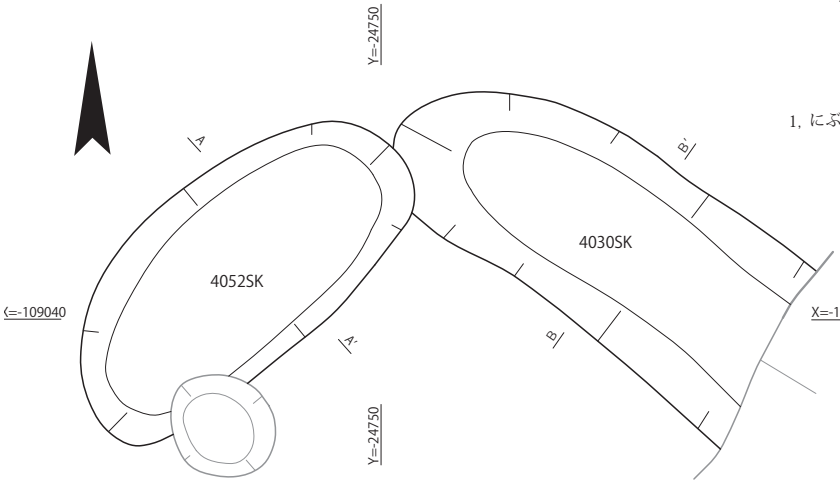
1，黒色(10YR2/1)中粒砂
2，褐色(10YR4/4)中粒砂
3，黒褐色(10YR3/2)中粒砂
4，褐色(10YR4/4)中粒砂
5，黒褐色(10YR3/2)中粒砂

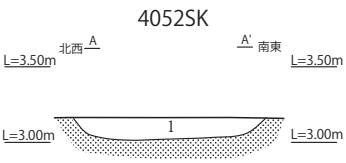


1，にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂　V層含む

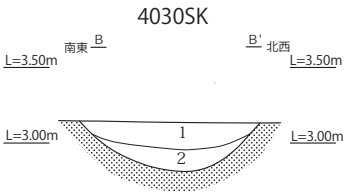
0　(S=1:50)　1m

第36図　4012SK・4090SK





1，褐色(10YR4/4)中粒砂



1，暗褐色(10YR3/4)中粒砂
2，にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂

0　(S=1:50)　1m

第37図　4030・4052SK

第６節　６地点の遺構

１．概要（図版 19・20）

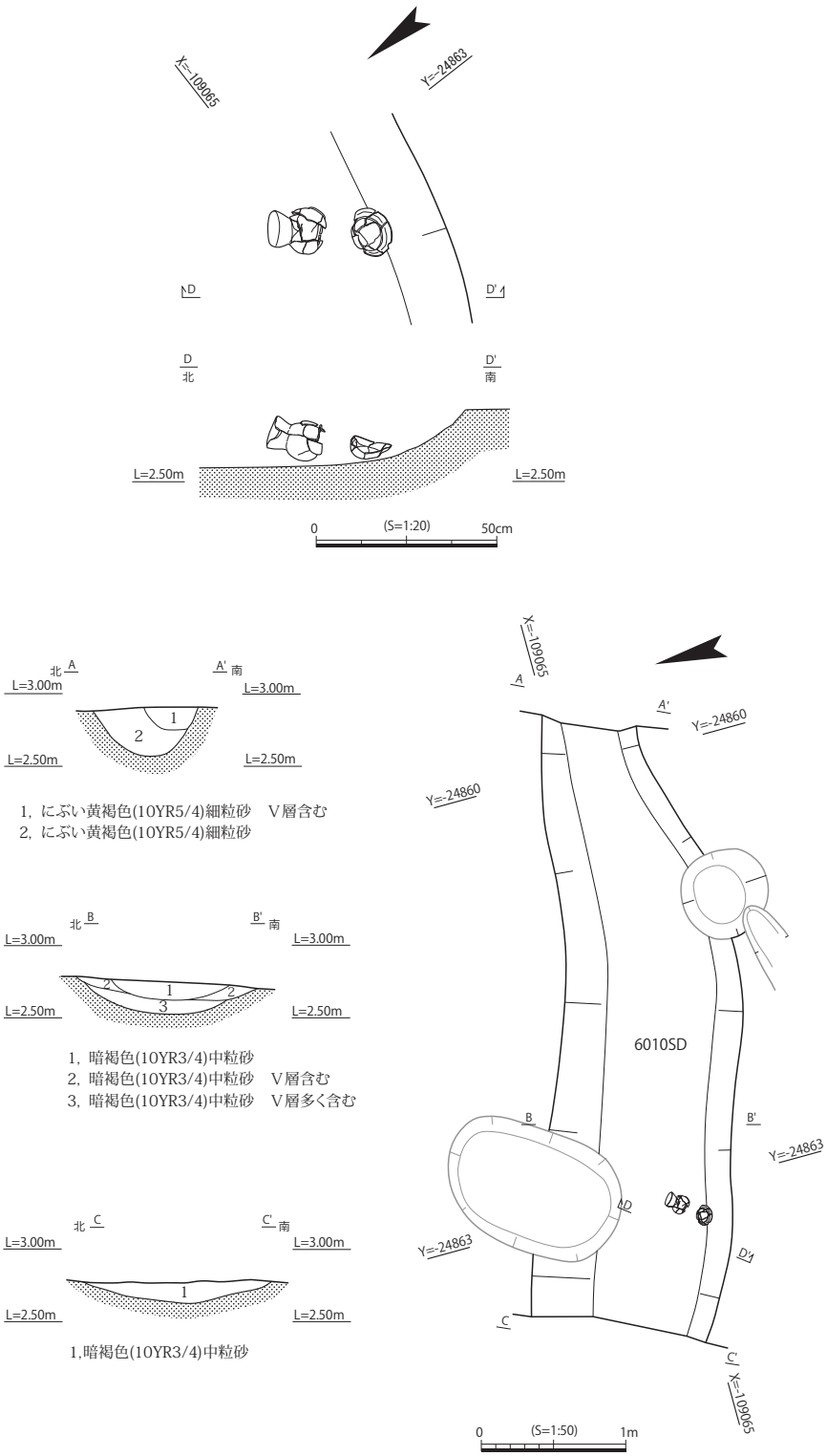
今回の調査において最も南側に位置する調査区であり、砂堆の南西隅にあたる。主な遺構は調査区南で検出した 6010SD である。長頸壺と小型鉢がまとまって出土した。他に土坑、溝、柱穴があるものの、遺構・遺物ともに少なく、いかにも集落遺跡の周縁部といった様相を示す。Ⅴ層のレベルは TP2.8 ～ 2.6 m 前後と低く、調査区内でも西南方向に下がっている。

２．溝

６０１０ＳＤ（第 38 図）

６地点南側で検出した東西溝である。ほぼ完形に残っていた古墳時代前期の小型長頸壺（第 44 図-37）と小型鉢（第 44 図-38）の２個体が、溝の南側でまとまって出土した。調査区北端にわずかに検出した 6008SX と対になる方形周溝墓の可能性もある。その場合は、調査区の大部分が墳丘部となるが、そのような痕跡はまったく認められなかった。

小型壺などが出土した溝の西側は広く、埋土も黒色を呈するが、東側は細く埋土も明るい。東壁側（断面 A) は別遺構を誤認している可能性がある。



第 38 図　6010SD

第７節　７地点の遺構

１．概要（図版 21・22）

７地点は砂堆の西端に位置する。Ｖ層は中央部北壁付近のみ TP2.7 mのレベルで残っていたが、大部分では近代以後の撹乱によって TP2.4 mあたりまで失われていた。西側はより深く大きな撹乱を受けており、遺構面は完全に失われていた。さらに湧水レベルが TP2.5 mのため複数の排水坑を掘削し、常時ポンプによる排水をしながらの調査であった。

７地点の遺構はすべて近世に帰属する可能性がある。調査区の南側には貝殻を多く含む大型遺構が複数ある。廃棄土坑であろう。何度も掘削が繰り返されたようだ。近世の遺構であるが、古代の遺物（製塩土器や須恵器）が比較的多く含まれていた。

２．溝

７０１０・７０１１・７０１５・７０１６ＳＤ（第 40 図）

７地点中央部西寄りで検出された南北溝群である。7011SD を除き調査区と直交する方位（N-22 ～ 25°-E）であり、1030SD などと同じく、既往調査で多くみられる方位である。7011SD は 7010SD に取り付くような溝で、その方位はほぼ真北である。

出土遺物は山茶碗や常滑焼の小片が主で、その量は少ない。調査時には中世の遺構と考えていたが、7011SD 出土遺物に１点の近世陶器が含まれており、近世遺構かもしれない。ただし、その場合も中世以来の溝である可能性は残る。７地点以西では標高も下がり、遺物・遺構とも減ることから主たる居住域の西端を示す溝とも考えられる。しかし、さらに西に位置する平成 23 年度調査の３地点（龍雲院遺跡）の 021SD・025SD（13 ～ 15 世紀に比定）との間隔が 109 m程度＝１町となることから一連の溝の可能性がある。これらの溝については第４章で考察しており、参照されたい。

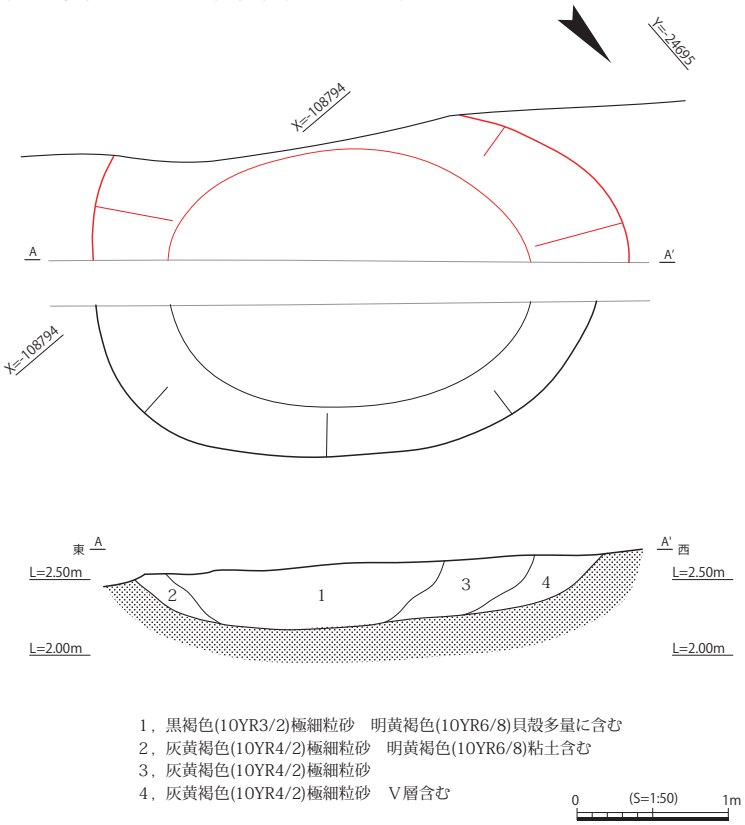
３．その他の遺構

７００１ＳＸ（第 39 図）

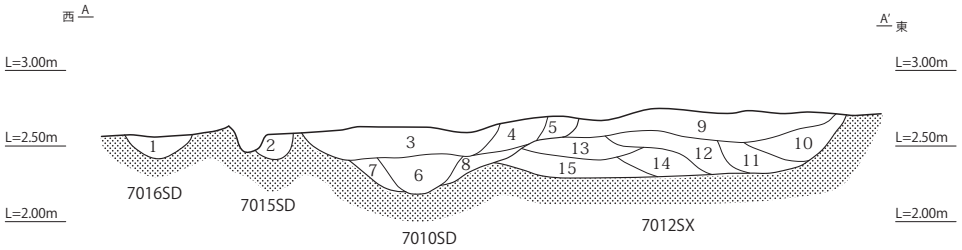
調査区中央で検出した楕円形の大型遺構である。貝殻片を多く含み、廃棄土坑であろう。近世の遺構であるが、須恵器や中世陶器を多く出土した。南半分のみＶ層の残りがよく、高いレベルで検出している（第 39 図の赤い部分）。

７０１２ＳＸ（第 40 図）

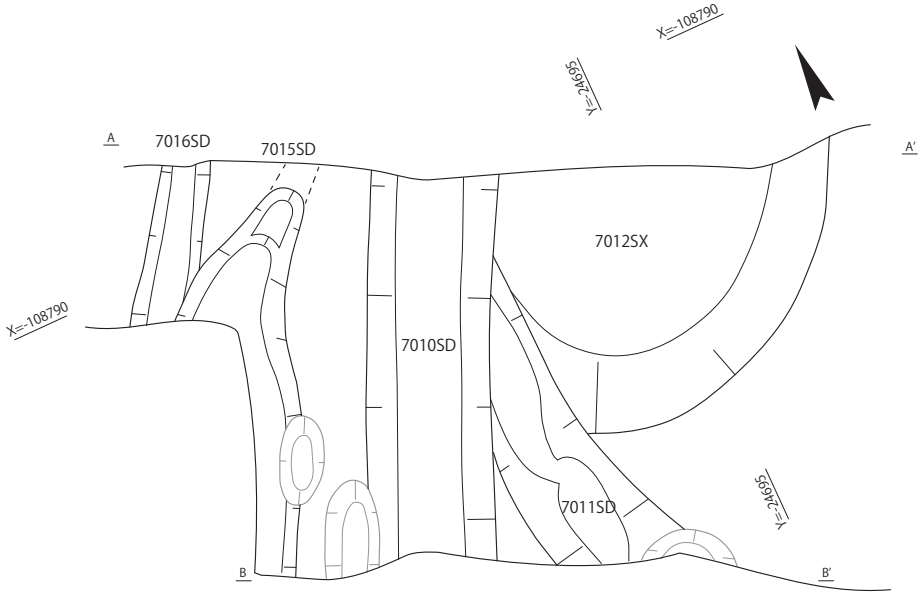
7010SD と 7011SD に切られる大型の遺構である。埋土がＶ層よりも下の層から由来すると考えられる粗粒砂を含むことから深い井戸かと考えていたが、調査区内では深さ 50cm 程度であり、井戸と考えられる状況は見出せなかった。出土遺物は土師器の小片のみであり、帰属時期の決め手に欠ける。

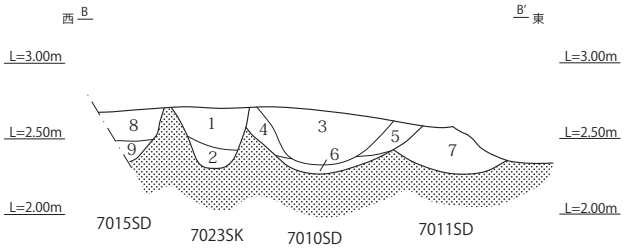


第 39 図　7001SX



1, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
7016SD
2, 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂
7015SD
3, 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂
7010SD
4, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
7010SD
5, 褐色(10YR4/4)細粒砂
7010SD
6, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
7010SD
7, オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗～中粒砂
7010SD
8, オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗～中粒砂
にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂含む　7010SD
9, 褐色(10YR4/4)細粒砂　径5～10mmの小礫　V層含む
7012SX
10, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
7012SX
11, 黄褐色(10YR7/8)粗粒砂
7012SX
12, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
7012SX
13, 灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂
7012SX
14, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　V層多量に含む
7012SX
15, 褐色(7.5YR4/4)細粒砂
7012SX





1, 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂　V層含む　7023SK
2, 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂　7023SK
3, 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂　7010SD
4, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　7010SD
5, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　V層含む　7010SD
6, オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂　V層含む　7010SD
7, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　7011SD
8, 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂　7015SD
9, 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂　V層含む　7015SD

0 (S=1:50) 1m

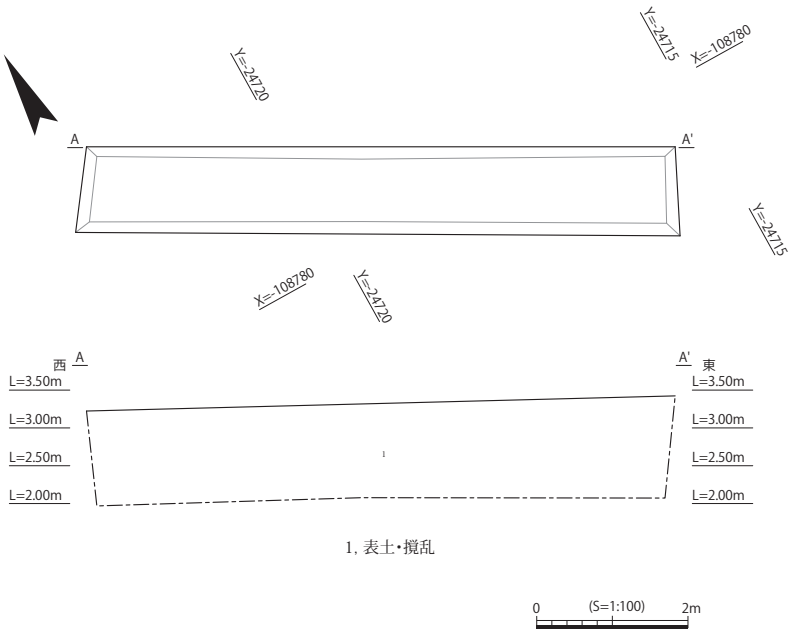
第40図　7010・7011・7015・7016SD・7012SX

第８節　８地点の遺構

１．概要（第 41 図）

８地点は７地点の 10 mほど西に位置する。７地点西側と同様の深い撹乱によって遺構は完全に失われていた。掘削土の中に遺物もほとんどなく、常滑焼１破片のみであった。既往調査でも７地点と８地点の間で基盤層のレベルが低下することなどから、主たる居住域からは外れていると考えられる。ただし、さらに西には龍雲院遺跡や郷中遺跡が存在する。８地点の北西側に位置する郷中遺跡では近世の遺構は多く見つかっている。また先述のように７地点の 7010SD と龍雲院遺跡の 021SD・025SD の間が約１町であり、両者が関係する溝であれば、８地点は何らかの区画内であったことになる。

写真 33　８地点（西から）



第 41 図　８地点平面・断面図

第３章　遺物

第１節　遺物の概要

出土した遺物は土器・陶磁器類を主とし、金属製品、貝類や骨などの自然遺物が含まれる。土器・陶磁器類の出土量は整理用コンテナ（内寸＝ W534 × D334 × H137mm）で 52 箱、自然遺物が６箱の計 58 箱であった。土器・陶磁器類は 52 箱中、２地点が 38 箱、そのうち 22 箱を 2120SD が占める。１地点は８箱あるが、その他の調査地点は１～２箱程度である。遺物の年代は弥生時代から近世にわたるが、大部分を中世陶磁器（特に山茶碗と常滑焼）が占める。

弥生土器は４地点で、古代の須恵器は１地点で多く出土した。しかしながら、弥生土器や須恵器が一つの遺構からまとまって出土することはなかった。弥生土器や須恵器は出土量は少ないが、破片資料も出来る限り図化し掲載した。

今回の出土遺物の中で特筆すべきは２つの大量出土銭と２つの銅製品（独鈷杵と和鏡片）である。大量出土銭と独鈷杵は方形区画溝群埋没後の遺構から出土している。和鏡片はやや離れているものの、同じ２地点からの出土である。大量出土銭は大量銭Ａ＝古瀬戸三耳壺と大量銭Ｂ＝常滑焼壺の２つがある。本章では容器である壺と銭貨を個々に報告する。銭貨は遺構や包含層からの個別出土銭として 41 枚出土しており、これまでの調査では最も多い。石器と木製品はなかった。石製品では石臼の下臼が出土した。これは 2120SD 直上から出土しており、2120SD 最上層に伴うものかもしれない。貝類は非常に多く出土したが、一部をサンプルとして採取することにした。獣骨や人骨も出土している。

遺物に関しては、まず土器・陶磁器類を時期別に、続いて瓦や金属製品などを報告する。弥生土器や須恵器など中世以前の遺物は、特定の遺構からのまとまった出土がないため種別ごとに報告する。中世の土器・陶磁器は特定の遺構や遺構群から一定量がまとまって出土しており、これらについては遺構単位の報告とする。ただし遺物に時期幅があり、必ずしも一括性の高い資料ではない。このような資料を一括提示する意味に疑問もあろうが、その時期幅も含めて、遺構の様相を示すものと考えて提示した。また、包含層･その他の遺構から出土した中世の土器･陶磁器は器種別に報告する。

本報告では、個々の遺物の形状や一般的な技法等については実測図による表現と遺物一覧表に委ね、各器種の出土状況や全体の傾向、特記事項を記述する。なお、出土遺物の型式や年代観は文末の基本参考文献を基準とした。また、最も遺物の多い中世については、畑間遺跡時期区分と各種遺物編年の対照表（表５）を提示しておく（註 20）。

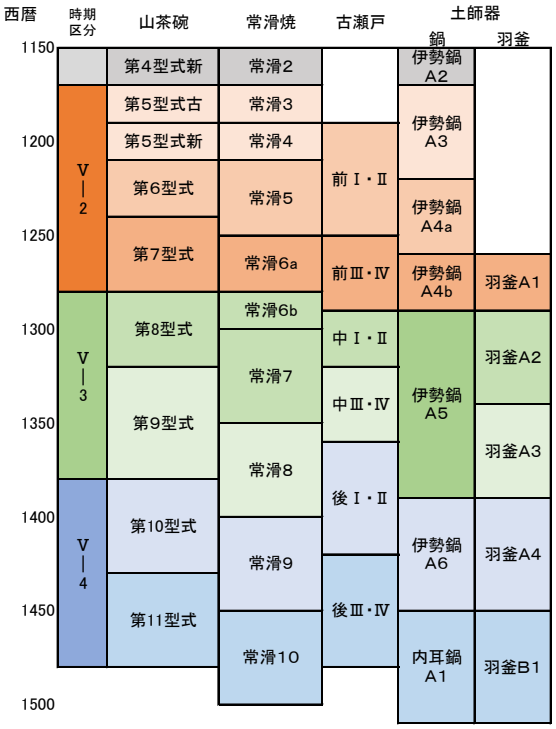


表５　中世遺物編年対照表

第２節　弥生～古墳時代の土器

弥生土器は４地点からの出土が多かったが、２地点においても包含層や中世遺構から出土しており、図示した遺物の４割ほどは２地点からの出土遺物である。時期的には前期と中期が主であった。

１．弥生前期から中期前葉の土器（第 42・43 図）

第 42 図は弥生前期から中期前葉の土器である。１～５は内傾し端部が肥厚する口縁部という要素を共有する。これらの土器は近接する烏帽子遺跡でも多く出土している（註 21）。１は内傾口縁の深鉢である。２は内側に突出する口縁部が特徴的で、内外面とも摩耗が著しく調整等は不明である。

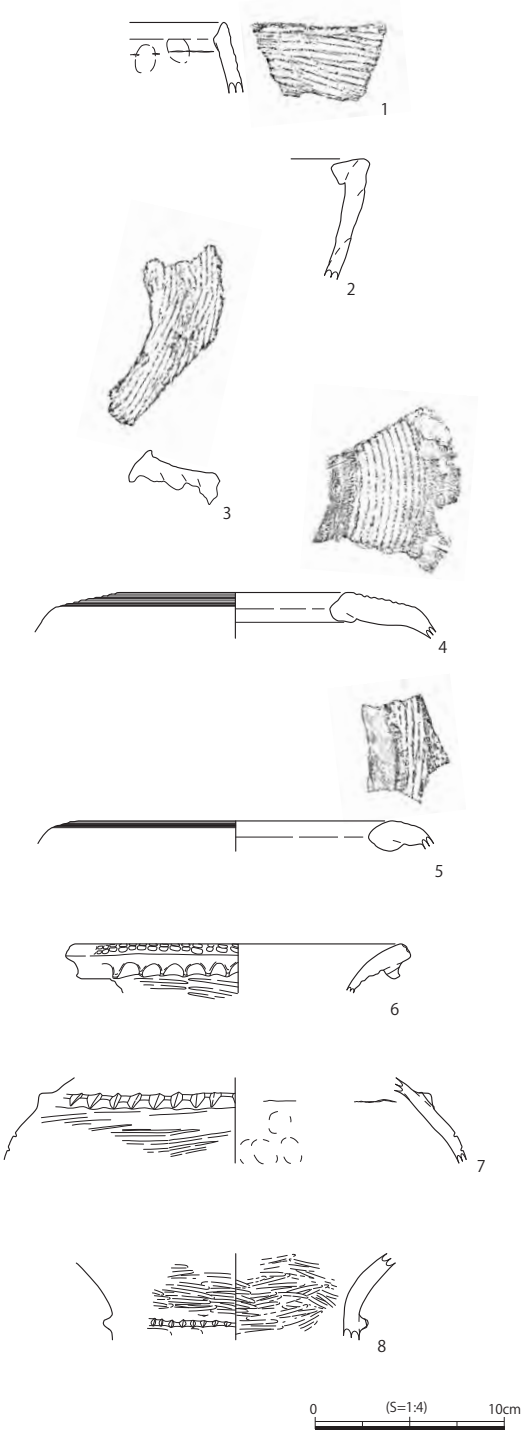
３～５は厚口鉢とされる器形で、口縁部が内部を塞ぐように屈曲する独特の形状を呈する。口縁端部が肥厚し、上部に条痕文を施す。岩滑式期に比定される。６と７はともに条痕文系土器の壺である。６は口縁部、７は肩部、ともに押圧突帯で飾られている。６の口縁端部は連続刺突も施されている。１や２と同じく弥生前期に比定される。８は遠賀川式系の壺である。内外面ともミガキがなされ、頸部には押圧突帯を施す。

第 43 図は弥生前期～中期前葉の条痕文系の深鉢である。器表面の状態の良好なものは拓本で図示している。９は口縁部から頸部は横方向、体部は縦方向の条痕を施す。11 の条痕は羽状である。これらは、口縁端部にも条痕による沈線を施している。９、14、15 は 4012SK、12 と 13 は 4090SK から出土している。ともに４地点北西隅に位置する遺構である。

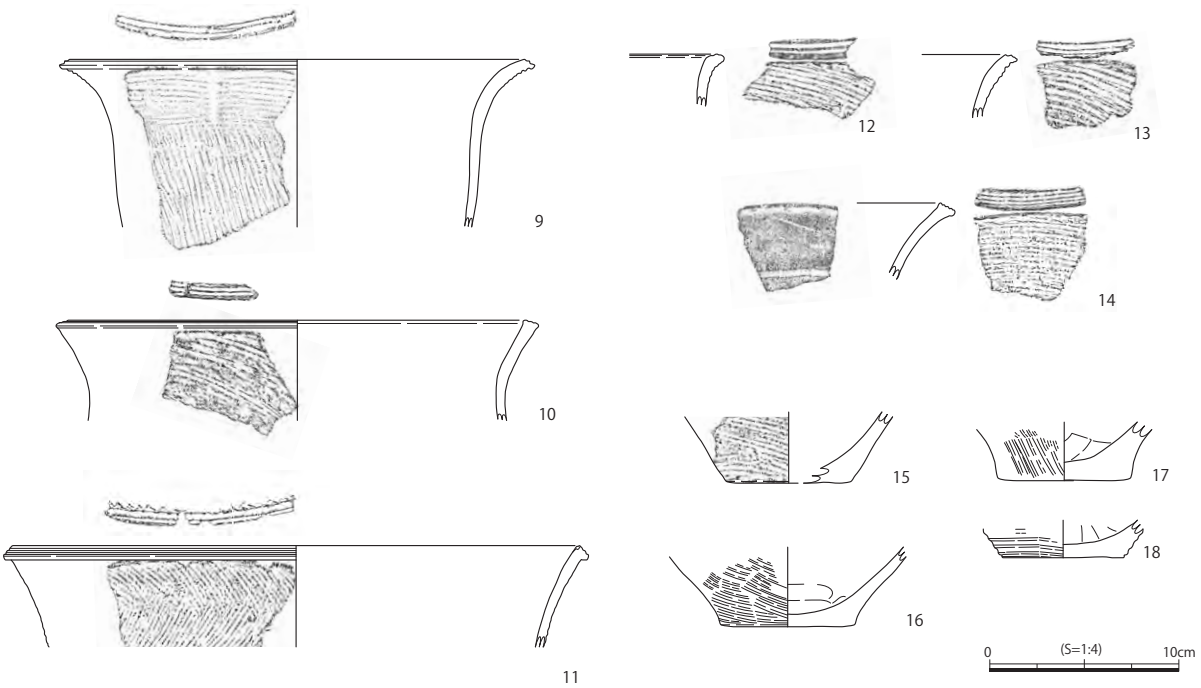
２．弥生中期から古墳時代前期の土器（図版 23・第 44 図）

図版 23 は弥生中期～終末期および古墳時代前期の土器である。

19 ～ 24 は弥生時代中期の壺である。それぞれ特徴的な装飾が施されている。19 はなだらかな波状文と肩が張り太い胴部が特徴的で、口縁端部には刻み目を、頸部には斜格子文を施す。20 は横ハケのち斜めハケのち波状文を施す。21 は頸部に波状文を施す壺である。これら波状文を施された３点の壺は 4011SD から出土しており、長床式期に比定される。なお、７と８も 4011SD からの出土遺物である。23 はなだらかな肩部をなす、貝田町式の細頸壺である。



第 42 図　弥生前期～中期前半の土器



第 43 図　弥生前期～中期の条痕文系土器

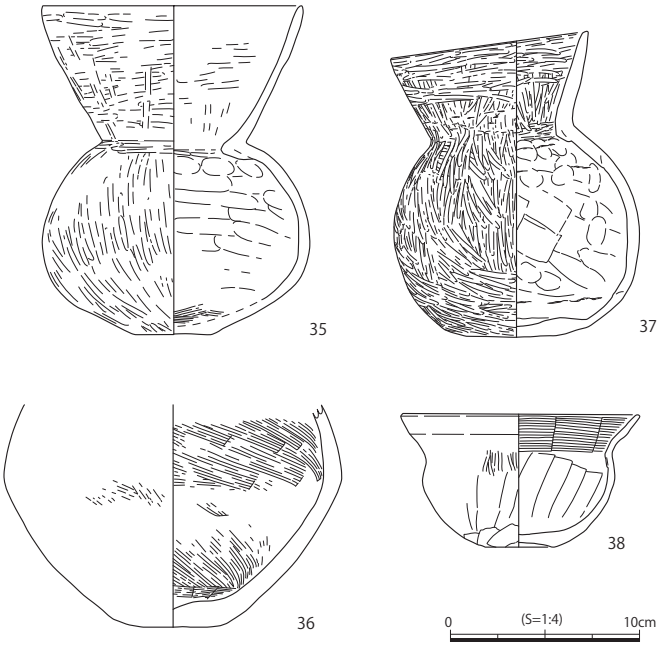
25 は 1186SK から出土したもので、高蔵式から山中式期の壺であろう。胴部最大径の位置が中心よりやや低い位置になる。頸部の沈線以外に文様は観察できない。

28 ～ 32 は竹管文や刺突文が施された山中式期の壺である。32 は 2200SK から出土した。28 ～ 31 も 2200SK 近辺の中世遺構や包含層から出土したものである。

33 は台付甕、34 は高坏の脚部、それぞれ廻間式から松河戸式期のものであろう。

第 44 図の 35 は口縁部が内湾する廻間式期の長頸壺、外面と口縁部内面はミガキが施されている。36 は表面が摩滅しており、調整等が不明瞭であるが、山中式～廻間式期の壺であろう。35 は 2222SK、36 は 2221SK から出土したものである。ピット状の小さい土坑からそれぞれ 1 個体の土器のみが出土した。

37 と 38 は 6010SD からまとまって出土した。37 は外面と口縁部内面は丁寧にミガキが施されている。38 は外面が摩耗し不明瞭だが、ミガキが施されていたとみられる。口縁部内面は横方向のハケが施される。松河戸式期頃の土器と考えている。



第 44 図　2221・2222SK と 6010SD 出土土器

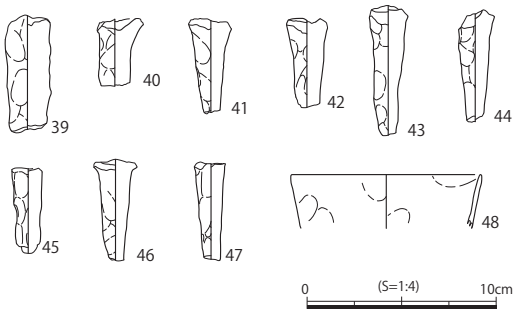
第３節　古代の土器・陶磁器

古代（本報告のⅣ期）の土器も少なく、残存率の低い破片資料が主である。最も目立つのは製塩土器の脚部片である。知多式４類が最も多い。須恵器や土師器も製塩土器と同時期（Ⅳ－２期＝７～８世紀）のものが多く、前後する時期（Ⅳ－１期と３期）の遺物は少ない。古代の遺物は、１地点と７地点が比較的多く出土している。灰釉陶器を６点図示しているが、平安時代の遺物は非常に少ない。これは既往調査成果においても同様である。

１．製塩土器（第 45 図）

製塩土器は破片数で 46 点出土し、10 点を図化した。46 点のうち、３点が杯部片、残り 43 点は脚部片である。脚部片 43 点のうち１点のみ知多式３類（39）、残りは、４Ａ類もしくは４Ｂ類である。全体の残るものはないが、脚長は６cm 前後とみられるもの＝４Ａ３類（8 世紀）が主である。

地点別では、１地点で 25 点、７地点も 11 点出土しており、出土遺物が最も多い２地点は７点であった。



第 45 図　製塩土器

２．古代の土師器・須恵器・灰釉陶器（図版 24・第 46 図）

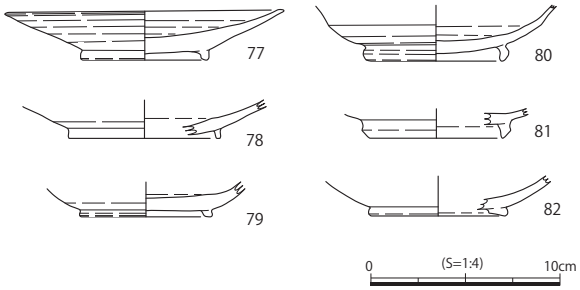
49 ～ 52 は土師器の甕である。49 と 50 は同じ 1180SX から出土した。49 は頸部はやや絞まり、口縁端部はわずかに上方につまみ出されている。7 世紀半ば頃のものである。50 は粗い指ナデや指オサエで成型し、粘土紐痕が残る小型の甕である。１地点のすぐ北に位置する平成 21 年度の調査の５地点から類似の甕が出土している。51 と 52 も同時期の甕と考えられる。

須恵器は 7 世紀の H-50 窯式から奈良時代の O-10 号窯式までのものがあるが、８世紀前葉の I-41 号窯式期頃の製品が多い。製塩土器知多式４類の年代とほぼ重なる。１地点からの出土が多いが、特定の遺構からまとまっての出土はない。小破片のものが主で、接合するものもほとんどなかった。

53 ～ 61 は坏、碗類である。60 は酸化焔焼成のため褐色を呈する。53 は H-50 窯式の坏 H である。62 ～ 65 は坏蓋である。62 のつまみは扁平で、63 ～ 65 は端部に返りがない。いずれも I-41 ～ C-27 窯式期に比定される。66 ～ 68 は壺瓶類の底部、70 ～ 72 は壺甕類である。69 は有台盤、胎土はやや軟質である。８世紀後半のものであろう。

74 は甑である。口縁部は丁寧なナデと沈線を施す。体部はタタキ目が残り、ここにも１条の沈線が施されている。75 と 76 は甑もしくは鍋の把手、ともに胎土は軟質で白色を呈す。

77 ～ 81 は灰釉陶器の碗もしくは皿である。灰釉陶器の出土量は少ない。９世紀前半の K-14 窯式の製品（77 ～ 79）、K-90 窯式（80）、O-53 窯式（81）のものがある。82 はいわゆる蛇の目高台である。本来は緑釉陶器の素地である。内面のみ灰釉が付着している。K-90 窯式の製品である。



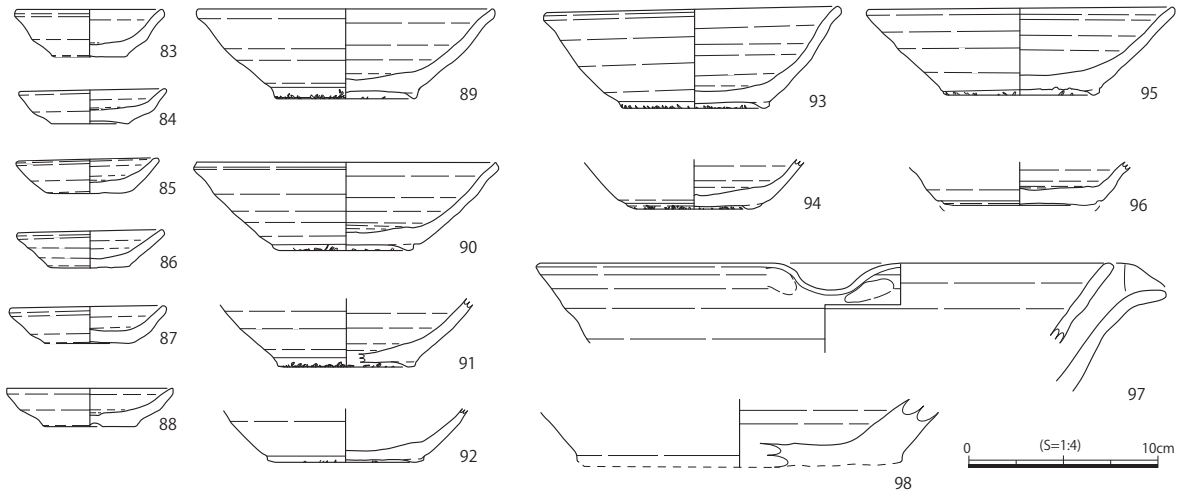
第 46 図　灰釉陶器

第４節　中世の土器・陶磁器

今回の調査で出土した遺物の大部分を、この時期（中世＝本報告のＶ期）の土器・陶磁器が占める。ただし、Ｖ－１期とＶ－５期の遺物は極めて少ない。1060SK、2120SD、2180SD、2153SX 遺構群、方形区画溝群と大量出土銭は遺構ごとに、それ以外の遺構や包含層からの出土遺物は種別ごとに報告する。

１．1060SK 出土の土器・陶磁器（第 47 図）

1060SK からは第５型式の山茶碗と小皿が出土した。残存率の高い個体が多かった。小皿（83 ～ 88）は体部と底部の境が明瞭で、器高も高く古い形状と言えよう。今回の調査では高台のある小碗が出土していない。既往調査でも小碗の出土数は少なく、中世畑間遺跡初期の遺物群と言える。97 は常滑焼片口鉢Ⅱ類である。Ⅱ類の片口鉢が少ない常滑窯２～３型式期のものである。98 は常滑焼甕の底部片である。97 と焼成具合や胎土が非常に似ており、同じ窯の製品かもしれない。



第 47 図　1060SK 出土の土器・陶磁器

２．2120SD 出土の土器・陶磁器（図版 25 ～ 30）

2120SD からはコンテナ 22 箱、破片数で約 4000 点の遺物が出土した。第２章でも述べたように、正確に遺物を層位ごとに取上げることができなかったが、整理作業において上層部（最上層・上層）と下層部（中層・下層）と分けることは可能であった（註 22）。上層部の方が出土量が多い。破片数では山茶碗が上層部で約６割、下層部では約７割を占める（註 23）が、大きさと重量から常滑焼が目立つ。上層では帯状に多くの遺物が出土し、北側では常滑焼片がまとまって廃棄されていた。また瓦も 48 点出土しており、その中には杏葉唐草文軒平瓦がある。銭貨も５枚出土しており、1433 年初鋳の宣徳通宝が含まれている。16 世紀の遺物も少量含まれている。これらは溝埋没最終段階の遺物と考えられるが、調査の不備によるもの、つまり 2120SD 埋土上面の未検出遺構に由来する可能性もある。また南西側では貝類などの自然遺物も出土した。なお、瓦や自然遺物については、後節で報告している。

図版 25 の 99 ～ 150 は尾張型の山茶碗および小皿である。第５～８型式のものがある。101 ～ 111 と 118 ～ 123 は下層部（下層・中層）から、他は上層部からの出土である。下層部出土の山茶碗は古相（第５型式）（101 ～ 111）と新相（第６～７型式）（118 ～ 123）に分かれる。前者が下層、後者が中層に由来すると考えられる。127 ～ 132 は長石などの細粒が多く混入し、白色を呈する胎

土から瀬戸産と考えられる。6点図示したが、瀬戸産の山茶碗は破片数では３％と少なかった。畑間遺跡では第８型式期には比較的高い比率で瀬戸産が含まれる傾向（註 24）があるのだが、2120SD は第８型式期の遺物が少ないため、瀬戸産山茶碗も少ないのだろう。123 はやや大ぶりで、わずかに口縁部がゆがむ、片口山茶碗を意図した製品であろうか。114 や 129 は高台がきれいに剥離している。常滑産山茶碗においても、６a 型式期に無高台山茶碗が存在するとされるが、図示した中で確実に無高台のものは 125 のみである。第５型式の山茶碗が下層の開削時期を、第７型式が中層の埋没時期を示すものと考えている。

小皿も同様に第５～８型式のものがあるが、型式差があまりなく、明確に個々の時期は判断しづらい。138 と 139 のみが下層部出土である。133 ～ 141 は底部と体部の境が明瞭であり、器高も２cm 以上であり、第５型式（常滑窯３型式）に比定される。142 ～ 149 は第６～８型式に比定される。146 は胎土から瀬戸産と考えられる。

150 は窯内で釉着した山茶碗底部の塊である。山茶碗は第６型式のものであろう。２地点包含層からもう１点（第 50 図 -331）、既往調査でも２点出土している。何のために集落に持ち込まれたのかは分からないが、窯業生産地域の集落らしい遺物と言えよう。武豊町のウスガイト遺跡でも同じものが出土している（註 25）。

図版 26 の 151 ～ 160 は東濃型山茶碗と小皿である。第８型式から第 11 型式のものまで存在する。14 世紀後半～ 15 世紀の遺物は多いものの、東濃型山茶碗は少ない。

161 ～ 170 は山茶碗系（常滑窯の片口鉢Ⅰ類）の鉢、第４～７型式のものがある。162 ～ 164 は玉縁状の口縁をなす、常滑窯編年６a 型式のものである。161 はやや古い常滑窯４型式のものである。165、166 は体部下半が丸みをもち、胎土も精良であることから常滑窯２～３型式のものと考えられる。170 は高台が省略されている。

171 ～ 217（図版 26 ～ 29）は常滑焼である。甕と鉢に加え、壺や小型の鉢、羽釜などがある。時期的には常滑窯初期（１ａ型式＝ 12 世紀前半の短頸壺）から 16 世紀まで含まれているが、最も多いのは６型式～ 10 型式の製品である。上層では、甕は８～９型式のものが多いが、鉢は９～ 10 型式のものが多く、甕の方が古相を示す。

2120ＳＤ最上層・上層
総破片数　3141

器種	器形	破片数
山茶碗	碗	1828※
	皿	106
	鉢	27
常滑焼	甕	869
	壺	7
	鉢	76
	その他	6
古瀬戸	碗	8
	鉢/盤	13
	壺・瓶	7
	その他	2
土師器	皿（碗）	32
	鍋	88
	甕	
	その他	
輸入陶磁器	碗杯皿	6
	鉢・盤	
	壺・瓶	
	その他	1

瓦	軒丸	2
	軒平	2
	丸	19
	平	1

不明・弥生ほか＝29　土製品＝12
※　瀬戸産62点　東濃型37点

2120ＳＤ中層・下層
総破片数　934

器種	器形	破片数
山茶碗	碗	604※
	皿	43
	鉢	43
常滑焼	甕	157
	壺	
	鉢	3
	その他	3
古瀬戸	碗	
	鉢/盤	
	壺・瓶	1
	その他	
土師器	皿（碗）	4
	鍋	23
	甕	
	その他	
輸入陶磁器	碗杯皿	
	鉢・盤	
	壺・瓶	
	その他	

瓦	軒丸	3
	軒平	1
	丸	20
	平	

不明・弥生ほか＝17　土製品＝12
※　瀬戸産6点

表６　2120SD 破片数

171 ～ 192 は甕である。171 は薄手で、口縁端部がわずかに上方に突起し受け口状を呈する。12 世紀代（常滑窯２～３型式）の甕である。172 と 173 も口縁部の突帯が発達していない段階、４～５型式のものである。図版 27 は常滑甕６～８型式のものである。甕の口縁は時期を追うごとに口縁部の外反が強まり、突帯が上下に発達していく。図版 28 の甕は突帯が頸部と一体化している。これらは９～ 10 型式の製品である。

193 ～ 197 は壺である。193 は灰色を呈する短頸壺である。体部外面にπのような線刻がある。短頸壺としては少し頸部が長い。縦方向のケズリ後に横方向のナデを施すが、ナデが粗く表面は凹凸がある。常滑窯１ａ型式の製品である。198 と 199 は浅い箱状の鉢である。199 は口縁部がわずかに注口状に指オサエで凹みが形成されている。13 世紀後半頃の製品であろう。200 と 201 は羽釜である。ともに土師質に焼成されている。

図版 29 は常滑焼の片口鉢、常滑窯片口鉢Ⅱ類とされるものである。内面は摩耗しているものが多い。常滑窯３～ 10 型式までのものがある。鉢は 202 や 203 のように口縁端部が丸みのあるものから、端部が平らに、そして、端部が上下に突起するもの（209 ～ 213）へと変化する。213 のように上下に突起し、端部に凸部が見られるものが最も新しい。なお、217 は図では古い型式にみえるが、軟質化し口縁部のナデ調整が粗雑な 16 世紀以降の製品である。本来は 2120SD に帰属しない可能性（註 26）もあるが、最上層埋没の最終段階の遺物と考えるべきであろう。

図版 30 の 218 ～ 234 は古瀬戸である。折縁小皿、天目茶碗や仏供、盤など多様な器形がある。古瀬戸中期と後期のものが多いが、221 は 16 世紀以降の製品かもしれない。折縁深皿（218、219）や盤類（226 ～ 230）は後期、231 の花瓶や 232 の柄付片口は中期のものである。

235 ～ 245 は土師器の鍋釜である。235 ～ 241 は伊勢型鍋である。235 と 236 はＡ３類、237 ～ 240 はＡ４類、241 はＡ５類である。Ａ５類は器壁が薄く特徴的だが、出土量は少ない。242 と 243 は羽釜Ａ類とされるもので、242 がＡ２、243 はＡ４、それぞれ 14 世紀初めと 15 世紀前半の製品であり、伊勢型鍋に後出する煮炊具である。244 と 245 はさらに後出の内耳鍋である。ともに体部から口縁が内傾しておらず、内耳鍋の初期、15 世紀半ば～後半のものと考えられる。246 ～ 250 は土師器皿、246 ～ 248 は山茶碗の小皿と同じ形状をしている。249 と 250 は手づくねである。

251 ～ 256 は輸入陶磁器である。251 と 252 は蓮弁文の青磁の碗で、253 は青磁の碗、見込みに櫛描文が施されている。255 は青白磁の合子である。これらは 13 世紀頃の製品と考えられる。254 の青磁は他に比べ釉がやや暗い緑色を呈する。他の青磁より後出、15 世紀のものであろう。256 は玉縁白磁碗の底部である。

2120SD の出土遺物は 13 世紀の山茶碗と 15 世紀の常滑焼が非常に多く、前者が下層部、後者が上層部の時期を示す遺物と考えられる。14 世紀の遺物は少なく、これは既往調査における全体的な傾向と一致する。

３．2180SD 出土の土器・陶磁器（図版 31）

2180SD からはコンテナ２箱分の遺物が出土した。貝や骨などの自然遺物も出土している。破片数では 50％以上を山茶碗が占めている。破片数としては第６型式の山茶碗が多いが、主たる遺物の時期は 14 ～ 15 世紀である。土師器の鍋釜類が破片数の約 10％あり、古い山茶碗を別とすれば、供膳具・調理具・貯蔵具・煮炊具が偏りなく出土していると言えよう。貝などの出土も含め、近接する生活空間からの日常的な廃棄物のように思われる。

山茶碗は第６～８型式のものが出土している。第６型式のものが多いが、小破片が主であった。258、264、265 は瀬戸産である。263 ～ 265 の山茶碗は底部が小さく無高台であり、第８型式に比定される。

266 ～ 269 は常滑焼の片口鉢である。いずれも口縁端部が突起し、常滑窯編年９～ 10 型式＝ 15 世紀代に比定される。一方、広口壺（271）や鉢（272）は 13 世紀代の製品である。

273 ～ 276 は古瀬戸である。273 は古瀬戸の折縁深皿、274 は天目茶碗である。ともに古瀬戸後期に比定される。276 は壺の胴部下半である。薄緑の灰釉が均一に施されている。

277 ～ 282 は土師器の鍋釜である。277 は伊勢型鍋 A 4 類、13 世紀の製品であり、上述の山茶碗と同時期の遺物である。278 ～ 282 は羽釜 A 類である。278 は A 2 類、279 は A 3 類、280 ～ 282 は A 4 類である。12 世紀後半～ 15 世紀前半の製品である。

2180SD では、上述のように 13 世紀～ 15 世紀後半までの遺物があり、上層と下層ごとに遺物を取上げたのだが、出土遺物は上下＝新旧と対応してはいない。第 8 型式の山茶碗も出土しており、長い時期の遺物が一定量含まれる。

4．2153SX 遺構群出土の土器・陶磁器（図版 32）

図版 32 は 2153SX 遺構群（貝殻廃棄遺構群）から出土した土器・陶磁器である。複数の遺構からの出土遺物であるが、すべての遺構から貝類が出土しており、出土遺物からも一定の期間の中で形成された 1 つの遺構群と考えている。各遺物の出土遺構は遺物一覧表を参照されたい。

破片数ではほぼ 50％を山茶碗が占めており、やはり第 5 ～ 7 型式のものが多い。これを除いて 2180SD と比べれば、土師器の皿が多く、常滑焼の鉢が少ないと言える。土師器の鍋釜や古瀬戸の盤や鉢もあり、貝殻も含め、食事に伴う廃棄物という様相が見て取れる。

283 ～ 289 は山茶碗と小皿である。2180SD 同様に第 6 型式の山茶碗が多いが、第 8 ～ 11 型式の山茶碗も出土している。286 は焼成不良の東濃型第 8 型式の山茶碗と思われるが、土師器杯もしくは皿の可能性もある。

290 ～ 293 は常滑焼である。290 は発達した突帯が頸部に接着するようになった常滑窯編年 10 型式の甕である。291 と 292 は突帯が非常に発達した常滑窯 9 型式のものである。293 の鉢は口縁端部が上下に突起しており 10 型式に比定される。

2180SD

総破片数　386

器種	器形	破片数
山茶碗	碗	206※
	皿	9
	鉢	10
常滑焼	甕	88
	壺	2
	鉢	14
	その他	
古瀬戸	碗	3
	鉢/盤	2
	壺・瓶	3
	その他	
土師器	皿（碗）	4
	鍋	41
	甕	
	その他	
輸入陶磁器	碗杯皿	
	鉢・盤	
	壺・瓶	
	その他	

不明・弥生ほか＝3　土製品＝1
※　瀬戸産25点　東濃型９点

2153SX遺構群

総破片数　356

器種	器形	破片数
山茶碗	碗	181※
	皿	7
	鉢	2
常滑焼	甕	70
	壺	5
	鉢	
	その他	
古瀬戸	碗	5
	鉢/盤	6
	壺・瓶	1
	その他	
土師器	皿（碗）	41
	鍋	30
	甕	
	その他	
輸入陶磁器	碗杯皿	
	鉢・盤	
	壺・瓶	
	その他	

不明・弥生ほか＝5　土製品＝3
※　瀬戸産16点　東濃型16点

表７
2180SD・2153SX 破片数

294 ～ 300 は古瀬戸である。古瀬戸後期の製品が主である。深皿（297 ～ 299）は後期Ⅲ・Ⅳ期に比定される。300 は鉢もしくは皿の片口部の破片であるが、中期の製品であろう。

301 ～ 306 は土師器である。301 と 302 は手づくねの土師器皿である。非常に薄手であるが、焼成は良好で締まりもある。303 ～ 306 は土師器の鍋釜である。伊勢型鍋もあるが、羽釜 A 4 類が主である。303 は鍔の先端が上方に向き、口縁とほぼ同じ位置まで達している。304 と 305 は 303 に比べ厚手で器壁の凹凸が目立つ。系統の異なるものであろうが、いずれも羽釜 A 類の中でも後出のものと比定され、その年代は 15 世紀半ばである。

出土遺物は 13 ～ 14 世紀の遺物も含むが、主体は 15 世紀半ば～後半であり、貝殻も含め、この時期に廃棄されたものであろう。

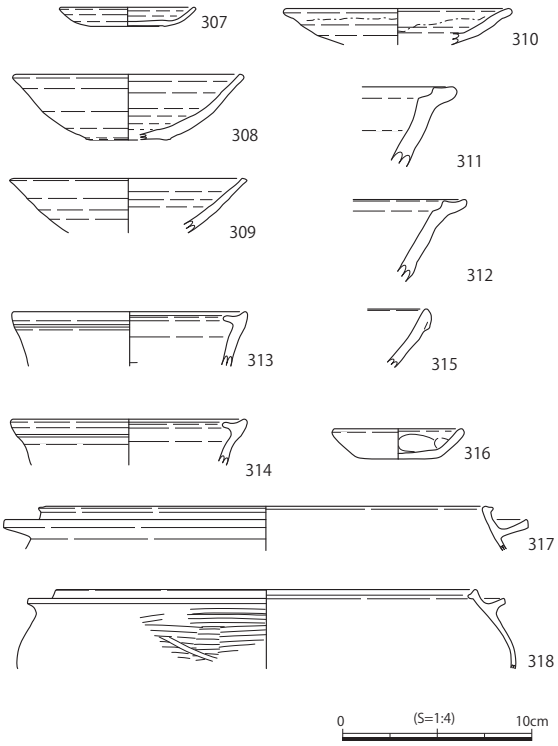
5．方形区画溝群出土の土器・陶磁器と大量出土銭の容器壺（第 48・49 図）

2115SD や 2148SD などの 2 地点の方形区画溝群からの出土遺物は少なかった。307 ～ 309 は第 10 ～ 11 型式の山茶碗と小皿である。310 は古瀬戸の緑釉小皿、311 と 312 は折縁深皿で、いずれも古瀬戸後期の製品である。313 と 314 は青磁の香炉である。同一個体の可能性があるが、断面等がやや異なることから 2 点図化した。釉薬は厚く、やや濃い緑色を呈しており、14 世紀後半～ 15 世紀の製品と考えられる。315 は玉縁口縁の白磁碗、13 世紀の製品である。316 は土師器小皿である。317 は土師器の羽釜で、A 3 類、318 も同じく A 4 類、13 世紀末～ 14 世紀前半に比定される。

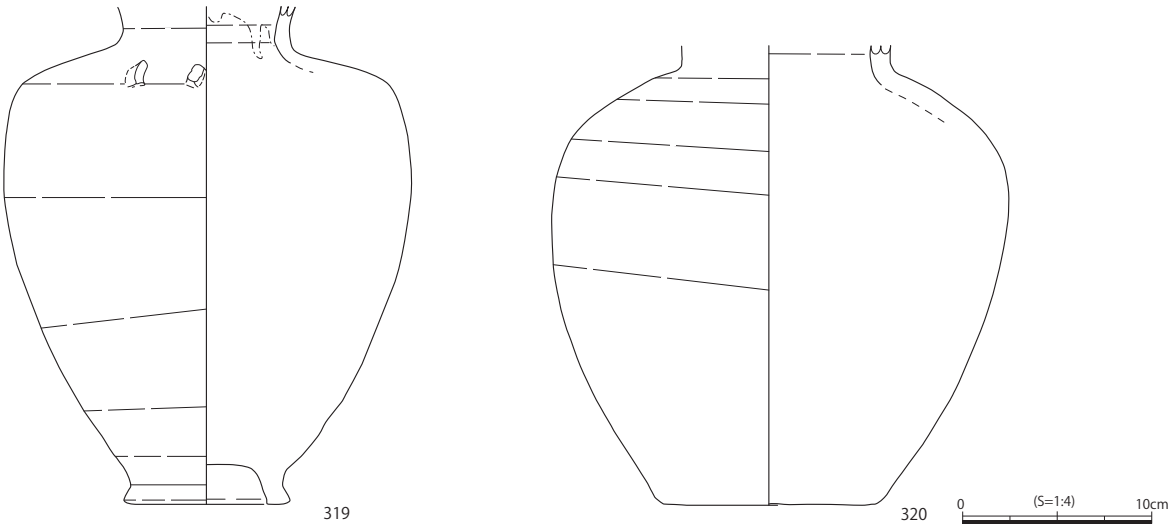
第 7 型式の山茶碗なども出土しているが、最古段階の溝である 2205SD から永楽通宝が出土しており、溝群の帰属年代は少なくとも 1403 年以後であることは確実である。出土する遺物も 15 世紀半ばのものがあり、銭貨の年代と整合性がある。

319 と 320 は大量出土銭の容器として使用された壺である。319 は大量銭 A の古瀬戸三耳壺。口縁部と耳は打ち欠きされている。釉薬は濃緑色を呈し、縞状に流下している。高台はやや外に張る断面形状を呈す。肩部が張り、沈線はない。古瀬戸前期Ⅰ・Ⅱ期＝ 13 世紀前半の製品に比定される。

320 は常滑焼の壺、319 と同じく口縁部が欠けているが、玉縁口縁壺であろう。丸みを帯びた形状や自然釉や胎土の色調から 15 世紀代後半の製品と考えられる。外面下半は表面がきれいに摩滅している。なお、蓋に用いられていたのは、13 世紀頃の山茶碗系片口鉢の胴部片（写真図版 56）である。



第 48 図　方形区画溝群出土の土器・陶磁器



第 49 図　大量出土銭の容器壺

6．包含層・その他の遺構出土の土器・陶磁器（第 50 図・図版 33）

第 50 図の 321 ～ 331 は山茶碗と小皿、鉢である。第 6 ～ 11 型式までのものがある。323 と 324 は 1040SD から出土したものである。329、330 は山茶碗の片口鉢。331 は 2120SD 出土の 150 と同じ山茶碗底部が釉着したものである。山茶碗は第 6 型式のもの、2 地点包含層からの出土である。

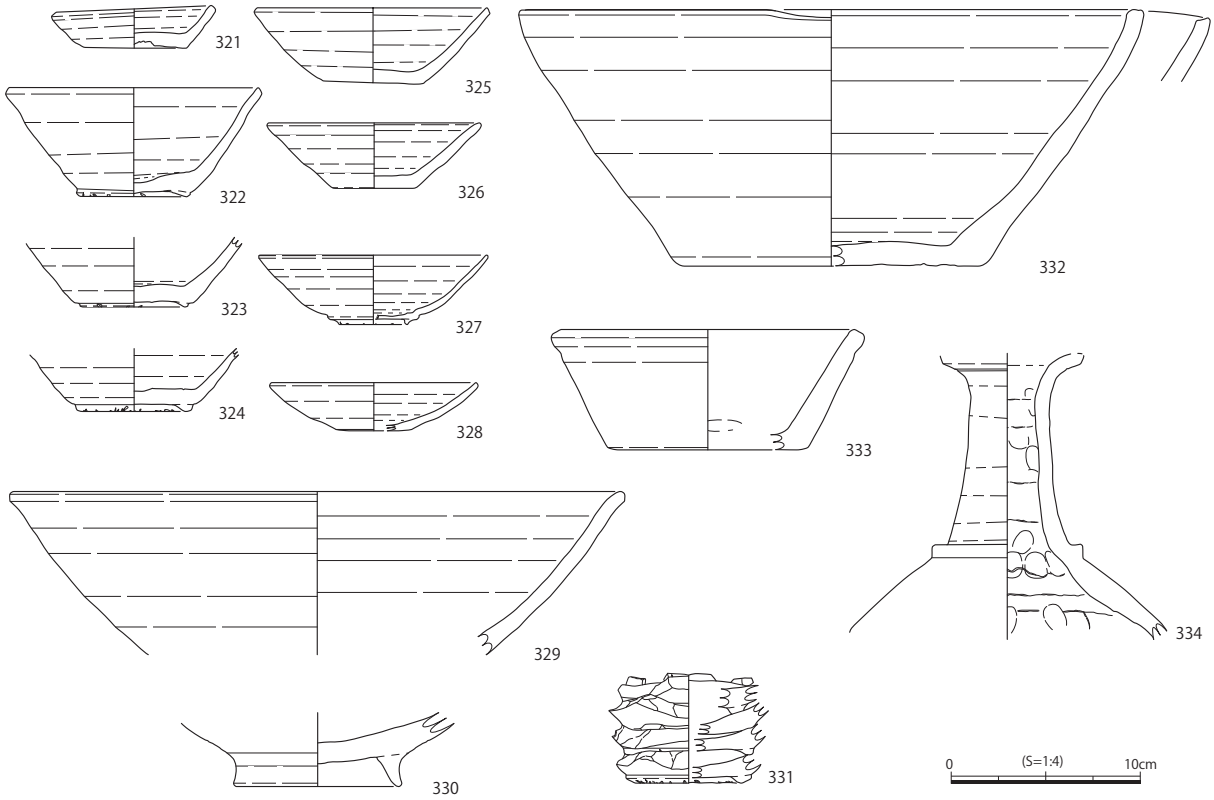
332 ～ 334 は常滑焼。332 は片口鉢、333 は小型の浅い鉢である。2120SD、2180SD からも同様の鉢（198、199、272）が出土している。334 は金属器を模したとされる肩部に稜がある水瓶で、12 世紀後半の製品と考えられる。口縁端部はわずかに欠けていた。

図版 33 の 335 ～ 351 は土師器皿である。335 ～ 340 は手づくね、341 ～ 351 はロクロ成形である。335 ～ 337 は内外面ともに指オサエの凹凸が残るが、338 ～ 340 は内面は丁寧に仕上げている。347 ～ 351 は口縁部を丁寧に横ナデし、外反させ、端部がわずかに上方につまみ出されている。これは戦国期の京都系土師器皿と共通する形状である。341 と 344 は 2 地点、345 と 346 は 4 地点から、他はすべて 7 地点からの出土である。

352 ～ 356 は土師器の鍋釜である。354 ～ 356 は 7 地点からの出土である。354、355 は内耳鍋である。355 は 354 よりも口縁が内傾しており、354 が内耳鍋 A 類、355 は B 類である。A 類は 15 世紀末、B 類は 16 世紀前半に比定される。356 は茶釜型の羽釜である。鍔が比較的長く、胴部下半はケズリが施されており、15 世紀末から 16 世紀前葉に比定される。

357 ～ 367 は古瀬戸である 364 は高台内に卸目が造られている底卸目皿である。高台も高く、13 世紀、古瀬戸前期の製品と思われる。357 ～ 361 の碗皿類は古瀬戸後期の製品である。

368 は蓮弁文の龍泉窯系の青磁碗である。1 地点からの出土である。今回の調査では輸入陶磁器は破片数で 18 点出土し、青白磁 1 点、白磁 3 点、他は青磁であった。



第 50 図　包含層・その他の遺構出土の土器・陶磁器（山茶碗・常滑焼）

第５節　瓦・土製品・石製品

１．瓦（図版 33・34・第 51 図）

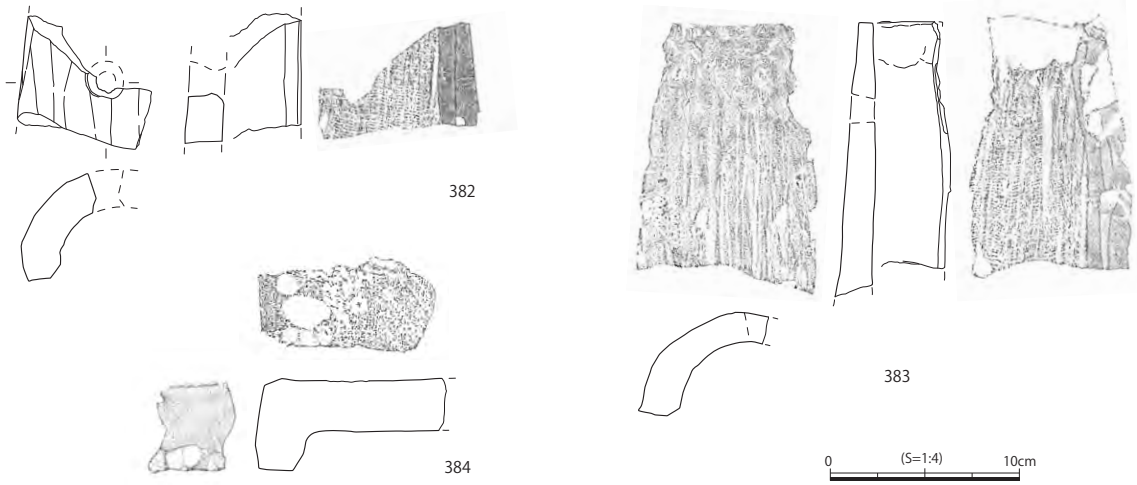
瓦は近世のものや小片で時期や形の判断のできないものを除き、77 点を抽出した。そのうち 70 点が２地点、さらに 2120SD 出土が 70 点中 48 点であった。１地点は３点のみ、３地点と４地点は各２点であった。本遺跡の瓦については、遺跡北東部からの出土が多いとの指摘があった。今回は１地点と２地点が北東部にあたり、２地点から多くの瓦が出土した。

77 点中、軒瓦は軒丸瓦が５点、軒平瓦が４点で、すべて 2120SD からの出土である。軒丸瓦はすべてが巴文であった。軒平瓦では熱田神宮との関係を示す杏葉唐草文軒平瓦が１点出土した。

瓦について特記すべきことは、軒瓦を除けば、ほとんどが丸瓦で、平瓦が極めて少ないことである。抽出した中で、丸瓦が 63 点に対し平瓦は５点と少なく、大きな破片のものは無かった。特に 2120SD において平瓦は１点に過ぎない。既往の調査でも同様の傾向はみられたとのことである。遺跡南東の丘陵地帯（加木屋地区）には 12 ～ 13 世紀前半の瓦陶兼業窯があり、その生産や流通に畑間遺跡が関わっていた可能性もある。丸瓦への偏重は何らかの生産・流通過程を反映した事象かもしれない。しかし、まとまって出土しているわけでもなく、丸瓦ばかりなのは、通常の瓦葺きの建築物でない、丸瓦を主に使用する特殊な建築物が存在したのか、もしくは、本来とは異なる用途に利用された結果ではないだろうか。

図版 34 と 35 は 2120SD から出土した瓦である。369 ～ 372 は巴文軒丸瓦である。369 は径 15.0cm、左まわりの三巴文で 24 個の珠文を配している。畑間遺跡の北東４㎞ほどに位置する社山古窯の軒丸瓦Ｖ類とされるものである。他の巴文も同じくＶ類と考えられる。373 は杏葉唐草文軒平瓦、胎土は灰黄色を呈し、焼締まりが弱い。顎貼り付け技法で成形し、瓦当裏面の補強粘土が厚い。瓦当部上縁が面取りされている。369 ～ 373 は社山古窯などで 12 世紀後半から 13 世紀初め頃に焼成された瓦である。杏葉唐草文軒平瓦の左右非対称な瓦当文様は非常に珍しく、特徴的である。周辺の社山古窯と論田古窯で出土しており、他には同じ大田町内の観福寺と熱田神宮寺での採集品が知られるのみである。畑間遺跡と熱田神宮の関係を示す重要な遺物である。本遺跡では 12 点目の出土となる。

374 は無文の軒平瓦である。本来文様のある瓦当部に強い指ナデを施す。375 は燻焼により黒色を呈する。瓦質土器の火舎などと類似する雷文が施されている。やや小ぶりであり、瓦ではない可能性



第 51 図　瓦（１・２・４地点出土）

がある。374、375 と同じものは既往調査でも出土している。

376 ～ 381 は 2120SD 出土の丸瓦である。376 は杏葉唐草文軒平瓦と一緒に出土した（写真図版 17-2）。379 には吊るし紐痕がある。いずれの丸瓦も陶器質で焼成は良好であり、381 を除き、自然釉が掛かっている。378 は端部が広がる形状で通常の丸瓦ではない。

第 51 図の 382 と 383 は釘穴がある。384 は 374 と同じく無文の軒平瓦とみているが、軒先以外に使用する瓦かもしれない。

２．土製品・石製品（第 52 図）

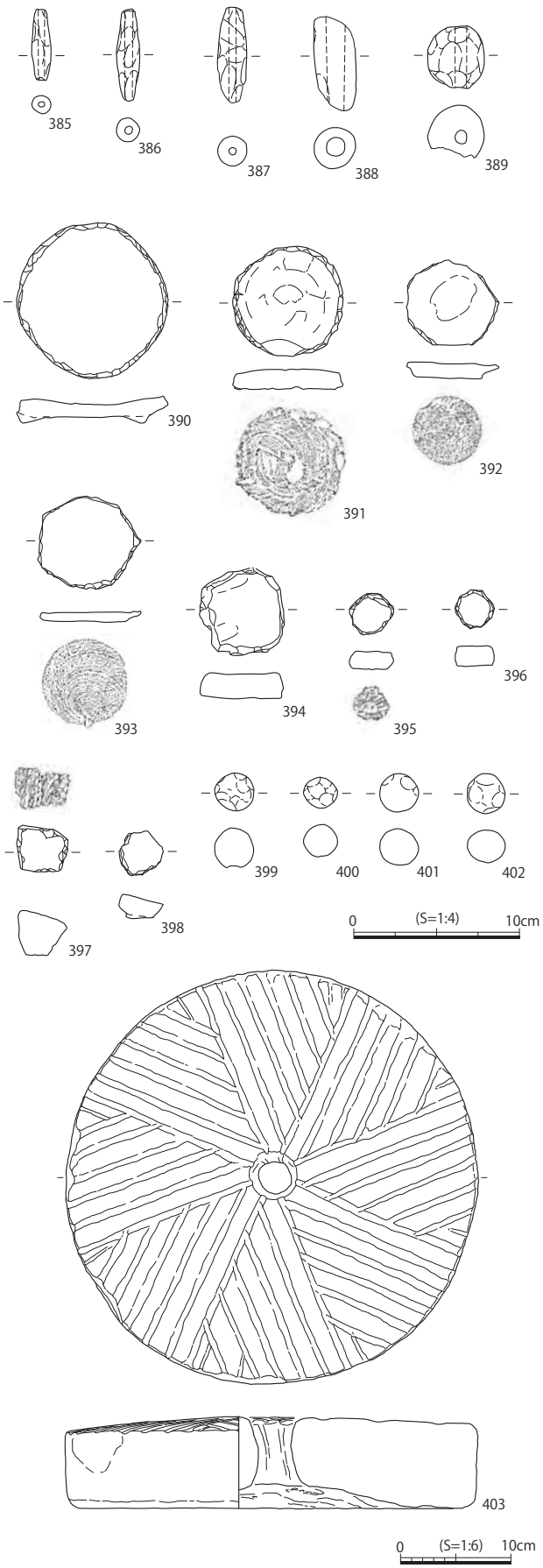
土製品としては、土錘、加工円盤、陶丸がある。土錘は 22 点出土した。１地点が６点、２地点が 13 点、７地点が３点である。土錘は主に海で使用されたのか、川で利用されたのか分からないが、１地点と７地点に多いのは製塩土器と同じ傾向である。389 のみが球形、385 ～ 388 は通常の円錐型、すべて土師質である。

加工円盤は小型が３点、大型が 19 点の計 22 点出土した。15 点は山茶碗を素材とし、他に常滑焼や土師器を素材としている。390 ～ 392、395 は山茶碗の底部、393 は土師器皿の底部、394 は常滑焼甕の胴部、396 は須恵器を素材としている。加工円盤は１地点からの３点以外、すべて２地点からの出土であった。

397 と 398 は陶片を方形に加工したもので、加工さいころと呼んでいる。397 は瓦片、398 は山茶碗を素材としいる。

陶丸は 18 点出土し、２地点が最も多く 12 点、１地点が５点、４地点から１点出土した。白い陶器質のもの（399、400）と褐色の焼締陶器質のもの（401、402）がある。

石臼（403）は２地点包含層、2120SD から方形区画溝近辺で出土した。花崗岩製で８分画６溝の下臼である。径 37.4cm、厚みは 8.3cm をはかる。重量は 18.5kg あった。



第 52 図　土製品・石製品

第６節　金属製品（銭貨・独鈷杵・和鏡）

１．金属製品の概要

金属製品としては、銭貨・独鈷杵・和鏡が出土した。独鈷杵と和鏡が通常の集落遺跡において発掘調査で出土することは珍しく貴重な資料である。銭貨はすべて２地点からの出土である。遺構や包含層からの個別出土銭は 41 枚であった。また、大量出土銭 A 内部の銭貨は取り出していないが、大量出土銭 B は内部の砂取りの際に肩部片が割れ、その際に外れた６枚と、内部に残っているが表面が観察できた５枚の計 11 枚の銭種が判明した。これらを除き、大量出土銭壺内の銭貨は未調査であるが、現状を観察したところ、緡銭とバラ銭がみられる（図版 38）。大量出土銭 A、B ともに上部は緡銭、下部はバラ銭で納められている可能性がある。壺内の状況等については、第４章で詳細に報告しており、参照されたい。ここでは銭種等を資料化できた 52 枚の銭貨について報告する。

全体として金属製品は非常に少なく、大部分は器種不明の金属片や釘などであった。なお、銭貨と独鈷杵・和鏡については、第４章と付論でも触れており参照されたい。

２．銭貨（表９・図版 36 ～ 38）

銭貨の銭種や法量等は表９の通りである。近世の文久永宝（1863 年初鋳）が１枚含まれていたが、残りすべて中世の銭貨である（註 27）。８種計 20 枚については金属組成の成分分析を行なった。これについては、付論１を参照されたい。中世の個別出土銭は２地点東区の 2115SD などの区画溝と 2120SD 周辺の限られた範囲から出土した。ただし、大量出土銭 A・B ともに内部の銭貨が散在した様子はなく、これらの銭貨は大量出土銭前後の時期に人々が使用していた銭貨と考えられる。

銭種別では最も多いのは永楽通宝である。大量出土銭 B 内の銭貨においても永楽通宝が 11 枚中４枚と最も多く、最新銭である。よって、大量出土銭の帰属時期は 15 世紀半ば以後と考えられる。

銭種	枚数	王朝	初鋳年	順位※
永楽通宝	12	明	1408年	6位
元豊通宝	7	北宋	1078年	2位
開元通宝	5	唐	621年	5位
皇宋通宝	4	北宋	1039年	1位
熙寧元宝	4	北宋	1068年	3位
元祐通宝	4	北宋	1086年	4位
聖宋元宝	3	北宋	1101年	10位
祥符元宝	2	北宋	1008年	12位
天聖元宝	2	北宋	1023年	7位
漢通元宝	1	後漢	948年	—
景徳元宝	1	北宋	1004年	—
至和元宝	1	北宋	1054年	—
嘉祐通宝	1	北宋	1056年	15位
天禧通宝	1	北宋	1071年	14位
宣徳通宝	1	明	1433年	36位

※全国の大量銭における出土数の順位
（註28文献より）

表８　銭貨種別出土数

永楽通宝に続いて多い銭種は、元豊通宝や皇宋通宝などの全国規模の銭種出土数順位（註 28）における上位の銭貨が顔を揃えており、一般的な銭種構成である（表８）。唯一出土例が少ないのは 948 年初鋳の漢通元宝で、これは五代の後漢発行の銭貨である。最古の銭種は 621 年初鋳の開元通宝であるが、背面に京の字が記されているものは 845 年（会昌５年）に補鋳された通称「会昌開元」と呼ばれるものである。中世渡来銭の最新銭は 1433 年初鋳の宣徳通宝、2120SD 上層から出土している。

畑間遺跡における銭貨の出土量はさほど多くはない。既往調査においては、計 46 枚の銭貨（近世除く）が出土している。畑間遺跡中央から南部を主とした平成 11 ～ 19 年度調査においては 30 枚の銭貨が出土しているが、この中には永楽通宝は１枚も含まれていない。中世のものとしては 1174 年初鋳の淳熙元宝が最も新しく、遺跡北部に位置する２地点との相違を示している。また平成 20 ～ 27 年度までの調査では 16 枚出土している。この中に永楽通宝は１枚のみである。遺跡北側の方が明銭など新しい銭貨が出土する傾向がある。

	銭種	王朝	初鋳年	字体	重量(g)	径(cm)	内径(cm)	厚み(cm)	遺構
1	開元通宝	唐	621年	真書	2.6	2.419	1.978	0.109	2115SD
2	開元通宝	唐	621年	真書	3.2	2.395	2.115	0.150	2205SD
3	開元通宝	唐	621年	真書	2.8	2.431	2.085	0.132	2150SX
4	開元通宝	唐	621年	真書	4.1	2.401	1.802	0.169	2150SX
5	開元通宝	唐	621年	真書	2.8	2.467	1.966	0.125	2150SX
6	漢通元宝	後漢	948年	真書	3.2	2.51	1.963	0.153	Ⅱ、Ⅲ層
7	景徳元宝	北宋	1004年	真書	—	—	—	—	大量銭B
8	祥符元宝	北宋	1008年	真書	4.0	2.508	1.95	0.161	Ⅱ、Ⅲ層
9	祥符元宝	北宋	1008年	真書	—	—	—	—	大量銭B
10	天聖元宝	北宋	1023年	真書	3.7	2.522	2.082	0.156	大量銭B
11	天聖元宝	北宋	1023年	篆書	2.9	2.460	2.131	0.121	2201SD
12	皇宋通宝	北宋	1039年	真書	3.2	2.428	2.044	0.109	2115SD
13	皇宋通宝	北宋	1039年	真書	3.0	2.249	1.891	0.122	2120SD
14	皇宋通宝	北宋	1039年	真書	3.6	2.451	1.964	0.169	Ⅱ、Ⅲ層
15	皇宋通宝	北宋	1039年	真書	3.1	2.456	1.97	0.135	Ⅱ、Ⅲ層
16	至和元宝	北宋	1054年	篆書	3.9	2.425	1.933	0.183	2227SK
17	嘉祐通宝	北宋	1056年	真書	2.7	2.361	1.972	0.121	大量銭B
18	熙寧元宝	北宋	1068年	真書	3.6	2.435	1.901	0.149	2115SD
19	熙寧元宝	北宋	1068年	真書	2.9	2.358	1.939	0.142	Ⅱ、Ⅲ層
20	熙寧元宝	北宋	1068年	篆書	2.6	2.465	2.09	0.091	2115SD
21	熙寧元宝	北宋	1068年	篆書	4.4	2.401	2.027	0.131	2115SD
22	天禧通宝	北宋	1071年	真書	5.3	2.551	2.002	0.143	2115SD
23	元豊通宝	北宋	1078年	真書	3.7	2.630	2.097	0.125	2115SD
24	元豊通宝	北宋	1078年	行書	3.4	2.492	1.877	0.136	大量銭B
25	元豊通宝	北宋	1078年	行書	3.9	2.481	1.933	0.168	2227SK
26	元豊通宝	北宋	1078年	行書	3.0	2.514	1.921	0.155	Ⅱ、Ⅲ層
27	元豊通宝	北宋	1078年	篆書	4.1	2.413	1.921	0.142	大量銭B
28	元豊通宝	北宋	1078年	篆書	3.7	2.478	1.887	0.131	2205SD
29	元豊通宝	北宋	1078年	篆書	3.7	2.476	2.008	0.146	2205SD
30	元祐通宝	北宋	1086年	行書	3.8	2.487	2.103	0.139	2205SD
31	元祐通宝	北宋	1086年	行書	3.1	2.383	1.935	0.144	2205SD
32	元祐通宝	北宋	1086年	篆書	3.7	2.451	1.956	0.134	2150SX
33	元祐通宝	北宋	1086年	篆書	3.3	2.507	2.033	0.155	Ⅱ、Ⅲ層
34	聖宋元宝	北宋	1101年	真書	3.2	2.492	1.801	0.135	2205SD
35	聖宋元宝	北宋	1101年	篆書	3.3	2.472	1.888	0.122	2120SD
36	聖宋元宝	北宋	1101年	篆書	3.5	2.475	2.047	0.156	大量銭B
37	永楽通宝	明	1408年	真書	2.8	2.474	2.132	0.137	2120SD
38	永楽通宝	明	1408年	真書	4.8	2.481	2.096	0.170	2115SD
39	永楽通宝	明	1408年	真書	3.7	2.532	2.149	0.121	2115SD
40	永楽通宝	明	1408年	真書	3.0	2.487	2.123	0.131	2205SD
41	永楽通宝	明	1408年	真書	3.5	2.554	2.106	0.134	2205SD
42	永楽通宝	明	1408年	真書	3.4	2.506	2.098	0.139	2205SD
43	永楽通宝	明	1408年	真書	3.8	2.477	2.089	0.156	2205SD
44	永楽通宝	明	1408年	真書	3.3	2.514	2.06	0.146	Ⅱ、Ⅲ層
45	永楽通宝	明	1408年	真書	3.7	2.487	2.092	0.143	大量銭B
46	永楽通宝	明	1408年	真書	—	—	—	—	大量銭B
47	永楽通宝	明	1408年	真書	—	—	—	—	大量銭B
48	永楽通宝	明	1408年	真書	—	—	—	—	大量銭B
49	宣徳通宝	明	1433年	真書	3.7	2.551	2.092	0.146	2120SD
50	不明	—	—	—	1.5	2.493	1.926	0.109	2120SD
51	不明	—	—	—	3.0	2.485	1.82	0.145	Ⅰ、Ⅱ層
52	文久永宝	江戸	1863年	—	4.1	2.714	2.167	0.152	Ⅱ層

4＝孔部破損　背京（会昌開元）　5＝穿孔２つあり　背上月　50＝欠損（1/2）咸平もしくは治平元宝か

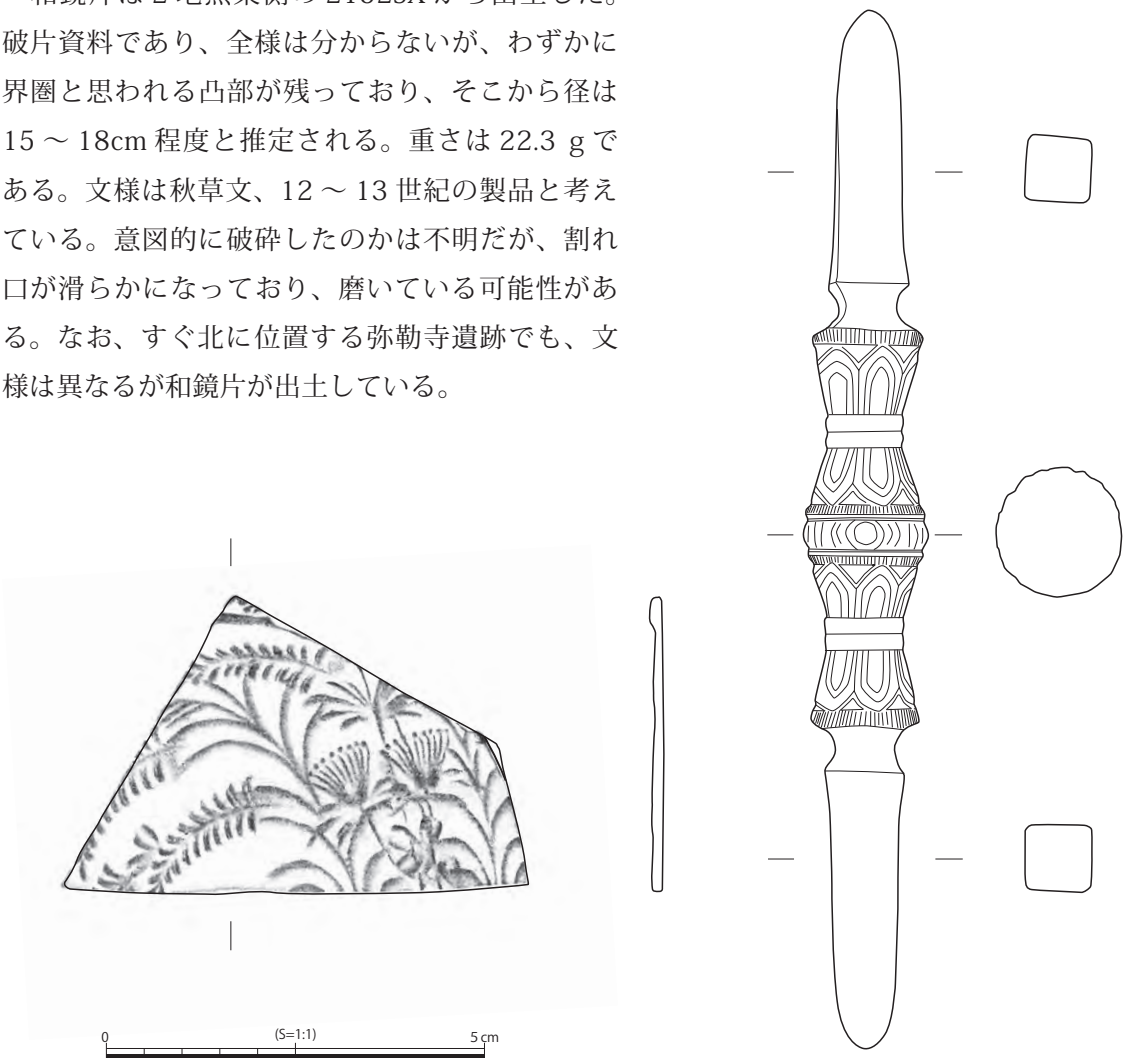
表９　出土銭貨一覧

３．独鈷杵・和鏡（第 53 図）

独鈷杵は密教法具の一つであり、その形の由来はインド神話の武具という。独鈷杵は金剛杵という法具の基本形であり、先端の鈷が３つのものは三鈷杵、５つのものは五鈷杵となる。独鈷杵は大量出土銭Ａと同じく方形区画溝群（2115SD や 2205SD）埋没後に形成された遺構＝ 2156SK から出土した。その位置は大量出土銭Ｂの２ｍほど南であった。銅製で全長 13.7cm、鈷の長さが 4.25cm、把部が 5.2cm、把部（鬼目）の厚み 1.6cm、重さ 103.5 ｇである。

把部は中央に鬼目が４つ、その上下に６葉の蓮弁帯がある。蓮弁帯それぞれ２条の紐帯で締められている。蓮弁帯と鈷部、鬼目帯との接合部には藁を表すという細かい線刻が多数ある。独鈷杵は平安時代などの古いものほど、鈷部が尖り、把部に対して長い傾向がある（註 29）。本事例は鈷部が把部に比べ短く、その比率は 0.82 である。また、鈷部の尖りも弱いことから 14 世紀前半の製品と考えられる。なお、隣接する知多市の法海寺に鎌倉時代後葉の製品と評価されている独鈷杵が伝世しており、その法量はほぼ一致する（註 30）。ただし、法海寺のものは蓮弁が８葉で、文様も本事例よりも全体にシャープであり、鈷部の尖りもやや鋭い。法海寺の独鈷杵はわずかに先行する時期の製品であるが、同じ工房で造られた可能性が考えられる。

和鏡片は２地点東側の 2152SX から出土した。破片資料であり、全様は分からないが、わずかに界圏と思われる凸部が残っており、そこから径は 15 ～ 18cm 程度と推定される。重さは 22.3 ｇである。文様は秋草文、12 ～ 13 世紀の製品と考えている。意図的に破砕したのかは不明だが、割れ口が滑らかになっており、磨いている可能性がある。なお、すぐ北に位置する弥勒寺遺跡でも、文様は異なるが和鏡片が出土している。



第 53 図　独鈷杵・和鏡

第７節　自然遺物（貝・骨類）

１．自然遺物の概要

畑間遺跡では貝類は非常に多く検出される。ただし、包含層や近世遺構からのものも多く、今回は遺構のものを主に一部を採取し、６つの遺構の貝類を分析・同定した。なお、貝類は任意で採取したサンプルの分析であり、全量・定量分析ではない。骨類はコンテナ１箱分が出土し、全点を分析・同定した。なお、これら自然遺物の分析・同定は株式会社パレオラボに依頼した。本節の内容の多くは株式会社パレオラボに負うものである。

２．貝類（表 10・写真 34）

貝類は２地点の 2115SD（方形区画溝）、2120SD、貝殻廃棄遺構群の 2153SX、2164SP、2195SK と７地点の 7001SX から出土したものについて報告する。２地点の遺構は中世（13 ～ 15 世紀）の遺構であるが、7001SX は近世（17 世紀か）の遺構である。

貝類の種類と点数は表 10 の通りである。点数が多いのは小さい塔型巻貝のウミニナ、イボウミニナなどであるが、これらは小さい上に 2164SP から集中的に出土したため数が多くなっている。全体としてはハマグリ、シオフキガイが多く、既往調査成果の傾向と一致する。

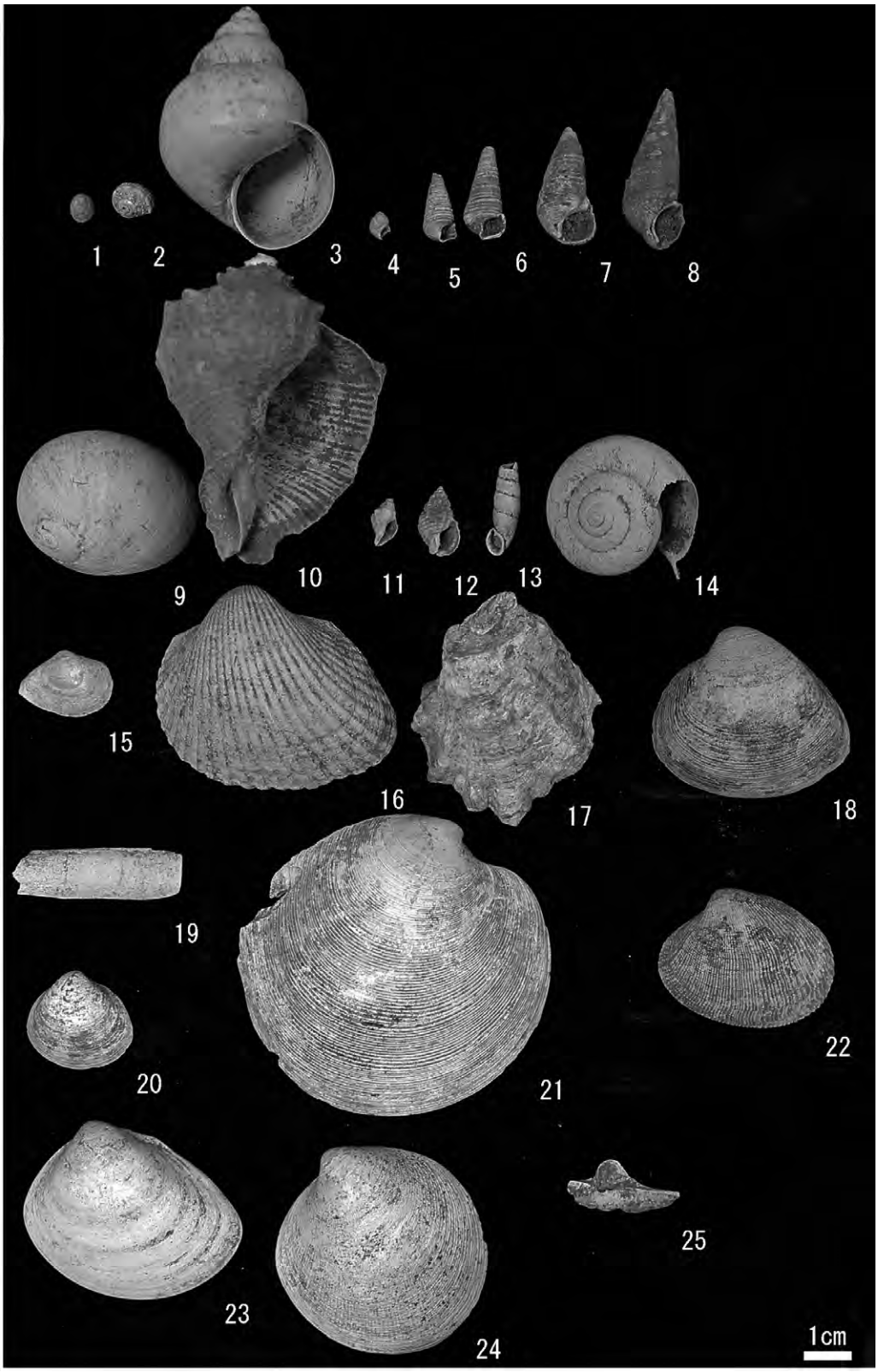
中世では、内湾の砂泥底に群生するウミニナやイボウミニナが多く採集された。同じく内湾の砂泥底に生息するカワアイガイ、ヘナタリガイ、ハマグリ、シオフキガイ、あるいは内湾の砂礫底に生息するアラムシロガイなども比較的多く見られ、貝類採集は主に遺跡周辺の内湾で行われたと考えられる。近世遺構の 7001SX では、内湾の砂泥底に生息するハマグリ、シオフキガイ、ウミニナ、イボウミニナ、アサリや、岩礁や砂礫底のカキ礁に生息する貝が出土している。中世に続いて、貝類採集は主に内湾で行われたと考えられるが、対象の変化も認められる。

		2115SD	2120SD	2153SX	2164SP	2195SK	7001SX
カサガイ目		0	0	0	24	0	0
イボキサゴ		0	0	0	11	0	1
マルタニシ		0	0	0	0	0	16
カワザンショウガイ		0	0	0	16	0	0
カワアイガイ		0	0	9	474	14	7
ヘナタリガイ		1	0	6	87	2	6
ウミニナ		16	9	52	4230	153	31
イボウミニナ		7	3	20	2491	43	77
ツメタガイ		0	0	0	0	0	1
アカニシ		0	9	0	1	0	7
アクキガイ科		0	0	0	85	0	0
アラムシロガイ		2	1	5	554	14	0
キセルガイ科		0	0	0	0	0	6
マイマイ類		0	0	0	0	0	1
不明巻貝		0	0	0	74	12	11
ハナエガイ	左	0	0	1	0	0	0
	右	0	0	0	0	0	0
サルボウガイ	左	0	0	0	0	0	15
	右	0	0	0	0	1	6
マガキ	左	0	0	31	4	13	28
	右	0	1	18	3	2	19
シオフキガイ	左	23	64	178	2	341	99
	右	32	62	174	2	330	100
マテガイ類（破片）	左右不明	1	0	10	0	135	5
シジミ属	左	0	4	0	2	1	8
	右	0	3	0	2	0	8
カガミガイ	左	0	0	0	0	1	1
	右	0	0	1	0	4	2
アサリ	左	5	2	4	0	5	19
	右	6	2	4	0	2	22
ハマグリ	左	97	54	330	3	221	201
	右	92	55	308	0	233	196
オキシジミ	左	0	0	0	0	0	1
	右	0	0	0	0	0	1
オオノガイ	左	0	0	1	0	0	0
	右	0	0	0	0	0	2
不明二枚貝	左右	0	0	0	0	0	3
フジツボ類（破片）		0	0	0	1	0	0

表 10　出土貝類

３．骨類（表 11）

出土した骨類は表 11 の通りである。ウマやイヌ、ニホンイシガメなどに加え、人骨も出土した。3 点の人骨が１地点南西部のトレンチで出土しているが、周辺に墓のような遺構はなく、近世の貝殻廃棄遺構（1022SX）に帰属すると思われる。また 2180SD からも人骨（頭蓋骨片）が出土している。ウマの骨も多く、7001SX 出土の中節骨には炎症によると思われる病変があった。ニホンイシガメの骨も各地点で出土している。ニホンジカやイノシシは狩猟によるものであろうが、ウマとイヌは飼育されていたと考えられる。本遺跡では平成 24 年度７地点において 14 ～ 15 世紀に比定されているウマとイヌの墓が検出されている。



1. カサガイ目　2. イボキサゴ　3. マルタニシ　4. カワザンショウガイ　5. カワアイガイ　6. ヘナタリガイ　7. ウミニナ
8. イボウミニナ　9. ツメタガイ　10. アカニシ　11. アクキガイ科　12. アラムシロガイ　13. キセルガイ科　14. マイマイ類
15. ハナエガイ　16. サルボウガイ　17. マガキ　18. シオフキガイ　19. マテガイ科　20. シジミ属
21. カガミガイ　22. アサリ　23. ハマグリ　24. オキシジミ　25. オオノガイ

写真 34　出土貝類

地点	グリッド	遺構	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考
1	8E16k	1022SK	ニホンジカ	上腕骨	右	遠位端～骨幹	1	
	8E17k	1041SK	哺乳綱？	不明	不明	破片	1	
	8E9m	1050SD	ウシ？ウマ？	寛骨	不明	破片	8	
	8E9m		哺乳綱	不明	不明	破片	1	
	8E11l	1060SK	ニホンイシガメ？	背甲・腹甲	—	破片	22	一部焼
	8E11l	1066SP	ニホンイシガメ？	甲羅	—	破片	3	
	8E10m	1114SP	哺乳綱	四肢骨	不明	骨幹破片	1	
	8E16j.17j	トレンチ	ヒト	上腕骨	右	ほぼ完存	1	
			ヒト	尺骨	右	近位端～骨幹	1	
			ヒト	四肢骨	不明	骨幹破片	7	
2	9E12j	2116SK	イヌ	脛骨	右	近位端	1	
	9E12k	2119SP	カメ目？	甲羅？	—	破片	1	
	9E13l	2120SD	ニホンイシガメ？	腹甲	—	破片	3	焼
	9E13l		ニホンイシガメ？	腹甲	—	破片	2	
	9E13k		ウマ	上顎臼歯	左	破片	1	
	9E13k		哺乳綱	四肢骨	不明	骨幹	1	
	9E13k		哺乳綱	不明	不明	破片	1	
	9E13l		ウマ	上顎第2前臼歯	左	ほぼ完存	1	歯冠高16.1mm
	9E13k.13l		ウマ	上顎第3/4前臼歯	左	ほぼ完存	1	歯冠高43.0mm
	9E13l		ウマ	上顎第3/4前臼歯	右	ほぼ完存	1	歯冠高38.2mm
	9E13k		ウマ	大腿骨	左	遠位端～骨幹	1	破片化
	9E13k		ウマ	大腿骨	右	骨幹破片	1	
	9E13k.13l		ウシ？ウマ？	四肢骨	不明	骨幹破片	5	
	9E13k		哺乳綱	四肢骨	不明	骨幹	1	
	9E14l	2135SD	イヌ？	上腕骨	右	骨幹	1	焼
	9E13l.14l		ウマ	上顎臼歯	左	1/4欠	1	II・III層
	9E12g	2154SD	ウマ	下顎臼歯	右	破片	1	
	9E12g	2180SD	ニホンイシガメ？	腹甲	—	破片	17	
			ヒト	頭蓋骨	不明	破片	1	
	9E11f	2195SK	哺乳綱	不明	不明	破片	1	
	9E9a.9b	II・III層	イノシシ？	踵骨	左	ほぼ完存	1	
	9E14m.15h	II・III層	ウマ	上顎臼歯	不明	破片	1	
	9E12j	II・III層	イヌ？	上腕骨	左	骨幹	1	
	9E12i	II・III層	哺乳綱	不明	不明	破片	1	関節面
	9E11f.12f	II・III層	哺乳綱	不明	不明	破片	1	
7	8D19b	7001SX	ニホンジカ	中足骨	左	骨幹	1	
	8D19b	7001.7005SX	ウマ	上腕骨	左	近位端	1	
			ウマ	橈骨	左	遠位端～骨幹	1	破片化
			ウマ	手根骨	左	完存	3	
			ウマ	第3中手骨	左	近位端～骨幹	1	
			ウマ	第4中手骨	左	完存	1	
			ウマ	基節骨（前肢）	左	完存	1	
			ウマ	中節骨（前肢）	左	完存	1	病変
	8D19b	7005SX	スズキ属	主鰓蓋骨	右	ほぼ完存	1	
	8D20c	II・III層	ニホンイシガメ？	背甲	—	破片	1	
	8D18a	II・III層	哺乳綱	四肢骨	不明	骨幹破片	1	
			ヒト？	橈骨	右	骨幹	1	
			ウシ	中足骨	左	骨幹	1	
	8D20b	II・III層	ウマ	上腕骨	左	遠位端～骨幹	1	

表 11　出土骨類

第４章　考察

第１節　畑間遺跡大量出土銭の検討

１．はじめに

畑間遺跡における中世大量出土銭（大量出土銭Ａ＝2140SX＝古瀬戸三耳壺と大量出土銭Ｂ＝2190SX＝常滑壺）は愛知県下で13例目（註31）、発掘調査における発見としては初事例であった。もちろん、東海市においても初めての発見である。個人的なことであるが、私が鳥取県の遺跡調査に従事していた2015年、すぐ近くの鳥取市下坂本清合遺跡にて備前焼の四耳壺に入れられた大量出土銭が発見（註32）されたと聞き驚いたが、翌年自らも遭遇するとは思ってもみなかった。下坂本清合遺跡の大量出土銭も発掘調査における発見としては鳥取県初事例とのことである。このように発掘調査において発見された大量出土銭は非常に貴重な資料と言えよう。

本節では、まず大量出土銭壺内部の観察記録について報告する。次に銭種と年代、出土状況などを他事例や先行研究を参考に考察する。そして、畑間遺跡および大量出土銭研究史の両面において本事例の性格や意義について述べておきたい。

ここで重視したことは、‘大量銭出土遺構’という視点である。大量出土銭は不時発見が多いこと、古銭学の伝統などもあって遺物たる銭貨の分析に主眼が置かれていた。内部の銭貨が未整理段階ということもあるが、今回は発掘調査時の発見であり、大量銭出土遺構としての検討を主としたい。なお、今後の保存・活用や内部銭貨の調査等については、東海市教育委員会において検討中である。よって本論は調査時の所見を主とした現段階の一考察である点を断っておく。

２．壺内部の観察と記録

２つの大量出土銭はともに埋められた状態を保持していた。大量銭Ａは粘土板を蓋としていた可能性（付論１参照）があり、Ｂは鉢の破片で蓋がされていた。ともに内部の銭貨は錆がひどく、固着している。固まっていたことで状態が維持され、調査時の取上げや状態の観察は比較的容易であった。

内部の状況は口部（壺の頸部）からわずかに観察できるのみであった。しかし、大量銭Ｂの常滑壺は内部の砂を除去する作業時に肩部の破片が外れ、内部をある程度観察することができた。

内部の清掃後に壺内の状況を把握するために名古屋市工業研究所にてCTスキャンによりＸ線撮影を行なった（写真35～38）（註33）。管電圧210KVで撮影したものの、重量のある金属の塊であるためＸ線が透過せず全体が黒く映り、銭貨の状況について詳細な分析は不可であった。しかし、壺内に有機物などで底上げした様子もなく、隙間なく銭貨が詰められていることは把握できた。

さらに通常の図化記録（図版38、第55・56図）に加えレーザーによる３次元計測を行ない、肉眼では見えにくい部分も記録化した（第54図）。なお、３次元計測によって容量も計ることができた。その結果、Ａが約4.8ℓ、Ｂが約6.0ℓであった。また、そのうち銭貨の部分はそれぞれ、3.7ℓと5.2ℓであり、容量に対してＡは約77％、Ｂは約86％銭貨を詰めている（第58図）。容器の容量と銭貨の枚数については、１ℓあたり平均的には750枚程度との実例から導かれた数値（註34）と壺甕の場合は１ℓあたり850枚入るという実験報告(註35)がある。それぞれを今回の数値に当てはめると、前者ではＡは3,600枚、Ｂは4,500枚、後者ではＡは3,145枚、Ｂは4,420枚となる。

重量はＡが15.3kg、Ｂが20.5kgである。重さに関しては、１連が332ｇ程度との報告（註36）がある。本事例は壺内に砂もあり、あまり参考にできないが、壺をＡ＝５kg、Ｂ＝６kgとして（破片

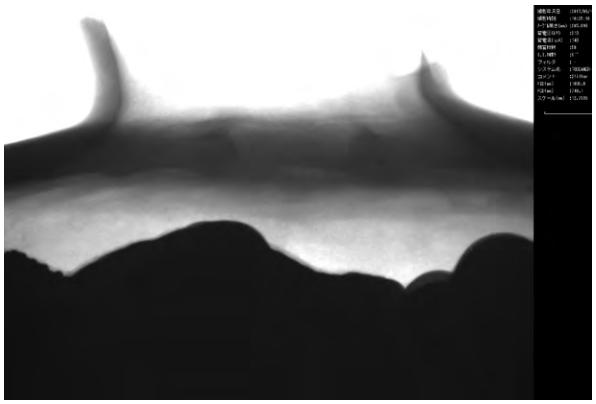


写真 35　大量銭Ａ壺内上部ＣＴ撮影

写真 37　大量銭Ｂ壺内上部ＣＴ撮影

写真 36　大量銭Ａ壺内下部ＣＴ撮影

写真 38　大量銭Ｂ壺内下部ＣＴ撮影

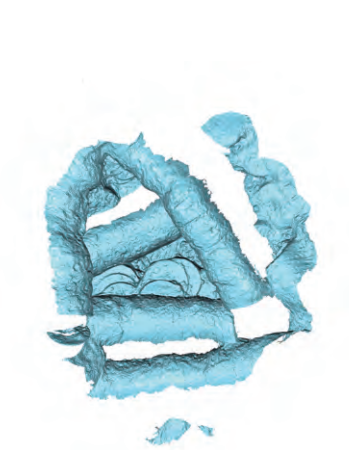
の重さなどから推定）計算すると、Ａは 31 連、Ｂは 44 連となり、容量からの予測と近い数値となる。現段階ではＡが 3,200 枚、Ｂは 4,500 枚と推定しておきたい。

先に述べたようにＡ、Ｂともに口部からは緡銭で納められている銭貨が確認できる。しかしながら、下部はいわゆるバラ銭で詰められている可能性がある。Ｂは 10 連の緡銭が、壺上部（肩部あたり）まで観察できるのだが、その下は銭貨の状態が異なり、観察できる範囲では、数枚以上の銭貨が固着して連をなした状態のものが見られない。しかし、下部の銭貨にも孔部に紐と考えられる有機物が付着しているものもある。本事例と同じく壺に納められていた山口県防府市下右田遺跡の大量出土銭は緡銭を入れて後に紐を抜いたと報告されており、連結している銭貨と散らばっている銭貨が混在していたとのことである（註 37）。銭貨が散在したような状況でありながら、孔部に紐の痕跡が残るＢ壺内の様相は、元来は緡銭であったものから紐を抜いた、もしくは切った可能性がある。この行為の意味は極めて重要と思われるが、この点は後述する。

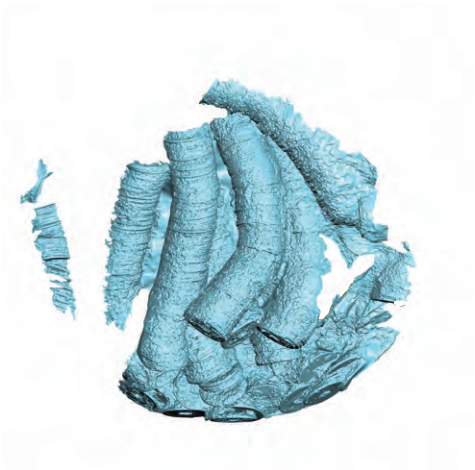
Ａは６連の緡銭が確認できる。下部は観察できないが、壺の中心部、緡銭の下に見える銭貨はバラ銭である（第 55 図）。なお、上部は緡銭、下部はバラ銭という詰め方は新潟県中郷村の小重遺跡と長野県中野市の西条岩船遺跡の大量出土銭でみられる（註 38）。上部は緡銭、下部はバラ銭と異なるのは如何なる理由であろうか。見える上部だけきれいな緡銭を入れたのだろうか。いずれにせよ、上部と下部で銭貨の詰め方が異なるとすれば興味深い。埋める以前から壺内に納めていた銭貨と埋める直前に詰めた緡銭といった時間差を考えることも可能である。銭種の分析においてもこの点を考慮すれば、何か知見が得られるかもしれない。

写真 39　大量銭Ａ壺内部

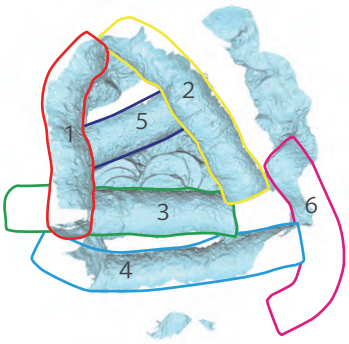
写真 40　大量銭Ｂ壺内部



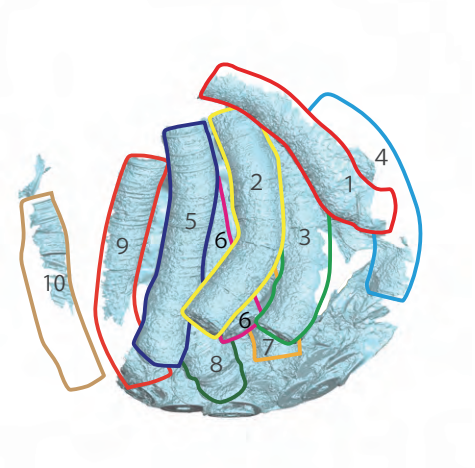
大量銭Ａ　３次元計測画像（上から）



大量銭Ｂ　３次元計測画像（上から）



大量銭Ａ　緡銭単位



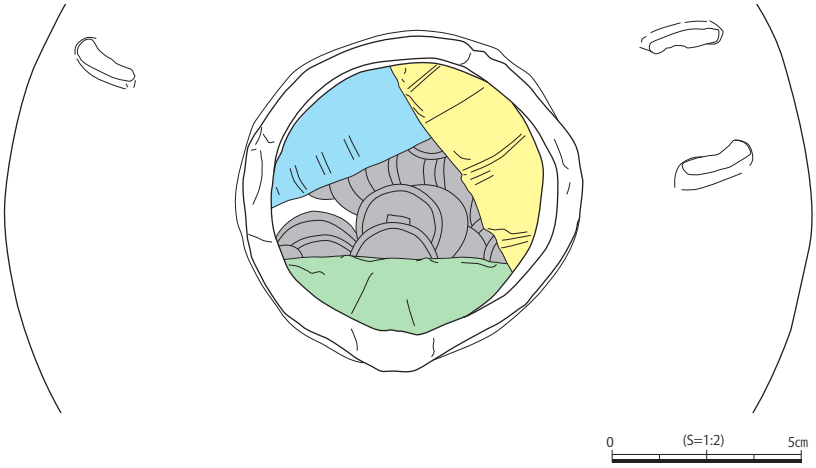
大量銭Ｂ　緡銭単位

※番号が上からの重なる順序を示す
※空白部分は計測レーザーを照射できなかった部分

0　(S=1:4)　10cm

第 54 図　壺内銭貨３次元計測図

写真 41　大量銭Ｂ出土銭



第 55 図　大量銭Ａ壺内銭貨実測図

また緡銭の詰め方がＡとＢで異なる（第 54 ～ 56 図）。Ａは緡銭１～６が廻るように位置している。少なくとも１～４は連なっているようにも観察される。一方、Ｂは個々の緡銭が同一方向に並べて納められている。Ａは壺の頸部が狭い（約７cm）ことから、紐で結ばれた複数の緡銭をとぐろを巻くように壺内に納め、一方のＢの方が頸部が少し広い（約９cm）ので、１連ずつ壺内に手を入れて納めたのではないだろうか。

１緡の枚数は、錆がひどく正確に数えることができないが、緡銭の長さは 12.5cm 程度であり、銭貨の厚みを 0.13cm とすれば、96 枚となる。いわゆる「省陌」がなされていたのであろう。A、Ｂともに銭貨の孔付近や中の砂に紐の一部と思われる有機物が残っていた。これらは分析の結果、イネ科の植物と判明した（付論２参照）。砂除去作業時に緡銭から外れた６枚の銭貨（写真 41）については錆を取り銭種同定を行なったが、その際に観察したところ、表裏は不規則であり、緡を作る際に表面を合わすことはしていないようである（註 39）。

いずれにせよ、壺内の状況に関しては、簡易の調査・観察を行なったのみである。大量出土銭Ｂ内部の銭貨もある程度の錆取りは行なったが、十分な保存処理を行なっていない状況では崩れる危険があり、本年度は出土状況の維持を最優先とした。

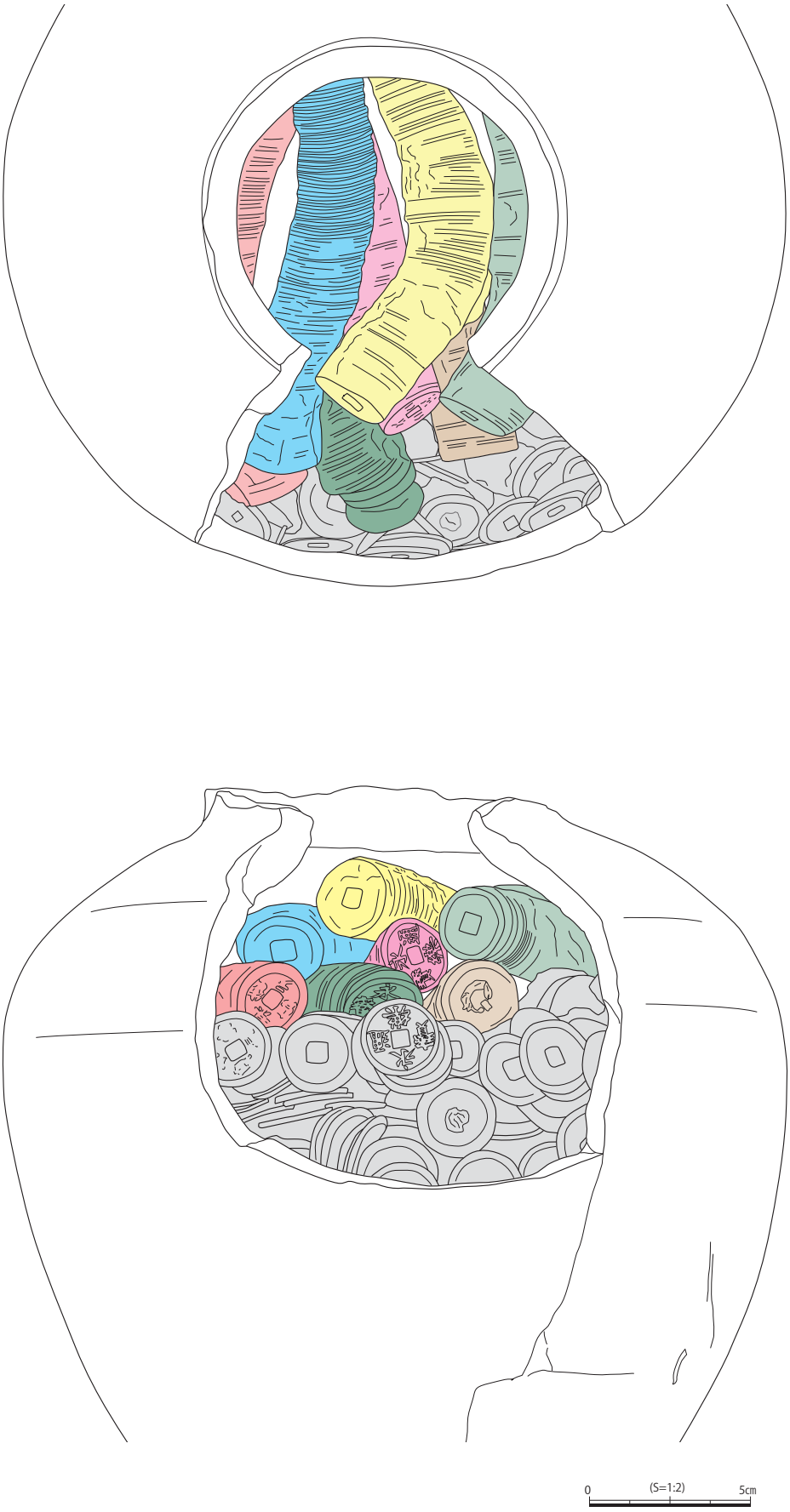
３．銭種と年代

銭貨については、大量銭Ｂでは 11 枚の銭種が判明している。永楽通宝（1408 年初鋳）が最新銭であり、4 枚と最も多い。他は元豊通宝（1078 年初鋳）など北宋銭である。大量出土銭の鈴木編年（表 12）では４期＝ 15 世紀第２～３四半世紀となる（註 40）。これは大量銭Ｂの常滑壺の年代や先行する方形区画溝の年代とも整合性がある。しかしながら、銭貨と年代に関して、今後の課題として２点挙げておきたいことがある。

一つの課題は大量銭Ａの銭貨についてである。遺構としては 15 世紀後半以降であることは確実だが、Ｂと比べ、壺の製作年代が 200 年以上古いことから、内部の銭貨がＢよりも古い可能性も考えられる。

	年代	主な最新銭（初鋳年）
１期	13世紀第４四半世紀～14世紀第１四半世紀	景定元宝（1260年）
２期	14世紀第２四半世紀～第３四半世紀	至大通宝（1310年）
３期	14世紀第４四半世紀～15世紀第１四半世紀	洪武通宝（1368年）
４期	15世紀第２四半世紀～第３四半世紀	永楽通宝（1408年）
５期	15世紀第４四半世紀	朝鮮通宝（1423年）
６期	16世紀第１四半世紀～第２四半世紀	宣徳通宝（1433年）
７期	16世紀第３四半世紀	世高通宝（1461年）
８期	16世紀第４四半世紀	弘治通宝（1503年）

表 12　大量出土銭編年



第 56 図　大量銭Ｂ壺内銭貨実測図

もう一つは大量銭出土遺構の時期が 16 世紀まで下がる可能性である。今回の出土銭においては永楽通宝の比率が高い。大量出土銭の他事例や博多遺跡群における個別出土銭の分析では、永楽通宝が最も多くなる時期は 16 世紀とされる（註 41）。永楽通宝は東国では基軸通貨のように使用されたとも言われ、その流通には伊勢商人が関わっていたとの説もある（註 42）。伊勢湾に面する畑間遺跡において永楽通宝の比率が高いことは注目に値する。その年代も含めて今後の検討課題である。

また、近接する 2120SD からは宣徳通宝が出土している。これらは大量銭に前後する時期、同じ集団・個人に使用・蓄財されていた銭貨であろう。よって大量銭にも宣徳通宝が含まれている可能性がある。宣徳通宝が最新銭となれば鈴木編年 6 期＝ 16 世紀前半となる。もっとも永楽通宝と宣徳通宝の初鋳年の差は 25 年であるのに対し、鈴木編年では宣徳通宝の有無で最大 125 年の差が生じることについては「永楽通宝を最新銭とする 4 期の実年代を 15 世紀の中頃としたうえで、前後の時期に実年代を割り当てたもの」と述べており（註 43）、仮に 1433 年初鋳の宣徳通宝が最新銭であっても埋納銭の時期を 16 世紀まで下がると断定されるわけではない。鈴木編年 5 期以後に関しては、最新銭だけで時期を決定するのは困難である。調査所見として、大量銭出土遺構の帰属時期は 1470 ～ 90 年代と判断しており、16 世紀まで下がらないと考えている。しかしながら、帰属時期のみではなく、永楽通宝の流通なども含め、銭貨の検討によって明らかにすべき課題もある。

4．出土状況の検討

大量出土銭 A は平面的には方形区画溝群の中、層位的にはその上に位置した。一方、大量出土銭 B は層位的に区画溝との関係を直接的には判断できない。現状では区画の内側に位置するように見えるが、後世の遺構や撹乱によって失われた溝が出土銭 B 直上にあった可能性がある。しかも、区画溝の段階ごとの位置関係からその溝は 2199SD と同じ最終段階の溝であったと考えられる（第 2 章第 17 図参照）。大量出土銭 A と B は容器に時期差はあるものの、層位と位置の関係から同時期と判断している。よって、大量銭とこの区画が有意の関係にある（埋めた人々が区画の存在を意識していた）蓋然性は高い。また溝群の最終段階にあたる 2199SD の位置に埋められていたことから、この区画が廃絶してからさほど時期を経ずに埋められたと考えている。

溝からの大量銭出土と言えば、誰もが『一遍聖絵』の一場面（写真 42）を思い起こすであろう。まさに、本事例はこの絵の通りの状況である。中世において溝に大量の銭貨を埋める行為、もしくはそこから見つかるということがある程度みられた事象であったのだろうか。

発掘調査事例でも、同じく溝からの出土事例がある。山形県酒田市の梵天塚遺跡（註 44）では明代の染付などが出土する 16 世紀頃の溝（SD160）の底から 1757 枚の銭貨が緡銭の状態で出土した。8 本の小刀状の鉄製品が共伴しており、有機物の容器や袋があったと推測される。最新銭は 1433 年初鋳の宣徳通宝である。この溝は墓域の区画溝と考えられる。報告書によれば、銭貨周辺が窪んでいたが、銭貨の重量による可能性もあり、掘り込みがあったのか分からないとのことである。墓地形成の早い段階での埋納という指摘（註 45）があるが、その場合、溝が開放さ

写真 42 『一遍聖絵』（清浄光寺蔵）

れた状況で底に置かれた、もしくは埋納後に溝が開削されたことになるが、いずれも考えにくい。溝埋没後、墓域としての役割を終えた段階（中断も含む）で埋納された可能性を考えたい。溝上面での掘り込みは観察されなかったことから、埋没途中の段階で埋められた可能性もあろう。

群馬県前橋市の大渡道場遺跡でも溝から大量銭が出土している（註 46）。W －３溝の底部で６連の緡銭が土坑状遺構から検出された。容器の痕跡はなく、有機物の袋に納められていたと推定されている。溝底部での検出であるが、埋土などの状況から銭貨の埋納は溝の埋没途中や埋没後の可能性があると述べられている。報告書においては、W －３溝が墓を伴う屋敷地の溝であることから、地鎮行為や境界祭祀に伴う埋納銭の可能性も指摘されている。他に溝内（埋没中～後）からの大量銭出土事例は青森県浪岡町の浪岡城館跡（註 47）などがある。

次に大量出土銭Ｂの出土状況について考察する。第２章で述べたようにＢの常滑壺は傾いて出土しており、それは後に掘削された土坑（2157SK と 2163SK）の影響と考えている。そのように考えた場合、これらの土坑を掘削した人々は、常滑壺（少なくとも何か入れていそうな壺）を視認したことは間違いなく、意図的にこれを掘り返さなかった可能性がある。これは当時の人々が、埋納された銭貨は掘り出してはいけないものと認識していたことを示すのではないだろうか。

同じような事例が中世京都の七条町、平安京左京八条三坊七町で検出された大量出土銭においてみられる（註 48）。大量出土銭は２基（P160 と P234）並んで検出され、径 40 ～ 50cm 程度の曲げ物に緡銭の状態で納められていた。P160 は 16,880 枚、P234 からは 14,535 枚が出土し、最新銭は至大通宝（1256 年）であった。２基のうち P160 は上部の銭貨が緡の状態を損なっているのだが、それは P160 の上で検出されている土坑（P42）掘削によるものと推定されている。P42 からは 11 枚の銭貨が出土しており、これは P160 に由来する。P42 の年代が 14 世紀～ 15 世紀とあまり明確ではないが、いずれにせよ、後に土坑が掘削され、その際に大量の銭貨を見つけたにもかかわらず、それを取り出さなかったことは明らかである。

ところで、大量銭Ｂの蓋に鉢の破片を使用していたのは、土坑掘削中に元来の蓋を破損したためではないだろうか。元の蓋がこの鉢なのか、破損した蓋の替わりに周囲にあった鉢片を蓋として使用したのかは分からないが。

2157SK を自ら掘削した時に、掘削途中に壺の姿が現れてしまい疑問を感じた。当初は「昔の人が壺を見つけたら取り出すので、土坑底部は壺まで達しない」と思い込んでおり、拡張前の壁面の観察では 2157SK と 2163SK 底部を壺よりも上と判断していた（註 49）。しかし、写真 43 を見れば分かるように 2157SK の埋土（貝殻片を含む暗い細粒砂）が壺の上部が見える段階でも残っており（この段階で 2190SX の掘り方は見えない）、壺上部が 2157SK 掘削時には姿を現していたことは間違いない。蓋に関しては想像に過ぎたかもしれないが、当時の人々は壺の存在を認識した上で取り出さなかったことは間違いない。

写真 43　大量銭Ｂ検出状況１

写真 44　大量銭Ｂ検出状況２

5．銭貨収納容器としての壺

今回の大量出土銭はともに壺に納められていた。大量銭Aは古瀬戸三耳壺、Bは常滑焼壺である。前者は古瀬戸前期Ⅰ・Ⅱ期＝13世紀前半、後者は常滑焼10型式期の製品で15世紀後半にそれぞれ比定される。二つの壺の製作年代は非常に差があるが、埋められた年代は同時期＝15世紀後半と考えられる。古瀬戸三耳壺の製作年代と埋納時期は250年ほどの時期幅があり、長い伝世を経た壺である。容器の年代と銭貨が埋められた時期が一致しないことは多くの事例があるものの、これほど時期差のあるものは少ない（註50）。また蔵骨器として使用された古瀬戸壺類では、平均的な伝世期間は四半世紀から半世紀という研究成果（註51）があり、やはり本事例の伝世期間は長いと言える。

大量出土銭の容器については、これまでのいくつかの研究・報告がある。個人的には、壺よりも甕が多く使用されている印象であったが、100例以上を集成した報告によれば、最も多いのは壺であり、集計された131例中37例が壺であった（註52）。ただし、５万枚以上の大量出土事例では壺を容器としたものは１事例もない。甕との容量差から考えて当然であるが、注目されやすい大量発見によって容器＝甕の印象が強かったのだろう。銭貨の量と容器の関係性について、東海地方の事例から3,000枚以上ならば常滑甕、それ以下ならは瀬戸壺が主体的に選択されたという指摘（註53）があるが、むしろ主体的に容器を選んだ結果として銭貨量の差が生じたとも言えないだろうか。量が少なく、しかも再利用のための備蓄であれば、有機物の箱や袋で十分である。あえて三耳壺や四耳壺などの優品を容器に使用することに何らかの意図があったとも考えられる。大量出土銭容器における壺の使用率は高いが、埋納遺構に使用された古瀬戸の壺瓶類の大部分は蔵骨器として使用されており、蓄銭容器としての利用は数例に過ぎず集成資料の１％に満たない（註54）。

今回の壺はともに口縁～頸部が失われており、特に大量銭Aの古瀬戸三耳壺は三耳を打ち欠いている。高台部にも小さい破損が複数みられ、打ち欠きしようとした痕跡かもしれない。このような打ち欠き行為は蔵骨器には多く見られるが、銭貨や他の遺物の埋納では完形のものが多いとのことである。また、頸部の欠損は壺よりも瓶子や水注に多くみられることから、口径の大きさと関係する可能性も指摘されている（註55）。しかし機能的な意味が無い三耳の欠損は、この壺の世俗との関係を絶とうとする意図を感じさせる行為（精抜きか精入れか？）である。本事例が祭祀的な意図をもって埋納された可能性を示す。

一方で、口径の大きさというのも大事な視点ではなかろうか。学問的ではないのだが、今回の調査時に非常に強く感じたことは、壺に銭貨は‘入れにくく出しにくい’ということである。成人男性の平均的な手幅は8.2cm、これに対して壺Aの口部は約７cm、Bの口部は約９cmである。銭貨を取り出す際は壺を掘り出し割る、もしくは逆さにすれば済むものの、備蓄して再利用を意図しているならば、「口が小さく出し入れしづらい容器を選択するのだろうか」という疑問は発見時から感じていた。

大量出土銭は不時発見例が多く、調査時の発見でも容器の上部まで残る良好な事例は少ない。よって、壺に銭貨は‘入れにくく出しにくい’という単純な事実があまり意識されてこなかったのではないだろうか。例えば、山梨県の小和田館遺跡では古瀬戸後期の四耳壺が容器として使用されているが、上部が破損した状態で検出されている。小和田館遺跡では他に２つの地点から大量銭が出土しているが、これら大量銭の出土地点が居住域と墓域の境界と考えられることから、祭祀遺構の可能性が指摘されている（註56）。壺の法量は口径9.5cm、胴部最大径22.0cm、高さ27.6cm（図面からの推定）、口部の最小径は6.4cmとなる。

同じように調査時の発見で壺に入った大量出土銭として、先述の下右田遺跡の事例がある。備前焼の玉縁口縁壺で、口部の最小径は約 5.4cm である。石の蓋がなされていたが、土坑周辺の特別な施設はなかったと報告されている。出土地点は屋敷地内の建物がない一帯に埋められていた。先述のように内部の銭貨は緡銭で入れたのち、紐を抜いたとされている。壺内に手を入れて取り出すのは困難である。そもそも備蓄して再利用するのであれば、紐を抜いてしまう意味が分からない。大量銭 B も同じく緡銭の紐を抜いた（切った）可能性があり、壺を壊さなければ非常に取り出しにくい。下右田遺跡では銭貨を柱穴に埋めた建物が複数発見されている。大量出土銭も二度と取り出す意図がないように思われ、祭祀的な埋納銭の蓋然性が高い（註 57）。

壺の使用＝祭祀的な埋納銭と言うつもりはないが、少量の備蓄なので壺を使用するとは単純に考えられない。壺という容器を大量銭の性格を判断する上で一つの要素として考える必要性だけは指摘しておきたい。

6．大量出土銭と独鈷杵

密教法具の独鈷杵が大量銭と極めて近い遺構から出土したことも本事例の性質を考える上で示唆に富む。独鈷杵が出土した 2156SK は大量銭と同じく方形区画溝群埋没後の遺構である。独鈷杵は大量出土銭の共伴遺物ではないが、近接する位置、区画溝との切り合い関係からみて、大量銭と関係すると考えている。独鈷杵の年代については次節で検討しているが、14 世紀前半に比定される。方形区画溝群が 15 世紀半ばであるので、2156SK もそれ以降の遺構である。古瀬戸三耳壺に比べると少し短いが、独鈷杵も 150 年以上、伝世・使用されていたのであろう。

大量銭と独鈷杵が共伴する事例は静岡県にある。掛川市の大竹遺跡では瀬戸産祖母懐茶壺に 3,000 枚ほどの銭貨が詰められ、付近から青磁碗や天目茶碗、花瓶、金剛盤、独鈷杵、三鈷杵、五鈷杵など多くの宝物や法具が出土した（註 58）。明治 34 年に発見され、出土状況の詳細は不明であるが、祭祀遺構であろう。同 44 年にはすぐ近くから 2,900 枚の銭貨も新たに見つかっており、容器などはなかったとのことである。銭貨の多くが散逸しているが、報告されている中では永楽通宝が最新銭であり、かつ最も多い。共伴する陶磁器などの遺物から遺構としての帰属時期は 16 世紀後半と判断されている。遺構の性格としては地鎮のための法具埋納遺構と推定されている。

本事例と比較すれば、大竹遺跡は共伴する遺物が非常に豊富である。大竹遺跡の独鈷杵は、鈷部が短く本事例より後出の製品である。本事例は独鈷杵 1 点のみ、しかも土坑の底部に廃棄されたかのような出土状況であり、大量銭との関係について断定できる材料はない。つまり、何らかの密教祭祀などが行われ、同時に埋められたと言えるような直接的な関係は見出せない。とは言え、このような稀有な遺物が偶然近接して出土することは考えにくい。大量銭と独鈷杵は、同じ個人・集団が保有していたものであろう。その場合、今回の大量銭を埋めた主体は、寺院などの宗教関係者と考えられる。ただし、寺院と大量銭の関係は、祠堂銭を用いた経済活動との結び付きを示すものとの解釈（註 59）もあり、確実に祭祀・宗教的な意味をもつと言い切れない。

また、少し離れた位置であるが、同じ 2 地点からは和鏡片も出土している。銭貨・独鈷杵（密教法具）・和鏡という組み合わせは、経塚でみられる（註 60）。経塚では多くの場合、銭貨は少量で脇役であるが、本事例では大量の銭貨が主役のようである。残念ながら、これらの遺物が直接的に結び付くような出土状況が検出されたわけではないが、このような遺物が集まっていたことは、この空間が非常に特異な場であったことを示している。

７．県内事例における畑間出土銭

冒頭に述べたように、愛知県内ではこれまで 12 例の中世大量出土銭があるが、発掘調査に伴うものは今回の事例のみである。既往の 12 例は『愛知県史　資料編５』にまとめられており、これら先行研究を参考に本事例を加えて作成したのが表 13 と第 57、58 図である（註 61）。これまでは本事例と類似の状況が見出される他事例を選択的に取上げたが、ここでは県内事例との比較およびその中での位置付けをみてゆく。

銭貨の時期区分では第１期が３例、第２期が２例、第３期が１例、第４期が３例、第６期が３例である。本事例は第４～６期の可能性があり、県内事例の半数が当該期にあたる。銭種の詳細な分析がなされたものは６例であるが、宣徳通宝を最新銭とする６期の３例は永楽通宝の比率が非常に高い。本事例との比較でこの点は示唆的である。地域的には尾張地方が４例、三河地方が７例、知多島嶼が１例となり、知多半島内では初事例となる。また、それぞれの出土地の地形的状況を平地（海抜 50 m以下）、丘陵地（同 50 ～ 100 m）、山地（同 100 m以上）に分けた。

県内事例に関して、資料作成過程で気付いた点が２点あり指摘しておきたい。一つは、丘陵地と山地出土例は第４期以降に集中していることである。これは銭貨の利用が平地部において先行していたことを示すのかもしれない。もっとも畑間遺跡は平地だが第４期以降である。もう一つは近距離に位置する２つの大量出土銭が３組もあることである。豊川市の篠束 A と B は同じ字内、愛西市の諸桑と津島市の百町は同じ日光川流域で南北３km ほど、豊田市の大平と蕨平は尾根を挟み東西２km ほどの距離である。わずか 12 例のうち半数が近距離で組をなすことは注目に値する（註 62）。このように狭い地域内で集中して大量出土銭が見つかることは他地域において既に指摘されている。これは備蓄された銭が偶然残された結果とは考えにくく、埋納銭論の根拠の一つとされている（註 63）。なお、本事例や諸桑出土銭のような同一地点の複数事例は、確実に同じ個人・集団によるものであり、上記の３組と少し意味合いが異なる。

次に容器についてであるが、13 例中、10 例が陶器の壺・甕を使用している（複数例があるので実質は 13 点）。先に挙げた全国集成では 121 例中、陶器が 76 例であるので、窯業地ゆえに陶器の比率が高いと言えるかもしれない。

４事例で容器の壺・甕が図示されており製作年代が確定される。

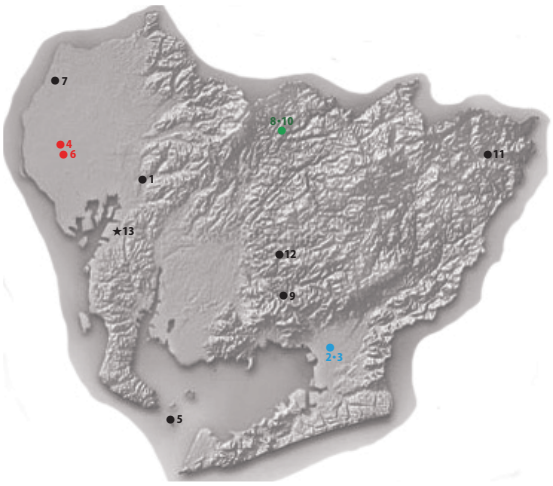
正法寺出土銭　銭貨２期＝ 14 世紀第２～３四半世紀・常滑壺７型式＝ 14 世紀前半
社口田出土銭　銭貨４期＝ 15 世紀第２～３四半世紀・常滑壺９型式＝ 15 世紀前半
蕨平出土銭　　銭貨６期＝ 16 世紀第１～２四半世紀・美濃・瀬戸鉄釉甕＝ 15 世紀後半
日影出土銭　　銭貨６期＝ 16 世紀第１～２四半世紀・常滑甕９型式＝ 15 世紀前半

前２者は容器の製作時期と銭貨の年代が近く、後２者は時期差がある。しかし、これは先にも述べた大量出土銭６期の年代観の問題があるので、銭貨と容器の年代が近づく可能性がある。本事例の場合、B の常滑壺の年代は近いが、A の古瀬戸三耳壺は 200 年以上の時期差があり、県内事例と比較しても非常に伝世期間の長い容器を使用していることが分かる。

第 58 図は容器の大きさの比較として、社口田出土銭と正法寺出土銭の常滑焼甕と本事例の三次元計測図を並べた。本事例の容量は A が 4.8 ℓ、B が 6.0 ℓ であるが、２例の大まかな容量は前者が 53 ℓ（26,284 枚）と後者が 13 ℓ（6,805 枚）である。先述の基準（１ ℓ あたり 750 枚）から言えば、この２例の銭貨枚数は容量に比して少ない。

		出土地	地形	最新銭 初鋳年	時期	備考
1	中根出土銭	名古屋市瑞穂区中根町 （旧昭和区弥富町字西大門）	平地	嘉定通宝 1208年	1期	約20貫出土、容器などは無し
2	篠東A出土銭	豊川市篠東町郷中 （旧小坂井町大字篠東）	平地	咸淳通宝 1265年	1期	容器は渥美・湖西窯産の甕、蓋に瓦
3	篠東B出土銭	豊川市篠東町郷中 （旧小坂井町大字篠東）	平地	咸淳通宝 1265年	1期	容器は古瀬戸三耳壺
4	諸桑出土銭	愛西市諸桑町中江 （旧佐織村大字諸桑）	平地	至大通宝 1310年	2期	常滑焼の甕２点と古瀬戸壺の計３点 銭貨は85貫出土したとされる
5	正法寺出土銭	南知多町篠島字神戸	平地	至大通宝 1310年	2期	容器は常滑焼の甕 銭貨は6,805枚
6	百町出土銭	津島市百町光善地 （旧神守村大字百町）	平地	洪武通宝 1368年	3期	容器は瀬戸美濃焼の甕 銭貨は約16貫出土したとされる
7	西萩原出土銭	一宮市西萩原字若宮前	平地	永楽通宝 1403年	4期	常滑焼の甕の破片とともに出土 銭貨は1,103枚現存
8	大平出土銭	豊田市大平町字上大屋敷 （旧小原村大字大平）	山地	永楽通宝 1403年	4期	約20貫出土、容器などは無し
9	社口田出土銭	岡崎市舞木町字社口田	丘陵地	咸元通宝 1403年	4期	容器は常滑焼の甕 銭貨は26284枚
10	乙ヶ林出土銭	豊田市乙ヶ林町字信田 （旧小原村大字乙ヶ林）	山地	宣徳通宝 1433年	6期	礎石のような石とともに蕨状のもの に包まれ約18貫出土したとされる
11	蕨平出土銭	豊根村下黒川字蕨平	山地	宣徳通宝 1433年	6期	容器は瀬戸美濃焼の甕 銭貨は8,776枚
12	日影出土銭	岡崎市米河内町字日影	丘陵地	宣徳通宝 1433年	6期	容器は常滑焼の甕 銭貨は2,471枚現存
13	**畑間出土銭**	**東海市大田町畑間**	**平地**	**永楽通宝か 1403年**		古瀬戸三耳壺と常滑焼壺の２点 銭貨は未調査

表 13　愛知県内大量出土銭一覧



第 57 図　愛知県内大量出土銭出土地点

（註 61 文献より）　0　(S=1:10)　20cm

第 58 図　大量銭容器壺甕実測図

８．畑間遺跡における位置付け

第３章で述べたように畑間遺跡の既往調査においては、計 46 枚の銭貨（近世除く）が出土している。20,000㎡以上の調査で 46 枚に対し、大量出土銭の見つかった２地点（約 570㎡）だけで 40 枚（近世除く）の個別出土銭がある。なお、これまでの調査では永楽通宝は１枚のみであり、この点も２地点の特徴の一つと言える。このように、畑間遺跡全体でみても、銭貨は２地点＝方形区画溝群一帯で集中的に出土しており、そのような場所で２つの大量出土銭は見つかったのである。

経済的な価値＝中世の銭貨と現代の貨幣価値との比較については、多くの研究成果があり、それらを参照されたいが、畑間遺跡における銭貨の価値を考える上で興味深い文書記録がある。畑間遺跡のある大田町（旧大里村）は中世熱田社領の大郷郷に比定されており、複数の文書に記録が残っていることは知られているが、この中で貢租銭納についての記載がある。文和３年（1354 年）の『熱田社領目録案』には、25 の社領（うち３社領は別納）の約 329 町の定田に対して、1,291 貫文の年貢が定められていると記録されている。田畠による差異もあろうが、単純計算では大郷郷は定田が約 20 町で、約 78 貫文の年貢が課せられていたことになる。大量銭Ａが 3,200 文、Ｂが 4,500 文と推定されることから、今回の大量出土銭は大郷郷が熱田社領に納める年貢の約 1/10 に相当する。文書記録と出土年代には１世紀の時間差があるが、おおまかな価値として押さえておきたい。

次に出土地点およびその状況についてである。２つの大量出土銭が出土した２地点周辺＝遺跡北東部は、既往調査報告において宗教性の高い場所であると度々指摘されていた。その根拠の一つとして、瓦の出土がこの一帯に多いことが挙げられている。例えば杏葉唐草文軒平瓦はこれまで 12 点出土しているが、うち８点が北東部一帯である。そして、この一帯の宗教性を示す祭祀遺構が２地点の北東 100 mほどに位置する平成 20 年度調査の３・４地点で検出されている。

この遺構は「隆珎」（人名か）「六親　七世父母　□□□」（盂蘭盆経の一部）などの文字が書かれた墨書土師器皿が埋納されており、先祖供養の祭祀とされる。注目すべきは、この墨書土師器皿埋納遺構が 2140SX（大量出土銭Ａ）と同じく方形区画を形成する溝（034SD）の埋土上に形成されていることである。さらに方形区画を形成する溝がわずかに位置を変えて何度も再開削されている状況、そして遺構の時期も 15 世紀後半に比定されており、空間・時間ともに類似する。

墨書土師器皿埋納遺構と今回の大量出土銭の検出状況や時期の類似性は偶然の一致とは考えにくい。両者に共通する性質があることや、先述の様々な要素（壺Ａの打ち欠きや壺Ｂが掘り出されなかった可能性など）から考えて、今回の大量出土銭は祭祀性を伴ういわゆる埋納銭の蓋然性が極めて高い。畑間遺跡では既往調査の成果から 15 世紀以後に遺構・遺物が減少することが判明している。この時期、集落に大きな変化が起こったことは確かである。墨書土師器皿埋納遺構と大量出土銭が時間的にも空間的にも近接することは中世畑間遺跡を考える上で非常に重要な事象である。

また出土銭と関連する方形区画の性質も自ずと推定される。独鈷杵の存在から寺院の可能性もあるが、区画溝から瓦の出土はない。同じく溝内から大量出土銭が見つかった山形県梵天塚遺跡や群馬県大渡道場遺跡の事例から墓域も候補となろう。いずれにせよ、この区画が宗教的な場であった蓋然性は高い。そして、大量銭Ｂの上に掘られた 2157SK が廃棄土坑と考えられることや 16 世紀の遺物が少ないことから、宗教的な場がその役目を終える時に大量の銭貨が埋納されたと考えている。梵天塚遺跡や大渡道場遺跡も同様の段階での埋納と考えたい。溝という面的な境界だけではなく、宗教的な場を世俗的な場へと変換させる時間の境界にも大量銭は位置していたのである。

９．本事例の性質～備蓄か埋納か～

大量出土銭は、貨幣として流通していた銭貨を備蓄のため埋めたものと考える研究者が多い。広義の備蓄銭も狭義では平時の備蓄銭と非常時の埋蔵銭に分けられる（註 64）。これに対し、祭祀的な性質を想定した埋納銭との評価がある。ここまで述べてきたように、本事例は、埋納銭と呼ぶべき祭祀的性質の大量出土銭である蓋然性が高い。その根拠として以下を挙げる。

1　区画の廃棄に伴うと考えられるその配置
2　出土銭Ｂが 2157SK・2163SK 掘削時に掘り返されなかったこと
3　周辺からの密教法具（独鈷杵）の出土
4　入れにくく出しにくい口の小さい壺の使用
5　壺の口頸部や三耳の打ち欠き

１に関しては、これまでの埋納銭論において、「境界の結界」に埋納されたという説、普請に伴う埋納といった説があり、これらと関連すると言えよう。本事例は区画溝埋没後＝区画の廃絶に伴うと考えているが、土地に対する祭祀という点では同じである。安易な境界祭祀論は慎みたいが、平成 20 年度調査の墨書土師器皿埋納遺構との検出状況の類似性を本事例を祭祀性のある遺構と考える根拠として挙げておきたい。

２については、１との関連で述べておきたいことがある。先の『一遍聖絵』の評価である。この絵は大量出土銭が境界に埋められた事例として、その祭祀性を主張する際にも提示されるが、この絵の人々は嬉々とした表情で掘り出している。『一遍聖絵』の人々と畑間遺跡の人々の違いは何ゆえだろうか。おそらくは埋納祭祀の記憶の有無であろう。2157SK と 2163SK は廃棄土坑である。よって方形区画は大量銭埋納後には特別な場ではなくなったと考えられる。埋納位置の記憶はあいまいなため二度も掘削してしまったが、この埋納銭を掘り出すことで、この場所を利用できなくなるという意識や不吉なことが起きるといった感覚があっただろう。一方で、このような記憶や禁忌の意識が無い場合は取り出されてしまうのだろう。なお、埋納銭を誤って掘ってしまうのは、地表に目印となるような構造物はなかったためと考えている。

３については、単に同じ遺跡から宗教的な遺物が出土すれば埋納銭とするのは早計であるが、面的にも層位的にも非常に近い遺構、同じ区画溝埋没後の遺構から出土していることを重視したい。また唯一の共伴事例であった大竹遺跡では多くの法具が出土しており、祭祀的な大量銭と考えられる。なお、和鏡片については少し離れた位置からの出土であり、直接的な関係があるのか、評価は難しい。しかし、銭貨・独鈷杵・和鏡という組み合わせが経塚に多く見られることは示唆的である。

４は感覚的なものであり、５の頸部の打ち欠きは、それゆえに行なわれたのかもしれない。しかし、三耳の打ち欠きは機能的な意味はない。蔵骨器では多くの類例があるものの、管見の限り大量銭の容器では確認できなかった。そもそも銭貨を備蓄するなら大量に存在する常滑焼の甕を用いる方が便利である。また壺Ｂ内部のバラ銭が元来緡銭であったものを紐を抜き出した（もしくは切った）とすれば、通常は緡銭で使用することからも、再利用する意図が無かったと推定される。

１～５の一つだけで埋納銭と判断するのは早計であろう。例えば、壺は蔵骨器として用意していたものを緊急時に埋蔵銭に利用したと考えることも可能であり、溝との関係性は大量銭の年代が 16 世紀まで下がれば弱くなる。しかしながら、複数の状況証拠から、調査所見として本事例を祭祀的な性質を伴う埋納銭と判断する。

10. 本事例の意義と課題

本事例が埋納銭である蓋然性が高いことは理解されるだろう。では、本事例のような祭祀性を示す状況証拠の無いものをすべて備蓄銭としてよいのだろうか。備蓄銭論は埋納銭論に対し個別的反論は示すものの、それ自体の体系的論理展開はない（註 65）という。本事例においても、埋納銭である蓋然性を高めることはできても、備蓄銭の可能性を否定することはできない。例えば、先に述べたように、個別出土銭の出土が多い一帯、つまり普段から銭貨を使用していた場所に大量銭が存在していることから、単なる備蓄銭と考えることもできる。また、発見された大量出土銭の年代が遺構・遺物が激減する 15 世紀後半であることから、備蓄銭が何らかの緊急事態が発生したために残されてしまった、もしくはその際に隠したという解釈も成り立つだろう。

大量出土銭に備蓄銭もしくは埋蔵銭があったとは思うが、祭祀性のある埋納銭を極めて少ない事例とする見解には同意できない。備蓄銭論者も認める事例として京都府福知山城事例（註 66）がある。しかし、これは大量銭出土遺構と言うよりは、純粋な地鎮遺構であろう。地鎮祭祀において大量銭も一つの祭具・宝物として使用されたに過ぎない。議論すべきは大量銭出土遺構の性質なのである。

銭貨＝貨幣というものが呪術的な力を持つという考えは人類学においても以前から提示されている（註 67）。考古学的にも六道銭や地鎮遺構において銭貨が使用されていることから、その呪術的な力への信仰は古代以来明らかである。問題は大量銭の評価である。地鎮などの祭祀遺構では少量の銭貨が使用（埋納）されるため、大量であれば備蓄と考えられるようだが、大量であれば呪術的な力も大きいと考えても不自然ではない。

密教法具と共伴する静岡県大竹遺跡などを除けば、特殊な埋納状況を示す事例はほとんどない。祭祀的な状況は地表面に存在していた場合もあるかもしれないが、先の述べたようにその可能性は考えにくい。考古学的に明確に把握できるような形式的・祭祀的な埋納状況が存在しないのは、村落における民間信仰ゆえではないだろうか。大量＝呪術的な力も大きいという感覚も庶民的な感覚として理解しやすい。銭貨を用意したのは領主層や名主層もしくは寺院であろうが、大量の銭貨を用意することは一般村民に対し気前の良さを示し、その地位や威厳を意識させる効果もあり、人類学で言うポトラッチのような要素（返礼や再分配はないが）があったのではないだろうか。

では、如何なる性質の祭祀なのか、これが最後の疑問となる。類似の区画溝で検出された祭祀遺構の墨書土師器には先祖供養の経文が書かれていたことから、大量銭も同じ性質の祭祀遺構と考えている。つまり、区画溝埋没＝区画の廃絶後に、この区画に関わった先祖の供養や地鎮として執り行われた祭祀ということである。区画内ではなく溝の位置に埋納される背景には、「境界」に対する意識があるとみてよいだろう。また、先祖供養としては過去を、地鎮としては未来（今後の土地利用）に意識が向いており、時間的にも「境界」に位置する祭祀と言えよう。

上記のような解釈論はともかく、我々発掘調査に関わる者としては、個々の出土状況＝遺構としての記録と検討が肝要である。しかし、多くの大量出土銭が不時発見である以上、それも困難であり、本事例も不時発見であれば、祭祀性を示すことは困難であっただろう。多くの情報に恵まれた本事例から他事例を検討すれば、山口県下右田遺跡、山梨県小和田館遺跡や京都七条町などの大量銭が埋納銭である蓋然性を高めたと言える。循環論法の危険もあるが、本事例は大量出土銭を検討する上で重要な資料となる。ここで記した調査所見の当否はともかく、大量銭出土遺構としての視点からの考察が可能な本事例は極めて重要である。

11. おわりに

畑間遺跡は大郷郷という中世の荘園村落に比定されている。出土する遺物は山茶碗、常滑焼、土師器の鍋釜が主であり、輸入陶磁器や古瀬戸の優品は極めて少ない。私自身が調査経験のある中世京都や愛知県稲沢市の下津宿遺跡のような都市遺跡と比べれば、その出土遺物の量と質には雲泥の差があり、決して豊かな遺跡とは思えない。もっとも大量銭の出土地は「都市部でない辺鄙なところが多く」（註 68）、荘園年貢の代銭納については、「自然と社会の環境が稲作経営以外の生業を強制するような地域と階層が、銭貨をまず吸引する」（註 69）と述べられている。このような指摘は、大量銭を畑間遺跡が経済的に豊かであったことを示すものという解釈からは遠ざける。実際、考古学的に示される物質的な「豊かさ」を畑間遺跡がもっているとは既往調査成果をみる限り言い難い。しかし、大量出土銭は、「銭貨を吸収する辺鄙なところ」のある種の「豊かさ」を示しているように思われる。

銭貨を埋めた主体について、その階層や組織についてはほとんど検討することが出来なかった。大量出土銭の性格を考える上で表裏一体の問題である。銭貨の分析とともに今後の課題であろう。

今回の大量出土銭の性質が如何なるものであれ、その時期が 15 世紀後半以降であることは重要な意味をもつ。この時期以降の遺構・遺物は激減する。遺跡の大きな転換期であり、歴史的には荘園制の解体期であり、戦乱の世が始まる。この時期に大量銭が残されたのは偶然ではなかろう。今回見つかった２つの大量出土銭は、それが意図的に残された埋納銭であれ、不本意ながら取り出せなかった備蓄銭であれ、畑間遺跡における歴史の転換点に位置している。

第２節　畑間遺跡出土の独鈷杵

大量出土銭Ｂに近接する土坑（2156SK）から出土した独鈷杵について、他事例との比較から、その年代などについて考察したい。

１．独鈷杵の年代

独鈷杵については、大量出土銭と関連する遺物として前節で取り上げ、大量銭と共伴する事例として掛川市大竹遺跡について触れた。他にも管見の限り、10 点ほどの発掘調査における出土事例があるようだ。伝世品については、寺院所蔵のもの、博物館や個人所蔵も含め、多数の独鈷杵が存在し、広島県厳島神社のものは国宝に指定されている。これらのうち発掘調査における出土品を主に、把部と鈷部の比率を把握できた計 10 点の資料を表 14 に示し、その中に本遺跡の独鈷杵を位置づけてみた（註 70）。また第 59 図には発掘調査報告書で実測図の示されているものから３点を比較のため掲載した。第３章でも述べたように独鈷杵は時代が下がると把部に対する鈷部の比率が短くなるとされており、表 14 ではその比率順に並べてみた。

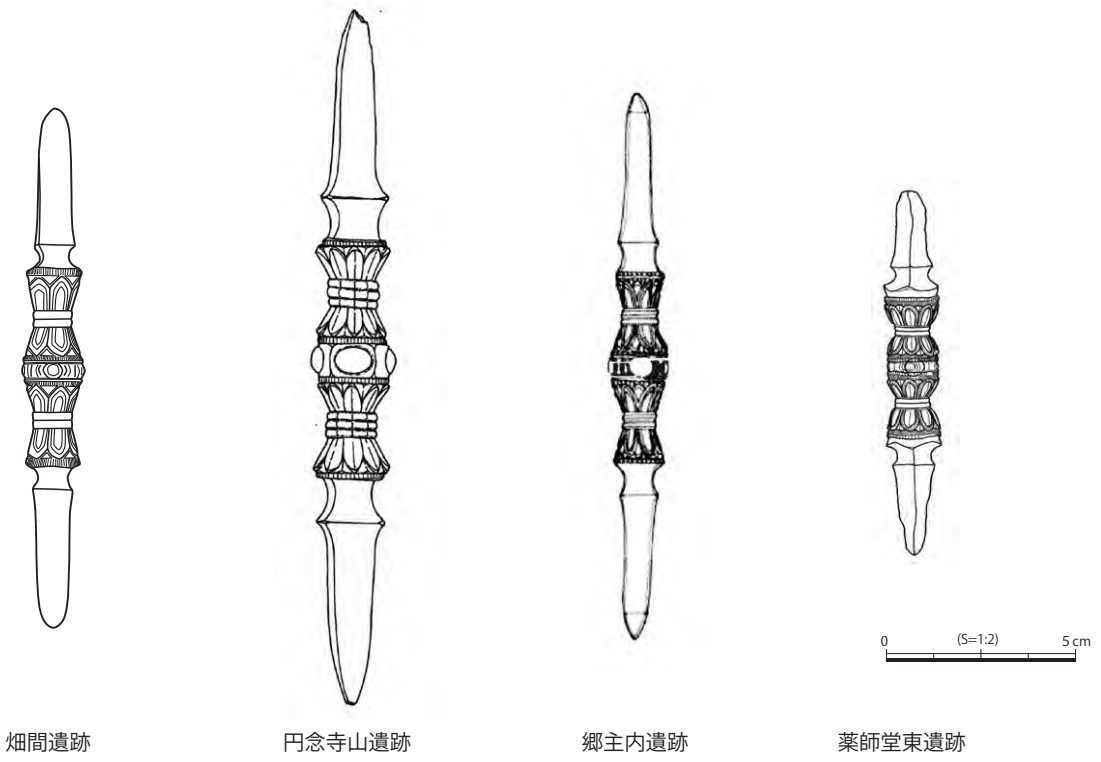
時代が下がると把部に対する鈷部の比率が短くなることは、表 14 の通り発掘資料においても追認される。12 ～ 13 世紀とされる独鈷杵の数値が 0.99 ～ 0.87 であるのに対し、15 世紀以降とされるものは 0.77 ～ 0.64 と明らかに変化する。この中で本事例の数値は 0.82 と中間的な数値を示す。

10 例の中には年号を記した共伴物のある２例も含まれているが、その他の表で記した年代は独鈷杵の製作年代そのものではなく、遺構や共伴遺物の年代である。例えば、富山県円念寺山遺跡出土の独鈷杵は、埋納年代は 12 世紀としているが、遺物の製作年代は 11 世紀の可能性があると指摘されている。密教法具という性格からして、製作後すぐに埋納や廃棄されることは少なく、円念寺山遺跡のように１世紀ほど伝世することが多いのであろう。そのように考えれば、表中唯一の伝世品である神奈川県極楽寺の独鈷杵が、同じ 13 世紀とされる宮城県郷主内遺跡と福島県長井前ノ山経塚に比べ、鈷部比が低いことの意味が明らかとなる。つまり、郷主内遺跡と長井前ノ山経塚の独鈷杵の製作年代は極楽寺のものよりも古く、一定期間伝世した後に埋納されたのであろう。

上記のことから畑間遺跡出土独鈷杵の年代について考えてみたい。鈷部比が最も近似値なのは紀年銘資料が共伴する鎌倉市極楽寺のものである。把部の形状は異なる（極楽寺のものは鬼面を作っており太い）が、鈷部先端の形状は類似する。鈷部比や文様の精密さから畑間遺跡のものよりも少し古いと考えられる。遺構としての帰属年代は千葉県笹子城跡が最も近い。鈷部比からみれば、本事例の方がやや古いと考えられるが、把部の太さや鈷部の尖り、文様などは類似する。笹子城の独鈷杵につい

	遺跡・出土地・所蔵地	長さ	鈷部比	年代（遺構や供伴物から）	備考
1	山形県南陽市　別所山経塚	15.7ｃｍ	0.99	12世紀（保延６年＝1140年）	保延６年銘経塚と供伴
2	富山県中新川郡上市町　円念寺山遺跡	18.2ｃｍ	0.98	12世紀後半	1-1号石槨（埋納遺構）本来は経塚か
3	福島県会津坂下町　長井前ノ山経塚	15.0ｃｍ	0.95	13世紀	経塚
4	宮城県角田市　郷主内遺跡	14.5ｃｍ	0.92	13世紀	仏具埋納遺構
5	神奈川県鎌倉市　極楽寺蔵	19ｃｍ	0.87	13世紀（建長７年＝1255年）	伝世品（建長７年銘供伴物あり）
6	**愛知県東海市　畑間遺跡**	**13.7ｃｍ**	**0.82**		**15世紀後半の土坑（2156ＳＫ）**
7	京都府八幡市　石清水八幡宮護国寺跡	18ｃｍ	0.77	近世	輪宝を伴う祭祀遺構
8	千葉県木更津市　笹子城跡	15.3ｃｍ	0.75	15世紀半ば～16世紀半ば	埋納遺構
9	静岡県掛川市　大竹遺跡	13.2ｃｍ	0.70	16世紀後半	大量銭を伴う祭祀具埋納遺構
10	茨城県小美玉市　石川西遺跡	9.4ｃｍ	0.70	不明	包含層
11	宮城県仙台市　薬師堂東遺跡	9.6ｃｍ	0.63	18世紀	木棺墓

表 14　独鈷杵の法量と年代



（註 70 文献より）

第 59 図　独鈷杵実測図

ては、出土状況等の詳細が分からないが、一定期間の伝世を経たと考えられる。

上記のような他事例との比較から、本事例の製作年代は 14 世紀前半（鎌倉時代後期～南北朝期）と位置付けられる。製作年代の推定が正しいとすれば、伝世期間は 150 年ほどとなる。

２．独鈷杵出土の背景

第３章で述べたように、隣接する知多市の法海寺に同時期の密教法具一式が伝世しており、その中に１点の独鈷杵が含まれている。法海寺の独鈷杵は蓮弁が８弁、文様はよりシャープで鈷部もやや尖りが鋭く、本事例と異なる。しかし、長さは同じ 13.7cm であり、重量や質感も非常に近い（註 71）。本事例より先行するものと考えられるが、同じ工人や工房によって製作された可能性は十分に考えられる。法海寺と畑間遺跡の歴史的な関係の検討も今後の課題となる。

また、独鈷杵はないものの、南知多町岩屋寺の密教法具一式（鎌倉時代前期）は国の重要文化財に指定されており著名である（註 72）。知多半島という限られた空間に２例の伝世密教法具が存在するのである。ほかに県内では、経塚遺跡である旧鳳来町の鏡岩下遺跡出土の五鈷杵、平成 28 年に県指定文化財とされた豊橋市赤岩寺所蔵の３点の金剛杵（うち１点独鈷杵）がある（註 73）。赤岩寺の独鈷杵は鈷部が長く尖りも強い。11 世紀後半～ 12 世紀前半の作とされている。

そもそも畑間遺跡を挟むように南北の丘陵地に位置する観福寺（大宝２年＝ 702 年創建）と弥勒寺（天平勝宝元年＝ 749 年創建）は前者が天台宗、後者が真言宗、ともに密教系寺院である。なお、近接する常蓮寺は浄土宗であり、1493 年創建と伝えられるが、直接的な関係は不明である。発見時には「何故こんなところに」と驚いたのだが、独鈷杵が出土する背景は存在していたのである。

第３節　調査成果からみた中世大郷郷

１．はじめに

畑間遺跡のある大田町という町名は大里村と木田村が合併して名付けられたものであり、畑間遺跡の位置する旧大里村は中世における熱田神宮社領大郷郷に比定されている。よって中世の畑間遺跡（東畑・郷中・龍雲院遺跡も含めて）は大郷郷遺跡と呼ぶべき中世荘園村落遺跡である。

本年度調査の主たる成果は中世の遺構・遺物であり、既往調査成果も含めれば、中世の畑間遺跡について考える材料が蓄積されている。特に今回の調査では、大量出土銭や独鈷杵といった貴重な資料にも恵まれた。本節では、まず大郷郷に関する文書記録について概観し、今回の成果と既往調査成果から中世荘園村落（大郷郷）として、畑間遺跡について考えてみたい。

調査成果については、溝とそれによって形成される区画に絞って考えたい。調査地点が狭く、建物などの様相が把握出来ないため、考察対象が溝に限定されるという現実もある。しかし、屋敷地が溝で区画されるなど、中世は考古学的に「溝の時代」とも言われている（註 74）。今回の調査においても、2120SD からは、12 ～ 15 世紀にわたる多量の遺物が出土しており、溝からは中世畑間遺跡の平面的な様相に加え、時間的な変遷も考えることができる。もちろん、溝は開削年代の決定が難しいなど、考察する上での課題もある。しかし、畑間遺跡では各調査地点が狭いため、一つの溝が複数の調査地点に延び、結果として複数回の調査を経ることによって多くの情報や一定の客観性が得られるという利点もある。本節では溝という遺構に絞って中世の畑間遺跡を検討し、そこから熱田社領大郷郷の歴史の一端に迫ってみたい。

２．熱田社領大郷郷

大郷郷に関する文書記録の内容を表 15 にまとめた。５つの記録が残っている。永仁６年（1298 年）～文和３年（1353 年）、半世紀程度の短い期間に集中している。考古学的には山茶碗第８～９型式、常滑窯７型式期、古瀬戸中期に相当する時期である。大郷郷の文書記録については、荘園制や熱田社に関する論考や『東海市史』などの地域史における先行研究がある。しかし、熱田社領全体の中で断片的に触れられているのみであり、大郷郷に絞った論考はない。よって、それらを参考とし、大郷郷について簡潔にまとめておく（註 75）。

まず、永仁６年（1298 年）、熱田社領が国衙方からの「勘落濫責」を訴えた注進状に伴う注文状の中に大郷との記録がある。「勘落濫責」とは土地の接取・横領とそれに伴う乱暴狼藉などを指す。この時期は荘園に対して、国衙領の回復を目指す動きがあったようで、伊勢神宮領からも同様の訴えがなされている。大郷郷では、このような中で、国衙方から様々な雑事の強制や物品の要求がなされたと記録されているわけである。

次の文書は正安元年（1299 年）の「熱田社領大郷百姓等陳状案」（猿投神社文書）である。他の文書は熱田社側の荘園管理のための記録であるが、これは村人が作成した陳状書である。内容は大郷郷の村民が荒尾郷の観音冠者という人物の殺害事件（犯人は大郷郷の村民か）に関して、同じ東海市内に位置する荒尾郷（国衙領）の村民から受けている圧力に対する反論と陳情である。この中に、「於市町・浦浜・野山・道路等～（中略）～被懸咎否～（中略）～関東御式目面明白也～」との記述がある。つまり、市町・浦浜・野山・道路などで起こった争いに対して村民として咎を受けることがないと述べており、この記述を網野善彦が『無縁・公界・楽』において、市や野山が「無縁」の場であったことの「疑う余地なし」証拠として挙げている（註 76）。

猿投神社文書
永仁６年（1298年）六月
熱田神宮社領 国衙方押妨注文案
国衙の干渉に対する注文状
大郷 度々雑事札根用途色々 経入注文到来

猿投神社文書
正安元年（1299年）八月
熱田神宮社領大郷郷 百姓等陳状案
観音冠者という人物の殺害事件につき荒尾郷村人の訴えに大里郷の村人が反論した陳情
大郷百姓等謹弁申　　欲被停止早荒尾郷村人等無道濫訴　観音冠者間事件条者、　観音冠者殺害事大郷村人等須以不覚悟者也 （中略） 恐々披陳言上如件

猿投神社文書
正安二年（1300年）
熱田社領大郷早田検見注進状案
大郷郷の田地検見の目録
合参拾参町八反二百七拾歩者 除田八町１反大　常不一反 木田押領半 氷上宮神田一丁二反 当郷新宮田二町六十歩 寺田五反　科野殿跡三丁 郷司給一丁三反 定田二五町七反三〇歩 早田一三町一反半　　晩田

楓軒文書纂 正和五年（1316年）
熱田社領別納等注進状写
別納（国衙に対して）の社領の注文状。 そこに当知行の社領として追記

熱田神宮文書
文和三年（1354年）
熱田社領目録案
熱田社権宮司尾張仲勝らが社領の一円領知行分を注進
田畠三十三町八段小三十歩 除　巳上　拾三町四段三十歩 定　弐拾町四段小

表 15　大郷郷に関する文書記録

大郷郷について考える上で注目したい点は、文書の中で村人がその根拠として関東御式目を挙げている点である。そもそも、市町・浦浜・野山・道路では連座制が適用されないと言った内容の法令は確認できないとのことである（註 77）。しかし、この法令の有無は別として、法を根拠に示した陳状書を作成する能力を村民が有していたこと、また、個人的な争いに端を発する事件に対し、村として対応しており、そこから大郷郷が貢納や支配の単位というだけでなく、村民が連帯感を持つ一つの村落として成り立っていたことがうかがえる。

正安２年（1300 年）と文和３年（1353 年）の文書はともに田畠等の面積が記録されている。ともに 33 町と記載され、50 年を経てほとんど変化がない。ただし、後者は田畠とされており、畠地の扱い次第では変化があったとも考えられる。また、除地とされる田畠が８町から 13 町に増加しており、これは熱田社が年貢を収取できない田畠の増加であろう。また、後者には他の社領の記録も含まれており、第１節で触れた年貢銭納額が記載されている。この記録から 14 世紀半ばには熱田社領では年貢は銭納化されており、大郷郷では約 20 町での定田に対し、約 78 貫文の年貢が課せられていたことになる。

前者の記録には多くの情報が記載されており、それが早田検見注進状である点も興味深い。13 ～ 14 世紀には早田や早米などの言葉が頻繁に文書記録にみられ、これは品種分化＝農業技術の発展とされていた。これに対して、早米は冷害に強くその収穫量も安定性が高く、領主側に確実に年貢を得られるという利点があることから、早田や早稲という言葉が頻出するのは、寒冷化による生産環境の悪化への対応として領主側から求められた結果との説が提示されている（註 78）。このようにみれば、この文書は、領主である熱田社の早田に対する関心と大郷郷に対する管理体制の強さをうかがわせる。

次に注目すべきは郷司の存在である。この郷司は国衙領の在庁官人としての郷司ではなく、荘園の下司としての郷司であり、その名の通り、大郷郷の管理者に相当する役職であったと考えられる。この早田検見注進状は郷司により作成されたのだろう。他の熱田社領においても郷司やそれに相当する

役職の記録がみられ、その職に任じられる人物は権宮司もしくは在地の有力者であり、前者の方が熱田社の支配が強かった。大郷郷に関しては、早田検見注進状の存在から熱田社の直接支配が強く、郷司に任じられる人物は前者の蓋然性が高いと考えられる（註 79）。この郷司は一丁三反の除田を有している。他にも氷上宮、科野殿跡などの除田が記されている。また現代においては合併して同じ大田町となっている木田郷に土地が押領されているとの記録もある。木田郷も同じ熱田社領であるが、横領とされており、対立関係にあったのだろうか。

正和５年（1316 年）の「熱田社領目録写」（楓軒文書纂）は熱田社領の「別納」について記載しており、ここにも大郷郷が記されている。この「別納」については、二つの解釈がある。「別納」とは、その字の通り、本来の貢租徴収とは別の納め方が存在することであるが、この文書における「別納」は熱田神宮にとって「別納」の社領であるという解釈と、国衙に対して「別納」つまり、この別納分を熱田社が得ている社領という解釈がある。近年の研究では後者の解釈がなされている（註 80）。その理由として、この文書は先の国衙による「勘落」に対して熱田社の権利を主張する性格の文書であること、1354 年の熱田社領目録において、これらの社領が一円社領とされていることとの整合性からである。よって、この時期の大郷郷は熱田社領であったと考えられる。

大郷郷について直接的に触れている文献史料は以上であるが、関連するものに少し触れておく。まず熱田社領の中で最も早くその存在が記録されている御幣田郷についてである。御幣田郷は東海市内に位置すると考えられており、大郷郷より北側の現在の荒尾町一帯、南側の加木屋町一帯の２説がある。後者であれば、社山古窯などの瓦陶兼業窯がそこに含まれ、杏葉唐草文軒平瓦などが御幣田郷で生産されたことになる。『吾妻鏡』の建久２年（1191 年）条に、熱田大宮司一族内で御幣田郷に関する相論があったこと、そこに源頼朝が関わったことなどが記されている。この中で、所領の本家であった上西門院（鳥羽天皇第２皇女、文治５年＝ 1189 年没）在世中から相論があったことなどが記され、御幣田郷は 12 世紀半ばから熱田社領（熱田大宮司一族の荘園）であったと考えられている。少なくともこの時期から知多半島北部、東海市周辺に熱田社領が存在していたわけである。

次に大郷御薗についてである。猿投神社文書に含まれる「熱田社領新別納郷等注文案」（1298 年頃か）に記録されている。同じ熱田社領の記録において、八嶋郷・八嶋御薗など表記が異なる事例があり、大郷御薗を大郷郷とみることはできる。記されている面積は 325 町６反であり、早田検見注進状よりもはるかに広い。これは山林などを含めたものとの見解がある。御薗とは元来は供物のための野菜などを栽培する土地を意味しており、大郷御薗という記録は野菜に限らず、様々な供物を山林などから入手し、熱田社に納めていたことを意味しているのかもしれない。この記録の解釈はともかく、入会地として山林なども含めて集落が形成されていたことは間違いない。発掘調査から田畠や入会地などについて考えるのは難しいが、集落全体を考える上で必須な課題である。

つづいて木田郷についてである。木田郷については 15 世紀にも記録がある。応永２年（1413 年）の記録では、「熱田社領尾張国木田郷　一色」と記されている。この時期にも熱田社領であったわけだが、三河守護の一色氏との関係もうかがえる。一色氏は知多郡の分国守護の立場にあり、木田にある観福寺は宝徳２年（1450 年）に一色氏の援助で再興されている。木田の地の支配者は熱田社から一色氏へと移っていったと考えられる。大郷郷や木田郷に限らず、15 世紀以降、熱田社領の記録は減少し、見られなくなる。基本的には、その背景として国人層の台頭や大名領国制への変動があるのだろうが、大郷郷における具体的な様相はまったく分からない。

3．畑間遺跡の溝と区画

これまでの調査で多くの中世の溝が検出されている。遺跡北部の中世溝については、平成 25 年度調査報告で検討した。また『愛知県史　資料編 5』においても調査成果がまとめられている。本論ではその後の成果も加えて、遺跡全域について、特に遺跡の立地する砂堆や周辺の地形等との関連性、遺跡内での差異などについて、より詳細に検討したい。

既往調査の成果から主な中世溝を抽出し、同一溝群や形成される区画を溝間の距離や方位、出土遺物などから推定し、第 60 図に示した。さらに、これらの溝を周辺の地形等がよく分かる航空写真の上に反映させたのが第 61 図である。第 61 図には既往調査報告や『東海市史』を参考とし、大田川の旧河道や砂堆の範囲も示した。これらの図を見れば大まかな様相が把握できると思うが、以下、各溝や区画について調査成果を概観してゆく。

①中央大溝

今回の調査成果を既往調査成果に位置付ける作業において最も明確な成果は、2120SD が平成 24 年度調査 4 地点の 4018・4031SD と連なり、その結果、砂堆中央部を横断する畑間遺跡最大規模の溝の存在が判明したことである。以下、これを中央大溝と呼びたい。

中央大溝は幅 4 ～ 5 mをはかる。幅 1 ～ 2 m程度の溝が多い本遺跡で最大規模の溝である。第 61 図を見れば分かるように本遺跡の位置する砂堆は佐渡島状の形をなし、中央部がくびれている。2120SD はまさにこの部分を横断している。12 世紀末に開削し、その後埋没と再開削を経て、15 世紀末にはその機能を終えている。

②砂堆北部の町単位の区画溝群

遺跡北部では 1 町を基本単位として区画溝群が形成されている。例えば、平成 25 年度 2 地点で検出した 170SD と平成 24 年度 1.2 地点の SD2077 との距離が 109 mとなり、平成 25 年度 1 地点と 2 地点の 040SD・110SD・190SD は約 55 m＝半町四方の方形区画を形成している。さらに 7 地点の 7010SD と平成 23 年度 3 地点の 020SX と 021SD との距離も 105 ～ 110 mであった。

これらの溝の方位は現在の道路や家屋の方位とほぼ一致しており、さらに溝の位置が現代の地境と一致する事例もあった。これらの溝は近世に再開削されているものもあり、そのため現代まで続いたと考えられる。溝の方位は正方位に対して、約 20°傾くものと約 30°傾くものの 2 者に分かれている（表 16）。現代（再開発以前）の小路や家屋の方位にも両者が並存しており、前後関係を判断できない。

主として第 5 ～ 7 型式の山茶碗や同時期の遺物が出土しており、12 世紀末から 13 世紀前半に開削され、13 世紀後半には埋没したと考えられる。一部の溝では 14 ～ 16 世紀の遺物が出土しており、14 世紀後半から 15 世紀に再開削されている。

年度	調査区	遺構番号	時期	備考
H21	5地点	SD 6	13世紀前半	
		SD 2～5	12世紀末～13世紀	
	6地点	SD5	12世紀末・15世紀	
		SD7～11	13世紀	
H23	3地点	020SX	12世紀末・15世紀	
		021SD	時期不明	
H24	1, 2 地点	SD2010	15～16世紀→近世	SD2070の再掘削
		SD2070	12世紀末～13世紀	
		SD2077	時期不明	
H25	1 地点	001・020SDほか	13世紀	H21-SD 5 と一連の溝
	2地点	040SD	13世紀→14～15世紀→近世	
		110・190SDほか	13世紀→近世	
		130・131SD	14～15世紀	110SDの再掘削か
		160SD・230SD	13世紀	
		170SD・210SD	13世紀	
H26	1 地点	009SD	13世紀・14～15世紀　→近世	H25-040SDと一群の溝
H28	1 地点	030SD	13世紀　→　近世	

主軸方位が30°前後のもの
主軸方位が20°前後のもの

表 16　町単位溝一覧

③砂堆南西部の方形区画群

第２章で述べたように、４地点において検出された柱穴を伴う溝（4043SD）と同じ構造の溝が隣接する平成 27 年度調査４地点でも見つかっており、二つの溝の間は約 30m であった。さらに平成 27 年度調査７地点にも同様の柱穴を伴う溝があり、同規模の東西約 32 mの方形区画を形成していた。前者を区画 A、後者を B とした。南北規模は不明であるが、同距離と仮定しておく。

この２つに加え、その中間に位置する平成 27 年度調査５地点では、調査区の西と中央にそれぞれ並行する３条（計６条）の溝があり、それらも同一規模の区画を形成していた可能性がある。これらの溝の東西間距離は最短で 22 m、最長で 36 mであるが、埋没のたびに西もしくは東にずれたとすれば、東西約 30 mの区画となる。これを区画 C としている。

これらの溝や区画は、いずれも調査区とほぼ直交もしくは平行する方位であり、同一規模（東西 30 m程度）の方形区画が複数並存していたと考えられる。仮に南北も同じ 30 mとすれば、ほぼ１反規模の区画となる。出土遺物はいずれの溝も 13 世紀のものであるが、その量は少ない。

④砂堆北東部の小型方形区画

砂堆北東部には３つの小型方形区画を想定している。墨書土師皿を伴うまじない遺構が見つかっている平成 20 年度３・４地点の小型区画をａ、大量銭の出土した区画をｂ、1040SD と 1050SD による区画をｃとした。区画ａとｃは溝間の距離がともに約 16 mであり、16 m四方の方形区画と考えられる。区画ｂについては、規模は不明であるが、第１節で指摘したように区画ａと類似の性格をもつと想定し、同規模の区画として第 60 図に示した。区画の帰属時期は、小型区画ａが 12 世紀後葉～ 15 世紀中葉、ｂは 15 世紀半ば～後半、区画ｃは 13 世紀代である。区画ａが時期の異なる複数の溝で形成され、長い期間存在していたと考えられるのに対し、ｂとｃにはそのような時期幅はみられない。

⑤砂堆南東部の町単位の方形区画

砂堆南東部は今回の調査地点には含まれないが、既往調査の成果を再検討したところ、北部と同じ１町を単位とする大きな区画が見出された。方位は N- ７～ 10°-E と W- ７～ 10°-S である。この方位は現代の耕作地や推定される旧大田川の流れとほぼ一致する。地形に則したものであろう。

これらの溝のうち、平成 21 年度２地点の SD1 からは大窯期の天目茶碗が、SD5 からは古瀬戸後期の卸皿が、平成 25 年度３地点の 002SD からは大窯期の碗がそれぞれ出土している。このことから、この方形区画は 15 世紀後半～ 16 世紀に比定される。

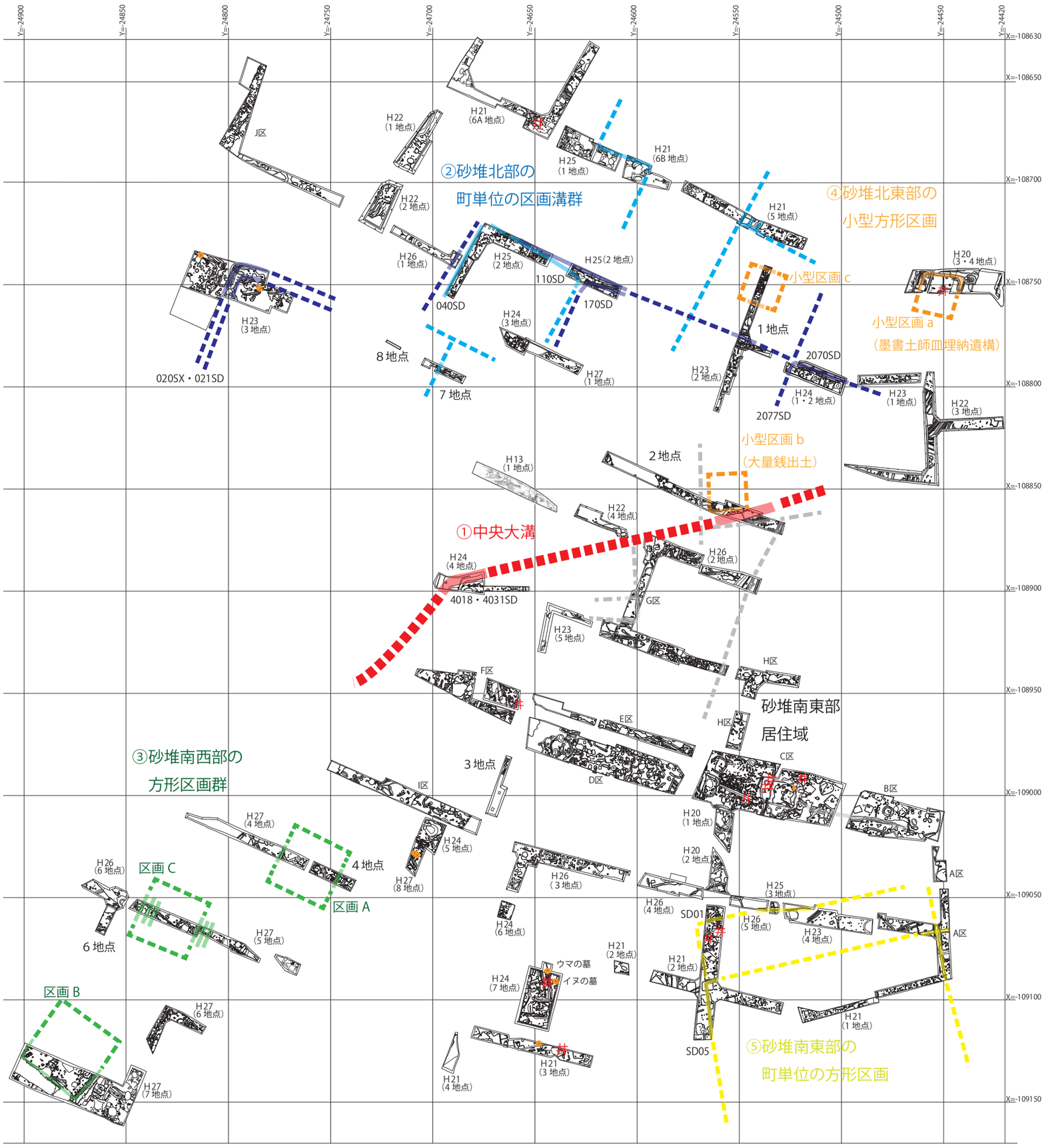
４．溝・区画の性格

①中央大溝

中央大溝の規模はこれまで畑間遺跡で検出されている溝の中で最も大きく、幅は５m、深さ１m、距離も 250 m以上と推測される。砂堆中央を横断し、集落を南北に分断するその景観は象徴的なものであり、大きな区画溝としての機能を有していたのではないだろうか。その規模も含め、大郷郷成立段階において領主層の主導によって計画的に開削された溝と考えられる。

一方で、当然ながら水路としての機能も有している。平成 24 年度４地点 4031SD の底面レベルは 2120SD より 60cm ほど低い TP2.2 m、その西端は南に曲がり、砂堆南西部の低地に水が流れ込むようになっている。砂堆の北東部は大田川や渡内川の洪水時にその水を受けるため、これらを排水する溝であったのだろう。

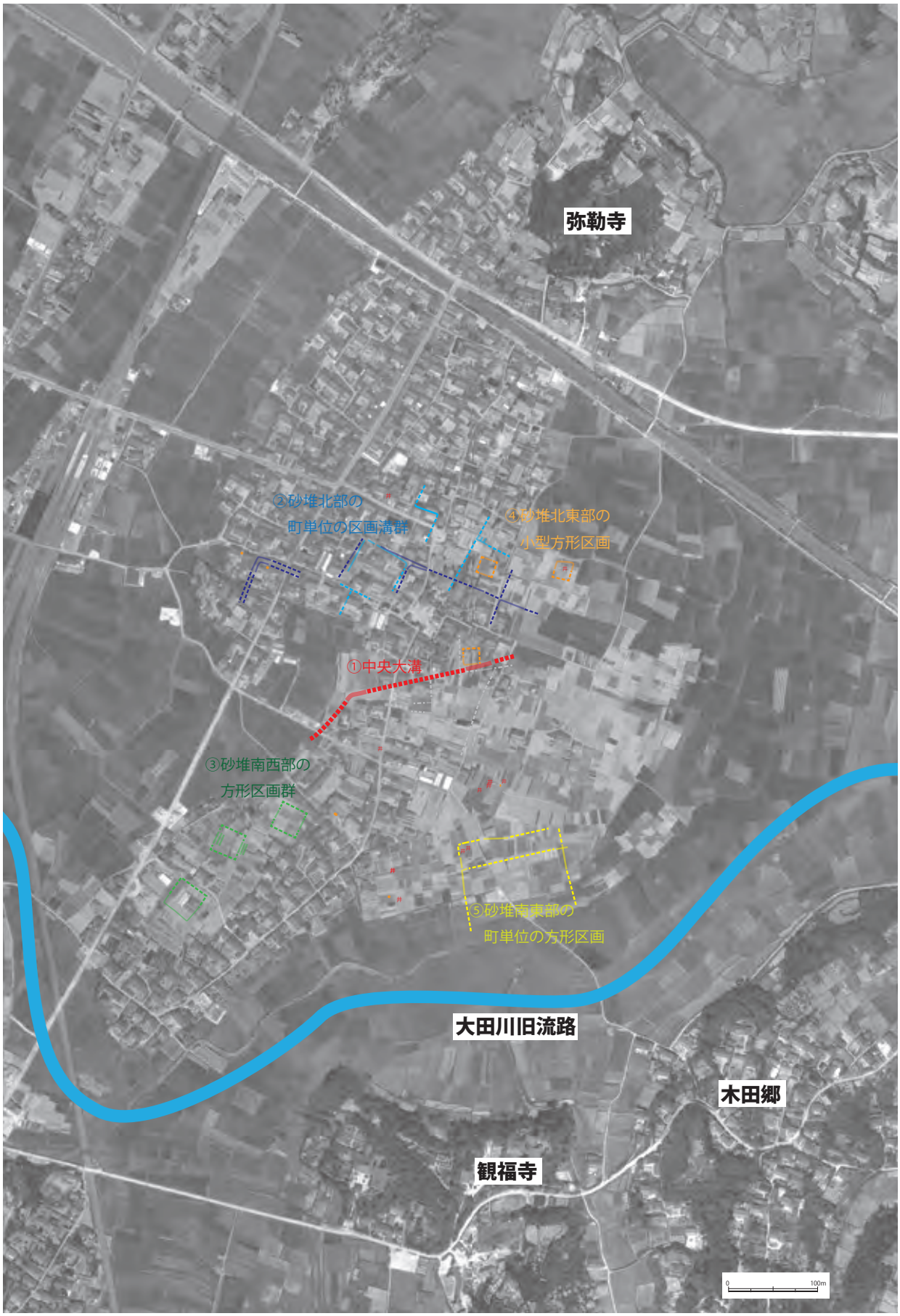
遺構の変遷については第２章で述べているが、中央大溝は 12 世紀末に開削され、その後、13 世紀



凡例

H21＝平成 21 年度調査
アルファベットは平成 11 ～ 19 年度の調査区
座標値は世界測地系
溝表現の破線部は推定
⊕＝墓
井＝井戸
縮尺は 1/2000

第 60 図　畑間遺跡の溝・区画



第 61 図　周辺環境と溝・区画

後半には埋没する。14 世紀末に上層が開削されるが、近接する 2135SD などと同じ方位・規模の溝として開削されており、中央大溝とは言えない。上層が 15 世紀半ばに埋没し、その後中央大溝として最上層が再開削される。中央大溝としては、15 世紀後半に機能したものの、15 世紀末にはその機能は失われ、その後はゆっくりと埋没していったと考えられる。

中央大溝は集落の基幹となる溝であり、領主層を主とし、集落全体で維持管理（註 81）を行っていた溝であろう。しかし、14 世紀～ 15 世紀前葉にはその機能は停止していたのである。

②砂堆北部の町単位の区画溝群

今回の調査でこの方位の溝＝ 1030SD が検出され、平成 25 年度 1 地点の 110SD ～平成 24 年度の 2010SD まで一連の溝が 200 m以上続く可能性が示された。もっとも、この東西溝が単一の溝なのか、半町程度の屋敷地が軸を揃えて東西に並んでいたのかが問題である。屋敷地が規則的に並ぶ事例は多く、武豊町のウスガイト遺跡やあま市の阿弥陀寺遺跡などの遺跡において、本遺跡のように細く狭い調査区が複数設定されていれば、類似の状況になるだろう（註 82）。1030SD と同じ軸線上に位置する東西溝は表 16 に赤文字で示したが、両方の方位の溝が含まれており、これらの溝は複数の区画が軸を揃えて並んでいたと考えるべきであろう。

区画の規模であるが、1 町単位の広さを有する屋敷地であれば、他事例では、溝の規模もより大きく、出土遺物にも有力者の存在を示すようなものがみられ、後に居館に発展する場合もある。これに対し、砂堆北部の溝はその規模も小さく、出土遺物からも有力者の存在は考えにくい。屋敷地とした場合もその規模は半町四方と考えるべきであろう。整然とした方格地割が存在し、少なくとも 5 ～ 8 区画ほどを想定できる（第 60 図）。しかしながら、区画の形成時期の詳細は不明であり、当初から整然とした地割であったのかは今後の検討課題である（註 83）。内部の状況も不明である。なお、既往調査成果からは、この区画が古代の条里に遡る蓋然性は低いと考えている。

③砂堆南西部の方形区画群

東西約 30 m、仮に南北も同規模とすれば、その面積はほぼ 1 反である。規模に統一感はあるが、北部ほど整然と並んでいる様相は感じられない。遺物は少ないが、区画内に建物が復元される柱穴もあり、通常の屋敷地と考えられる。ただし、溝に伴う柱穴列の存在が疑問である。この柱穴列は溝埋没後の遺構であり、護岸とは考えにくく、柵や塀のような区割施設ではないだろうか。柵や塀などを築きながら遺物が少ないことから、ウマやウシなどを飼育していた牧草地等の可能性が考えられる。

④砂堆北東部の小型方形区画群

先に触れたように、区画 a と b が祭祀的な場であった蓋然性は高い。小型区画 a は中心に井戸があるが、生活用ではなく、何らかの祭祀用の井戸であろう。小型区画 b については、内部の状況がまったく不明である。寺院と考えたいが、2115SD などから瓦の出土はない。墓も候補となろうが、既往調査成果からは特定の墓域はなく、各屋敷地やその周辺に点在している状況がみられる。しかし、郷司など集落の支配者層の特別な墓であった可能性はある。いずれにせよ、小型区画 a と同じく祭祀的な場と考えており、溝から出土した青磁や銭貨は個人的な奢侈品などではなく、供物と考えている。

小型区画 c も同様に考えたいところだが、積極的な証拠はない。区画内の遺構は柱穴が多く、通常の屋敷地のようである。また、区画 a と b は複数の溝を頻繁に再掘削している様相が見られるが、 c の 1040SD と 1050SD には見られない。現状では、 a と b のような特殊な区画と考えることはできないが、同一規模の区画として一群にしておいた。

⑤砂堆南東部の町単位の方形区画

砂堆南東部の1町単位の区画は、これまでの溝と異なり、その時期は15世紀後半～16世紀である。区画内（北西隅）には常滑甕を枠に再利用した15世紀の井戸があり、区画溝の時期と一致する。井戸の存在からは屋敷地とも考えられるが、この時期の遺構・遺物が非常に少ない。区画の中央部の平成21年度調査1地点ではほとんど中世の遺構がなく、近くに位置する平成25年度4地点（区画の外側であるが）では13世紀以降（近世以前）の畝跡が検出されている。この区画は耕作地として整備され、井戸も畠に伴うものであったと考えている。この1町単位の区画が15世紀後半以降に形成されたとすれば、それは畑間遺跡において遺構・遺物が激減し、2120SDが埋没し、大量出土銭の埋められた時期でもある。

この区画の北西部＝平成21年度2地点では、複数の掘立柱建物が検出されているが、これらは切り合い関係や遺物から溝に先行する12～14世紀の遺構と判明している。平成23年度4地点では本遺跡では出土数が少ない山茶碗の小碗が一定数出土しており、12世紀半ば＝畑間遺跡における中世集落形成期から人間活動の痕跡が垣間見える。

5．集落の様相

ここで平面的な様相をまとめてみたい。まず中央大溝は砂堆を横断し、集落は大きく南北に分けられる。砂堆北部には町単位の溝が開削されており、ブロック状に整然とした方格地割が存在する。半町程度の屋敷地が並ぶ居住域として使用されていたと考えている。区画内の大部分が未調査地であり、詳細は不明であるが、規模に比べて出土遺物や遺構は少なく感じられることから、屋敷地内は畠地が多かったのではないだろうか。土地利用としては、こちらもウマなどの飼育、尾張地域でさかんな養蚕も考えられよう。畑間遺跡の西側は今でこそ多くの干拓地・埋立地が広がるが、中世には、海は近く、高潮や塩害の危険があり、水田に向いた土地ではなかっただろう。南東側の旧大田川一帯の低地も同様であり、主な耕作地（水田）は北東側と思われるが、決して好条件とは考えにくい。屋敷地を広く設定し、そこを畠や牧草地などを確保し、生活の糧を得ていたのではないだろうか。

北部において、区画内がある程度の調査をされているのは、平成23年度3地点（龍雲院遺跡）の020SXと201SDによって形成される区画である。この区画内では短刀が副葬された土壙墓が検出されているが、溝以西にも3基の墓が見つかっており、この区画溝は墓域を示すものではなかろう。墓の年代が13世紀とされる一方で、溝からの出土遺物は12世紀後半と15世紀代の山茶碗と報告されている。このことから、12世紀後半に区画が形成され、13世紀には廃絶し、一帯が墓域となり、15世紀に再度区画が形成されたと考えられる。020SXと201SDと7010SDの距離は約1町であり、一つの区画を形成していた可能性はあるが、7地点西側～8地点は撹乱によって遺構が失われていた。

一方の砂堆南西部は1反規模の屋敷地が南北に位置する。近世の大里村から現代に至るまで集落は北の郷中と南の的場に分かれており、その在り方が中世以来のものであることは非常に興味深い。しかし、区画溝は13世紀のうちに埋没し、再開削されていないようだ。近世以降の状況から考えて、南西部においても居住域としての利用が続いていたと考えているが、少し東に移動しているのかもしれない。13世紀末以降は遺物も極めて少なく、その様相は不明である。ウマなど家畜牧草地の可能性を指摘したが、溝埋没後の柱穴列の段階＝13世紀末以降の土地利用として想定できるのではないだろうか（註84）。北部の区画も含めて、畠や牧草地のような土地利用から生み出されたものが、熱田社に納められ、それが大郷御園と呼ばれた背景にあるのかもしれない。

南東部は集落形成期には居住域であったようだが、15 世紀には耕作地となり、後に東畑と呼ばれる姿になっている。なお、この一帯の北側（B 区・C 区）は、実は中世の遺構密度の最も高い一帯である。明確な区画溝はないが、中世の井戸や墓が検出されている。時期不明の柱穴や土坑の多くも中世に帰属する可能性があり、第３の屋敷地群として想定される。遺構・遺物の詳細は既往報告を参照されたいが、13 世紀の遺構が多く、つづいて 14 世紀後半～ 15 世紀後半の遺構もある。よって時期的な様相は他の地域と同じである。

上記のような区画の在り方、その背景には何があるのだろうか。３つの屋敷地群が時期ごとに移動した結果とは考えにくいことから、階層（名主層と小百姓など）や出自（古代以来の住民と中世の新住民など）、職業（副業として漁労、窯業など）などが異なる集団によるものと考えられる。区画の規模からは北部が上層農民の居住域にも思われるが、先述のように様々な土地利用が考えられる。砂堆中央部一帯は区画溝はないが、井戸などの遺構は多く、遺物も豊富である。多くの人々が密集して居住していたエリアのようである。また南西部と北部も様相にも差異がある。今後の課題としては、出土遺物の詳細な分析が必要である。

砂堆北東部の区画ａとｂは、通常の居住域と異なる特殊な区画である。砂堆北東部一帯は熱田社との関連を示す杏葉唐草文軒平瓦が多く出土しており、中世集落の形成当時から、特殊な一帯とみられ、その終末段階に大量出土銭が納められているのである。

６．中世大郷郷の変遷

以下、大郷郷に関する文書記録と溝およびそれによって形成される区画を主とした発掘調査成果を総括し、畑間遺跡の時期区分（表３・５）を基準として、中世大郷郷の変遷に迫ってみたい。

Ｖ－１期（1130 年代～ 1170 年代＝山茶碗第４型式期）

この段階の遺構・遺物は極めて少ない。無人の地であったとさえ思えるが、半農半漁の小さい集落であったのだろう。砂堆上にわずかな住居が散在していた状況であったと思われる。この時期に加木屋地区の社山古窯や吉田古窯で京都に供給される瓦が焼成されていた。

Ｖ－２期前葉（1180 年代～ 1210 年代＝山茶碗第５型式期）

遺構・遺物はこの段階から明らかに増加する。１町単位の区画溝群もこの時期に形成されている。今回の調査では 1060SK がこの時期の遺構であり、2120SD 下層からも第５型式の山茶碗が多く出土している。畑間遺跡の地が熱田社領大郷郷として成立した時期である。歴史的にも頼朝政権の成立とともに熱田社領が発展したと考えられ、これを大郷郷成立の背景とみてよいだろう。御幣田郷は前段階から社領となっていたと考えられ、少し遅れての社領化となる。どのような経緯でこの地が熱田社領になったのかは不明であるが、これを契機とし、中央大溝の開削、溝を伴う屋敷地、宗教施設などが形成された。

この時期は愛知県内で多くの中世集落が一斉に成立する（註 85）。しかし、開削された溝の規格性や熱田神宮との関係性を示す杏葉唐草文軒平瓦の存在から、中世畑間遺跡の成立は在地勢力の自然発生的な展開ではなく、熱田社の主導によるものと考えている。杏葉唐草文軒平瓦（図版 34-373）はこの時期の畑間遺跡を象徴する遺物である。これまで 12 点出土しており、基本的な製作技法に変化はないが、顎形態に多少の個体差がある。社山古窯などの瓦陶兼業窯における瓦の中では後出の製品であり、京都へ供給される瓦が生産終了後も引き続き造られていたのであろう（註 86）。それらが大郷郷にもたらされ、寺院などの建築物に用いられていたと考えられる。

Ｖ－２期中葉～後葉（1220 年代～ 1270 年代＝山茶碗第６～７型式期）

最も遺構・遺物が多い時期という点からは最盛期と言える。ただし、山茶碗生産が最盛期であり、その結果として集落からの遺物出土量が多くなっているだけなのかもしれない。しかしながら、大郷郷の住民が窯業生産に何らかの関わりを持っていた可能性は既に指摘されている（註 87）。今回の調査でも重ね焼きで釉着した山茶碗片（150、331）が出土しており、遺跡の立地的にも工人の居住地や出荷場となっていた可能性は当然考えられる。出荷場としてはより海に近い横須賀（註 88）の方が適しているだろうが、大郷郷にも窯業生産に関わっていた人々が住んでいたであろう。よって山茶碗生産の増加に伴い、大郷郷の人口や経済的な活気がピークを迎えていたと考えたい。

Ｖ－３期（1280 年頃～ 1370 年頃＝山茶碗第８～９型式期）

知多半島における山茶碗生産が終了し、畑間遺跡においても山茶碗の出土量が激減する。ただし、これをそのまま集落の衰退とすることはできない。文書記録が残っており、耕作地の面積も安定しており、大きな変化や衰退は認められない。常滑窯編年６ｂ型式期における山茶碗生産の終焉＝山茶碗の激減は地域全体の現象であり、14 世紀の集落遺跡が検出されにくいことも指摘されている（註 89）。これらをどう評価するのかは難しい問題である。

知多半島における山茶碗生産の終焉は瀬戸や東濃窯での生産拡大と軌を一にしており、工人の移動があったとされる（註 90）。大郷郷にも窯業に関わる住民がおり、移住に伴い放棄された屋敷地もあっただろう。一方、この時期に残された「熱田社領大郷百姓等陳状書」は村落としての安定と村民の結合が見て取れる記録である。確かにこの時期の遺物は少ないが、常滑窯７型式の甕や伊勢型鍋Ａ５類も出土し、当該期の瀬戸産山茶碗も流入している。住民の減少があったとしても、村民の生活は継続していたはずである。ところで、上述のような陳状書を提出する村民は名主層を主体としたものであろう。これに対し、減少した住民は小百姓や下人層なのではないだろうか。これらの人々は浮遊性が高いとされており、山茶碗生産や領主の直営田に関わり、経済的な事情や領主による強制からこの地を離れ、それがこの時期の遺構・遺物減少の背景となったと考えたい。一方、名主層などには大きな変化もなく、生活を継続していたのであろう。

熱田社側に目を向ければ、この時期、熱田社領が国衙方からの圧力を受け、社領支配が貫徹し得ない状況が記されている。そもそも正和５年の文書記録は、このような状況の中で熱田社側の権利を主張するために作成されたとされている。また文和３年に作成された社領注進状においては、大郷郷も含め多くの社領が一円御神領とされているが、この文書も決して熱田社によって安定した支配が貫徹していたことを示すのではなく、国衙や地頭との対立は続いており、その中で熱田社が「社領支配の強化を内外に示した」文書とのことである（註 91）。

多くの溝は第７型式期に埋没しており、再開削されていないことから維持･管理体制の弱体化があったことは間違いなく、遺跡の状況なども勘案すれば、国衙と熱田社との相克の中で、溝などの公共施設の開発行為や維持・管理が十分になされなかったのだろう。

Ｖ－４期（1380 年代～ 1480 年頃＝山茶碗第 10 ～ 11 型式期）

再び遺構・遺物が増加傾向を示す時期である。この傾向は既往調査でもみられ、１町単位溝の再開削などの動きがこの時期の前半から始まる。２地点の遺構はこの時期の後半に比定されるものが多く、特に 2120SD 最上層の開削は、中央大溝としての機能を取り戻すための多大な労働力を要する再開発行為である。

このような変化の背景は何であろうか。15 世紀初めには隣接する木田郷の経営に三河から知多半島に進出した一色氏が関わっている。木田の観福寺が宝徳 2 年（1450 年）には一色佐馬介らの援助で再興されており、木田郷は 15 世紀前半に熱田社領から一色氏の支配下に入ったと考えられる。同じ頃、大郷郷も熱田社領としての歴史を終え、一色氏の支配下となったのではないだろうか。大郷郷と一色氏を結ぶ直接的な証拠はないが、一色氏が観福寺再興のような再開発事業を大郷郷でも行なったものが、2120SD の再開削や 2 地点の方形区画の形成と考えておきたい。

15 世紀は全国的にも荘園制の解体期であり、この時期に廃絶する中世集落も多い。また国人領主の台頭や大名領国制の成立期でもある。大郷郷も熱田社領から離れ一色氏など在地勢力の支配下となった可能性は十分に考えられる。もっとも一色氏の時代もすぐに終わる。応仁の乱で西軍に組したため、応仁 2 年（1468 年）に知多郡の分郡守護の地位を幕府に没収されたのである。

15 世紀後葉以降の大郷郷や周辺の歴史的状況についてはよく分かっていないが、荒尾氏が支配していた可能性を指摘したい。荒尾氏はもともと大郷郷の北に位置する国衙領荒尾郷を本領とする御家人であるが、寛正 6 年（1465 年）の文書に荒尾氏が知多市寺本一帯の代官として記録されており、大郷郷の南北の地を荒尾氏が支配していたわけである。今回出土した独鈷杵が知多市寺本に位置する法海寺伝世の独鈷杵と類似しており、この時期に大郷郷にもたらされたとすれば、何らかの関係を示すものと言えよう。また、16 世紀には木田城の城主として荒尾氏の名が残っており、大郷郷も同様に荒尾氏の支配化にあった蓋然性は高い。よって、15 世紀前半代の再開発は一色氏、そして、大量出土銭と独鈷杵は荒尾氏と、支配者層の変遷が遺構の背景にあると考えておきたい。

Ⅴ－５期（1480 年頃～ 16 世紀＝大窯期）

大量銭の埋納を画期としてこの時期が始まる。ただし、前節で述べたように大量出土銭が先祖供養の遺構とすれば、その意識は前代に向いており、Ⅴ－４期の最後とも言える。大量出土銭に関しては、今後の調査・分析によって、その帰属時期も変更を迫られるかもしれないが、それはⅤ－５期の中での議論となる。

この時期の遺構は少なく、今回取り上げた遺構群では砂堆南東部の 1 町単位の区画がこの時期に属するが、周辺に当該期の遺構は少ない。2120SD もほぼ埋没する。既往調査でも 16 世紀の遺構・遺物が少ないことから、15 世紀末に大きな変化があったことは確実である。ただし、集落として廃絶したとは考えられない。本調査においても、7 地点ではこの時期の茶釜型の羽釜や土師器皿が出土している。そして、大郷郷は江戸時代には大里村として存在し、北部の区画溝は現代まで受け継がれているのである。

現状では、砂堆北部に中心を移した集落の再編がなされたと考えられる。畑間遺跡のすぐ北に位置する弥勒寺遺跡は 16 世紀の遺構・遺物を主とし、「天文 15 年」（1546 年）銘の硯が出土している（註 92）。集落の中心が北に移動したと考えているが、砂堆北部の多くが土地区画事業地外であるため、この一帯は未調査である。近世には砂堆の北部が郷中と呼ばれ集落の中心であった。中世後期に現在の居住域と重なる場所に集落が移ることは、これまでも指摘されている（註 93）が、本遺跡群では、その名の通り近世大里村の中心域である郷中遺跡において近世の遺構・遺物が多くみられ、これを例証している。

ただし、このような大きな変化の背景はまったく不明である。支配者層によるものと考えているが、大郷郷だけの動きなのか、地域的にみられるものなのか、今後の課題である。

7．おわりに

中世畑間遺跡からは、規格性の高い溝や屋敷地、浮遊性の高い住民、大量の銭貨など一見すると都市的な要素も見出しうるが、畑間遺跡は決して都市的な場ではなく、通常の村落遺跡である。近世に兵農分離や村と町の区別が進み、村から都市的な要素は激減するが、中世においては「村落自体の中に都市的要素が現代・近世よりもより多く混有」（註 94）しており、中世畑間遺跡＝大郷郷はその多様さの一端を示している。

先に述べたように中世において溝を伴った集落が形成・再編成される動きは全国的に共通するものである。中世集落遺跡は溝によって区画された屋敷地、さらに都市的な集落では環濠のような溝もみられる。大規模な水路開発の記録もあり、溝は中世の遺跡を象徴する遺構と言える。県内においても多くの遺跡でこのような様相がみられる。この中で畑間遺跡は溝の規模や遺物の質や量からみれば一般的な集落に過ぎない。しかし、溝を検討した結果、その配置に明確な規格が見出される。これは計画的な開発によって集落が形成されたことを示しているのだろう。杏葉唐草文軒平瓦の存在は熱田社と大郷郷の関係性を示す遺物である。このような状況から 12 世紀末における第 1 砂堆の開発と大郷集落の形成の契機は熱田社領としての荘園開発と考えるのが最も妥当である。砂堆という限定された範囲とその立地（熱田と知多南部の中間点）が計画的な開発に適していたと考えられる。なお、12 世紀後半は、東海地方で中世集落が一斉に形成される時期と指摘されており、多くの中世集落遺跡との比較が今後の課題である。本論では報告書という性格上、必要最低限しか取上げなかったが、同じ熱田社領との比較を試みれば多くの知見を得られるであろう。

14 世紀には遺構・遺物の減少がみられ、その背景には、国衙の介入により熱田社の支配が弱まり、村の開発や維持管理が滞ったこと、浮遊性の高い小百姓や下人層などの減少があったと考えている。ただし、大郷郷の文書記録が残っており、継続的な村民の生活があったことは間違いない。14 世紀末～ 15 世紀にかけて再開発がなされているが、区画溝の規模に変化はみられない。居館の堀と思われるような遺構は未だ確認されておらず、集落の質的な変化は認められない。いわゆる集村化は 16 世紀以降と考えているが、大郷郷では、12 世紀末の集落成立段階から、砂堆という環境下で、散村とは少し異なり、まとまりと規格性のある村落景観をなしていた。

溝や区画からは、集落における面的な多様性が示された。特に既往調査でも指摘されていた砂堆北東部の特殊性は、今回の大量出土銭の発見でより明確となった。他の区画や居住域の差異は住民の階層や職業、土地利用の在り方が反映しているのだろう。しかしながら、調査地の制約から区画内の様相については不明な点が多い。文書に記された郷司の館や氷上宮、科野殿などについては、何ら追及できなかった。

畑間遺跡の大まかな変遷は、これまで中世集落の研究で指摘されている傾向と一致しており、中世大郷郷も中世史の大きな流れの中に位置していることが分かる。12 世紀末～ 13 世紀初頭の大郷郷開発は熱田神宮と鎌倉政権との関係が、13 世紀後半以降の遺構・遺物の減少は知多半島における山茶碗生産の終了が、14 世紀の停滞は国衙と熱田社の相克、15 世紀の変動は守護勢力の伸長や国人層の台頭に伴う荘園制の崩壊がそれぞれの背景にみえてくる。14 世紀末以降の再開発を一色氏によるものと考えたが、それに対抗する熱田社側の動き、惣村化による村民による再開発などの可能性もある。いずれにせよ、多くの村民の日常生活は途絶えることはなく、中世の大郷郷から近世大里村、そして大田町に至るのである。

第５章　総括

最後に各時代ごとに遺跡の様相や変遷について、平成 28 年度調査の成果を総括しておく。

弥生時代から古墳時代に関しては、本年度の調査では、あまり成果を得ることはできなかった。主たる遺構は 4 地点の 4011SD と 6 地点の 6010SD である。水路や区画溝とは考えにくく、既往調査成果と合わせれば、周溝墓の可能性が考えられる。第 4 章第 3 節で試みたような調査成果の統合を当該期に関しても行なえば、一定の様相が見出されるだろう。

古代の遺構・遺物は既往調査成果同様に限定的であるが、7 世紀後半から 8 世紀の遺物が多い。この時代に関しては、北に位置する松崎遺跡との関係が重要となろう。古代の遺構は 1 地点でわずかにその痕跡が見出されたのみであるが、7 地点も比較的古代の遺物が多かった。7 地点のすぐ北側に位置する平成 25 年度 1 地点では、調査区の南側で須恵器が多く出土した。古代の遺構は、中世や近世の遺構と重なり、1150SX や 1180SX のように詳細な様相が把握できない遺構が多いが、遺物の詳細な分析から面的な様相も把握可能と思われる。

中世は今回の調査で最も多くの成果を得られた時代である。既往調査同様に 10 ～ 11 世紀の遺構・遺物がほとんどなく、12 世紀後葉に中世集落が突然形成される状況が確認された。その背景には熱田社による荘園化があると考えられる。13 世紀は知多半島における山茶碗生産の最盛期であり、畑間遺跡でも多くの遺構と遺物が検出される。ところが、山茶碗生産終了とともに遺構・遺物とも減少する。ただし、前章で述べたように、村人の生活は継続している。また中世畑間遺跡の面的な多様性を前章で提示したが、その性格や時期をより詳細に把握するには遺物の分析が必要である。時間などの制約もあったが、方法論も含めて、今回は十分に取り組むことができなかった。

14 世紀における遺構・遺物の減少は既往調査でも指摘されており、今回の調査成果も同様の傾向を示した。ただし、文書記録から集落が継続していることは間違いない。もっとも、14 世紀における遺構・遺物の減少は全国的に指摘されており、本書の範囲を超える問題であるが、人々の流動性が高まったことは、その背景として考えられるのではないだろうか。

14 世紀末から 15 世紀前半には再開発のような動きもみられるが、15 世紀後半以降再び遺構・遺物の減少がみられる。大量出土銭はこの時代の画期に位置すると考えている。中世畑間遺跡の変遷については前章で述べており、ここでは触れないが、大量出土銭や独鈷杵など貴重な資料が出土したことは大きな成果であった。特に大量出土銭が発掘調査において発見される事例は少なく、愛知県内初事例であった。さらに遺構との関係性を検討できる検出状況であったことも特筆される。もっとも、検討に耐えうる調査と報告を行えたのか不安もあるが、調査担当者としての見解は提示した。今後、内部の銭貨の検討も含め、さらに研究・議論が進むことを期待したい。

得られた成果に比して、多くの課題を残す報告となってしまったが、今後の調査・研究に向けて興味深い課題が多い。調査成果を安易に文献史と関連付けることには批判もあるだろうが、地域史を構築するには、やはりそこに挑む必要がある。前章では、その第一歩としての拙論を提示した。今後は文献史学者や郷土史家なども含めた多方面から調査成果を検討してゆく必要があり、畑間遺跡にはその価値があることを今回の調査成果は示している。

註

第１章

（註１）　愛知県教育委員会　1999 年『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』

（註２）　東海市教育委員会 1997 年『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』

（註３）　横須賀町史編纂委員会編　1969 年　『横須賀町史』　横須賀町

（註４）　知多市教育委員会　1979 年　『法海寺遺跡』（知多市文化財報告第 15 集）

（註５）　愛知県史編さん委員会　2010 年『資料編４　考古４　飛鳥～平安』

（註６）　永井伸明・宮澤浩司　2007 年　「伊勢湾を望む海辺の遺跡－東畑遺跡等発掘調査概報－」
『研究報告とうかい』創刊号　東海市教育委員会
宮澤浩司　2009 年「伊勢湾を望む海辺の遺跡（2）－平成 19 年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要－」
『研究報告とうかい』第２号　東海市教育委員会

（註７）　永井伸明ほか　2014 年『愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告－平成 11 ～ 19 年度調査』
東海市教育委員会

第２章

（註８）　調査時は埋納銭という呼称を用いていたが、埋納銭は一定の性格を付与する用語であることから、大量出土銭という呼称に改めた。

（註９）　出土遺物の年代観や型式分類の基準とした論文等は参考文献に挙げている。

（註 10）　中世（Ⅴ期）は平成 25 年度報告において３期区分としたが、今回はさらに細分し５期区分とした。

（註 11）　Ⅲ層は包含層として掘削しているが、この段階で認識できた遺構は測量や部分的な掘り下げなど個別に対応した。ただし、Ⅲ層と遺構埋土の区別が困難であり、正確なプランが検出できないことが多い。

（註 12）　21 年度調査では、調査時に不明遺構としていたものを報告書で竪穴建物と変更しており、今回はその逆となる。その判断は難しいが、この一帯に古代の遺物が多くみられる点は留意すべきである。

（註 13）　一つの例として、平成 23 年度調査の３地点（龍雲院遺跡）の 020SX（流路または溝）を挙げておく。13 世紀頃の遺構であるが、江戸時代以来の旧家の敷地境と一致していた。

（註 14）　平成 24 年度の SD4031 の底点レベルは TP2.25 mほど、2120SD の底点レベルが P2.80 mほどなので、西へ 120 ～ 140 mで、約 55cm 下がっている。

（註 15）　調査時の記録は最上層とＡ～Ｅ層に分けており、Ａ層が最上層ｂ、Ｂ層が上層、Ｃ層が中層、Ｄ、Ｅ層が下層である。

（註 16）　2120SD と 2135SD の切り合いは調査時には前者が後者を切っているとしていた。しかし、2135SD から 15 世紀の遺物が出土していること、2120SD 上層との関係性から、2135SD は 2120SD の中～下層より新しい溝であり、切り合い関係を誤認していたと判断する。ただし、他の遺構も含め、調査時の記録の改変は行っていない。

（註 17）　本遺跡は砂堆に立地し、遺構埋土も大部分は砂質である。必然的に埋まりやすいこともあって多くの遺構は自然埋没と判断しているが、人為的に埋めているであろう大量銭出土遺構の埋土も他の遺構と何ら差異はなく、埋没状況の判断は困難である。

（註 18）　この撹乱は当初は 2114SD としていたが、掘削と壁面観察の結果、現代撹乱の影響で地山層まで二次的な変色によって黒色化していることが判明した。この黒色化の中で、2221SK は遺物の存在とわずかな埋土の緩さから検出したが、正確さは不安が残る。

（註 19）　平成 23 年度調査の４地点では列状に土器棺墓が見つかっている。2221・2222SK は土器棺墓にしては小さい壺であるが、列状の土器埋納遺構の可能性は考えられる。

第３章

（註 20）　この表は本報告における記述の基準として提示しており、各編年の対応関係や実年代についての厳密さを追求しているものではない。また、担当者の力量から詳細な型式分類ができないことも考慮したものであることを断っておきたい。なお、各編年の参考とした論文は巻末の参考文献に記している。

（註 21）　これらについては製塩土器という指摘もあるが、今回の資料では被熱痕などは見出せなかった。
石黒立人　2003 年　『烏帽子遺跡Ⅱ』（財）愛知県埋蔵文化財センター
考古学フォーラム編　2010 年『東海土器製塩研究』　考古学フォーラム

（註 22）　上層の図化（第 16 図）した遺物の取上げ日を基準に、調査日誌なども参考として分けた。

（註 23）　愛知県内の中世遺跡における破片数計測データは以下の論文に提示されているが、12 ～ 14 世紀では山茶碗の比率は８割を超えるものも多い。
尾野善裕　1996 年　「東海地方の尾張地域を中心とした中世の土器・陶磁器組成について」
『中近世土器の基礎研究 11』　中世土器研究会
川井啓介　2000 年　「三河地域の中世集落」
『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第１号　（財）愛知県埋蔵文化財センター

（註 24）　以下の論文で第７型式は 33％、第８型式では 95％が瀬戸産というデータが提示されている。遺構や調査地点の差もあろうが、2153SX や 2180SD と比べても 2120SD 出土の瀬戸産山茶碗は少ない。
　中野晴久　2013 年　『中世常滑窯の研究』　愛知学院大学学位請求論文
（註 25）　愛知県史編さん委員会編　2017 年　『資料編５　考古５　鎌倉～江戸』　愛知県
（註 26）　グライ化のため周辺も含め変色しており、上面に存在した遺構を見逃している可能性がある。
（註 27）　模鋳銭については、判断に不安があり本報告では記載しない。
（註 28）　鈴木公雄　1999 年　『出土銭貨の研究』　東京大学出版会
（註 29）　時代が下がると鈷部の尖りが弱く、把部に対して短くなるという。
　石田茂作　1977 年『仏教考古学論攷　五　仏具編』　思文閣出版
（註 30）　法海寺の独鈷杵は、長さは 13.7cm、重量は 100.1 ｇと法量はほぼ同じである。質感も類似するが、使用による手ずれがみられる。鈷部はわずかに長く 4.4cm で、鈷部比は 0.89 となる。法海寺・知多市歴史民俗博物館のご厚意により実見させて頂いた。記して感謝したい。
　知多市誌編さん委員会編　1983 年　『知多市誌　資料編 2』
第４章第１節
（註 31）　ただし近世の１例（新城市＝旧鳳来町の下吉田出土銭）を加えれば 14 例となる。
愛知県史編さん委員会編　2017 年　『資料編５　考古５　鎌倉～江戸』愛知県
（註 32）　下坂本清合遺跡については、以下の鳥取県の HP による。
http://www.pref.tottori.lg.jp/251795.htm
（註 33）　撮影は名古屋市工業研究所に依頼して行なった。
使用機材は TOSCANER-32252 μｈ（最大管電圧 225kV）である。
（註 34）　岩名健太郎　1999 年　「東海地方における大量出土銭の収納容器」
『出土銭貨』第５号　出土銭貨研究会
（註 35）　永井久美男編　1994 年　『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会
（註 36）　辻本武　1996 年　『吉野遺跡出土埋蔵銭の緡』
『出土銭貨』第 12 号　出土銭貨研究会
（註 37）　山口県教育委員会　1980 年　『下右田遺跡　第４次調査概報』
（註 38）　永井久美男編　1996 年　『中世の出土銭　補遺１』兵庫埋蔵銭調査会
　藤沢高広　1997 年　「長野県中野市西条・岩船遺跡群出土の備蓄銭」『出土銭貨』第 12 号
（註 39）　紐の痕跡が残っていた銭貨を１枚目とし、外しながら表裏を確認した。結果は下記の通りであった。
（表→表→裏→裏→裏→表）
（註 40）　鈴木公雄　1999 年　『出土銭貨の研究』　東京大学出版会
　なお鈴木編年の６期以降を再検討した永井編年では宣徳通宝を最新銭とする６期を 15 世紀第２四半世紀から 1560 年代までとしており、５期以降の年代決定は最新銭だけでは困難と認められる。
　永井久美男編　1996 年　『中世の出土銭　補遺１』兵庫埋蔵銭調査会
（註 41）　鈴木公雄　1999 年　『出土銭貨の研究』　東京大学出版会
　櫻木晋一　2015 年　『貨幣考古学の世界』　ニューサイエンス社
（註 42）　永原慶二　1993 年「伊勢商人と永楽銭基準通貨圏」
『知多半島の歴史と現在№５』　日本福祉大学知多半島総合研究所
（註 43）　鈴木公雄　1999 年　『出土銭貨の研究』　東京大学出版会
（註 44）　山形県埋蔵文化財センター　1996 年　『土塚遺跡・梵天塚遺跡・中谷地遺跡発掘調査報告書』
（註 45）　橋口定志　1999 年「銭を埋めること」『越境する貨幣』　歴史学研究会編　青木書店
（註 46）　前橋市教育委員会　2011 年　『大渡道場遺跡』
（註 47）　工藤清泰　1995 年　「城館生活の一断面」『中世の風景を読む１』　網野善彦ほか編　新人物往来社
浪岡城では堀から銭貨と数珠が伴って出土しており、祭祀性が指摘されている。
（註 48）　京都文化財団　1988 年　『平安京左京八条三坊七町』
（註 49）　写真図版 25 と図版 12 は拡張前の分層線を示す。第 29 図の破線は写真 44 の段階の図面であり、土坑掘削時に壺が見えていたと判断したものである。
（註 50）　出土銭貨研究会　1999 年　『出土銭貨』第 12 号
（註 51）　藤澤良祐　2001 年「埋納された古瀬戸製品」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要ⅩⅧ』
（註 52）　鈴木公雄　1999 年「備蓄銭の容器について」『出土銭貨』第 12 号　出土銭貨研究会
（註 53）　足立順司　2002 年　「中部地方」『出土銭貨研究の最前線』季刊考古学第 78 号
（註 54）　藤澤良祐　2001 年「埋納された古瀬戸製品」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要ⅩⅧ』　同上
（註 55）　同上
（註 56）　長坂町教育委員会　1986 年　『小和田館跡』

（註 57）　山口県教育委員会　1980 年　『下右田遺跡　第 4 次調査概報』
（註 58）　足立順司　1981 年　「掛川市大竹遺跡の研究」『森町考古 16』森町考古学研究会
（註 59）　鈴木公雄　1999 年　『出土銭貨の研究』　東京大学出版会
（註 60）　それぞれが経塚に伴う事例は多いが、銭貨・独鈷杵（密教法具）・和鏡が 3 点そろって出土する経塚は少ない。愛知県新城市鳳来町の鏡岩下遺跡（五鈷杵）や京都市鞍馬寺経塚があるが、1 基の経塚に伴うわけではないようだ。
　鳳来町教育委員会　1967 年　『鳳来町史　文化財編』
　難波田徹　1977 年　『鞍馬寺経塚遺宝覚書』　鞍馬弘教総本山鞍馬寺出版部
（註 61）　愛知県史編さん委員会編　2017 年　『資料編 5　考古 5　鎌倉～江戸』愛知県
　県史においては 1,000 枚以上の出土事例を大量銭としており、豊橋市本郷遺跡を含めていない。本郷遺跡では長径 1m、短径 0.8 mの楕円形土坑から 6 連の緡銭（1 緡が 96 ～ 115 枚）を含む総計 896 枚の銭貨が出土した。最新銭は威淳元宝（初鋳年 1265 年）である。土坑は黄白色の粘質土で意図的に埋め戻しており、祭祀性が指摘されている。
　柴垣勇夫　1986 年「愛知県における銭貨埋納容器の諸例」『愛知県立陶磁資料館研究紀要 5』
（註 62）　篠島では正法寺出土銭に加え、伊勢湾台風後に海岸で見つかった前浜出土銭が伝えられている。現存する銭貨は 188 枚（最新銭は 1423 年初鋳の朝鮮通宝）であるが、近隣に埋まっていた大量銭が台風によって破壊され散在したものであるとすれば、これも近距離の事例に加わる。
　奥川広成　1989 年　「付載第二　篠島前浜出土の備蓄銭」『神明社貝塚』　南知多教育委員会
（註 63）　橋口定志　1999 年　「銭を埋めること」『越境する貨幣』　歴史学研究会編　青木書店
（註 64）　峰岸純夫　1999 年　「中世埋蔵銭についての覚書　『越境する貨幣』　歴史学研究会編　青木書店
（註 65）　橋口定志　2002 年　「中世大量出土銭貨の性格」『出土銭貨研究の最前線』季刊考古学第 78 号
（註 66）　杉原和雄・森島康雄　1993 年「京都府出土の備蓄古銭」『摂河泉文化資料』42・43 号　摂河泉文庫
（註 67）　栗本慎一郎　2013 年『経済人類学』　講談社
（註 68）　櫻木晋一　2015 年　『貨幣考古学の世界』　ニューサイエンス社
（註 69）　大山喬平　1978 年『日本中世農村史の研究』岩波書店
第 4 章第 2 節
（註 70）　下記の資料をもとに作成した。
　石田茂作　1977 年『仏教考古学論攷　五　仏具編』　思文閣出版
　足立順司　1981 年　「掛川市大竹遺跡の研究」『森町考古 16』森町考古学研究会
　茨城県教育財団　2009 年　『石川西遺跡』
　上市町教育委員会　2002 年　『黒川上山古墓群発掘調査第 7 次調査概報』
　上市町教育委員会　2005 年　『上市町黒川遺跡群発掘調査報告書』
　千葉県教育振興財団　2015 年　『はるかなる西上総の歴史』
　仙台市教育委員会　2011 年　『薬師堂東遺跡』
　福島県立博物館　2002 年　『博物館だより 67』
　宮城県教育委員会　2001 年　『名生館遺跡ほか』
　八幡市教育委員会　2014 年　『護国寺跡現地説明会資料』
（註 71）　註 30 参照
（註 72）　南知多町誌編さん委員会　1997 年　『南知多町誌　資料編 6 』
（註 73）　鳳来町教育委員会　1967 年　『鳳来町史　文化財編』
　愛知県の HP より、文化財の指定にともなう以下の PDF 資料を参照した。
http://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/202722.pdf
第 4 章第 3 節
（註 74）　原田信男・渋江芳浩　1994 年『中世村落の景観復原について』　札幌大学女子短期大学部紀要 23
（註 75）　表 15 は下記の文献をもとに作成した。本節の文書記録に関する記述も下記の文献を参照した。
　愛知県史編さん委員会編　2001 年『愛知県史　資料編 8　中世 1 』　愛知県
　上村喜久子　2012 年『尾張の荘園・国衙領と熱田社』　岩田書院
　大府市誌編さん委員会　1986 年『大府市誌』　大府市
　新修名古屋市史編集委員会編　1998 年『新修名古屋市史　第二巻』　名古屋市
　東海市史編さん委員会編　1990 年　『東海市史　通史編』　東海市
　知多市誌編さん委員会編　1981 年　『知多市誌　本文編』　知多市
　半田市誌編さん委員会編　1989 年『半田市誌』　半田市
　藤本元啓　2003 年　『中世熱田社の構造と展開』　続群書類従完成会

（註 76）　網野善彦　1978 年 『無縁・公界・楽』 平凡社
（註 77）　同上
（註 78）　磯貝富士男　2002 年 『中世の農業と気候』 吉川弘文館
（註 79）　藤本元啓　2003 年 『中世熱田社の構造と展開』 続群書類従完成会
（註 80）　同上
（註 81）　灌漑施設などの維持管理は名主層が担うことが多いという（註 69 文献）。ただし、中央大溝は単なる水路ではなく、集落を南北に分ける区画溝としての機能もあり、根本的には領主層の管理下にあった溝と考えている。
（註 82）　石黒立人ほか　1990 年 『阿弥陀寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
奥川弘成・立松彰　1998 年 『ウスガイト遺跡の記憶』 武豊町教育委員会
（註 83）　本格的な方格地割は 15 世紀以降に形成され、それが近世以降に砂堆北部（郷中遺跡）へ展開していった可能性もあり、これが大郷郷から大里村への動き＝集村化であったのかもしれない。しかしながら、13 世紀の遺物のみが出土する溝もあり、1 町もしくは半町単位の溝群が 12 世紀末～ 13 世紀から形成され始めたことは間違いないと考えている。
（註 84）　今回および既往調査でもウマの骨が出土している。また、遺跡南部に位置する平成 24 年度調査の 7 地点では 14 ～ 15 世紀に比定されるウマの墓が見つかっている。埋葬されていたウマは中世の平均的なウマよりも大きく、特別な存在であったのではないかと指摘されている。
安部みき子　2015 年 「東海市東畑遺跡出土の埋葬馬の分析」
『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』 東海市教育委員会
（註 85）　考古学フォーラム編　2002 年『東海の中世集落を考える』
（註 86）　杏葉唐草文軒平瓦は吉田１・２号窯（常滑窯編年１ｂ～２型式期）では出土しておらず、後出する社山古窯（１ｂ～３型式期）で出土している。杏葉唐草文軒平瓦は京都に供給された瓦よりは後出の在地向けの瓦と考えられ、常滑窯３型式期に生産されていたとすれば、畑間遺跡の状況と整合性がある。なお、畑間遺跡ではこれまでに 12 点出土している。いずれも顎貼り付け技法で成形されているとみられるが、瓦当周縁部の面取りや、顎貼り付け時の補強粘土の多寡によって外見上はかなりの個体差がみられる。これらを時期差とできるのか分からないが、より詳細な検討を要する。
大府市誌編さん委員会編　1990 年 『大府市誌　資料編　考古』
愛知県史編さん委員会編　2012 年 『別編　窯業３　中世・近世常滑系』愛知県
柴垣勇夫　1982 年 「尾張における平安末期の瓦生産」『愛知県陶磁資料館研究紀要１』
杉崎章・楢崎彰一ほか　1956 年 『横須賀町史別冊　横須賀の遺跡』 横須賀町史編纂委員会
永井邦仁　2014 年 『愛知県における中世瓦の展開とその特徴』 愛知県埋蔵文化財センター研究紀要第 15 号
（註 87）　中野晴久　2013 年 『中世常滑窯の研究』 愛知学院大学学位請求論文
上記論文においては、瀬戸産山茶碗の出土比率から、「生産者の居住域としては理解しづらい」とも述べられている。しかし、後述するように、知多半島における山茶碗生産の終焉と瀬戸における生産の拡大が工人の移動などを伴う一連の動きと考えられる（註 90 文献）ならば、瀬戸産製品の存在は両地域の結び付きを示すとの解釈も成り立つのではないだろうか。つまり、商品として瀬戸産山茶碗がもたらされたのではなく、何らかの人的交流（窯業に関わる交流や婚姻のような生活に関わる交流など）の結果ということである。
（註 88）　範義という御家人が横須賀郷を所領し、常滑焼を東国に輸出していたという説が提示されている。
福島金治　1997 年 『金沢北条氏と称名寺』 吉川弘文館
（註 89）　考古学フォーラム編　2002 年『東海の中世集落を考える』
（註 90）　愛知県史編さん委員会編　2012 年 『別編　窯業３　中世・近世常滑系』愛知県
（註 91）　藤本元啓　2003 年 『中世熱田社の構造と展開』 続群書類従完成会
（註 92）　東海市教育委員会　1998 年 『知多弥勒寺遺跡発掘調査報告』
（註 93）　広瀬和雄　1988 年 「中世村落の形成と展開」 物質文化 50
少なくとも本遺跡においては、この指摘通りの状況が想定できる。
（註 94）　清水三男　1996 年 『日本中世の村落』 岩波書店

参考文献

既往調査

1　愛知県教育委員会　1999 年　『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』

2　東海市教育委員会　1997 年　『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』

3　立松彰・永井伸明　2004 年　『愛知県東海市畑間遺跡発掘調査報告』　東海市教育委員会

4　永井伸明・宮澤浩司　2007 年　「伊勢湾を望む海辺の遺跡－東畑遺跡等発掘調査概報－」
『研究報告とうかい』創刊号　東海市教育委員会

5　宮澤浩司　2009 年　「伊勢湾を望む海辺の遺跡（２）－平成 19 年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要－」
『研究報告とうかい』第２号　東海市教育委員会

6　桐山秀穂・宮澤浩司ほか　2009 年　『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

7　有馬啓介・宮澤浩司ほか　2012 年　『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

8　筧和也・宮澤浩司ほか　2012 年　『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

9　坂野俊哉・宮澤浩司ほか　2013 年　『畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

10　筧和也・宮澤浩司ほか　2014 年　『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

11　永井伸明ほか　2014 年　『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告 - 平成 11 ～ 19 年度調査』
東海市教育委員会

12　中村毅・宮澤浩司ほか　2015 年　『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

13　坂野俊哉・宮澤浩司ほか　2016 年　『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

14　丹生泰雪・宮澤浩司ほか　2017 年　『畑間遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

遺物の年代観・用語等

15　愛知県史編さん委員会編　2003 年　『資料編２　考古２　弥生』愛知県

16　愛知県史編さん委員会編　2005 年　『資料編３　考古３　古墳』愛知県

17　愛知県史編さん委員会編　2010 年　『資料編４　考古４　飛鳥～平安』愛知県

18　愛知県史編さん委員会編　2017 年　『資料編５　考古５　鎌倉～江戸』愛知県

19　愛知県史編さん委員会編　2007 年　『別編　窯業２　中世・近世瀬戸系』愛知県

20　愛知県史編さん委員会編　2012 年　『別編　窯業３　中世・近世常滑系』愛知県

21　石黒立人・加納俊介編　2002 年　『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社

22　石田茂作　1977 年　『仏教考古学論攷　五　仏具編』　思文閣出版

23　考古学フォーラム編　1996 年　『鍋と甕　そのデザイン』　考古学フォーラム

24　考古学フォーラム編　2010 年　『東海土器製塩研究』　考古学フォーラム

25　中世土器研究会編　1995 年　『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

26　中野政樹編　1969 年　『和鏡』　日本の美術 42　至文堂

27　中野晴久　2013 年　『中世常滑窯の研究』　愛知学院大学学位請求論文

28　藤沢良祐　2008 年　『中世古瀬戸窯の研究』　高志書院

29　山崎信二　2000 年　『中世瓦の研究』　奈良文化財研究所

銭貨・大量出土銭

30　坂詰秀一編　2002 年　『出土銭貨研究の最前線』　季刊考古学第 78 号　雄山閣

31　櫻木晋一　2015 年　『貨幣考古学の世界』　ニューサイエンス社

32　出土銭貨研究会編　1996 年　『出土銭貨』第５号　出土銭貨研究会

33　出土銭貨研究会編　1997 年　『出土銭貨』第８号　出土銭貨研究会

34　出土銭貨研究会編　1999 年　『出土銭貨』第 12 号　出土銭貨研究会

35　鈴木公雄　1999 年　『出土銭貨の研究』　東京大学出版会
36　永井久美男編　1994 年　『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会
37　永井久美男編　1996 年　『中世の出土銭 - 補遺Ⅰ』兵庫埋蔵銭調査会
38　永井久美男　2002 年　『新版　中世出土銭の分類図版』　高志書院
39　歴史学研究会編　1999 年　『越境する貨幣』　　青木書店
考古学・歴史全般
40　愛知県史編さん委員会編　2001 年　『愛知県史　資料編８　中世１』　愛知県
41　愛知県史編さん委員会編　2016 年　『通史編１　原始・古代』愛知県
42　網野善彦　1991 年　『日本中世土地制度史の研究』　塙書房
43　網野善彦・石井進・稲垣泰彦・永原慶二編　1989 年　『荘園入門　講座日本荘園史１』　吉川弘文館
44　上村喜久子　2012 年　『尾張の荘園・国衙領と熱田社』　岩田書院
45　宇野隆夫　2001 年　『荘園の考古学』　青木書店
46　大山喬平　1978 年　『日本中世農村史の研究』　岩波書店
47　小野正敏編　2001 年　『図解・日本の中世遺跡』　東京大学出版会
48　大府市誌編さん委員会　1986 年　『大府市誌』　大府市
49　小山靖憲編　1987 年　『絵図にみる荘園の世界』　東京大学出版会
50　金田章裕　1993 年　『微地形と中世村落』　吉川弘文館
51　木村茂光　1992 年　『日本古代・中世畠作史の研究』　校倉書房
52　考古学フォーラム編　2002 年　『東海の中世集落を考える』考古学フォーラム
53　坂詰秀一編　1992 年　『中世を考古学する』　季刊考古学第 39 号　雄山閣
54　佐々木銀弥　1964 年　『荘園の商業』　吉川弘文館
55　新修名古屋市史編集委員会編　1997 年　『新修名古屋市史　第一巻』　名古屋市
56　新修名古屋市史編集委員会編　1998 年　『新修名古屋市史　第二巻』　名古屋市
57　荘園史研究会編　2013 年　『荘園史研究ハンドブック』東京堂出版
58　高橋学　2003 年　『平野の環境考古学』　古今書院
59　東海市史編さん委員会編　1990 年　『東海市史　通史編』　東海市
60　知多市誌編さん委員会編　1981 年　『知多市誌　本文編』　知多市
61　永原慶二　1998 年　『荘園』　吉川弘文館
62　半田市誌編さん委員会編　1989 年　『半田市誌』　半田市
63　藤本元啓　2003 年　『中世熱田社の構造と展開』　続群書類従完成会
64　横須賀町史編纂委員会編　1969 年　『横須賀町史』　横須賀町

付論

自然科学分析

付論１　大量出土銭Ａ（古瀬戸三耳壺）内部出土の板状材の分析
付論２　大量出土銭壺内の繊維片の同定
付論３　金属製品の蛍光Ｘ線分析

付論１　大量出土銭Ａ（古瀬戸三耳壺）内部出土の板状材の分析

藤根　久・竹原弘展（パレオ・ラボ）

1．はじめに

畑間遺跡は、東海市大田町地内の伊勢湾に面した砂地上に広がる弥生時代から中世を中心とした遺跡である。調査では、大量の銭貨が納められた中世（鎌倉～室町時代）の陶器壺（古瀬戸と常滑焼）が２点出土した。このうち、古瀬戸壺（三耳壺）の中から板状の物質が検出された。ここでは、この材質を調べるために、実体顕微鏡観察と蛍光Ｘ線分析を行った。

2．試料と方法

試料は、古瀬戸壺（三耳壺）から出土した板状材１点である。

試料を実体顕微鏡で観察した後、粘土部分の蛍光Ｘ線分析を行った。試料は、マイラーフィルムのホルダに入れて測定した。分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計 SEA1200VX を使用した。装置は、Ｘ線管が最大 50kV、1000 μ A のロジウム（Rh）ターゲット、Ｘ線照射径が 8mm または 1mm、Ｘ線検出器は SDD 検出器（Vortex）である。検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）であるが、軽元素の感度は蛍光Ｘ線分析装置の性質上若干低い。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが 15kV（一次フィルタ無し）・50kV（一次フィルタ Pb 測定用、Cd 測定用）の３条件で、測定時間は各条件 100 ～ 300s、管電流自動設定、照射径 8mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、標準試料を用いないファンダメンタルパラメータ法（FP 法）による半定量分析を行った。

3．結果および考察

板状の蓋は、炭化植物遺体またはその痕（葉身の一部）が随所に含まれる灰黄色（2.5Y 6/2）の粘土である。この板状粘土は厚さ 5mm 前後で、炭化植物遺体と粘土が互層をなした層状粘土である（図版 1-2 ～ 8）。また、この板状粘土は、比較的固結しているが、未焼成の粘土である。

粘土部分の蛍光Ｘ線分析では、ナトリウム（Na2O）、マグネシウム（MgO）、アルミニウム（Al2O3）、ケイ素（SiO2）、リン（P2O5）、カリウム（K2O）、カルシウム（CaO）、チタン（TiO2）、マンガン（MnO）、鉄（Fe2O3）、銅（CuO）、亜鉛（ZnO）、ルビジウム（Rb2O）、ストロンチウム（SrO）、イットリウム（Y2O3）、ジルコニウム（ZrO2）、バリウム（BaO）、鉛（PbO）が検出された（表 2）。

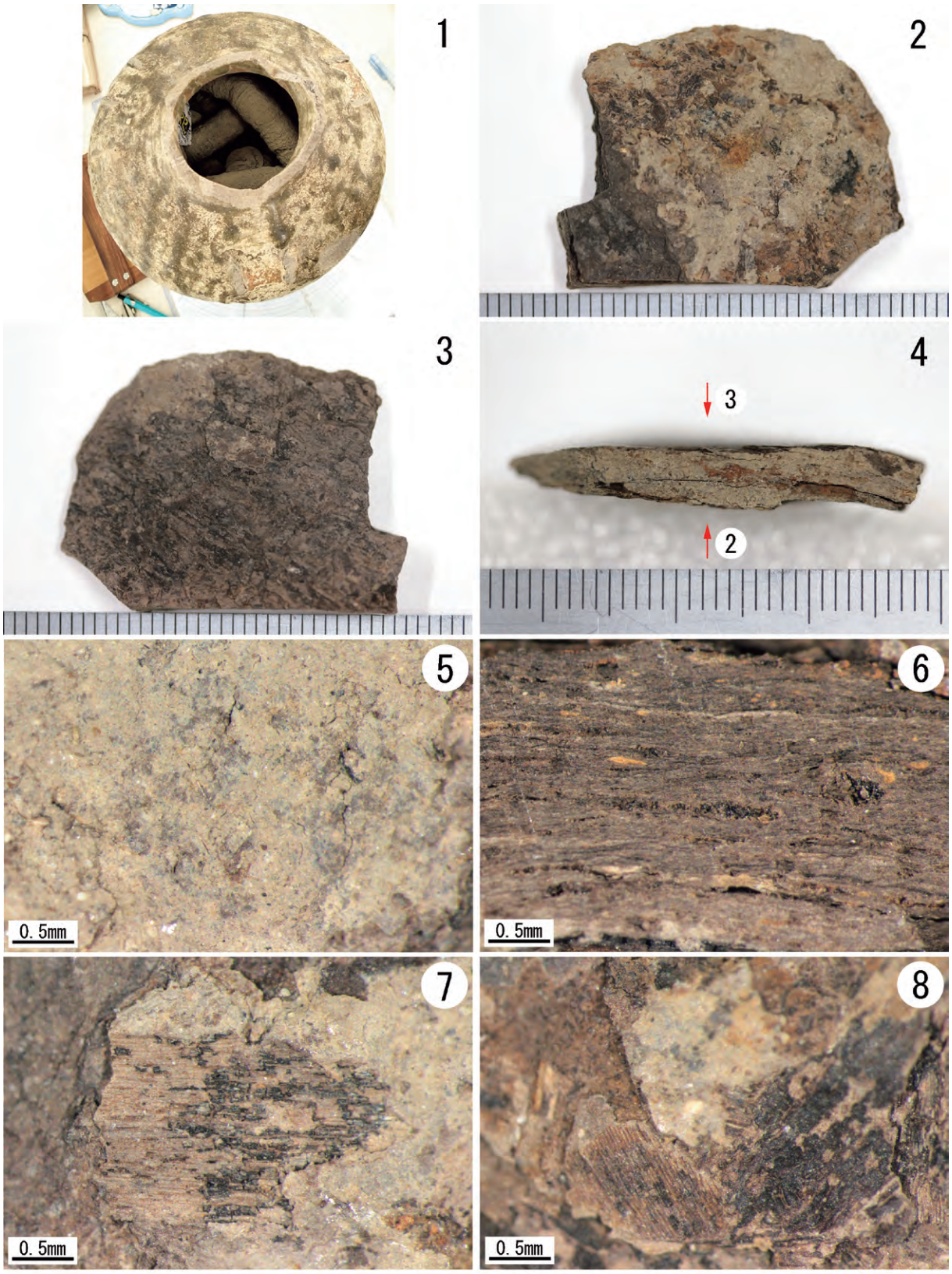
このうち、アルミニウム（Al2O3）が 23.52% 検出されているため、粘土分が多いと推定される。なお、銅（CuO）が 0.52%、鉛（PbO）が 0.18% 含まれていたが、これらは自然の堆積物には含まれない元素であり、壺内の古銭の成分による汚染と考えられる。

遺跡の東側には大府丘陵が位置し、新第三紀鮮新世の矢田川累層が分布する（図１；凡例 Y1 および Y2）。坂本ほか（1986）によると、未固結の砂層とシルト層とが数 mm ごとの厚さで繰り返す互層からなる。シルト層は灰白色・塊状で、時に植物破片を多く含んで暗褐色を呈したり、亜炭層を挟んだりする。

検討した板状の蓋は、炭化植物遺体と粘土が互層をなした層状粘土（またはシルト質粘土）であり、周辺の丘陵に分布する矢田川累層の剥離し易い板状粘土をそのまま利用したと考えられる。

表１　蛍光Ｘ線半定量分析結果（重量%）

分析No.	分析試料	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	CuO	ZnO	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2	BaO	PbO	合計
1	灰黄色粘土	2.53	0.60	23.52	63.80	0.74	2.27	1.03	0.74	0.29	3.68	0.52	0.01	0.02	0.01	0.01	0.03	0.02	0.18	100.00



図版1　古瀬戸壺（三耳壺）と板状蓋の実体顕微鏡写真
1.古瀬戸壺　2.a面　3.b面　4.断面　5.粘土表面（a面）　6.板状蓋の断面
7-8.炭化植物遺体痕（a面）

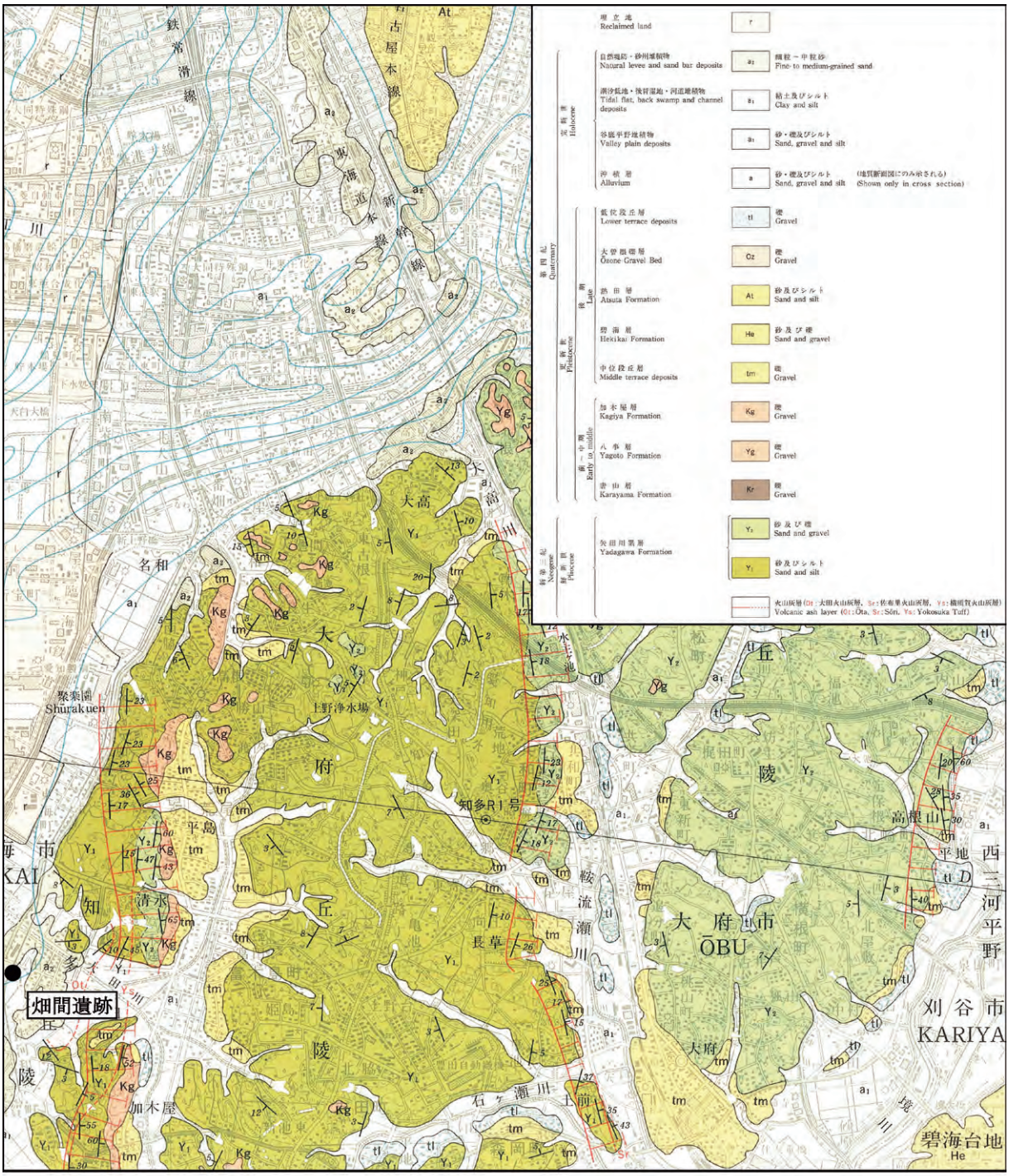


図1　畑間遺跡と周辺の地質
（坂本ほか（1986）名古屋南部地域の地質（5万分の1地質図幅）を編集）

引用文献

中井　泉編　（2005）　蛍光X線分析の実際．242p，朝倉書店．

坂本　亨・高田康秀・桑原　徹・糸魚川淳二　（1986）　名古屋南部地域の地質．地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅），55p，地質調査所．

付論２　大量出土銭壺内の繊維片の同定

小林克也（パレオ・ラボ）

1．はじめに

畑間遺跡から出土した大量出土銭内部から抽出した繊維片の同定を行なった。

2．試料と方法

試料は、大量出土銭Ａ（古瀬戸三耳壺）から出土した繊維片（試料 No.1：図版 1-1）と、大量出土銭Ｂの常滑壺から出土した繊維片（試料 No.2：図版 1-2）の２点である。

繊維片の同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面、縦断面について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製　VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3．結果

同定の結果、繊維片はいずれも単子葉植物のイネ科であった。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

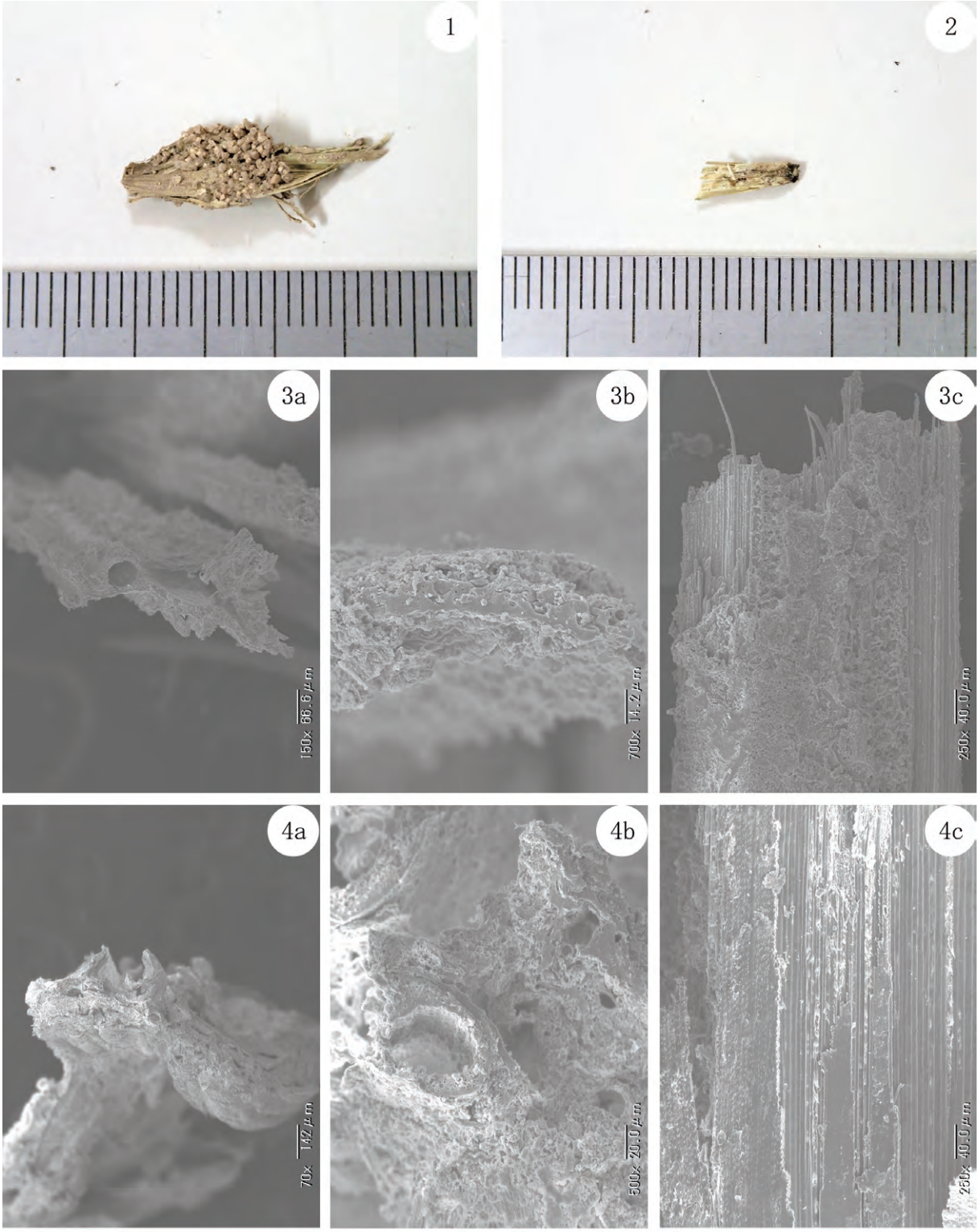
(1) イネ科　Gramineae　図版１　3a-3c(No.1)、4a-4c(No.2)

向軸側の原生木部、その左右の２個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の稈である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は比較的薄い。

イネ科はタケ亜科やキビ亜科など７亜科がみられる単子葉植物であるが、対照標本が少なく、種の同定までには至っていない。

4．考察

繊維片は、いずれもイネ科であった。イネ科植物の茎を撚って紐を作り、銭指紐として利用したと考えられる。



図版1　畑間遺跡出土の銭指紐の試料写真・走査型電子顕微鏡写真

1.同定試料(No.1)、2.同定試料(No.2)、3a-3c.イネ科(No.1)、4a-4c.イネ科(No.2)

a:横断面、b:横断面拡大、c:縦断面

付論３　金属製品の蛍光Ｘ線分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1．はじめに

２地点から出土した、金属製品（銭貨・独鈷杵・和鏡）の蛍光Ｘ線分析を行い、その材質を検討した。

2．試料と方法

分析対象は、銭貨 20 点と和鏡片 1 点、独鈷杵 1 点である。分析は、非破壊で錆の上から測定した。分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、Ｘ線管が最大 50kV、1000 μ A のロジウム（Rh）ターゲット、Ｘ線照射径が 8mm または 1mm、Ｘ線検出器は SDD 検出器である。また、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することで S/N 比の改善が図れる。測定条件は、管電圧 50kV、一次フィルタ・測定時間（s）の組み合わせが Pb 測定用・500s、Cd 測定用・1000s の２条件、管電流自動設定、照射径 8mm、試料室内雰囲気大気に設定した。定量分析は、MBH Analytical 社の 32X LB14（batch A）を用いて補正したファンダメンタル・パラメータ法（FP 法）による半定量分析を装置付属ソフトを用いて行った。

なお、今回行った分析は、錆の上から非破壊で測定する分析である。銅合金製品の腐食は均一には進行せず、化学組成も大きく変化し得るため、今回得られた結果は厳密な値として比較検討すべきではなく、おおまかな、定性的な結果としてとらえる必要がある。

3．結果

表 1 に FP 法による半定量分析の結果を示す。アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、鉄（Fe）といった、表面の汚れに大きく影響される元素を除くと、ニッケル（Ni）、銅（Cu）、亜鉛（Zn）、ヒ素（As）、銀（Ag）、スズ（Sn）、アンチモン（Sb）、金（Au）、水銀（Hg）、鉛（Pb）、ビスマス（Bi）が検出された。

［銭貨］

（分析 No.1 ～分析 No.20）

いずれも銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）が主に検出され、Cu-Sn-Pb 系の青銅製と考えられる。分析 No.6 の開元通宝と分析 No.20 の文久永宝はスズ（Sn）がやや少ないが、全体的に銅（Cu）が比較的少なく、スズ（Sn）と鉛（Pb）が多い傾向がみられた。ただし、上述の通り非破壊分析であるため、これらの傾向が、銭貨本来の化学組成によるものか、腐食の影響によるものかは不明である。銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）以外の元素では、

表１　半定量分析結果（mass%）

	分析 No.	銭種・器種		Cu	Sn	Pb	As	Ni	Zn	Ag	Sb	Au	Hg	Bi
			分析線	Kα	Kα	Lβ	Kβ	Kα	Kα	Kα	Kα	Lα	Lα	Lα
3	1	開元通宝		34.30	28.89	36.01	tr	0.04	—	0.08	0.20	—	—	0.48
4	2	開元通宝		45.87	23.24	29.41	0.50	0.09	—	0.23	0.43	0.12	—	0.11
5	3	開元通宝		38.80	6.32	49.59	2.51	0.08	—	0.41	0.78	—	—	1.51
12	4	皇宋通宝		40.09	21.34	38.12	tr	0.04	—	0.18	0.05	—	—	0.17
13	5	皇宋通宝		29.42	24.87	45.19	tr	0.02	—	0.09	0.07	—	—	0.33
14	6	皇宋通宝		42.78	20.28	35.85	tr	—	—	0.04	0.09	—	—	0.96
18	7	熙寧元宝		36.32	34.40	28.87	tr	—	0.18	0.05	0.08	—	—	0.10
20	8	熙寧元宝		33.27	25.87	39.95	tr	0.02	0.32	0.01	0.14	—	—	0.42
21	9	熙寧元宝		31.62	25.72	41.82	0.16	0.02	—	0.17	0.03	—	0.14	0.31
24	10	元豊通宝		54.83	13.48	31.30	0.08	0.02	—	0.10	0.02	—	0.03	0.13
27	11	元豊通宝		40.27	21.72	37.88	tr	—	—	0.02	0.02	—	—	0.08
28	12	元豊通宝		38.24	21.25	40.13	tr	—	—	0.18	0.10	—	—	0.11
30	13	元祐通宝		36.12	19.30	44.11	tr	—	—	0.14	0.21	—	—	0.12
31	14	元祐通宝		37.60	19.83	41.28	tr	0.02	—	0.18	0.71	—	—	0.38
32	15	元祐通宝		39.89	22.47	37.09	tr	—	—	0.22	0.17	—	—	0.17
37	16	永楽通宝		30.04	23.67	45.33	tr	0.02	—	0.17	0.45	—	—	0.33
41	17	永楽通宝		30.86	15.65	52.74	tr	0.02	—	0.09	0.31	—	—	0.32
44	18	永楽通宝		55.77	10.21	33.52	tr	0.02	—	0.08	0.23	—	—	0.16
49	19	宣徳通宝		34.05	20.97	44.00	tr	0.03	—	0.18	0.46	—	—	0.31
52	20	文久永宝		64.32	2.84	30.72	0.98	0.02	—	0.08	1.04	—	—	—
	21	鏡片	鏡面	53.39	32.63	8.03	4.59	0.01	—	0.29	0.55	0.08	0.19	0.24
			背面	53.55	34.16	6.45	4.66	0.02	—	0.29	0.55	0.08	—	0.24
	22	独鈷杵		26.69	0.47	69.91	1.88	0.02	—	0.78	0.09	—	—	0.15

※tr：痕跡量

ヒ素（As）、ニッケル（Ni）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）、ビスマス（Bi）が、ほとんどの試料から検出された。

分析 No.5 の開元通宝からは、微量の金（Au）が検出された。

分析 No.6 の開元通宝は、上述の通り、スズ（Sn）がやや少ない一方、ヒ素（As）、ビスマス（Bi）がやや多く検出された。

分析 No.7 と分析 No.8 の熙寧元宝からは、微量の亜鉛（Zn）が検出された。分析 No.9 の熙寧元宝と分析 No.15 の元豊通宝からは、微量の水銀（Hg）が検出されたが、水銀（Hg）は鋳造品には通常含まれない物質であるため、銭貨自体の材質に由来しないと考えられる。

江戸時代の銭貨である分析 No.20 の文久永宝は、スズ（Sn）が少ない一方、ヒ素（As）とアンチモン（Sb）がやや多く検出された。

［和鏡片］（分析 No.21）

分析 No.21 の和鏡片からは、銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）、ヒ素（As）が主に検出され、Cu-Sn-Pb-As 系の青銅製品と考えられる。微量成分としては、ニッケル（Ni）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）、ビスマス（Bi）に加え、金（Au）が検出されたのが特徴的であった。また、鏡面からは、鏡背面では検出されなかった水銀（Hg）が微量ながら検出された。鏡面の水銀（Hg）は、鏡磨による鍍錫の痕跡である可能性がある。

［独鈷杵］（分析 No.22）

分析 No.22 の独鈷杵は、スズ（Sn）は微量で、銅（Cu）、鉛（Pb）、ヒ素（As）が主に検出され、Cu-Pb(-As) の銅合金製と考えられる。ほかに、微量のニッケル（Ni）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）、ビスマス（Bi）が検出された。

中世の密教法具については、宮城県郷主内遺跡出土遺物の分析例があるが（松井，2001）、いずれもスズ（Sn）を多く含有している。両分析とも非破壊分析ではあるが、郷主内遺跡の遺物は、スズ（Sn）をほとんど含まない今回の独鈷杵とは特徴が異なると推定される。

4．おわりに

畑間遺跡から出土した、主に中世の金属製品の材質を分析した結果、銭貨 20 点は概ね Cu-Sn-Pb 系の青銅製、和鏡片は Cu-Sn-Pb-As 系の青銅製、独鈷所は Cu-Pb(-As) の銅合金製と考えられた。

引用・参考文献

五十川伸矢（1999）越中氷見の鏡磨道具と鏡磨の歴史．五十川伸矢編「鋳造遺跡出土遺物による日本歴史時代の鏡製作技術の復原研究」：21-32，京都橘女子大学．

岩崎佳枝・網野善彦・高橋喜一・塩村耕校注（1993）七十一番職人歌合・新撰狂歌集・古今夷曲集．新日本古典文学大系，61，621p，岩波書店．

松井敏也（2001）郷主内遺跡出土密教法具の蛍光 X 線分析法による材質分析．岩見和泰編「名生館遺跡ほか―郷主内遺跡」：131-134，宮城県教育委員会．

中井　泉編（2005）蛍光 X 線分析の実際．242p，朝倉書店．

西本右子・佐々木稔（2002）公鋳銭・模鋳銭の化学分析．ぶんせき，10，585-586．

鈴木棠三編（1998）新装版日本職人辞典．359p，東京堂出版．

遺構一覧表

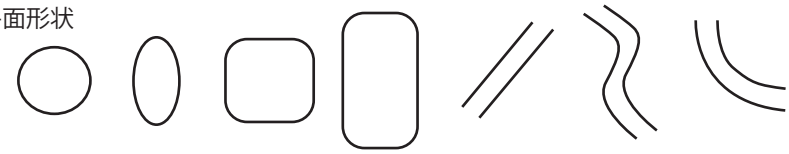
・遺構一覧表凡例

座標のグリッドは主たる位置を示す。
長軸、短軸、深さの単位はｃｍである。
（　）で記した数値は調査区外に続くものなど、調査時に計測できた部分の数値である。
平面形状・断面形状は下記の図による。
埋土と出土遺物は主たるものを記した。
時期は下記の本遺跡の時期区分で記した。
８地点は遺構がなかったため、表も無しとした。

断面形状

U 字形　V 字形　椀形　箱形　皿形

平面形状



円形　楕円形　方形　長方形　直線状　蛇行状　弧状

時期区分表

時期		時代・土器型式
Ⅰ	1	縄文時代晩期以前
	2	縄文時代晩期末～弥生時代初頭
	3	弥生時代前期（樫王式期～水神平式期）
Ⅱ	1	弥生時代中期前半（岩滑式期）
	2	弥生時代中期後半（貝田町式・瓜郷式期～凹線紋系・古井式期）
Ⅲ	1	弥生時代後期（八王子古宮式期～山中式期）
	2	弥生時代終末期～古墳時代前期（廻間式期～松河戸Ⅰ式期）
	3	古墳時代中期（松河戸Ⅱ式期～宇田式期）
Ⅳ	1	古墳時代後期～終末期（東山10号窯式期～東山44号窯式期）
	2	奈良時代（東山50号窯式期～黒笹14号窯式期）
	3	平安時代前期（黒笹90号窯式期～東山72号窯式期）
Ⅴ	1	平安時代後期（山茶碗第２～４型式期）
	2	鎌倉時代（山茶碗第５～7型式期・常滑窯３～６a型式期）
	3	鎌倉時代末～室町時代前期（山茶碗第８～９型式期）
	4	室町時代中期（山茶碗第10～11型式期）
	5	室町時代後期（瀬戸大窯式期）
Ⅵ		江戸時代

平成 28 年度（2016 年）畑間遺跡 1 地点（HM16-1）　遺構一覧表

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
1001	SK	8E17m	102	45	27	楕円形	碗型	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）中粒砂	近世陶器ほか	Ⅵ	
1002	SP	8E17m	43	33	21	円形	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂　　Ⅴ層含む	無し	不明	
1003	SK	8E17m	(60)	70	13	楕円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1004	SK	8E17l	118	75	11	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	土師器	Ⅴ	
1005	SK	8E17 l	62	(18)	16	不明	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
1006	SP	8E17 l	(82)	61	9	楕円形	皿型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	近世陶器	Ⅵ	
1007	SP	8E17 l	37	30	15	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗	Ⅴ	
1008	SP	8E17 l	53	34	18	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	常滑焼	Ⅴ	
1009	SP	8E17 l	46	40	27	楕円形	碗型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	無し	不明	
1010	SK	8E16 l	114	(27)	35	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗	Ⅴ	
1011	SK	8E17 l	78	75	53	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1012	SD	8E16 k	(151)	35	12	直線状	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1013	SP	8E16 l	70	64	26	円形	碗型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	山茶碗　近世陶器	Ⅵ	
1014	SP	8E16 l	52	(41)	11	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	不明小片	不明	
1015	SP	8E16 k	31	22	38	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
1016	SP	8E16 k	41	27	14	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	不明	
1017	SK	8E16 k	82	79	23	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅵ	
1018	SP	8E16 k	61	60	18	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
1019	SP	8E16 j	52	33	18	楕円形	碗型	褐色（10YR4/6）中粒砂	山茶碗　土師器ほか	Ⅴ	
1020	SK	8E16 j	116	32	19	長楕円形	碗型	黒褐色（10YR3/1）細粒砂	常滑焼ほか	Ⅵ	
1021	SK	8E16 k	139	82	12	不整形	皿型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂　貝殻片大量に含む	山茶碗　須恵器　灰釉陶器	Ⅵ	
1022	SX	8E16 k	(794)	(228)	23	不整形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂　貝殻片含む	山茶碗ほか	Ⅵ	
1023	SK	8E16 j	70	47	20	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1024	SP	8E16 j	51	42	58	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	弥生土器　近世瓦ほか	Ⅵ	
1025	SP	8E16 k	52	39	12	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1026	SP	8E16 k	49	40	10	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1027	SK	8E16 j	(136)	66	16	長楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	不明小片（近世か）	Ⅵ	
1028	SP	8E16 k	46	27	14	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	不明小片（近世か）	Ⅵ	
1029	SP	8E16 k	39	20	13	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	不明小片	不明	
1030	SD	8E16 k	—	—	—	直線状	皿型	第7図参照	山茶碗ほか	Ⅴ	
1031	SK	8E15 l	(32)	—	15	不明	碗型	黒褐色（2.5Y3/1）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
1032	SK	8E13 l	109	91	24	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂　　Ⅴ層含む	山茶碗　常滑焼	Ⅴ	
1033	SP	8E17 k	43	31	33	円形	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1034	SP	8E17 k	50	30	21	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗　近世陶器ほか	Ⅵ	
1035	SP	8E16 k	43	37	14	円形	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	無し	Ⅵ	
1036	SK	8E16 k	56	(48)	10	不明	碗型	明黄褐色（10YR6/6）粗粒砂（Ⅴ層）と灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂（Ⅲ層）	無し	不明	
1037	SP	8E16 l	55	(33)	19	不明	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂　　Ⅴ層含む	無し	不明	
1038	SP	8E17 l	52	44	22	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗	Ⅴ	
1039	SP	8E17 l	41	(19)	13	不明	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
1040	SD	8E12 l	—	—	—	直線状	碗型	第８図参照	山茶碗　常滑焼	Ⅴ	上部に近世溝あり

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
1041	SK	8E17k	(36)	21	10	楕円形	碗型	黒褐色（10YR3/2）中粒砂	山茶碗　常滑焼　近世陶器	Ⅵ	
1042	SK	8E14k	104	(64)	25	隅丸方形	碗型	灰黄褐色（10YR5/2）中粒砂　しまりあり	無し	不明	
1043	SP	8E16k	34	34	14	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
1044	SP	8E16k	31	29	20	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	不明	
1045	SP	8E10m	59	57	51	円形	碗型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1046	SK	8E10m	98	81	16	円形	碗型	黒褐色（10YR3/2）中粒砂　Ⅴ層含む	山茶碗ほか	Ⅴ	
1047	SK	8E9mn	78	61	35	楕円形	碗型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	山茶碗　常滑焼ほか	Ⅴ	
1048	SK	8E9m	84	65	26	楕円形	碗型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1049	SK	8E9m	107	87	23	楕円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	山茶碗　須恵器ほか	Ⅴ	
1050	SD	8E9m	(293)	139	43	直線状	碗型	第8図参照	山茶碗　常滑焼ほか	Ⅴ	
1051	SP	8E10m	86	47	41	楕円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	山茶碗　土師器ほか	Ⅴ	
1052	SP	8E10m	(49)	49	22	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	山茶碗　土師器ほか	Ⅴ	
1053	SP	8E10m	(45)	(43)	5	円形	皿型	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1054	SP	8E10m	41	(33)	39	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1055	SP	8E10m	33	(25)	26	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗　弥生土器	Ⅴ	
1056	SP	8E10m	33	29	34	円形	U字型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	山茶碗　常滑焼	Ⅴ	
1057	SK	8E9n	(55)	(27)	13	不明	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	無し	不明	
1058	SP	8E17l	63	43	11	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
1059	SP	8E11l	47	41	28	円形	碗型	暗褐色（7.5YR3/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1060	SK	8E11l	113	107	54	円形	V字型	第9図参照	第47図参照	Ⅴ	
1061	SD	8E11l	(209)	55	33	直線状	碗型	黒褐色（2.5Y3/2）中粒砂　焼土片含む	山茶碗　須恵器	Ⅴ	
1062	SX	8E11l	(287)	(166)	8	不明	皿型	第10図参照	山茶碗　土師器　須恵器	不明	
1063	SK	8E11l	93	(60)	40	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　焼土片少量含む	山茶碗　土師器　須恵器	Ⅴ	
1064	SP	8E11l	47	36	35	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1065	SP	8E11l	48	(31)	33	不明	碗型	黒褐色（2.5Y3/1）細粒砂　Ⅴ層含む	不明小片	不明	
1066	SP	8E11l	72	54	25	円形	碗型	黒褐色（10YR3/2）中粒砂　焼土片含む	山茶碗　須恵器ほか	Ⅴ	
1067	SP	8E11l	(27)	34	11	不明	碗型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	無し	不明	
1068	SP	8E11l	(50)	(39)	28	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1069	SK	8E11l	86	(16)	21	不明	碗型	黄褐色（2.5Y5/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1070	SP	8E11m	28	24	23	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	不明小片	不明	
1071	SP	8E11m	52	43	31	円形	碗型	黒褐色（10YR3/2）中粒砂	山茶碗　須恵器ほか	Ⅴ	
1072	SX	8E10m	(155)	(110)	20	不明	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	山茶碗　須恵器ほか	Ⅴ	
1073	SP	8E11m	58	47	33	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	山茶碗　須恵器ほか	Ⅴ	
1074	SP	8E11m	41	31	15	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	無し	不明	
1075	SP	8E11m	(29)	37	15	不明	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂　Ⅴ層含む	弥生土器ほか	不明	
1076	SP	8E11l	38	33	26	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1077	SP	8E11l	47	44	25	円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1078	SP	8E12l	58	(26)	25	円形	碗型	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）中粒砂	須恵器	Ⅳ	
1079	SP	8E12l	32	27	9	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	弥生土器	不明	
1080	SP	8E12l	39	34	23	円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）細粒砂	無し	不明	
1081	SD	8E12l	(204)	33	4	直線状	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂　貝殻片含む	不明小片	不明	

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
1082	SX	8E13l	(290)	(97)	44	不明	碗型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	山茶碗　近世陶器	Ⅵ	
1083	SK	8E13l	107	(49)	18	楕円形	碗型	黒褐色（2.5Y3/1）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1084	SP	8E14k	56	(29)	不明	不明	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
1085	SP	8E11m	49	35	24	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1086	SP	8E11m	32	24	16	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	山茶碗ほか	Ⅴ	
1087	SP	8E11m	51	(22)	32	不明	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1088	SP	8E10m	37	(27)	21	不明	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1089	SP	8E10m	26	24	22	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1090	SP	8E9m	41	(28)	12	不明	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1091	SD	8E9m	(328)	51	11	直線状	碗型	黒褐色（10YR3/2）中粒砂　Ⅴ層含む	山茶碗ほか	Ⅴ	
1092	SP	8E9m	56	40	41	円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	無し	不明	
1093	SP	8E9m	37	35	19	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	無し	不明	
1094	SP	8E9m	54	(27)	11	楕円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	Ⅴ	
1095	SK	8E9m	68	53	24	楕円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1096	SP	8E9m	49	34	8	楕円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1097	SP	8E9m	48	45	10	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1098	SP	8E10m	40	38	19	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1099	SP	8E10m	41	37	19	円形	碗型	暗褐色（7.5YR3/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1100	SK	8E10m	(108)	(93)	24	不明	碗型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1101	SP	8E10m	47	(30)	24	不明	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1102	SK	8E10l	(106)	(103)	22	不明	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1103	SP	8E11m	49	41	16	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1104	SP	8E11m	29	27	32	円形	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1105	SP	8E11m	25	19	16	円形	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1106	SP	8E11m	51	(33)	31	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1107	SP	8E11l	42	35	42	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1108	SK	8E11m	95	81	22	不整円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1109	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1110	SP	8E13l	39	(26)	4	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1111	SK	8E9m	103	(61)	12	不明	碗型	黒褐色（10YR3/2）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1112	SP	8E10m	(24)	23	11	不明	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
1113	SK	8E10m	85	51	33	楕円形	碗型	黒褐色（10YR3/2）中粒砂　貝殻片含む	須恵器	不明	
1114	SP	8E10m	30	28	30	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	山茶碗ほか	Ⅴ	
1115	SP	8E11m	32	30	25	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
1116	SP	8E16k	56	42	47	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	山茶碗ほか	Ⅴ	
1117	SK	8E17k	87	77	29	円形	碗型	黄褐色（10YR5/6）中粒砂	不明小片	不明	
1118	SK	8E15k	108	66	12	楕円形	皿型	黒色（10YR2/1）細粒砂　貝殻片含む	山茶碗ほか	Ⅴ	
1119	SK	8E17l	104	50	41	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1120	SD	8E15k	(356)	41	12	直線状	皿型	黒褐色（10YR3/1）細粒砂	無し	不明	
1121	SP	8E17l	54	(27)	11	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
1122	SP	8E16l	48	39	24	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　V層含む	無し	不明	
1123	SD	8E15 k	(59)	47	9	直線状	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　V層含む	無し	不明	
1124	SP	8E16 k	58	44	24	円形	碗型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	不明	
1125	SK	8E16 k	55	46	14	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　V層含む	無し	不明	
1126	SK	8E17l	83	(49)	14	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　V層含む	無し	不明	
1127	SK	8E15 k	(58)	55	12	不明	皿型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1128	SK	8E14 k	(91)	(77)	9	不明	皿型	褐色（10YR4/4）中粒砂　V層含む	無し	不明	
1129	SK	8E10m	(61)	(83)	13	楕円形	皿型	黒褐色（10YR3/2）細粒砂　にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂とV層含む	弥生土器	不明	
1130	SX	8E13 k	(476)	(82)	20	不明	皿型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	山茶碗　近世陶器	Ⅵ	
1131	SD	8E13l	166	61	21	直線状	碗型	灰色（5Y4/1）中粒砂	山茶碗　弥生土器	V	
1132	SP	8E10m	39	26	15	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗	V	
1133	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—		
1134	SK	8E9m	70	49	25	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗　土師器ほか	V	
1135	SP	8E10l	43	(25)	29	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	V	
1136	SP	8E11l	58	(39)	26	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	V	
1137	SP	8E12l	42	30	21	楕円形	碗型	黄褐色（2.5Y5/3）中粒砂	山茶碗ほか	V	
1138	SP	8E12l	49	36	20	楕円形	碗型	黄褐色（2.5Y5/3）中粒砂	無し	不明	
1139	SP	8E10m	29	24	12	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1140	SK	8E9m	55	36	(10)	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1141	SP	8E11m	43	(18)	20	不明	碗型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	山茶碗ほか	V	
1142	SP	8E10lm	29	26	12	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	V	
1143	SP	8E10lm	(31)	28	16	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1144	SK	8E11lm	(94)	(36)	37	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗　弥生土器ほか	V	
1145	SP	8E11m	56	46	13	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　V層含む	不明小片	不明	
1146	SX	8E10m	—	—	—	—	—	黒褐色（10YR3/2）中粒砂　V層含む	無し	不明	
1147	SP	8E11m	32	(23)	26	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	V	
1148	SP	8E12l	(25)	(20)	28	円形	U字型	にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土質シルト	無し	不明	
1149	SP	8E12l	45	45	12	円形	碗型	黄褐色（2.5Y5/3）中粒砂とV層の斑土	無し	不明	
1150	SX	8E11m	287	(78)	10	不明	碗型	第10図参照	山茶碗　土師器　須恵器	不明	
1151	SK	8E10m	89	(32)	26	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　V層含む	無し	不明	
1152	SK	8E10m	162	(148)	47	円形	碗型	第９図参照	山茶碗　常滑焼ほか	V	
1153	SK	8E10m	(69)	(53)	7	不明	皿型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗ほか	V	
1154	SP	8E11m	39	28	23	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	須恵器　土師器	Ⅳ	
1155	SP	8E11m	(26)	23	20	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1156	SP	8E11m	48	42	18	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	土師器	Ⅳ	
1157	SK	8E16 k	75	40	24	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　V層含む	須恵器	Ⅳ	
1158	SP	8E11m	37	32	22	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1159	SP	8E10m	(51)	(17)	6	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1160	SK	8E10m	(104)	(84)	33	円形	碗型	第９図参照	山茶碗　常滑焼ほか	V	
1161	SP	8E10m	(45)	(16)	13	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　V層含む	無し	不明	

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
1162	SP	8E10m			37	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	山茶碗	不明	
1163	SK	8E9m	(93)	(69)	20	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	不明小片	不明	
1164	SP	8E10m	30	27	28	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	山茶碗ほか	Ⅴ	
1165	SP	8E11m	25	22	27	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1166	SK	8E11m	(54)	47	20	楕円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	土師器	Ⅳ	
1167	SP	8E11l	28	23	10	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	無し	不明	
1168	SP	8E11l	29	26	14	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1169	SK	8E10m	47	42	13	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	無し	不明	
1170	SK	8E17l	65	(42)	23	不明	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	土師器	Ⅳ	
1171	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1172	SP	8E11l	(25)	32	15	円形	碗型	黒褐色（10YR3/2）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
1173	SP	8E11m	30	(15)	19	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
1174	SP	8E11m	59	(39)	26	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂	古瀬戸　土師器	Ⅴ	
1175	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1176	SX	8E10m	(65)	—	3	不明	皿型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　貝殻片含む	無し	不明	
1177	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1178	SP	8E17m	35	32	9	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
1179	SP	8E17m	36	31	15	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
1180	SX	8E10m	(44)	—	11	不明	碗型	第11図参照	土師器	Ⅳ	
1181	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1182	SP	8E17m	31	30	16	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
1183	SP	8E17m	(38)	62	12	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
1184	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1185	SP	8E10m	33	27	18	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	山茶碗　土師器ほか	Ⅴ	
1186	SK	8E16k	85	(72)	27	不整形	碗型	第12図参照	弥生土器	不明	
1187	SK	8E10m	(60)	(36)	16	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	—	
1188	SP	8E12l	43	41	25	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗　須恵器	Ⅴ	
1189	SP	8E10m	(19)	(12)	22	不明	碗型	黒褐色（10YR2/2）中粒砂	無し	不明	
1190	SK	8E11l	79	(50)	33	楕円形	碗型	第10図参照	不明小片	不明	
1191	SD	8E16l	(151)	149	15	不明	Ⅴ字型	図版６参照	無し	不明	
1192	SX	8E16l	(48)	(68)	20	不明	碗型	図版６参照	近世陶器	Ⅵ	
1193	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
1194	SX	8E16l	—	—	—	不明	碗型	第10図参照	無し	Ⅴ	
1195	SP	8E17m	(28)	48	11	円形	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
1196	SX	8E16l	—	—	—	不明	碗型	図版５参照	無し	不明	

平成 28 年度（2016 年）畑間遺跡 2 地点（HM16-2）　遺構一覧表

※ 2087 まで西区、2088 ～東区

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
2001	SK	9D8r	305	190	30	楕円形	碗型	暗褐色（10YR3/2）細粒砂	山茶碗　須恵器ほか	不明	
2002	SX	9D7q	（267）	37	5	不明	碗型	褐色（10YR4/4）細粒砂　　貝殻片多量に含む	無し	Ⅵ	
2003	SK	9D7r	（136）	79	31	不明	碗型	黒褐色（10YR2/3）細粒砂　オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂とⅤ層含む	無し	不明	
2004	SP	9D8r	44	（41）	11	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
2005	SP	9D8q	30	（24）	12	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
2006	SP	9D8q	43	（28）	9	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	不明小片	不明	
2007	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2008	SP	9D8r	35	30	21	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
2009	SK	9D8r	114	（65）	25	不明	皿型	黒褐色（2.5Y3/2）中粒砂	須恵器	不明	
2010	SK	9D8r	81	（56）	34	不明	碗型	第22図参照	弥生土器	Ⅱ	
2011	SX	9D8r	（114）	（88）	25	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗　土師器　常滑焼ほか	不明	
2012	SP	9D8r	37	（34）	41	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	常滑　須恵器	Ⅴ	
2013	SP	9E10d	46	39	15	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
2014	SP	9E10d	（29）	27	27	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
2015	SP	9E10d	36	34	33	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗	不明	
2016	SK	9E10d	82	59	62	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	山茶碗　弥生土器	不明	
2017	SK	9E10d	（73）	67	22	楕円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	山茶碗ほか	不明	
2018	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2019	SP	9E9c	47	（21）	34	円形	碗型	暗褐色（10YR3/3）細粒砂	山茶碗	不明	
2020	SP	9E9c	（43）	39	29	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗ほか	Ⅴ	
2021	SP	9E9c	50	41	32	円形	碗型	暗褐色（10YR3/3）細粒砂	無し	不明	
2022	SK	9E11d	（134）	126	32	長方形	碗型	第24図参照	無し	Ⅵ	
2023	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2024	SP	9E11d	32	26	31	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
2025	SP	9E11d	41	29	44	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	無し	不明	
2026	SP	9E10d	39	（23）	15	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
2027	SP	9E10c	35	（29）	22	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
2028	SP	9E10c	48	44	24	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗　須恵器	Ⅴ	
2029	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2030	SK	9E10c	（66）	（60）	25	不明	碗型	暗褐色（10YR3/4）細粒砂	無し	不明	鬼板（酸化鉄）多量に出土
2031	SP	9E10c	39	（23）	25	円形	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	無し	不明	
2032	SK	9E10c	（55）	49	46	不明	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	土師器	不明	
2033	SK	9E9c	103	（69）	41	不明	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	山茶碗　須恵器	Ⅴ	
2034	SK	9E9c	（64）	23	10	不明	碗型	黒褐色（7.5YR3/2）細粒砂　焼土含む	無し	不明	
2035	SP	9E9c	35	33	45	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	不明小片	不明	
2036	SP	9E9c	25	22	32	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗　土師器	不明	
2037	SK	9E10c	76	21	29	楕円形	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	無し	不明	
2038	SP	9E10c	29	24	17	円形	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	無し	不明	
2039	SK	9E10c	72	44	37	楕円形	碗型	暗褐色（7.5YR3/3）中粒砂	山茶碗	不明	

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
2040	SX	9E10 c	208	(63)	71	不明	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	複数の遺構上の窪みか
2041	SP	9E10 c	36	(30)	16	円形	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	無し	不明	
2042	SK	9E10 c	133	(52)	11	不明	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	弥生土器	不明	
2043	SP	9E10 c	46	(41)	52	円形	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	山茶碗	不明	
2044	SK	9E11d	135	116	29	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	不明	撹乱か
2045	SK	9E11d	119	(83)	26	不明	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
2046	SP	9E10 c	52	48	32	円形	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	無し	不明	
2047	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2048	SK	9E10 c	(68)	28	39	不整形	碗型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	須恵器　山茶碗ほか	Ⅴ	
2049	SP	9E9b	34	(18)	12	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2050	SP	9E9b	(48)	—	60	不明	U字型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗	不明	
2051	SK	9E9 c	127	(45)	39	不明	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	無し	不明	
2052	SP	9E9 c	31	30	25	円形	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	無し	不明	
2053	SK	9E10 c	77	52	33	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗　常滑焼　須恵器ほか	Ⅴ	
2054	SP	9E9c	45	43	42	円形	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	無し	不明	
2055	SP	9E10 c	32	30	14	円形	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	無し	不明	
2056	SP	9E10 c	69	43	47	楕円形	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	山茶碗	Ⅴ	
2057	SP	9E10 d	42	(18)	16	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
2058	SP	9E10 d	48	(26)	33	円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
2059	SP	9E9 c	(55)	(28)	25	不明	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	無し	不明	
2060	SX	9D9t	(93)	—	11	不明	碗型	暗褐色（10YR3/3）細粒砂　貝殻片大量に含む	山茶碗　常滑焼ほか	Ⅴ	
2061	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2062	SP	9D8r	39	36	11	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
2063	SP	9D7r	66	42	19	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
2064	SK	9D8r	(100)	45	27	楕円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂とにぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂の斑土	無し	不明	
2065	SK	9D7r	(78)	(67)	36	不明	碗型	第22図参照	弥生土器	Ⅱ	
2066	SP	9D8r	(69)	35	40	楕円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗　弥生土器	Ⅴ	
2067	SP	9D8r	24	21	11	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
2068	SP	9D8r	30	29	18	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
2069	SP	9E10 c	36	35	26	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗	不明	
2070	SP	9E10 c	60	(19)	28	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗	不明	
2071	SP	9E10 c	53	39	17	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	須恵器	不明	
2072	SP	9E10 c	34	(20)	44	円形	U字型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2073	SK	9E10 c	136	77	34	楕円形	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	山茶碗　須恵器	Ⅴ	
2074	SK	9E10 c	89	(52)	42	不明	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	無し	不明	
2075	SD	9E10 c	(130)	92	49	直線状	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	不明小片	不明	
2076	SP	9E10 c	(26)	(14)	19	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2077	SK	9E10 c	(48)	(26)	13	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2078	SP	9E9b	46	32	11	楕円形	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	無し	不明	
2079	SP	9E10 d	30	28	17	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
2080	SP	9E9 c	29	27	33	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗	不明	
2081	SP	9E10 c	58	37	45	円形	U字型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂　V層含む	無し	不明	
2082	SK	9E10 c	56	54	21	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
2083	SX	9E10 d	（120）	—	9	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　V層含む	無し	不明	
2084	SP	9E10 c	31	（29）	41	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2085	SP	9E10 c	54	（51）	28	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2086	SP	9E11d	40	35	14	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2087	SK	9E10d	（69）	（42）	34	不明	碗型	褐色（7.5YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2088	SK	9E14o	（93）	（44）	15	不明	碗型	図版15参照	無し	不明	
2089	SP	9E14o	47	40	9	円形	碗型	暗オリーブ色（5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
2090	SD	9E14n	（693）	82	39	直線状	碗型	図版15参照	近世陶器	Ⅵ	
2091	SK	9E15o	（89）	（82）	21	不明	碗型	図版15参照	山茶碗	Ⅴ	
2092	SP	9E14n	38	38	19	円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	山茶碗	Ⅴ	
2093	SP	9E14n	33	31	13	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
2094	SP	9E14n	36	32	9	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
2095	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2096	SP	9E14n	33	28	27	円形	碗型	第28図参照	無し	Ⅴ	東部柱穴列
2097	SP	9E14n	41	37	18	円形	碗型	第28図参照	無し	Ⅴ	東部柱穴列
2098	SP	9E14n	38	36	13	円形	碗型	暗オリーブ色（5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
2099	SP	9E14n	41	（14）	15	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	無し	不明	
2100	SD	9E14n	（521）	115	24	直線状	V字型	第13図参照	山茶碗ほか	Ⅴ	
2101	SP	9E14n	28	25	17	円形	碗型	暗オリーブ色（5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
2102	SP	9E14n	82	71	20	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
2103	SP	9E14m	44	37	23	円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	無し	Ⅴ	東部柱穴列
2104	SP	9E14m	50	45	23	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	山茶碗　土師器	Ⅴ	東部柱穴列
2105	SP	9E14m	97	46	30	楕円形	碗型	第28図参照	山茶碗	Ⅴ	
2106	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2107	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2108	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2109	SP	9E14o	57	（20）	18	不明	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
2110	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2111	SK	9E13j	115	103	14	円形	碗型	黒褐色（7.5YR3/1）中粒砂	無し	不明	
2112	SP	9E13j	59	53	14	円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	無し	不明	
2113	SD	9E13j	171	41	15	直線状	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂　V層含む	無し	不明	
2114	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	撹乱と判明、汚染により周辺黒色化
2115	SD	9E13i	（1083）	106	34	直線状	碗型	第19図参照	山茶碗　古瀬戸　常滑焼ほか	Ⅴ	方形区画溝群（東西溝）
2116	SD	9E12j	（493）	（165）	41	直線状	碗型	第19図参照	山茶碗　常滑焼　古瀬戸ほか	Ⅴ	方形区画溝群（東西溝）か
2117	SP	9E14n	（44）	39	7	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　V層含む	無し	Ⅴ	東部柱穴列
2118	SK	9E12i	132	45	6	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　貝殻片多量に含む	山茶碗	Ⅴ	2201SD上の貝殻廃棄土坑
2119	SP	9E14m	51	49	17	円形	碗型	第28図参照	山茶碗　常滑焼	Ⅴ	東部柱穴列

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
2120	SD	9E13k	(1059)	431	65	直線状	碗型	第14図参照	図版25～30参照	V	中央大溝
2121	SK	9E14m	87	84	20	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	山茶碗　常滑焼ほか	V	
2122	SK	9E14m	(85)	52	19	不明	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	古瀬戸	V	
2123	SP	9E14m	53	42	14	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	山茶碗	V	東部柱穴列
2124	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2125	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2126	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2127	SP	9E14m	72	(35)	13	不明	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂　V層含む	山茶碗　須恵器　不明小片	V	
2128	SP	9E14m	34	31	26	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂　V層含む	無し	不明	
2129	SD	9E13m	(239)	44	13	弧状	碗型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	山茶碗	V	
2130	SX	9E14o	(263)	(59)	10	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	複数の遺構を一つと誤認か
2131	SP	9E14m	32	31	19	円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	無し	不明	
2132	SP	9E14m	33	30	20	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	山茶碗	V	
2133	SP	9E14m	38	32	16	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2134	SK	9E13lm	193	87	24	楕円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	常滑焼　山茶碗ほか	不明	
2135	SD	9E13m	(1087)	150	8	直線状	皿型	第20図参照	常滑焼　山茶碗　古瀬戸ほか	V	
2136	SD	9E13m	(434)	38	10	直線状	皿型	第20図参照	山茶碗	V	
2137	SD	9E14m	(423)	28	10	直線状	皿型	第20図参照	山茶碗ほか	V	
2138	SD	9E14m	(422)	39	16	弧状	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗　加工円盤ほか	V	
2139	SD	9E14m	(144)	36	13	直線状	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2140	SX	9E12i	65	56	19	不整形	碗型	第29図参照	無し	不明	大量出土銭A（古瀬戸三耳壺）
2141	SP	9E14m	39	37	10	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2142	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2143	SP	9E14m	32	31	13	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
2144	SD	9E14l	(523)	126	19	直線状	皿型	第20図参照	山茶碗　弥生土器	V	
2145	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2146	SD	9E14k	(100)	45	16	直線状	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂　V層含む	無し	不明	
2147	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
2148	SD	9E12h	(294)	104	35	直線状	碗型	第19図参照	常滑焼　山茶碗　土師器ほか	V	方形区画溝群（南北溝）
2149	SD	9E12h	(309)	(43)	19	直線状	碗型	第19図参照	山茶碗　常滑焼ほか	V	方形区画溝群（南北溝）
2150	SX	9E13h	—	—	—	—	—	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗　常滑焼ほか	V	方形区画溝群の上層部分か
2151	SP	9E14m	37	31	6	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
2152	SX	9E14m	(128)	—	8	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗　常滑焼ほか	V	和鏡片出土
2153	SX	9E11g	623	—	6	不明	碗型	第26図参照	図版32参照	V	貝殻廃棄土坑群上の包含層
2154	SD	9E11g	(386)	114	26	直線状	碗型	図版12参照	山茶碗　常滑焼　弥生土器	V	
2155	SK	9E11e	178	51	26	不整形	碗型	にぶい黄褐色（10YR5/3）中粒砂	常滑焼	V	
2156	SK	9E13h	(184)	113	26	円形	碗型	第27図参照	山茶碗　常滑焼ほか	V	独鈷杵出土
2157	SK	9E12h	166	116	27	楕円形	碗型	暗褐色（7.5YR3/3）細粒砂　貝殻含む	山茶碗　古瀬戸　土師器ほか	V	大量出土銭Bの上の土坑
2158	SD	9E12h	(130)	39	14	直線状	碗型	第19図参照	常滑焼　山茶碗ほか	V	方形区画溝群（南北溝）
2159	SK	9E10d	80	29	10	楕円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
2160	SK	9E11e	221	(71)	17	不明	碗型	第25図参照	山茶碗　常滑焼	V	

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
2161	SK	9E10e	68	(33)	28	不明	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂　Ⅴ層含む	山茶碗	Ⅴ	
2162	SP	9E10e	30	28	9	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2163	SK	9E12h	(102)	58	20	楕円形	碗型	褐色（7.5YR4/4）細粒砂	無し	Ⅴ	大量出土銭Bの上の土坑
2164	SP	9E11f	32	30	16	円形	碗型	貝殻片多量　にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂を含む	無し	Ⅴ	貝殻充填ピット
2165	SK	9E11e	276	272	45	隅丸方形	碗型	第25図参照	山茶碗　土師器　古瀬戸	Ⅴ	
2166	SP	9E10e	29	26	8	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2167	SP	9E11e	52	36	28	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	常滑焼	Ⅴ	
2168	SP	9E11e	41	36	22	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2169	SP	9E11f	25	22	11	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2170	SK	9E11e	142	89	15	楕円形	碗型	第24図参照	山茶碗　須恵器	Ⅴ	
2171	SX	9E12h	(223)	—	5	不明	不明	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗	Ⅴ	
2172	SK	9E11d	133	(76)	25	楕円形	碗型	第24図参照	山茶碗　常滑焼	Ⅴ	
2173	SP	9E11e	44	38	28	円形	碗型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	無し	不明	
2174	SP	9E11f	46	44	19	円形	碗型	灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂	古瀬戸	Ⅴ	
2175	SK	9E11f	(110)	85	5	方形	碗型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂　粘土含む	土師器	Ⅴ	
2176	SK	9E11f	105	(54)	15	不明	碗型	黒褐色（10YR3/2中粒砂	無し	不明	
2177	SP	9E11e	40	36	15	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	弥生土器（古式土師器か）	不明	
2178	SP	9E11e	37	33	22	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2179	SP	9E11e	39	36	16	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
2180	SD	9E12g	(401)	131	45	やや蛇行	碗型	第21図参照	図版31参照	Ⅴ	
2181	SK	9E10e	75	34	9	楕円形	碗型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	Ⅴ	
2182	SK	9E10d	138	79	27	楕円形	碗型	第24図参照	常滑焼　土師器　山茶碗	Ⅴ	
2183	SP	9E11d	40	30	23	円形	碗型	第24図参照	無し	Ⅴ	
2184	SK	9E11d	(74)	(43)	23	不明	碗型	第24図参照	無し	Ⅴ	
2185	SX	9E11e	(176)	83	20	不明	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
2186	SK	9E11e	(277)	(149)	14	不明	碗型	第25図参照	山茶碗　常滑焼	Ⅴ	
2187	SK	9E11e	99	73	31	隅丸方形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	Ⅴ	
2188	SK	9E11e	(166)	(59)	24	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層多く含む	無し	Ⅴ	
2189	SP	9E11e	38	35	17	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	Ⅴ	
2190	SX	9E12h	44	42	16	円形	碗型	第29図参照	無し	Ⅴ	大量出土銭B（常滑壺）
2191	SP	9E11e	32	27	14	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	Ⅴ	
2192	SP	9E11e	40	37	21	円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	無し	Ⅴ	
2193	SP	9E12f	28	26	24	円形	碗型	暗褐色（7.5YR3/3）中粒砂	無し	Ⅴ	
2194	SK	9E12f	273	(173)	20	不明	碗型	第26図参照	図版32参照	Ⅴ	
2195	SK	9E11f	250	(139)	35	不明	碗型	第26図参照	図版32参照	Ⅴ	
2196	SD	9E13h	(148)	87	26	直線状	碗型	第19図参照	山茶碗　常滑焼ほか	Ⅴ	方形区画溝群（南北溝）
2197	SP	9E13i	(58)	68	15	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	不明小片	Ⅴ	
2198	SD	9E12i	(273)	52	15	直線状	碗型	第19図参照	山茶碗　常滑焼ほか	Ⅴ	方形区画溝群（東西溝）
2199	SD	9E12i	(828)	66	12	直線状	碗型	第19図参照	山茶碗　常滑焼ほか	Ⅴ	方形区画溝群（東西溝）
2200	SK	9E12g	(116)	(98)	32	不明	碗型	第22図参照	弥生土器	Ⅲ	

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
2201	SD	9E12i	(522)	39	12	直線状	皿型	第19図参照	山茶碗　常滑焼　古瀬戸ほか	Ⅴ	方形区画溝群（東西溝）
2202	SK	9E12h	84	(24)	20	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	不明小片	Ⅴ	
2203	SK	9E13j	180	(80)	8	円形	皿型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	無し	Ⅴ	
2204	SK	9E11f	(158)	(119)	50	不明	碗型	第26図参照	図版32参照	Ⅴ	
2205	SD	9E12h	(589)	93	36	直線状	碗型	第19図参照	山茶碗　常滑焼　古瀬戸ほか	Ⅴ	方形区画溝群（南北～東西溝）
2206	SP	9E12h	50	(36)	16	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
2207	SD	9E12f	(213)	72	31	直線状	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	山茶碗　常滑焼　土師器ほか	Ⅴ	
2208	SK	9E12f	111	(75)	25	不明	碗型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	山茶碗　常滑焼	Ⅴ	
2209	SD	9E13h	73	(72)	7	直線状	碗型	第19図参照	無し	Ⅴ	方形区画溝群（東西溝）
2210	SP	9E12h	76	(50)	25	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	不明小片	Ⅴ	
2211	SD	9E12i	(266)	42	17	直線状	碗型	第19図参照	山茶碗　常滑焼ほか	Ⅴ	方形区画溝群（東西溝）
2212	SP	9E12i	48	22	13	楕円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	Ⅴ	
2213	SP	9E10d	42	40	36	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	土師器皿	Ⅴ	
2214	SP	9E14l	20	19	5	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	Ⅴ	2144SD南肩の杭跡
2215	SP	9E14l	17	16	4	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	Ⅴ	2144SD南肩の杭跡
2216	SP	9E14l	22	21	4	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	Ⅴ	2144SD南肩の杭跡
2217	SP	9E14l	22	21	3	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	Ⅴ	2144SD南肩の杭跡
2218	SP	9E14l	20	17	7	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	Ⅴ	2144SD南肩の杭跡
2219	SK	9E14l	131	63	23	楕円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	Ⅴ	
2220	SP	9E13l	69	(27)	26	円形	碗型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	Ⅴ	
2221	SK	9E12i	62	53	18	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層多く含む	弥生土器	Ⅲ	
2222	SK	9E13k	35	33	15	円形	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層多く含む	古式土師器	Ⅲ	
2223	SD	9E12i	(346)	53	17	直線状	碗型	第19図参照	山茶碗	Ⅴ	方形区画溝群（東西溝）
2224	SD	9E12i	(417)	56	15	直線状	碗型	第19図参照	土師器　常滑焼	Ⅴ	方形区画溝群（東西溝）
2225	SP	9E13i	47	41	20	円形	碗型	暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂	無し	Ⅴ	
2226	SK	9E13l	126	(75)	23	不明	皿型	オリーブ黒色（5Y3/1）中粒砂	山茶碗　常滑焼　土師器ほか	Ⅴ	2120SD下層上面の土坑か
2227	SK	9E12k	190	(147)	53	不明	碗型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗　常滑焼	Ⅴ	
2228	SP	9E13k	39	28	24	楕円形	碗型	オリーブ黒色（5Y3/1）中粒砂	無し	Ⅴ	
2229	SD	9E12j	(244)	31	23	直線状	碗型	第19図参照	山茶碗　古瀬戸	Ⅴ	方形区画溝群（東西溝）
2230	SD	9E12j	(126)	48	20	直線状	碗型	第19図参照	無し	Ⅴ	方形区画溝群（東西溝）

平成 28 年度（2016 年）畑間遺跡 3 地点（HM16-3）　遺構一覧表

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
3001	SD	10D17h	(350)	86	23	直線状	椀型	第30図参照	土師器　弥生土器	Ⅴ	
3002	SD	10D17h	(479)	(69)	14	直線状	椀型	第30図参照	無し	Ⅴ	
3003	SD	10D18g	(280)	32	44	直線状	椀型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	山茶碗	不明	複数のピット状の落ち込みを伴う溝
3004	SK	10D17h	(157)	(56)	21	不明	椀型	褐色（7.5YR4/3）細粒砂	無し	不明	

平成 28 年度（2016 年）畑間遺跡 4 地点（HM16-4）　遺構一覧表

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
4001	SP	1C8i	56	51	47	円形	椀型	淡黄色（2.5Y8/4）粘土　褐色（10YR4/4）中粒砂含む	無し	Ⅵ	
4002	SP	1C8i	45	34	15	円形	椀型	暗褐色（7.5YR3/4）中粒砂	無し	Ⅵ	
4003	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
4004	SP	1C8i	36	35	16	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	Ⅵ	
4005	SP	1C7i	39	38	47	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	弥生土器	Ⅵ	
4006	SP	1C8i	50	47	24	円形	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂　2～5mmの小石含む	山茶碗	Ⅴ	
4007	SK	1C7i	140	(71)	43	不明	椀型	極粗粒砂（小礫層）	無し	不明	
4008	SE	1C8i	345	258	81	不整形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗　常滑焼　近世陶器　弥生土器	Ⅴ	
4009	SK	1C8 j	74	63	48	円形	椀型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	古瀬戸　弥生土器	Ⅴ	
4010	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
4011	SD	1C8 j	(515)	228	50	長楕円形	椀型	第33図参照	弥生土器	Ⅱ	
4012	SK	1C7i	(142)	153	61	不明	椀型	第36図参照	弥生土器	Ⅱ	
4013	SP	1C8 k	76	(28)	38	不明	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂　にぶい黄色（2.5Y6/4）粘土多く含む	山茶碗　弥生土器	Ⅴ	
4014	SP	1C8 k	60	(36)	26	楕円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	Ⅴ	
4015	SK	1C8 j	(49)	56	32	不明	椀型	極粗粒砂（小礫層）	無し	不明	
4016	SX	1C8 j	(156)	(224)	17	不整形	椀型	第33図参照	弥生土器	Ⅱ	4011SDの一部
4017	SP	1C8 j	41	37	15	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　黒褐色（10YR2/2）中粒砂、炭化物含む	無し	不明	
4018	SP	1C8 k	34	32	15	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　黒褐色（10YR2/2）中粒砂、炭化物含む	弥生土器小片	不明	
4019	SP	1C7i	48	47	23	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	Ⅵ	
4020	SK	1C7i	(71)	49	38	楕円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
4021	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
4022	SX	1C8i	(383)	(110)	49	方形	箱型	図版18参照	山茶碗　弥生土器	Ⅴ	
4023	SP	1C8 k	51	(30)	24	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	Ⅴ	
4024	SK	1C8 k	(106)	(62)	12	不明	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	Ⅴ	
4025	SK	1C9 k	143	91	21	楕円形	椀型	暗褐色（7.5YR3/4）中粒砂　Ⅴ層含む	山茶碗　弥生土器	Ⅴ	
4026	SK	1C9 k	243	92	27	長楕円形	椀型	褐色（7.5YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	弥生土器	不明	
4027	SK	1C９l	119	89	15	楕円形	椀型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂　貝片含む	不明小片	不明	
4028	SK	1C８l	108	(44)	29	不明	椀型	褐色（7.5YR4/4）中粒砂	弥生土器	Ⅴ	遺物は弥生だが層位的に中世

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
4029	SP	1C8 k	64	46	28	楕円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
4030	SK	1C8 k	（296）	131	32	長楕円形	椀型	第37図参照	弥生土器	不明	
4031	SK	1C10 l	（60）	（40）	37	不明	椀型	第35図参照	山茶碗　常滑焼	Ⅴ	
4032	SP	1C9m	72	43	36	楕円形	椀型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂　貝片含む	弥生土器	Ⅱ	
4033	SP	1C９ l	56	52	24	円形	椀型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	無し	不明	
4034	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
4035	SP	1C8 k	44	43	6	円形	椀型	褐色（7.5YR4/4）中粒砂	無し	不明	
4036	SD	1C9 l	328	39	20	直線	椀型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	常滑焼　弥生土器　山茶碗	Ⅴ	
4037	SP	1C9 k	75	48	22	楕円形	椀型	黄橙色（10YR8/6）中粒砂	山茶碗	Ⅴ	
4038	SP	1C8 k	41	39	14	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	無し	Ⅴ	
4039	SP	1C8 k	60	57	36	円形	U字型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	不明小片	不明	
4040	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
4041	SP	1C9 l	47	43	26	円形	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	不明	
4042	SK	1C9 k	322	102	36	不整形	椀型	褐色（7.5YR4/4）中粒砂	土師器　弥生土器	不明	
4043	SD	1C9 k	（502）	114	39	ほぼ直線	椀型	第34図参照	山茶碗　常滑焼	Ⅴ	柱穴を伴う溝
4044	SP	1C8 j	71	61	22	円形	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	不明小片	不明	
4045	SK	1C8i	147	（83）	49	不整形	椀型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	無し	不明	
4046	SP	1C7i	26	23	16	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂	無し	不明	
4047	SP	1C8i	23	20	44	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	弥生土器	不明	
4048	SP	1C8i	22	（13）	12	円形	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	不明	
4049	SP	1C8i	33	（17）	26	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	無し	不明	
4050	SK	1C9 k	127	（74）	36	隅丸方形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
4051	SD	1C8 k	（122）	61	11	直線	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	土器	不明	
4052	SK	1C8 j	265	111	23	長楕円形	椀型	第37図参照	無し	不明	
4053	SK	1C9 j	74	66	19	円形	椀型	黒褐色（2.5Y3/２）中粒砂	無し	不明	
4054	SK	1C9 k	95	64	39	楕円形	椀型	暗褐色（10YR3/3）中粒砂	無し	Ⅴ	
4055	SP	1C8 k	41	40	12	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗	Ⅴ	
4056	SP	1C8 j	38	35	10	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
4057	SK	1C8 j	（68）	58	8	楕円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
4058	SP	1C9 l	35	30	34	円形	U字型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	不明	
4059	SD	1C9 l	（160）	23	9	直線	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
4060	SD	1C9 l	（537）	242	35	わずかに湾曲	椀型	第35図参照	常滑焼　山茶碗　弥生土器	Ⅴ	
4061	SK	1C9 l	76	53	20	楕円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	Ⅴ	
4062	SP	1C9 l	44	35	11	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	Ⅴ	
4063	SD	1C9m	（168）	70	28	直線	椀型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	無し	不明	
4064	SK	1C9 k	135	（60）	33	不明	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	不明	
4065	SD	1C10 l	（293）	（174）	37	わずかに湾曲	椀型	第35図参照	弥生土器	Ⅲ	
4066	SK	1C9 k	75	65	17	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
4067	SK	1C9 k	77	（38）	18	楕円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	山茶碗	Ⅴ	
4068	SP	1C8 k	51	39	12	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	山茶碗	Ⅴ	
4069	SP	1C9 l	38	35	11	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	Ⅴ	

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
4070	SP	1C9 l	58	47	20	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	Ⅴ	
4071	SP	1C8 k	24	（17）	11	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	Ⅴ	4043SDに伴う柱穴
4072	SP	1C9 k	（34）	33	17	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	Ⅴ	4043SDに伴う柱穴
4073	SP	1C9 k	34	31	15	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	Ⅴ	4043SDに伴う柱穴
4074	SK	1C8 k	118	（56）	28	不明	椀型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	無し	不明	
4075	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
4076	SP	1C8 k	32	（20）	12	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	Ⅴ	
4077	SP	1C9 k	36	33	19	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	Ⅴ	4043SDに伴う柱穴
4078	SK	1C9 l	87	57	34	楕円形	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	Ⅴ	
4079	SP	1C8 k	52	（30）	8	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
4080	SP	1C8 k	37	35	16	円形	椀型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	無し	不明	
4081	SP	1C8 k	28	24	12	円形	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	不明	
4082	SP	1C9 k	33	27	17	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂	無し	Ⅴ	4043SDに伴う柱穴
4083	SP	1C8 k	30	28	22	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	Ⅴ	4043SDに伴う柱穴
4084	SP	1C8 k	41	37	31	円形	U字型	暗褐色（10YR3/4）中粒砂	無し	Ⅴ	4043SDに伴う柱穴
4085	SD	1C9 k	（137）	32	16	直線	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	不明	
4086	SP	1C9 l	29	（25）	20	円形	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	Ⅴ	
4087	SP	1C8 j	31	30	15	円形	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	不明	
4088	SP	1C9 l	32	29	22	円形	椀型	にぶい黄橙色（10YR6/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
4089	SP	1C8i	59	（30）	23	不明	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
4090	SK	1C7i	（180）	75	26	不明	椀型	第36図参照	弥生土器	Ⅱ	

平成 28 年度（2016 年）畑間遺跡 6 地点（HM16-6） 遺構一覧表

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
6001	SD	1B14h	(257)	30	3	直線	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	弥生土器（土師器か）	不明	
6002	SK	1B13h	127	85	19	楕円形	椀型	黄褐色（2.5Y5/3）中粒砂	無し	不明	
6003	SK	1B13i	82	(61)	28	円形	椀型	褐色（7.5YR4/3）中粒砂	無し	Ⅲ	
6004	SP	1B13i	(39)	36	18	円形	椀型	図版20参照	無し	不明	
6005	SP	1B13i	(30)	24	17	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
6006	SP	1B12i	37	31	17	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	弥生土器	不明	
6007	SP	1B12i	37	34	14	円形	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	不明	
6008	SX	1B12i	—	—	13	不明	椀型	図版20参照	無し	不明	
6009	SP	1B12i	37	37	14	円形	椀型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	不明	
6010	SD	1B14h	419	124	28	わずかに湾曲	椀型	第38図参照	土師器	Ⅲ	
6011	SK	1B12i	145	78	29	楕円形	椀型	褐色（7.5YR4/3）中粒砂	弥生土器（土師器か）	不明	
6012	SK	1B12h	47	42	38	不明	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
6013	SK	1B14h	72	(46)	13	円形	椀型	図版20参照	弥生土器	Ⅲ	
6014	SK	1B14h	—	—	14	不明	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	Ⅲ	
6015	SD	1B14h	180	54	12	ほぼ直線	皿型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
6016	SP	1B13h	38	35	16	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
6017	SP	1B13h	43	43	9	円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
6018	SP	1B13h	48	42	32	円形	U字型	褐色（10YR4/6）中粒砂	無し	不明	
6019	SP	1B13h	50	32	12	楕円形	皿型	褐色（7.5YR4/3）中粒砂	無し	不明	
6020	SP	1B13h	34	33	17	円形	椀型	褐色（7.5YR4/3）中粒砂	無し	不明	
6021	SP	1B13i	65	37	16	楕円形	椀型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
6022	SP	1B14h	46	43	35	円形	U字型	褐色（10YR4/4）中粒砂	無し	不明	
6023	SP	1B14h	42	(28)	26	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	弥生土器	Ⅲ	
6024	SP	1B14h	64	61	30	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
6025	SP	1B13i	40	34	19	円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	
6026	SK	1B12i	69	40	38	楕円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂	無し	不明	

平成 28 年度（2016 年）畑間遺跡 7 地点（HM16-7）　遺構一覧表

番号	記号	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形状	断面形状	埋土	出土遺物	時期	備考
7001	SX	8D19b	340	（211）	35	楕円形	椀型	第39図参照	山茶碗　常滑焼　土師器　須恵器ほか	Ⅵ	
7002	SX	8D12c	（275）	（104）	42	不明	椀型	灰黄褐色（10YR4/2）極細粒砂　明黄褐色（10YR6/8）粘土　貝殻片含む	土師器　常滑焼　山茶碗ほか	Ⅵ	
7003	SX	8D20c	（381）	（108）	32	不明	椀型	暗褐色（10YR3/3）極細粒砂　貝殻片大量に含む	土師器　常滑焼　山茶碗　近世陶器ほか	Ⅵ	
7004	SX	8D19c	（305）	（159）	19	不明	椀型	灰黄褐色（10YR4/2）極細粒砂	常滑焼　土師器　古瀬戸	Ⅵ	
7005	SX	8D19c	189	（67）	26	不明	椀型	暗褐色（10YR3/3）極細粒砂　貝殻片多量に含む	土師器　常滑焼　山茶碗　近世陶器ほか	Ⅵ	
7006	SX	8D19c	（218）	（100）	26	不明	椀型	黄灰色（2.5Y4/1）細粒砂	土師器　山茶碗ほか	Ⅵ	
7007	SK	8D19b	（101）	（57）	25	不明	椀型	褐色（10YR4/4）細粒砂	山茶碗ほか	不明	
7008	SK	8D19a	（63）	（46）	28	不明	椀型	褐色（10YR4/4）細粒砂　Ⅴ層含む	近世陶器ほか	Ⅵ	
7009	SX	8D19b	105	47	35	楕円形	椀型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂	土師器	Ⅵ	
7010	SD	8D19a	（245）	86	31	直線	椀型	第40図参照	常滑焼　山茶碗　土師器ほか	Ⅴ	
7011	SD	8D19a	（169）	62	38	弧状	椀型	第40図参照	土師器　常滑焼　近世陶器	Ⅴ	
7012	SX	8D19a	（216）	（182）	49	不明	椀型	第40図参照	土師器ほか	Ⅴ	
7013	SP	8D19b	31	26	27	円形	椀型	黒褐色（7.5YR3/1）極細粒砂	土師器	不明	
7014	SP	8D19a	59	29	13	楕円形	椀型	黒褐色（2.5Y3/2）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
7015	SD	8D19a	（254）	43	25	不整形	椀型	第40図参照	土師器　常滑焼　山茶碗	Ⅴ	
7016	SD	8D19a	（105）	34	23	直線	椀型	第40図参照	土師器	Ⅴ	
7017	SP	8D18a	32	31	25	円形	椀型	黒褐色（2.5Y3/2）中粒砂	無し	不明	
7018	SP	8D19a	42	38	25	円形	U字型	暗褐色（10YR3/3）細粒砂　炭化物含む	無し	不明	
7019	SP	8D19b	42	34	18	楕円形	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂	無し	不明	
7020	SD	8D19b	（45）	33	12	直線	皿型	暗褐色（10YR3/3）細粒砂	無し	不明	
7021	SP	8D19b	（43）	29	16	楕円形	椀型	オリーブ褐色（2.5Y4/3）中粒砂　Ⅴ層含む	無し	不明	
7022	SP	8D19a	62	（19）	15	不明	椀型	にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂	無し	Ⅵ	
7023	SP	8D19a	62	（19）	15	不明	椀型	第39図参照	無し	不明	

遺物一覧表

・遺物一覧表凡例

口縁等の残存率は円形ゲージを用い計測し 12 分割で記した。
口径・底径のうち（　）で記したものは、確度の低い数値である。
器高のうち（　）で記したものは残存部分の数値である。
色調は全体的に主たるものを記し、一部内外面および断面を別に記した。
時期は下記の本遺跡の時期区分で記した。

時期区分表

時期		時代・土器型式
Ⅰ	1	縄文時代晩期以前
	2	縄文時代晩期末～弥生時代初頭
	3	弥生時代前期（樫王式期～水神平式期）
Ⅱ	1	弥生時代中期前半（岩滑式期）
	2	弥生時代中期後半（貝田町式・瓜郷式期～凹線紋系・古井式期）
Ⅲ	1	弥生時代後期（八王子古宮式期～山中式期）
	2	弥生時代終末期～古墳時代前期（廻間式期～松河戸Ⅰ式期）
	3	古墳時代中期（松河戸Ⅱ式期～宇田式期）
Ⅳ	1	古墳時代後期～終末期（東山10号窯式期～東山44号窯式期）
	2	奈良時代（東山50号窯式期～黒笹14号窯式期）
	3	平安時代前期（黒笹90号窯式期～東山72号窯式期）
Ⅴ	1	平安時代後期（山茶碗第２～４型式期）
	2	鎌倉時代（山茶碗第５～7型式期・常滑窯３～６a型式期）
	3	鎌倉時代末～室町時代前期（山茶碗第８～９型式期）
	4	室町時代中期（山茶碗第10～11型式期）
	5	室町時代後期（瀬戸大窯式期）
Ⅵ		江戸時代

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
第42図	001	弥生土器	深鉢	4	Ⅱ・Ⅲ層	口：1/12	－	(3.7)	－	内面－指ナデ、指オサエ 外面－条痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/4浅黄色	Ⅰ-3	
	002	弥生土器	深鉢	1	1030SD	口：1/12	－	(6.3)	－	内面－輪積痕、摩耗のため調整不明 外面－調整等不明	砂粒・礫を含む	10YR8/4浅黄橙色	Ⅰ-3	
	003	弥生土器	厚口鉢	4	4012SK	口：1/12	－	(2.2)	－	内面－輪積痕、ヨコナデ、条痕文 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/3浅黄色	Ⅱ-1	
	004	弥生土器	厚口鉢	2	2120SD	口：1/12	(12.1)	(2.4)	－	内面－輪積痕、ヨコナデ 外面－ヨコナデ、ナデ、条痕文	砂粒・礫を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	Ⅱ-1	
	005	弥生土器	厚口鉢	4	4028SK	口：1/12	(16.3)	(1.6)	－	内面－ヨコナデ 外面－ヨコナデ、条痕文、ナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	Ⅱ-1	
	006	弥生土器	壺	2	2154SD	口：2/12	(17.2)	(2.6)	－	内面－摩耗のため調整不明 外面－条痕文、ナデ、口縁端部キザミ、貼付突帯、指頭押圧文	砂粒・礫を含む	10YR6/4にぶい黄橙色	Ⅰ-3	
	007	弥生土器	壷	4	4011SD	－	－	(4..5)	－	内面－輪積痕、指オサエ、ナデ 外面－条痕文、貼付突帯、キザミ、ナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	Ⅰ-3	
	008	弥生土器	壷	4	4016SX	－	－	(4.5)	－	内面－ミガキ 外面－ミガキ、貼付突帯、キザミ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/4浅黄色	Ⅰ-3	遠賀川系土器
第43図	009	弥生土器	深鉢	4	4012SK	口：1/12	(24.0)	(9.8)	－	内面－ヨコナデ 外面－条痕、口縁端部条痕２条	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	Ⅰ-3～Ⅱ-1	
	010	弥生土器	深鉢	4	4030SK	口：1/12	(24.0)	(5.3)	－	内面－ヨコナデ 外面－条痕、口縁端部条痕２条	砂粒・礫を含む	10YR5/2灰黄褐色	Ⅰ-3～Ⅱ-1	
	011	弥生土器	深鉢	4	4012SK	口：1/12	(40.0)	(5.4)	－	内面－ヨコナデ 外面－条痕、口縁端部条痕2条、押引き文	砂粒・礫を含む	2.5Y4/1黄灰色	Ⅰ-3～Ⅱ-1	
	012	弥生土器	深鉢	4	4090SK	口：1/12	－	(2.7)	－	内面－ヨコナデ 外面－条痕、口縁端部条痕２条	砂粒・礫を含む	2.5Y7/3浅黄色	Ⅰ-3～Ⅱ-1	
	013	弥生土器	深鉢	4	4090SK	口：1/12	－	(3.3)	－	内面－ヨコナデ 外面－条痕、口縁端部条痕２条	砂粒・礫を含む	2.5Y4/1黄灰色	Ⅰ-3～Ⅱ-1	
	014	弥生土器	深鉢	4	4012SK	口：1/12	－	(4.0)	－	内面－ヨコナデ 外面－条痕、口縁端部条痕２条	砂粒・礫を含む	2.5Y7/3浅黄色	Ⅰ-3～Ⅱ-1	
	015	弥生土器	深鉢	4	4012SK	底：2/12	－	(3.8)	(6.6)	内面－摩耗のため調整不明 外面－条痕文、ナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/3浅黄色	Ⅰ-3～Ⅱ-1	
	016	弥生土器	深鉢	4	Ⅱ・Ⅲ層	底：2/12	－	(4.2)	(7.0)	内面－ナデ 外面－条痕、ミガキ	砂粒・礫を含む	2.5Y4/1黄灰色	Ⅰ-3～Ⅱ-1	
	017	弥生土器	深鉢	4	Ⅱ・Ⅲ層	底：1/12	－	(3.1)	(7.0)	内面－板ナデ 外面－条痕、ミガキ	砂粒・礫を含む	2.5Y5/1黄灰色	Ⅰ-3～Ⅱ-1	
	018	弥生土器	深鉢	4	4016SX	底：3/12	－	(2.0)	(6.4)	内面－板ナデ 外面－条痕文、ナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	Ⅰ-3～Ⅱ-1	
図版23	019	弥生土器	壷	4	4011SD	口：8/12	(15.4)	(11.0)	－	内面－指オサエ、ヨコナデ、一部摩耗のため調整不明 外面－直線文、斜格子文、沈線、波状文、口縁端部キザミ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/3浅黄色 断面：7.5YR6/4にぶい橙色	Ⅱ-2	
	020	弥生土器	壷	4	4011SD	－	－	(8.0)	－	内面－ハケ 外面－ハケ、波状文	砂粒・礫を含む	2.5Y7/4浅黄色	Ⅱ-2	
	021	弥生土器	壷	4	4011SD	－	－	(5.4)	－	内面－輪積痕、指オサエ 外面－ナデ、直線文、波状文	砂粒・礫を含む	7.5YR6/4にぶい橙色	Ⅱ-2	
	022	弥生土器	壷	2	2120SD	－	－	(5.0)	－	内面－指ナデ 外面－櫛描文	砂粒・礫を含む	10Y8/2灰白色 断面：7.5Y6/1灰色	Ⅱ-2	
	023	弥生土器	壷	2	2065SK	口：8/12	11.1	(20.5)	－	内面－指オサエ、ヘラケズリ、ハケ、ヨコナデ 外面－ハケ、ナデ、押引き文、直線文	砂粒・礫を含む	10YR8/3浅黄橙色 断面：10YR5/1褐灰色	Ⅱ-2	

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版23	024	弥生土器	壺	2	2180SD	—	—	(5.5)	—	内面－指オサエ、指ナデ、ヨコナデ 外面－ハケ、直線文	砂粒・礫を含む	2.5Y7/3浅黄色 断面：2.5Y4/1黄灰色	Ⅱ-2	
	025	弥生土器	壺	1	1186SK	口：2/12 底：3/12	(11.6)	27.7	(6.9)	内面－板ナデ、指オサエ、ヨコナデ 外面－ハケ、指オサエ、ナデ、ヨコナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色 断面：10YR4/1褐灰色	Ⅲ-1	
	026	弥生土器	壺	2	Ⅱ・Ⅲ層	口：1/12	(9.4)	(6.5)	—	内面－指オサエ、ナデ 外面－摩耗のため調整不明	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	Ⅱ～Ⅲ	
	027	弥生土器	壺	4	Ⅱ・Ⅲ層	口：1/12	—	(3.8)	—	内面－板ナデ 外面－ナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/3浅黄色	Ⅱ～Ⅲ	
	028	弥生土器	壺	2	Ⅱ・Ⅲ層	—	—	(2.8)	—	内面－ナデ、指オサエ 外面－貼付突帯、刺突文、竹管状刺突文	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	Ⅲ	
	029	弥生土器	壺	2	Ⅱ・Ⅲ層	—	—	(3.6)	—	内面－輪積痕、指ナデ 外面－ヨコナデ、刺突文、竹管状刺突文、直線文	砂粒・礫を含む	2.5Y8/3淡黄色	Ⅱ-2	
	030	弥生土器	壺	2	2180SD	—	—	(4.6)	—	内面－ハケ、指オサエ 外面－刺突文、直線文上に刺突文、直線文	砂粒を含む	10YR8/4浅黄橙色	Ⅱ-2	
	031	弥生土器	壺	2	2180SD	口：1/12	(17.8)	(1.8)	—	内面－羽状文 外面－ナデ、口縁端部キザミ	砂粒・礫を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	Ⅲ-1	
	032	弥生土器	壺	2	2200SK	口：3/12	(19.5)	(4.8)	—	内面－輪積痕、ナデ、羽状文 外面－ハケ、ナデ、口縁端部キザミ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	Ⅲ-1	
	033	土師器	台付甕	4	4065SD	—	—	(3.6)	—	内面－板ナデ 外面－ハケ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	Ⅲ-2	
	034	土師器	高杯	2	2120SD	—	—	(8.0)	—	内面－輪積痕、絞り痕、指オサエ 外面－摩耗のため調整不明	砂粒・礫を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	Ⅲ-3	
第44図	035	弥生土器	壺	2	2222SK	口：2/12 底：4/12	(13.6)	17.3	4.3	内面－ハケ、輪積痕、指ナデ、指オサエ、ミガキ 外面－ナデ、ミガキ	砂粒・礫を含む	7.5YR7/6橙色	Ⅲ-2	
	036	弥生土器	壺	2	2221SK	底：1/12	—	(11.7)	5.8	内面－ナデ、ハケ 外面－ハケ、摩耗のため調整不明	砂粒・礫を含む	2.5Y8/2灰白色	Ⅲ-2	
	037	土師器	壺	6	6010SD	口：10/12 底：12/12	10.3	16.2	5.2	内面－輪積痕、ハケ、ナデ、板ナデ、指オサエ、工具痕、ミガキ 外面－ミガキ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	Ⅲ-2～3	
	038	土師器	小型鉢	6	6010SD	口：7/12 底：12/12	12.4	7.0	3.6	内面－輪積痕、板ナデ、ハケ 外面－ヨコナデ、ミガキ、板ナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	Ⅲ-2～3	
第45図	039	土師器	製塩土器	2	2090SD	残存部位：脚上部	長(6.2)	—	—	外面－指オサエ、指ナデ	砂粒・礫を含む	10YR8/3浅黄橙色	Ⅳ-2	付け根径：2.3cm
	040	土師器	製塩土器	1	Ⅲ層b	残存部位：脚上部	長(3.6)	—	—	内面－ナデ 外面－指オサエ、指ナデ	砂粒を含む	7.5YR8/4浅黄橙色	Ⅳ-2	付け根径：2.1cm
	041	土師器	製塩土器	7	Ⅱ層	残存部位：脚上部	長(5.0)	—	—	外面－指オサエ、指ナデ	砂粒を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	Ⅳ-2	付け根径：2.1cm
	042	土師器	製塩土器	1	Ⅱ・Ⅲ層	残存部位：脚上部	長(4.7)	—	—	内面－ナデ 外面－指オサエ、指ナデ	砂粒を含む	7.5YR6/6橙色	Ⅳ-2	付け根径：2.1cm
	043	土師器	製塩土器	7	Ⅱ層	残存部位：脚上部	長(6.8)	—	—	外面－指オサエ、指ナデ	砂粒を含む	7.5YR6/6橙色	Ⅳ-2	付け根径：2.0cm
	044	土師器	製塩土器	6	Ⅱ・Ⅲ層	残存部位：脚上部	長(5.9)	—	—	外面－指オサエ、指ナデ	砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい橙色		付け根径：1.8cm
	045	土師器	製塩土器	1	Ⅲ層b	残存部位：脚上部	長(4.5)	—	—	外面－指オサエ、指ナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR8/4浅黄橙色	Ⅳ-2	付け根径：1.6cm
	046	土師器	製塩土器	7	7001SX	残存部位：脚上部	長(5.4)	—	—	外面－指オサエ、指ナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR7/4にぶい橙色	Ⅳ-2	付け根径：1.7cm

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
第45図	047	土師器	製塩土器	1	Ⅱ・Ⅲ層	残存部位：脚上部	長（5.3）	—	—	外面－指オサエ、指ナデ	砂粒を含む	5YR7/6橙色	Ⅳ-2	付け根径：1.6cm
	048	土師器	製塩土器	1	1085SP	口：1/10	（10.0）	（2.9）	—	内外面－指オサエ、指ナデ	砂粒を含む	10YR8/3浅黄橙色	Ⅳ-2	
図版24	049	土師器	甕	1	1180SX	口：11/12	17.8	（13.1）	—	内面－輪積痕、指オサエ、ハケ、ヨコナデ 外面－ヨコナデ、ハケ	砂粒を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	Ⅳ-2	
	050	土師器	甕	1	1180SX	口：12/12	12.4	（12.1）	—	内面－輪積痕、ハケ、ヨコナデ、板ナデ、指オサエ 外面－ヨコナデ、指オサエ、ナデ	砂粒を含む	10YR6/3にぶい黄橙色	Ⅳ-2	
	051	土師器	甕	2	2153SX	口：1/12	（24.0）	（2.8）	—	内外面－ヨコナデ	砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい橙色	Ⅳ-2	
	052	土師器	甕	1	撹乱	底：7/12	—	（5.6）	（6.6）	内面－輪積痕、指オサエ、指ナデ 外面－ハケ、板ナデ	砂粒・礫を含む	10YR8/3浅黄橙色	Ⅳ-2	
	053	須恵器	坏身	1	撹乱	口：5/12	（9.0）	（3.3）	—	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ	砂粒を含む	N6/0灰色	Ⅳ-2	
	054	須恵器	無台坏	2	2120SD	底：12/12	—	（2.6）	7.5	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	Ⅳ-2	
	055	須恵器	無台坏	2	2048SK	口：4/12	（11.0）	（4.2）	（7.2）	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ	礫を含む	5YR6/3にぶい橙色	Ⅳ-2	
	056	須恵器	坏身	2	2071SP	口：2/12 底：2/12	（12.1）	3.6	（9.0）	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ	砂粒を含む	10YR6/3にぶい黄橙色 断面：2.5Y5/1黄灰色	Ⅳ-2	
	057	須恵器	碗	1	撹乱	口：1/12	（13.0）	（4.6）	—	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ	砂粒を含む	7.5YR6/4にぶい橙色	Ⅳ-2	
	058	須恵器	碗	1	Ⅱ層	底：2/12	—	（2.9）	（7.4）	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	砂粒を含む	10YR5/2灰黄褐色 断面：2.5Y7/1灰白色	Ⅳ-2	
	059	須恵器	碗	1	1041SK	底：4/12	—	（2.1）	（8.0）	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y5/1黄灰色 断面：7.5YR6/2灰褐色	Ⅳ-2	
	060	須恵器	有台坏	2	Ⅱ層	底：1/12	—	（1.7）	（11.0）	内面－ロクロナデ 外面－回転ヘラケズリ、貼付高台	砂粒・礫を含む	10YR6/3にぶい黄橙色	Ⅳ-2	
	061	須恵器	有台坏	2	Ⅱ・Ⅲ層	—	—	（1.2）	—	内面－ロクロナデ 外面－回転ヘラケズリ、貼付高台	砂粒を含む	5Y6/1灰色	Ⅳ-2	
	062	須恵器	蓋	1	ﾄﾚﾝﾁ1	摘み：8/12	—	（1.8）	—	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、摘み貼付	砂粒・礫を含む	5YR5/2灰褐色	Ⅳ-2	摘み径：（3.4）cm
	063	須恵器	蓋	7	7005SX	口：1/12	（18.1）	（2.1）	—	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ	砂粒・礫を含む	5Y6/1灰色	Ⅳ-2	
	064	須恵器	蓋	1	Ⅱ・Ⅲ層	口：1/12	（17.0）	（2.9）	—	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ	砂粒を含む	5YR5/1褐灰色	Ⅳ-2	
	065	須恵器	蓋	1	1066SP	口：1/12	（15.0）	（2.1）	—	内外面－ロクロナデ	砂粒を含む	10YR6/2灰黄褐色	Ⅳ-2	
	066	須恵器	壺瓶	1	1061SD	底：2/12	—	（3.3）	（6.9）	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒を含む	5Y5/1灰色	Ⅳ-2	
	067	須恵器	壺瓶	1	Ⅱ層	底：1/12	—	（3.3）	（6.8）	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒・礫を含む	N6/0灰色	Ⅳ-2	
	068	須恵器	壺瓶	2	2165SK	底：3/12	—	（2.9）	（11.8）	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒を含む	5Y6/1灰色	Ⅳ-2	降灰のため調整不明瞭
	069	須恵器	有台盤	2	Ⅱ層	底：1/12	—	（3.9）	（14.0）	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	Ⅳ-2	

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版24	070	須恵器	甕	7	7001SX	口：2/12	(18.0)	(4.9)	—	内面－ヨコナデ 外面－タタキ	砂粒・礫を含む	2.5Y5/1黄灰色	Ⅳ-2	
	071	須恵器	短頸壺	1	1150SX	口：1/12	(19.0)	(5.8)	—	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y6/1黄灰色	Ⅳ-2	
	072	須恵器	短頸壺	1	Ⅲ層	口：2/12	(13.0)	(13.6)	—	内外面－ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	Ⅳ-2	
	073	須恵器	甕	2	2120SD	底：2/12	—	(4.8)	(15.4)	内面－ナデ、強いナデ 外面－タタキ、指ナデ、底部摩耗のため調整不明	砂粒・礫を含む	5YR4/1褐灰色 断面：2.5Y7/1灰白色	Ⅳ-2	
	074	須恵器	甑	7	7001SX	口：1/12	—	(10.0)	—	内面－指オサエ、ナデ 外面－ヨコナデ、タタキ、沈線	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	Ⅳ-2	
	075	須恵器	把手	2	2033SK	—	—	(4.4)	—	内面－ナデ 外面－指オサエ、指ナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y8/3淡黄色	Ⅳ-2	
	076	須恵器	把手	2	Ⅰ層	—	—	(6.4)	—	内面－指オサエ 外面－指オサエ、指ナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y8/2灰白色	Ⅳ-2	
第46図	077	灰釉陶器	皿	2	2120SD	口：1/12 底：12/12	14.3	2.7	6.6	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	Ⅳ-2	
	078	灰釉陶器	皿	2	Ⅱ・Ⅲ層	底：1/12	—	(2.0)	(8.0)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	Ⅳ-2	
	079	灰釉陶器	碗	2	2120SD	底：2/12	—	(1.8)	(6.8)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	Ⅳ-2	
	080	灰釉陶器	碗	1	Ⅲ層	底：9/12	—	(2.9)	6.9	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	Ⅳ-3	
	081	灰釉陶器	碗	1	Ⅱ・Ⅲ層	底：2/12	—	(1.5)	(7.0)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	Ⅳ-3	
	082	緑釉素地	碗	1	1021SK	底：2/12	—	(2.1)	(7.0)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色	Ⅳ-3	蛇の目高台
第47図	083	山茶碗	小皿	1	1060SK	口：4/12 底：6/12	(7.6)	2.5	(4.0)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	5Y8/1灰白色	Ⅴ-2	
	084	山茶碗	小皿	1	1060SK	口：12/12 底：12/12	7.6	1.8	4.1	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/3浅黄色	Ⅴ-2	
	085	山茶碗	小皿	1	1060SK	口：11/12 底：12/12	7.2	1.9	4.5	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	Ⅴ-2	
	086	山茶碗	小皿	1	1060SK	口：12/12 底：12/12	7.6	2.0	4.2	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転ヘラ切り	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	Ⅴ-2	
	087	山茶碗	小皿	1	1060SK	口：12/12 底：12/12	8.0	2.0	4.6	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	2.5Y6/2灰黄色	Ⅴ-2	
	088	山茶碗	小皿	1	1060SK	口：1/12 底：7/12	(8.8)	2.0	(5.0)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	2.5Y6/2灰黄色	Ⅴ-2	
	089	山茶碗	碗	1	1060SK	口：3/12 底：5/12	(15.5)	4.7	(7.2)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	Ⅴ-2	籾殻痕
	090	山茶碗	碗	1	1060SK	口：1/12 底：3/12	(15.8)	4.6	(6.8)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	Ⅴ-2	籾殻痕
	091	山茶碗	碗	1	1060SK	底：3/12	—	(3.6)	(6.5)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	Ⅴ-2	籾殻痕
	092	山茶碗	碗	1	1060SK	底：3/12	—	(3.7)	(8.2)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y7/3浅黄色	Ⅴ-2	籾殻痕
	093	山茶碗	碗	1	1060SK	口：10/12 底：6/12	15.4	5.4	(7.4)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	Ⅴ-2	籾殻痕

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
第47図	094	山茶碗	碗	1	1060SK	口：8/12 底：7/12	—	(2.6)	(5.7)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	095	山茶碗	碗	1	1060SK	口：9/12 底：12/12	16.0	4.7	7.7	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	V-2	籾殻痕
	096	山茶碗	碗	1	1060SK	—	—	(2.3)	(7.0)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、高台剥離	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-2	
	097	常滑焼	片口鉢	1	1060SK	口：2/12	(25.0)	(6.2)	—	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	10YR5/1褐灰色	V-2	
	098	常滑焼	甕	1	1060SK	底：1/12		(5.0)	—	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	10YR5/1褐灰色	V-2	
図版25	099	山茶碗	碗	2	2120SD	口：5/12 底：12/12	16.0	5.0	8.0	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、板状圧痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	籾殻痕
	100	山茶碗	碗	2	2120SD	口：5/12 底：6/12	(15.6)	4.4	8.0	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	10YR8/3浅黄橙色	V-2	籾殻痕
	101	山茶碗	碗	2	2120SD	口：2/12 底：12/12	15.9	4.8	7.2	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒・礫を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	V-2	籾殻痕、砂粒痕
	102	山茶碗	碗	2	2120SD	口：1/12 底：10/12	(17.0)	5.1	(7.6)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	籾殻痕
	103	山茶碗	碗	2	2120SD	口：5/12 底：3/12	(16.2)	4.8	(6.7)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-2	籾殻痕
	104	山茶碗	碗	2	2120SD	口：2/12 底：7/12	(15.6)	4.8	(7.8)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、貼付高台、ナデ	砂粒・礫を含む	10YR8/1灰白色	V-2	籾殻痕
	105	山茶碗	碗	2	2120SD	口：4/12 底：4/12	(16.0)	4.8	7.0	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	籾殻痕
	106	山茶碗	碗	2	2120SD	口：1/12 底：12/12	(16.2)	5.1	(7.7)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒・礫を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	V-2	籾殻痕
	107	山茶碗	碗	2	2120SD	口：6/12 底：12/12	15.6	4.8	7.1	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台、ナデ	礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	108	山茶碗	碗	2	2120SD	口：3/12 底：12/12	(15.6)	5.1	(7.6)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、ナデ、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	籾殻痕
	109	山茶碗	碗	2	2120SD	底：12/12	—	(3.3)	8.1	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、糸切痕、貼付高台、ナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	籾殻痕
	110	山茶碗	碗	2	2120SD	底：8/12	—	(3.2)	7.2	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	111	山茶碗	碗	2	2120SD	口：5/12 底：12/12	14.9	5.3	7.0	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台、ナデ	礫を含む	5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	112	山茶碗	碗	2	2120SD	口：7/12 底：5/12	14.4	5.0	7.0	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	外面：2.5Y7/2灰黄色 断面：2.5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	113	山茶碗	碗	2	2120SD	口：7/12 底：1/12	(15.6)	5.3	(7.1)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	7.5Y6/2灰オリーブ色	V-2	籾殻痕
	114	山茶碗	碗	2	2120SD	口：3/12 底：12/12	(14.5)	5.0	(7.3)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、高台剥離	砂粒・礫を含む	5Y7/1灰白色	V-2	
	115	山茶碗	碗	2	2120SD	口：10/12 底：12/12	13.9	5.1	6.2	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、ヘラナデ、貼付高台	砂粒・礫を含む	5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	116	山茶碗	碗	2	2120SD	口：8/12 底：2/12	13.5	5.6	(6.4)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台、板状圧痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	117	山茶碗	碗	2	2120SD	口：5/12 底：5/12	(13.6)	4.8	(5.8)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、ナデ、高台剥離	礫を含む	7.5YR6/1褐灰色	V-2	

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版25	118	山茶碗	碗	2	2120SD	口：4/12 底：3/12	(14.4)	(5.4)	(6.9)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-2	
	119	山茶碗	碗	2	2120SD	口：11/12 底：12/12	13.6	4.8	5.8	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	籾殻痕
	120	山茶碗	碗	2	2120SD	口：12/12 底：12/12	13.5	4.8	6.3	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	121	山茶碗	碗	2	2120SD	口：4/12 底：10/12	(14.2)	4.7	6.1	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、ナデ、貼付高台	礫を含む	5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	122	山茶碗	碗	2	2120SD	口：5/12 底：6/12	(12.5)	5.0	(6.3)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒・礫を含む	5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	123	山茶碗	碗	2	2120SD	口：11/12 底：12/12	14.3	5.3	6.3	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒・礫を含む	5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕、片口碗か
	124	山茶碗	碗	2	2120SD	口：5/12 底：2/12	(13.5)	5.2	(5.2)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	125	山茶碗	碗	2	2120SD	口：6/12 底：12/12	13.1	5.8	4.6	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒・礫を含む	10YR8/2灰白色	V-2	
	126	山茶碗	碗	2	2120SD	口：6/12 底：3/12	(13.6)	5.9	6.8	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	127	山茶碗	碗	2	2120SD	口：2/12	(13.0)	(4.3)	－	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	瀬戸産
	128	山茶碗	碗	2	2120SD	口：3/12	(13.2)	(4.0)	－	内外面－ロクロナデ	礫を含む	5Y8/1灰白色	V-2	瀬戸産
	129	山茶碗	碗	2	2120SD	口：3/12	(12.6)	(5.3)	－	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、板状圧痕、高台剥離	砂粒・礫を含む	2.5Y8/2灰白色	V-2	瀬戸産
	130	山茶碗	碗	2	2120SD	口：2/12 底：5/12	(12.9)	6.3	(4.2)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、板状圧痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕、瀬戸産
	131	山茶碗	碗	2	2120SD	底：8/12	－	(2.9)	(5.0)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台、ナデ	礫を含む	5Y8/1灰白色	V-2	籾殻痕、瀬戸産
	132	山茶碗	碗	2	2120SD	底：1/12	－	(2.7)	(5.0)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、板状圧痕、貼付高台	礫を含む	7.5YR8/1灰白色	V-2	籾殻痕、瀬戸産
	133	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：1/12 底：12/12	(8.8)	2.5	4.3	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、板状圧痕	砂粒・礫を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	V-2	
	134	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：6/12 底：12/12	9.2	2.2	4.2	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、ヘラ切	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	
	135	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：12/12 底：12/12	8.2	2.3	4.3	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒・礫を含む	5Y7/1灰白色	V-2	
	136	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：8/12 底：12/12	(9.1)	(2.2)	5.1	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転ヘラ切、板状圧痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	
	137	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：10/12 底：12/12	8.5	2.0	5.3	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、ヘラナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	
	138	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：11/12 底：12/12	7.8	2.0	4.5	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、ナデ	礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	
	139	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：10/12 底：12/12	8.3	2.1	4.6	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	
	140	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：3/12 底：5/12	(7.6.)	2.0	(4.4)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、板状圧痕	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-2	
	141	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：7/12 底：12/12	7.6	2.2	3.9	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版25	142	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：12/12 底：12/12	8.8	2.0	5.7	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、板状圧痕	砂粒・礫を含む	5Y8/1灰白色	V-2	
	143	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：8/12 底：10/12	7.5	1.8	5.0	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒・礫を含む	5Y7/1灰白色	V-2	
	144	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：12/12 底：12/12	8.0	1.7	5.6	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	
	145	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：8/12 底：12/12	8.6	1.7	5.5	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、ナデ	礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	
	146	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：3/12 底：3/12	(8.4)	(1.3)	(6.4)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、板状圧痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	瀬戸産
	147	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：12/12 底：12/12	7.9	1.8	4.8	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、ナデ	礫を含む	5Y8/1灰白色	V-2	籾殻痕、見込みに付着物あり
	148	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：1/12 底：12/12	(8.0)	1.6	4.4	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、ナデ	礫を含む	5Y7/1灰白色	V-2	
	149	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：12/12 底：12/12	7.3	1.4	4.4	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、指ナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR7/3にぶい橙色	V-2	
	150	山茶碗		2	2120SD	－	－	(6.6)	6.1	内面－ロクロナデ、指ナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒を含む	5Y8/1灰白色	V-2	4枚以上の重ね焼籾殻痕、底径は下から2枚目
図版26	151	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：1/12 底：2/12	(8.0)	0.8	(6.3)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-3～4	
	152	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：5/12 底：8/12	(8.0)	1.0	5.5	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、板状圧痕	砂粒を含む	5Y7/1灰白色	V-3～4	
	153	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：2/12 底：3/12	(7.6)	1.1	(5.0)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	V-3～4	
	154	山茶碗	小皿	2	2120SD	口：4/12 底：5/12	(7.8)	1.2	(5.5)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒を含む	5Y8/1灰白色	V-3～4	
	155	山茶碗	碗	2	2120SD	口：1/12	(12.8)	(3.0)	－	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y8/2灰白色	V-3	土師器杯の可能性あり
	156	山茶碗	碗	2	2120SD	底：7/12	－	(2.2)	(3.0)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y8/1灰白色	V-3	籾殻痕
	157	山茶碗	碗	2	2120SD	口：4/12 底：5/12	(12.6)	4.6	(3.5)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	礫を含む	5Y8/2灰白色	V-3	見込み及び高台に籾殻痕あり
	158	山茶碗	碗	2	2120SD	口：1/12 底：1/12	(13.8)	3.0	(5.6)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	礫を含む	5Y8/1灰白色	V-4	籾殻痕
	159	山茶碗	碗	2	2120SD	口：1/12 底：6/12	(11.8)	4.5	(3.8)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	5Y8/1灰白色	V-4	籾殻痕
	160	山茶碗	碗	2	2120SD	口：2/12	(11.2)	(2.8)	－	内外面－ロクロナデ	礫を含む	10YR8/2灰白色	V-4	
	161	山茶碗	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	(23.7)	(3.8)	－	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-1	
	162	山茶碗	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	(21.4)	(7.5)	－	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ	砂粒・礫を含む	2.5Y6/1黄灰色	V-2	
	163	山茶碗	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	(28.2)	(8.3)	－	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	7.5Y7/1灰白色	V-2	
	164	山茶碗	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	(26.2)	(4.4)	－	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	5Y7/1灰白色	V-2	

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版26	165	山茶碗	片口鉢	2	2120SD	底：5/12	－	(7.8)	(13.4)	内面－ロクロナデ、重ね焼痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、回転ヘラケズリ、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	
	166	山茶碗	片口鉢	2	2120SD	底：3/12	－	(5.4)	(14.4)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、糸切痕、貼付高台、ナデ	礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	167	山茶碗	片口鉢	2	2120SD	底：4/12	－	(6.0)	(12.9)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台、底部摩耗のため調整不明	礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	
	168	山茶碗	片口鉢	2	2120SD	底：2/12	－	(9.5)	(12.9)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y6/1黄灰色	V-2	
	169	山茶碗	片口鉢	2	2120SD	底：5/12	－	(7.6)	(13.0)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、ヘラケズリ、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y6/2灰黄色	V-2	籾殻痕
	170	山茶碗	片口鉢	2	2120SD	底：7/12	－	(3.8)	(9.6)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、ナデ、高台剥離	礫を含む	5Y8/1灰白色	V-2	
	171	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(54.8)	(15.0)	－	内面－輪積痕、ヨコナデ、指オサエ、板ナデ 外面－ヨコナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	5YR5/4にぶい赤褐色 断面：7.5Y6/1灰色	V-1	
	172	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(26.0)	(8.5)	－	内外面－ヨコナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	5YR4/3にぶい赤褐色 断面：5Y8/1灰白色	V-2	
	173	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(30.0)	(8.0)	－	内面－輪積痕、指オサエ、ヨコナデ 外面－指オサエ、ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR4/3にぶい赤褐色 断面：2.5Y7/1灰白色	V-2	
図版27	174	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(35.8)	(9.6)	－	内面－ヨコナデ、指オサエ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR6/3にぶい褐色	V-2	
	175	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	－	(6.2)	－	内外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	2.5YR3/3暗赤褐色 断面：N4/0灰色	V-2	
	176	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(44.2)	(4.4)	－	内面－ヨコナデ 外面－ヨコナデ、板ナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/2にぶい黄橙色	V-2	
	177	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	－	(7.4)	－	内面－輪積痕、指オサエ、ヨコナデ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR6/4にぶい橙色 断面：5Y6/1灰色	V-2	
	178	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(44..6)	(5.3)	－	内外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR5/3にぶい赤褐色 断面：N6/0灰色	V-2	
	179	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(39.2)	(8.1)	－	内面－ヨコナデ、指ナデ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR5/3にぶい赤褐色 断面：10YR6/1褐灰色	V-2	
	180	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	－	(9.1)	－	内面－ヨコナデ、指オサエ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	7.5R4/1暗赤灰色 断面：5Y7/1灰白色	V-2	
	181	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(40.8)	(10.5)	－	内面－ヨコナデ、指オサエ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	2.5YR6/6橙色	V-2	
	182	常滑焼	広口壺	2	2120SD	口：2/12	(28.9)	(11.7)	－	内面－ヨコナデ、指オサエ、指ナデ 外面－ヨコナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	内面：5YR4/4にぶい赤褐色 断面：N8/0灰白色	V-2	
	183	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(47.4)	(9.0)	－	内外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	2.5YR5/2灰赤色 断面：N5/0灰色	V-2	
	184	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(52.0)	(11.9)	－	内面－ヨコナデ、指オサエ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR5/6明赤褐色 断面：N4/0灰色	V-2	
図版28	185	常滑焼	甕	2	2120SD	口：2/12	(37.6)	(18.6)	－	内面－指オサエ、指ナデ、ヨコナデ 外面－ナデ、ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR5/2灰褐色 断面：2.5Y7/1灰白色	V-2	
	186	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	－	(6.1)	－	内外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	2.5YR4/2灰赤色 断面：N5/0灰色	V-2	

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版28	187	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(47.6)	(7.4)	—	内面－ヨコナデ 外面－ヨコナデ、ナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR5/3にぶい褐色	V-2	
	188	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	—	(5.8)	—	内外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR5/3にぶい赤褐色 断面：5Y6/1灰色	V-2	
	189	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(35.0)	(9.1)	—	内面－輪積痕、ヨコナデ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	10YR8/4浅黄橙色	V-2	
	190	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	—	(10.5)	—	内面－ヨコナデ、指オサエ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR5/3にぶい褐色	V-2	
	191	常滑焼	甕	2	2120SD	口：1/12	(24.6)	(7.5)	—	内面－ヨコナデ、指オサエ、指ナデ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	2.5YR5/2灰赤色 断面：N5/0灰色	V-2	
	192	常滑焼	短頸壺	2	2120SD	口：1/12	(22.5)	(6.0)	—	内面－ヨコナデ、指オサエ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	2.5YR5/3にぶい赤褐色 断面：7.5Y5/1褐灰色	V-2	
	193	常滑焼	壺	2	2120SD	口：5/12	(15.7)	(17.5)	—	内面－輪積痕、ヨコナデ、指オサエ 外面－ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒・礫を含む	10Y4/1灰色 断面：N4/0灰色	V-1	外面にπのような線刻あり
	194	常滑焼	壺	2	2120SD	底：1/12	—	(6.2)	(12.0)	内面－指オサエ 外面－ヨコナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	5YR4/2灰褐色 断面：2.5Y7/1灰白色	V-2	
	195	常滑焼	壺	2	2120SD	口：1/12	(18.6)	(6.4)	—	内面－輪積痕、ロクロナデ、指オサエ 外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR5/3にぶい褐色 断面：2.5Y7/1灰白色	V-2	
	196	常滑焼	広口壺	2	2120SD	口：2/12	(12.6)	(4.4)	—	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y6/1黄灰色	V-2	
	197	常滑焼	玉縁壺	2	2120SD	口：1/12	(10.2)	(5.2)	—	内面－ヨコナデ 外面－ヨコナデ	砂粒を含む	5YR5/3にぶい赤褐色 断面：2.5Y7/2黄灰色	V-2	
	198	常滑焼	小鉢	2	2120SD	口：4/12 底：4/12	(15.3)	5.8	(13.0)	内面－ロクロナデ、指ナデ 外面－ロクロナデ、ヘラナデ、底部砂粒痕	砂粒・礫を含む	5YR6/4にぶい橙色	V-2	内面にSのような線刻あり
	199	常滑焼	小鉢	2	2120SD	口：1/12 底：1/12	(15.0)	4.7	(13.2)	内面－板ナデ、ナデ 外面－指オサエ、ナデ釉	礫を含む	5YR5/4にぶい赤褐色 断面：2.5Y5/1黄灰色	V-2	
	200	常滑焼	羽釜	2	2120SD	口：1/12	(21.9)	(6.6)	—	内外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	10YR8/3浅黄橙色	V-2	土師質焼成
	201	常滑焼	羽釜	2	2120SD	—	—	(4.9)	—	内面－ヨコナデ、板ナデ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR7/6橙色	V-2	土師質焼成
図版29	202	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	(22.0)	(5.6)	—	内面－輪積痕、ロクロナデ、指オサエ 外面－ロクロナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	5YR5/4にぶい赤褐色 断面：N5/0灰色	V-2	
	203	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：1/12 底：3/12	(34.0)	12..6	(17.0)	内面－ロクロナデ、板ナデ、指オサエ 外面－ロクロナデ、指オサエ、板ナデ、底部砂粒痕	砂粒・礫を含む	2.5YR4/2灰赤色 断面：2.5Y6/1黄灰色	V-2	
	204	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	(29.0)	(6.1)	—	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	5YR5/3にぶい赤褐色	V-2	
	205	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	—	(5.3)	—	内面－輪積痕、ヨコナデ 外面－ナデ、ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR5/3にぶい赤褐色	V-2	
	206	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	—	(4.3)	—	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR5/2灰褐色	V-2	
	207	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	(35.8)	(6.2)	—	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	5YR6/6橙色	V-3	
	208	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	—	(7.2)	—	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、指オサエ	砂粒・礫を含む	2.5YR5/3にぶい赤褐色 断面：2.5Y6/1黄灰色	V-3	
	209	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	—	(7.1)	—	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、指オサエ、指ナデ	砂粒・礫を含む	5YR4/1褐灰色 断面：5YR6/6橙色	V-4	
	210	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	(32.8)	(9.7)	—	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	5YR6/3にぶい橙色 断面：N6/0灰色	V-4	

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版29	211	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	—	(7.0)	—	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	5YR5/4にぶい赤褐色 断面：5Y6/1灰色	V-4	
	212	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：1/12 底：1/12	(34.8)	12.9	(14.0)	内面－ロクロナデ、ヨコナデ 外面－ロクロナデ、ヨコナデ、指オサエ、板ナデ	砂粒・礫を含む	5Y5/1灰色	V-4	
	213	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：3/12	(29.4)	(9.8)	—	内面－輪積痕、ロクロナデ 外面－ロクロナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	5YR5/3にぶい赤褐色 断面：5Y5/1灰色	V-4	
	214	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	底：2/12	—	(6.8)	(13.0)	内面－輪積痕、指オサエ、ヨコナデ 外面－ハケ、ヨコナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR6/3にぶい褐色	V-3～4	
	215	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	底：2/12	—	(6.4)	(13.0)	内面－ナデ 外面－ロクロナデ、指オサエ、底部砂粒痕	砂粒・礫を含む	2.5YR6/6橙色	V-3～4	
	216	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	底：1/12	—	(6.8)	(16.0)	内面－輪積痕、ナデ、指オサエ、板ナデ 外面－ナデ、指オサエ、底部砂粒痕	砂粒・礫を含む	2.5YR5/3にぶい赤褐色	V-3～4	
	217	常滑焼	片口鉢	2	2120SD	口：1/12	(28.4)	(7.4)	—	内面－指オサエ、ナデ 外面－指オサエ、ナデ、ヘラケズリ	砂粒・礫を含む	5YR6/6橙色	V-5	
図版30	218	古瀬戸	折縁小皿	2	2120SD	口：3/12 底：4/12	(9.0)	2.2	(5.2)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、施釉	砂粒を含む	N7/0灰白色	V-4	
	219	古瀬戸	端反り皿	2	2120SD	口：1/12 底：5/12	(11.3)	2.2	(6.0)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、施釉	砂粒を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	V-4	
	220	古瀬戸	小皿	2	2120SD	底：11/12	—	(1.4)	(4.8)	内面－ロクロナデ、指圧痕、施釉 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	221	瀬戸美濃	小皿	2	2120SD	口：1/12 底：3/12	(10.7)	2.2	(3.4)	内外面－ロクロナデ、施釉	砂粒を含む	5Y8/1灰白色	V-5	
	222	古瀬戸	天目茶碗	2	2120SD	口：3/12	(12.0)	(5.0)	—	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、施釉	砂粒を含む	5Y8/1灰白色	V-4	
	223	古瀬戸	天目茶碗	2	2120SD	底：9/12	—	(2.5)	(4.6)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－回転ヘラケズリ、削出高台	砂粒・礫を含む	5Y7/1灰白色	V-4	
	224	古瀬戸	碗	2	2120SD	口：1/12	—	(3.1)	—	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、施釉	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	V-4	
	225	古瀬戸	皿	2	2120SD	口：1/12	—	(4.4)	—	内外面－ロクロナデ、施釉	砂粒を含む	2.5Y8/2灰白色	V-4	
	226	古瀬戸	鉢	2	2120SD	底：3/12	—	(1.7)	(10.0)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、板状圧痕	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	227	古瀬戸	鉢	2	2120SD	底：3/12	—	(1.7)	(9.9)	内面－ロクロナデ、指圧痕、施釉 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-4	見込みにトチン痕あり
	228	古瀬戸	皿	2	2120SD	底：3/12	—	(1.8)	(10.6)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－回転ヘラケズリ、回転ヘラ切	砂粒を含む	5Y6/1灰色	V-4	
	229	古瀬戸	盤	2	2120SD	底：2/12	—	(2.8)	(13.0)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－回転ヘラ切り、ナデ、回転ヘラケズリ、施釉	砂粒・礫を含む	2.5Y8/2灰白色	V-4	
	230	古瀬戸	折縁深皿	2	2120SD	底：3/12	—	(4.4)	(12.2)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－回転ヘラケズリ	砂粒・礫を含む	7.5YR7/4にぶい橙色 断面：10YR8/4浅黄橙色	V-4	
	231	古瀬戸	花瓶	2	2120SD	底：2/12	—	(5.0)	(5.2)	内面－ロクロナデ、板ナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、施釉	砂粒を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	V-3	
	232	古瀬戸	柄付片口	2	2120SD	—	—	(6.8)	—	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、ヘラケズリ、施釉	砂粒を含む	2.5Y8/1灰白色	V-3	
	233	古瀬戸	瓶類	2	2120SD	—	—	(9.6)	—	内面－ロクロナデ 外面－回転ヘラケズリ、施釉	砂粒・礫を含む	2.5Y7/3浅黄色	V-3	

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版30	234	古瀬戸	瓶子	2	2120SD	底：12/12	－	(6.9)	8.8	内面－輪積痕、ロクロナデ、指オサエ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、施釉	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	V－3	
	235	土師器	伊勢型鍋	2	2120SD	口：1/12	(20.0)	(3.8)	－	内面－ヨコナデ、ハケ 外面－ヨコナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色 断面：10Y6/1灰色	V－2	
	236	土師器	伊勢型鍋	2	2120SD	口：3/12	(24.6)	(5.3)	－	内面－ヨコナデ、板ナデ 外面－ヨコナデ、指オサエ	礫を含む	7.5YR7/4にぶい橙色 断面：5Y4/1灰色	V－2	
	237	土師器	伊勢型鍋	2	2120SD	口：2/12	(25.8)	(13.6)	－	内面－ヨコナデ、板ナデ、ヘラケズリ 外面－ヨコナデ、ハケ、指オサエ、ヘラケズリ	砂粒・礫を含む	7.5YR7/3にぶい橙色 断面：2.5Y4/1黄灰色	V－2	
	238	土師器	伊勢型鍋	2	2120SD	口：2/12	(23.4)	(5.1)	－	内面－ヨコナデ、指オサエ 外面－ヨコナデ、ハケ、指オサエ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	V－2	
	239	土師器	伊勢型鍋	2	2120SD	口：1/12	(26.0	(3.3)	－	内面－指オサエ、ヨコナデ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	10YR8/2灰白色 断面：5Y5/1灰色	V－2	
	240	土師器	伊勢型鍋	2	2120SD	口：1/12	(23.7)	(2.9)	－	内外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色 断面：10Y3/1オリーブ黒色	V－2	
	241	土師器	伊勢型鍋	2	2120SD	口：1/12	(24.6)	(5.6)	－	内面－指オサエ、ヨコナデ、ナデ 外面－ヨコナデ、ハケ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V－3	
	242	土師器	羽釜	2	2120SD	－	－	(3.1)	－	内面－指オサエ、ナデ 外面－ハケ、ヨコナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR7/4にぶい橙色 断面：N3/0暗灰色	V－3	
	243	土師器	羽釜	2	2120SD	口：1/12	(23.6)	(1.8)	－	内面－ヨコナデ、指ナデ 外面－ヨコナデ	礫を含む	7.5YR8/4浅黄橙色	V－4	
	244	土師器	内耳鍋	2	2120SD	口：1/12	(24.0)	(5.5)	－	内面－ヨコナデ 外面－ヨコナデ、指オサエ、沈線	砂粒・礫を含む	2.5Y8/2灰白色	V－4	
	245	土師器	内耳鍋	2	2120SD	口：1/12	－	(4.2)	－	内面－指ナデ 外面－ヨコナデ、ナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y8/2灰白色	V－4	
	246	土師器	小皿	2	2120SD	口：5/12 底：11/12	(7.3)	1.6	(5.1)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、板状圧痕	砂粒・礫を含む	7.5Y7/3浅黄色	V－2～4	
	247	土師器	小皿	2	2120SD	口：1/12 底：8/12	(7.2)	1.6	(4.6)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒・礫を含む	5YR6/6橙色	V－2～4	
	248	土師器	小皿	2	2120SD	口：4/12 底：4/12	(8.2)	1.3	(5.6)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕	砂粒・礫を含む	10YR8/2灰白色	V－2～4	
	249	土師器	小皿	2	2120SD	口：3/12 底：3/12	(8.0)	1.5	－	内面－ヨコナデ、指ナデ 外面－ヨコナデ、指オサエ、ナデ	砂粒を含む	2.5Y8/2灰白色	V－2～4	
	250	土師器	小皿	2	2120SD	口：3/12	(9.1)	1.4	(3.7)	内面－ナデ 外面－ナデ、指オサエ	砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい橙色	V－2～4	
	251	青磁	碗	2	2120SD	口：1/12	－	(3.7)	－	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、蓮弁文、施釉	砂粒を含まない	N8/0灰白色	V－2～3	
	252	青磁	碗	2	2120SD	口：1/12	－	(2.6)	－	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、蓮弁文、施釉	砂粒を含まない	5Y8/1灰白色	V－2～3	
	253	青磁	碗	2	2120SD	底：2/12	－	(1.9)	(4.7)	内面－ロクロナデ、施文、施釉 外面－回転ヘラケズリ、削出高台、施釉	砂粒を含まない	10Y8/1灰白色	V－2～3	
	254	青磁	碗	2	2120SD	口：1/12	－	(1.7)	－	内外面－ロクロナデ、施釉	砂粒を含まない	5Y7/1灰白色	V－3～4	
	255	青白磁	合子	2	2120SD	口：4/12	(4.2)	(1.6)	－	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、蓮弁文、施釉	砂粒を含まない	5Y8/1灰白色	V－2～3	
	256	白磁	碗	2	2120SD	底：3/12	－	(2.5)	(7.0)	内面－輪積痕、ロクロナデ、施釉 外面－回転ヘラケズリ、削出高台	砂粒を含まない	5Y8/1灰白色	V－2	
図版31	257	山茶碗	小皿	2	2180SD	口：6/12 底：8/12	(8.2)	2.0	(5.6)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、ヘラ切り、ナデ	礫を含む	2.5Y6/1黄灰色	V－2	籾殻痕

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版31	258	山茶碗	小皿	2	2180SD	口：5/12 底：7/12	(7.6)	1.6	(5.2)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	礫を含む	5Y8/1灰白色	V-2	瀬戸産　内面降灰多
	259	山茶碗	小皿	2	2180SD	口：5/12 底：8/12	(7.7)	1.8	(4.9)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、板状圧痕	礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	内面降灰多
	260	山茶碗	碗	2	2180SD	口：1/12 底：10/12	(14.6)	5.1	(6.0)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	籾殻痕
	261	山茶碗	碗	2	2180SD	口：1/12	(14.4)	(4.7)	－	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、高台剥離	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-2	
	262	山茶碗	碗	2	2180SD	口：1/12 底：10/12	(13.6)	5.9	(6.2)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、板状圧痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	263	山茶碗	碗	2	2180SD	口：10/12 底：12/12	12.9	4.8	4.9	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-3	
	264	山茶碗	碗	2	2180SD	口：3/12 底：5/12	(13.2)	4.3	(5.4)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-3	瀬戸産
	265	山茶碗	碗	2	2180SD	口：5/12 底：12/12	(13.0)	4.4	5.0	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-3	瀬戸産
	266	常滑焼	片口鉢	2	2180SD	口：1/12	(28.9)	(8.4)	－	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	5YR7/6橙色	V-4	
	267	常滑焼	片口鉢	2	2180SD	口：1/12	(30.0)	(7.8)	－	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、板ナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	10YR6/2灰黄褐色	V-4	
	268	常滑焼	片口鉢	2	2180SD	口：1/12	(24.0)	(5.8)	－	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、ヘラケズリ、ナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	2.5YR6/4にぶい橙色	V-4	
	269	常滑焼	片口鉢	2	2180SD	口：1/12	(28.0)	(7.4)	－	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、指オサエ	砂粒を含む	5YR6/3にぶい橙色 断面：2.5Y6/1黄灰色	V-4	
	270	常滑焼	甕	2	2180SD	口：1/12	(39.0)	(6.4)	－	内外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR7/1明褐灰色 断面：5YR6/1褐灰色	V-4	
	271	常滑焼	広口壺	2	2180SD	口：1/12	(15.2)	(8.4)	－	内面－輪積痕、指オサエ、ヨコナデ 外面－ハケ、ヨコナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR5/2灰褐色 断面：2.5Y6/1黄灰色	V-2	
	272	常滑焼	小鉢	2	2180SD	口：2/12 底：1/12	(17.4)	7.0	(12.8)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、底部砂粒痕	砂粒を含む	5YR5/2明褐灰色 断面：10YR6/1褐灰色	V-2	
	273	古瀬戸	折縁深皿	2	2180SD	口：1/12	－	(3.5)	－	内外面－ロクロナデ、施釉	砂粒を含む	2.5Y7/3浅黄色	V-4	
	274	古瀬戸	天目茶碗	2	2180SD	口：1/12 底：5/12	(11.6)	7.2	(4.2)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、削出高台、施釉	砂粒を含む	2.5Y7/3浅黄色	V-4	
	275	古瀬戸	壷	2	2180SD	口：3/12	(11.0)	(6.8)	－	内外面－ヨコナデ、施釉	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	V-4	
	276	古瀬戸	壷	2	2180SD	底：1/12	－	(17.4)	(13.7)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台、施釉	砂粒を含む	2.5Y7/3浅黄色	V-4	
	277	土師器	伊勢型鍋	2	2180SD	口：2/12	(21.3)	(4.4)	－	内面－輪積痕、ヨコナデ 外面－ヨコナデ、指オサエ、ハケ	砂粒を含む	2.5Y7/3浅黄色	V-2	
	278	土師器	羽釜	2	2180SD	口：1/12	(21.5)	(4.1)	－	内面－ヨコナデ 外面－ハケ、ヨコナデ	砂粒を含む	10YR8/4浅黄橙色 断面：2.5YR5/1赤灰色	V-3	
	279	土師器	羽釜	2	2180SD	口：1/12	－	(4.8)	－	内面－輪積痕、ヨコナデ、板ナデ 外面－ハケ、ヨコナデ	砂粒を含む	7.5YR5/1褐灰色	V-3	
	280	土師器	羽釜	2	2180SD	口：3/12	(22.5)	(8.2)	－	内面－指オサエ、ヨコナデ、板ナデ、強いナデ 外面－ハケ、指オサエ、指ナデ、ヨコナデ	砂粒を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	V-4	

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版31	281	土師器	羽釜	2	2180SD	口：2/12	(18.9)	(3.7)	—	内面－指オサエ、ナデ 外面－ハケ、ヨコナデ	砂粒を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	V-4	
	282	土師器	羽釜	2	2180SD	口：1/12	(20.8)	(3.7)	—	内面－ヨコナデ、ナデ 外面－ハケ、ヨコナデ	砂粒・礫を含む	10YR4/1褐灰色 断面：2.5Y4/1黄灰色	V-4	
図版32	283	山茶碗	小皿	2	2195SK	口：1/12 底：5/12	(8.7)	1.2	(6.5)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/3浅黄色	V-3	
	284	山茶碗	碗	2	2195SK	口：7/12 底：12/12	12.7	3.6	5.1	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、板状圧痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	285	山茶碗	碗	2	2194SK	口：2/12 底：4/12	(12.7)	3.1	(4.4)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	V-4	
	286	山茶碗	碗	2	2153SX	口：1/12	(14.5)	(3.5)	—	内外面－ロクロナデ	砂粒を含む	10YR8/3浅黄橙色	V-3	
	287	山茶碗	碗	2	2195SK	口：3/12 底：12/12	(12.0)	3.9	5.1	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、板状圧痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	288	山茶碗	碗	2	2204SK	口：1/12 底：8/12	(13.2)	4.2	5.6	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、板状圧痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-3	
	289	山茶碗	碗	2	2195SK	口：1/12 底：1/12	(14.1)	5.4	(6.2)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒・礫を含む	5Y7/1灰白色	V-3	
	290	常滑焼	甕	2	2153SX	口：1/12	(36.2)	(6.3)	—	内外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	10YR4/2灰黄褐色 断面：5YR5/1褐灰色	V-4	
	291	常滑焼	甕	2	2153SX	口：1/12	—	(5.0)	—	内外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR4/3にぶい赤褐色 断面：10YR5/1褐灰色	V-4	
	292	常滑焼	大甕	2	2195SK	口：1/12	(45.3)	(8.5)	—	内面－輪積痕、ヨコナデ、指オサエ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR6/3にぶい橙色 断面：10YR8/1灰白色	V-4	
	293	常滑焼	片口鉢	2	2194SK	口：1/12	(30.8)	(8.2)	—	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	2.5YR6/6橙色	V-4	
	294	古瀬戸	小鉢	2	2153SX	口：7/12 底：12/12	8.7	3.5	4.6	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、削出高台、施釉	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	295	古瀬戸	天目茶碗	2	2153SX	口：6/12	(12.0)	(5.7)	—	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、削出高台、施釉	砂粒を含む	2.5Y8/2灰白色	V-4	
	296	古瀬戸	平碗	2	2204SK	口：1/12	(16.8)	(5.7)	—	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、施釉	砂粒を含む	2.5Y8/2灰白色	V-4	
	297	古瀬戸	折縁深皿	2	2153SX	口：1/12	(29.0)	(8.2)	—	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、施釉	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	298	古瀬戸	折縁深皿	2	2194SK	底：3/12	—	(8.9)	(11.6)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、回転ヘラ切り、施釉	砂粒・礫を含む	2.5Y8/3淡黄色	V-4	
	299	古瀬戸	折縁深皿	2	2153SX	底：3/12	—	(3.3)	(13.5)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ	砂粒・礫を含む	2.5Y8/2灰白色	V-4	
	300	古瀬戸	片口鉢	2	2174SP	口：2/12	(18.8)	(3.2)	—	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-2～3	
	301	土師器	皿	2	2207SD	口：1/12 底：2/12	(11.0)	1.6	(8.4)	内面－ヨコナデ、指ナデ 外面－指オサエ	砂粒を含む	10YR7/3にぶい黄橙色 断面：7.5Y4/1灰色	V-4	
	302	土師器	皿	2	2195SK	口：7/12 底：8/12	(12.2)	1.9	7.2	内面－ヨコナデ、指ナデ 外面－ヨコナデ、指オサエ	砂粒を含む	外面：10YR8/3浅黄橙色 断面：5Y7/1灰白色	V-4	
	303	土師器	羽釜	2	2195SK	口：12/12	20.5	(10.4)	—	内面－ヨコナデ、ヘラケズリ 外面－ハケ、ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	V-4	

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版32	304	土師器	羽釜	2	2194SK	口：2/12	(17.6)	(13.1)	—	内面－ヘラケズリ、板ナデ、指オサエ、ヨコナデ 外面－ヘラケズリ、ハケ、指オサエ、ヨコナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	V-4	
	305	土師器	羽釜	2	2153SX	口：1/12	(17.6)	(5.3)	—	内面－指オサエ、板ナデ、ヨコナデ 外面－ハケ、指オサエ、ヨコナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	V-4	
	306	土師器	伊勢型鍋	2	2153SX	口：1/12	(26.0)	(1.7)	—	内面－輪積痕、ヨコナデ 外面－ヨコナデ	砂粒を含む	7.5YR6/3にぶい褐色	V-2～3	
第48図	307	山茶碗	小皿	2	2116SD	口：2/12 底：3/12	(7.0)	1.0	(3.9)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒を含む	5Y7/1灰白色	V-4	
	308	山茶碗	碗	2	2116SD	口：2/12 底：1/12	(11.8)	3.4	(4.4)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒を含む	2.5Y8/3淡黄色	V-4	
	309	山茶碗	碗	2	2150SX	口：1/12	(12.0)	(2.8)	—	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/2灰白色	V-4	
	310	古瀬戸	縁釉小皿	2	2150SX	口：1/12	(11.6)	(1.9)	—	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、施釉漬け掛け	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	311	古瀬戸	折縁深皿	2	2115SD	口：1/12	—	(4.2)	—	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、施釉	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	312	古瀬戸	折縁深皿	2	2116SD	口：1/12	—	(4.3)	—	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、施釉	砂粒を含む	2.5Y6/2灰黄色 断面：2.5Y7/3浅黄色	V-4	
	313	青磁	香炉	2	2205SD	口：1/12	(12.3)	(2.9)	—	内外面－ロクロナデ、施釉	砂粒を含まない	5Y8/1灰白色	V-4	
	314	青磁	香炉	2	2205SD	口：1/12	(12.3)	(2.5)	—	内外面－ロクロナデ、施釉	砂粒を含まない	5Y8/1灰白色	V-4	
	315	白磁	碗	2	2116SD	口：1/12	—	(3.1)	—	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、施釉	砂粒を含まない	5Y7/1灰白色	V-4	
	316	土師器	小皿	2	2116SD	口：3/12 底：3/12	(6.8)	1.6	(4.4)	内外面－ナデ、指オサエ	砂粒を含む	2.5Y8/2灰白色	V-4	
	317	土師器	羽釜	2	2148SD	口：1/12	(23.2)	(2.3)	—	内外面－ヨコナデ	砂粒を含む	10YR8/3浅黄橙色 断面：2.5YR5/1赤灰色	V-3	
	318	土師器	羽釜	2	2148SD	口：1/12	(22.0)	(4.2)	—	内面－ヨコナデ 外面－ハケ、ヨコナデ	砂粒を含む	2.5Y8/2灰白色 断面：5Y5/1灰色	V-3	
第49図	319	古瀬戸	三耳壺	2	2140SX	底：12/12	—	(26.2)	8.8	内面－ロクロナデ 外面－ヨコナデ	砂粒を含む	5Y6/1灰色	V-2	大量出土銭A
	320	常滑焼	壺	2	2190SX	底：12/12	—	(24.3)	12.0	内面－ロクロナデ 外面－ヨコナデ、底部砂粒痕	砂粒・礫を含む	2.5YR3/2暗赤褐色 断面：N3/0暗灰色	V-4	大量出土銭B
第50図	321	山茶碗	小皿	2	2060SX	口：12/12 底：12/12	8.1	5.3	2.2	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	
	322	山茶碗	碗	1	Ⅱ・Ⅲ層	口：4/12 底：12/12	(13.2)	5.7	5.6	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、板状圧痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	籾殻痕
	323	山茶碗	碗	1	1040SD	底：4/12	—	(3.7)	(5.4)	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、板状圧痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-2	籾殻痕
	324	山茶碗	碗	1	1040SD	底：12/12	—	(3.0)	5.7	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切痕、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-2	籾殻痕
	325	山茶碗	碗	2	Ⅱ・Ⅲ層	口：6/12 底：12/12	12.1	4.1	5.4	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	2.5Y8/1灰白色	V-3	
	326	山茶碗	碗	7	7005SX	口：4/12 底：11/12	(11.2)	3.4	(4.4)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	5Y8/1灰白色	V-3	

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
第50図	327	山茶碗	碗	1	1130SX	口：5/12 底：6/12	(11.9)	3.6	(3.6)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y8/1灰白色	V-4	籾殻痕
	328	山茶碗	碗	2	2165SK	口：1/12 底：1/12	(10.7)	2.5	(4.0)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	2.5Y7/1灰白色	V-4	
	329	山茶碗	片口鉢	2	Ⅱ・Ⅲ層	口：1/12	(32.0)	(8.6)	－	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR6/2灰褐色	V-2	
	330	山茶碗	片口鉢	7	Ⅱ層	底：1/12	－	(3.9)	(8.6)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-2	
	331	山茶碗		2	Ⅱ・Ⅲ層	底：5/12	－	(2.0)	(5.5)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	礫を含む	5Y8/1灰白色	V-2	最上部高台付着、4枚以上の重ね焼 籾殻痕、底径は最上段
	332	常滑焼	片口鉢	1	Ⅱ・Ⅲ層	口：1/12 底：2/12	(31.8)	13.6	(16.0)	内外面－ロクロナデ、指ナデ	砂粒・礫を含む	7.5YR6/2灰褐色	V-2	
	333	山茶碗	鉢	7	7002SX	口：1/12 底：1/12	(15.5)	6.3	(10.6)	内面－ヨコナデ、指ナデ 外面－ヨコナデ、底部砂粒痕	砂粒・礫を含む	10YR6/4にぶい黄橙色	V-2	
	334	常滑焼	長頸壷	2	2060SX	－	－	(15.2)	－	内面－輪積痕、指オサエ、ヨコナデ 外面－ヨコナデ	砂粒・礫を含む	5YR5/3にぶい赤褐色	V-2	
図版33	335	土師器	豆皿	7	Ⅰ層	口：12/12 底：12/12	3.1	1.3	－	内面－指ナデ 外面－指オサエ	砂粒を含む	5YR5/6明赤褐色	V-5～Ⅵ	
	336	土師器	小皿	7	7001SX	口：12/12 底：12/12	6.5	1.7	2.1	内面－ナデ 外面－ナデ、指オサエ	砂粒を含む	10YR6/4にぶい黄橙色	V-5～Ⅵ	
	337	土師器	小皿	7	7001SX	口：6/12 底：12/12	6.0	1.3	－	内面－ナデ 外面－ナデ、指オサエ	砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい橙色	V-5～Ⅵ	
	338	土師器	小皿	7	7001SX	口：1/12	(8.8)	(1.8)	－	内面－ナデ 外面－ナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	7.5YR7/4にぶい橙色	V-5～Ⅵ	
	339	土師器	小皿	7	7001SX	口：2/12	(8.4)	(1.5)	－	内外面－指オサエ	砂粒を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	V-5～Ⅵ	口縁部煤付着
	340	土師器	小皿	7	7001SX	口：1/12	(9.0)	(1.9)	－	内面－ナデ 外面－指オサエ	砂粒・礫を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	V-4～5	
	341	土師器	小皿	2	2214SP	口：1/12 底：8/12	(7.7)	1.4	(4.1)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒を含む	7.5YR6/4にぶい橙色	V-4～5	
	342	土師器	小皿	7	7001SX	口：1/12 底：8/12	(8.5)	1.7	5.0	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	5YR6/6橙色	V-4～5	口縁部煤付着
	343	土師器	小皿	7	7005SX	口：2/12 底：7/12	(7.5)	1.5	(4.2)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	V-4～5	
	344	山茶碗	小皿	2	2060SX	口：4/12 底：2/12	(8.6)	1.7	(4.6)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい橙色	V-4～5	
	345	土師器	皿	4	Ⅱ・Ⅲ層	口：1/12 底：2/12	(11.7)	2.1	(7.8)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒を含む	7.5YR7/6橙色	V-4～5	
	346	土師器	皿	4	Ⅱ・Ⅲ層	口：1/12 底：3/12	(11.4)	2.7	(6.6)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	V-4～5	
	347	土師器	碗	7	7005SX	口：1/12	(13.0)	(2.5)	－	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	V-4～5	
	348	土師器	皿	7	7001SX	口：1/12	(12.4)	(1.9)	－	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	V-4～5	
	349	土師器	皿	7	7001SX	口：1/12	(13.0)	(1.8)	－	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/3浅黄色	V-4～5	

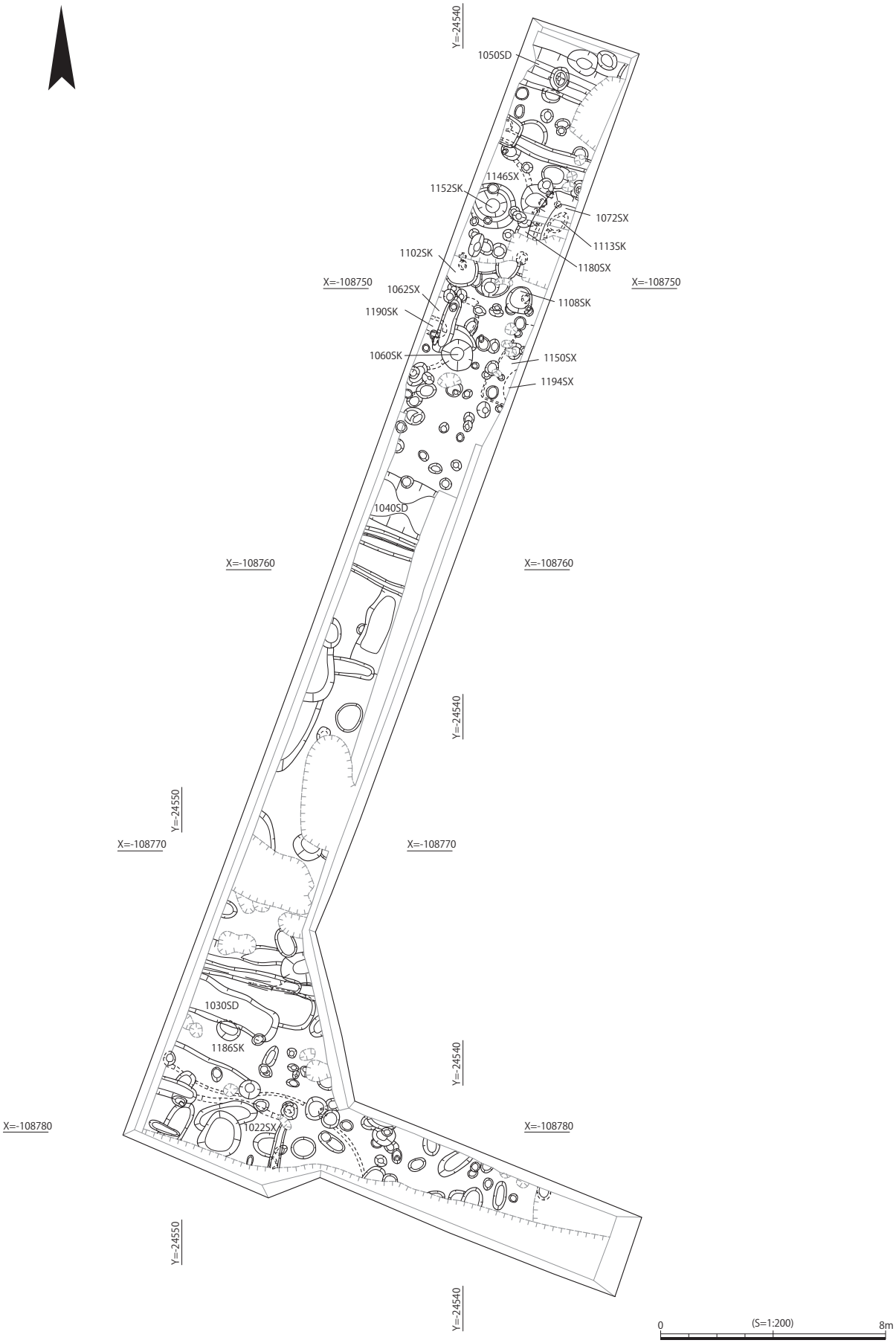
	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版33	350	土師器	皿	7	Ⅱ層	口：2/12 底：5/12	(12.0)	1.8	(6.6)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	V-4～5	
	351	土師器	皿	7	7001SX	口：1/12 底：8/12	(13.3)	2.2	(7.4)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	V-4～5	
	352	土師器	伊勢型鍋	2	2165SK	口：1/12	(24.0)	(4.0)	－	内面－ヨコナデ、ナデ、指オサエ 外面－ハケ、ヨコナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y8/2灰白色	V-2～3	
	353	土師器	羽釜	4	Ⅰ層	口：1/12	(33.4)	(5.4)	－	内外面－ロクロナデ	砂粒・礫を含む	10YR8/3浅黄橙色	V-3～4	
	354	土師器	内耳鍋	7	7001SX	口：7/12	(22.4)	(11.1)	－	内面－ナデ 外面－指オサエ、ナデ、ヨコナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	V-4	
	355	土師器	内耳鍋	7	7001SX	口：7/12	25.1	(12.7)	－	内面－板ナデ 外面－指オサエ、ナデ、ヨコナデ、ケズリ、沈線	砂粒・礫を含む	10YR7/3にぶい黄橙色	V-4～5	
	356	土師器	羽釜	7	7001SX	－	－	(9.9)	－	内面－板ナデ、ヨコナデ、ナデ 外面－ヨコナデ、ナデ、板ケズリ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	V-4～5	
	357	古瀬戸	折縁小皿	2	Ⅱ・Ⅲ層	口：2/12 底：4/12	(9.2)	2.3	(5.6)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、板状圧痕、施釉	砂粒を含む	2.5Y8/3淡黄色	V-4	
	358	古瀬戸	小皿	2	2157SK	口：3/12 底：12/12	(10.2)	2.3	4.5	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、施釉	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	359	古瀬戸	小皿	2	Ⅱ・Ⅲ層	口：2/12 底：4/12	(10.6)	2.7	(6.0)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、施釉	砂粒を含む	2.5Y8/1灰白色	V-4	
	360	古瀬戸	碗	2	2165SK	底：7/12	－	(2.5)	(5.0)	内面－ロクロナデ、指圧痕、施釉 外面－回転糸切り痕、回転ヘラケズリ、削出高台	砂粒・礫を含む	2.5Y7/3浅黄色	V-4	内面トチン痕
	361	古瀬戸	碗	2	Ⅱ・Ⅲ層	底：7/12	－	(2.4)	(4.3)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－回転ヘラケズリ、削出高台、施釉	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-4	
	362	古瀬戸	仏供	2	Ⅱ・Ⅲ層	底：8/12	－	(2.7)	(5.3)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	2.5Y8/3淡黄色	V-4	
	363	古瀬戸	把手付鍋	1	Ⅰ層	口：1/12	(15.4)	(6.5)	－	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、施釉	砂粒を含む	5Y8/1灰白色	V-3	
	364	古瀬戸	底卸目皿	2	Ⅱ・Ⅲ層	底：5/12	－	(2.7)	(7.8)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、貼付高台、卸目、施釉	砂粒・礫を含む	10YR7/2にぶい黄橙色	V-2	
	365	古瀬戸	卸目付大皿	2	Ⅱ・Ⅲ層	－	－	(3.6)	－	内面－ロクロナデ、卸目 外面－回転ヘラケズリ	砂粒・礫を含む	5YR8/2灰白色	V-4	
	366	瀬戸美濃	鉢	1	1130SX	口：1/12 底：5/12	(21.4)	10.9	(10.1)	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、回転ヘラケズリ、貼付高台、施釉	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	V-5～Ⅵ	
	367	古瀬戸	瓶	2	Ⅱ・Ⅲ層	底：1/12	－	(6.4)	(9.5)	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、施釉	砂粒を含む	5Y8/1灰白色	V-4	
	368	青磁	碗	1	Ⅱ・Ⅲ層	口：1/12	－	(2.6)	－	内面－ロクロナデ、施釉 外面－ロクロナデ、蓮弁文、施釉	砂粒を含まない	5Y8/1灰白色	V-2～3	
図版34	369	瓦	軒丸瓦	2	2120SD	－	長：(4.4)	幅：(15.3)	高：(15.2)	瓦当裏面－ヘラナデ、指ナデ、指オサエ	砂粒・礫を含む	2.5Y8/3淡黄色	V-1～2	瓦当径：15.0cm 巴文
	370	瓦	軒丸瓦	2	2120SD	－	長：(4.1)	幅：(9.9)	高：(5.4)	瓦当裏面－指ナデ、指オサエ	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-1～2	瓦当径：(14.8) cm 巴文
	371	瓦	軒丸瓦	2	2120SD	－	長：(4.0)	幅：(7.1)	高：(4.9)	瓦当裏面－ナデ	砂粒を含む	N8/0灰白色	V-1～2	巴文
	372	瓦	軒丸瓦	2	2120SD	－	長：(5.0)	幅：(7.1)	高：(10.3)	瓦当裏面－ヨコナデ、ヘラナデ	砂粒を含む	N8/0灰白色	V-1～2	瓦当径：(14.0) cm 巴文

	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
図版34	373	瓦	軒平瓦	2	2120SD	—	長：（12.5）	幅：（15.6）	高：（11.6）	凸面－ヘラナデ、ヨコナデ 凹面－布目、面取り	砂粒を含む	2.5Y8/2灰白色	V-1～2	厚：4.0cm 瓦当幅：（14.6）cm 瓦当厚：6.8cm 杏葉唐草文 瓦当一部に離れ砂あり
	374	瓦	軒平瓦	2	2120SD	—	長：（7.6）	幅：（11.6）	高：（6.6）	凸面－ヘラナデ、ヨコナデ 凹面－布目	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	V	厚：2.0cm 瓦当幅：（10.3）cm 瓦当厚：4.9cm 無文軒平
	375	瓦	軒平瓦	2	2120SD	—	長：（7.1）	幅：（8.7）	高：（3.4）	凸面－ヘラナデ、指ナデ、ヨコナデ 凹面－ヘラナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-4～5	厚：1.3cm 瓦当幅：（7.9）cm 瓦当厚：3.4cm 雷文　瓦質土器か
	376	瓦	丸瓦	2	2120SD	—	長：（10.1）	幅：15.3	高：6.7	凹面－布目、面取り 凸面－縄目、ヘラナデ	砂粒を含む	10YR8/1灰白色	V-1～2	厚：2.3cm
	377	瓦	丸瓦	2	2120SD	—	長：（11.9）	幅：15.4	高：6.8	凹面－布目、ヘラナデ、面取り 凸面－縄目、ヘラナデ	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-1～2	厚：3.0cm
図版35	378	瓦	丸瓦	2	2120SD	—	長：（9.8）	幅：（9.9）	高：（5.2）	凹面－布目、面取り 凸面－縄目、ヘラナデ	砂粒を含む	5Y8/1灰白色	V-1～2	厚：2.1cm　道具瓦か
	379	瓦	丸瓦	2	2120SD	—	長：（21.2）	幅：（8.1）	高：（7.9）	凹面－布目、面取り、吊るし紐痕 凸面－縄目、ヘラナデ、ナデ	砂粒を含む	2.5Y7/2灰黄色	V-1～2	厚：2.1cm
	380	瓦	丸瓦	2	2120SD	—	長：（20.3）	幅：（6.0）	高：（7.2）	凹面－布目、面取り 凸面－縄目、ヘラナデ	砂粒を含む	5Y7/1灰白色	V-1～2	厚：2.0cm
	381	瓦	丸瓦	2	2120SD	—	長：（8.7）	幅：（9.5）	高：8.5	凹面－布目、面取り 凸面－縄目、ヘラナデ	砂粒を含む	10YR8/3浅黄橙色	V-1～2	厚：2.8cm
第51図	382	瓦	丸瓦	4	Ⅱ・Ⅲ層	—	長：（7.0）	幅：（7.1）	高：（5.7）	凹面－布目、面取り 凸面－ヘラナデ	砂粒を含む	2.5Y6/2灰黄色	V	厚：2.1cm　穿孔あり
	383	瓦	丸瓦	2	2154SD	—	長：（14.5）	幅：（6.9）	高：（5.5）	凹面－布目、面取り、ナデ 凸面－ヘラナデ、ナデ	砂粒を含む	2.5Y6/2灰黄色	V	厚：2.0cm　穿孔あり
	384	瓦	軒平瓦	1	Ⅰ層	—	長：（6.4）	幅：（10.1）	高：（4.9）	凸面－ヘラナデ、ナデ、面取り 凹面－布目、指オサエ、コビキ、面取り	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	V	厚：2.9cm　無文軒平
第52図	385	土師器	土錘	2	2120SD	12/12	長：5.5	幅：1.4	厚：1.4	外面－指ナデ	砂粒・礫を含む	10YR7/4にぶい黄橙色	不明	孔径：0.5cm、 重量：9.44g
	386	土師器	土錘	7	Ⅰ層	12/12	長：4.3	幅：1.2	厚：1.1	外面－指ナデ	砂粒を含む	7.5YR8/4浅黄橙色	不明	孔径：0.4cm、 重量：4.80g
	387	土師器	土錘	1	Ⅱ・Ⅲ層	8/12	長：（5.8）	幅：1.8	厚：1.8	外面－指ナデ	砂粒を含む	7.5YR8/4浅黄橙色	不明	孔径：0.4cm、 重量：14.40g
	388	土師器	土錘	2	2120SD	7/12	長：（5.7）	幅：2.5	厚：2.5	外面－指ナデ	砂粒・礫を含む	2.5Y8/3淡黄色	不明	孔径：1.1cm、 重量：28.06g
	389	土師器	土錘	2	2120SD	9/12	長：3.8	幅：3.4	厚：（3.0）	外面－指ナデ	砂粒を含む	10YR8/3浅黄橙色	不明	孔径：0.8cm 重量：37.02g
	390	山茶碗	加工円盤	1	1060SK	12/12	長：9.4	幅：9.1	厚：1.6	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y7/4浅黄色	V	重量：105.08g　籾殻痕
	391	山茶碗	加工円盤	2	2180SD	12/12	長：6.6	幅：5.7	厚：1.2	内面－板ナデ、指ナデ 外面－回転糸切り痕、高台剥離	砂粒・礫を含む	7.5Y8/1灰白色	V	重量：61.27g
	392	山茶碗	加工円盤	2	2120SD	12/12	長：5.2	幅：5.5	厚：1.0	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－ロクロナデ、回転糸切り痕	砂粒・礫を含む	N8/0灰白色	V	重量：32.93g
	393	土師器	加工円盤	2	2153SX	12/12	長：5.6	幅：6.3	厚：0.7	内面－ロクロナデ 外面－回転糸切り痕	砂粒を含む	7.5YR7/6橙色	V	重量：25.13g

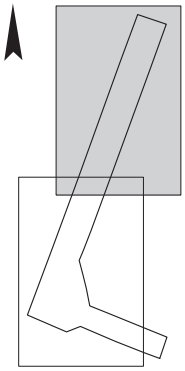
	番号	器種	器形	調査区	遺構・層位	残存率	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法等の特徴	胎土	色調	時期	その他・備考
第52図	394	常滑焼	加工円盤	2	2060SX	12/12	長：5.3	幅：5.1	厚：1.6	内外面－ナデ	砂粒を含む	7.5YR7/4にぶい橙色	Ⅴ	重量：47.36g
	395	山茶碗	小型加工円盤	2	2120SD	12/12	長：2.5	幅：2.7	厚：1.1	内面－ロクロナデ、指圧痕 外面－回転糸切り痕	砂粒を含む	2.5Y8/1灰白色	Ⅴ	重量：8.77g
	396	須恵器	小型加工円盤	2	2120SD	12/12	長：2.3	幅：2.4	厚：1.2	内外面－摩耗のため調整不明	砂粒を含む	2.5Y6/1黄灰色	Ⅴ	重量：9.54g
	397	瓦	加工さいころ	2	2120SD	12/12	長：2.8	幅：3.1	厚：2.7	内面－ヘラ切り 外面－縄目、ヘラナデ	砂粒を含む	N8/0灰白色	Ⅴ	重量：27.69g
	398	山茶碗	加工さいころ	2	2120SD	12/12	長：2.7	幅：2.7	厚：1.4	内面－ロクロナデ 外面－ロクロナデ、貼付高台	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	Ⅴ	重量：10.09g　籾殻痕
	399	陶器	陶丸	4	4005SP	12/12	長：2.3	幅：2.4	厚：2.4	外面－指オサエ、指ナデ	砂粒を含む	2.5Y8/2灰白色	Ⅴ	重量：14.83g
	400	陶器	陶丸	2	2120SD	12/12	長：1.8	幅：2.1	厚：1.9	外面－指オサエ、指ナデ	砂粒を含む	2.5Y7/1灰白色	Ⅴ	重量：7.24g
	401	陶器	陶丸	2	2120SD	12/12	長：2.3	幅：2.3	厚：2.2	外面－指オサエ、指ナデ	砂粒を含む	5YR5/3にぶい赤褐色	Ⅴ	重量：12.45g
	402	陶器	陶丸	1	1063SK	12/12	長：2.4	幅：2.3	厚：1.9	外面－指オサエ、指ナデ	砂粒を含む	5YR5/6明赤褐色	Ⅴ	重量：11.96g
	403	石製品	石臼（下臼）	2	Ⅱ・Ⅲ層	12/12	径：37.4	－	高：8.3		－	－	不明	石材：花崗岩 重量：18500g 8分画6溝こぼれ目型

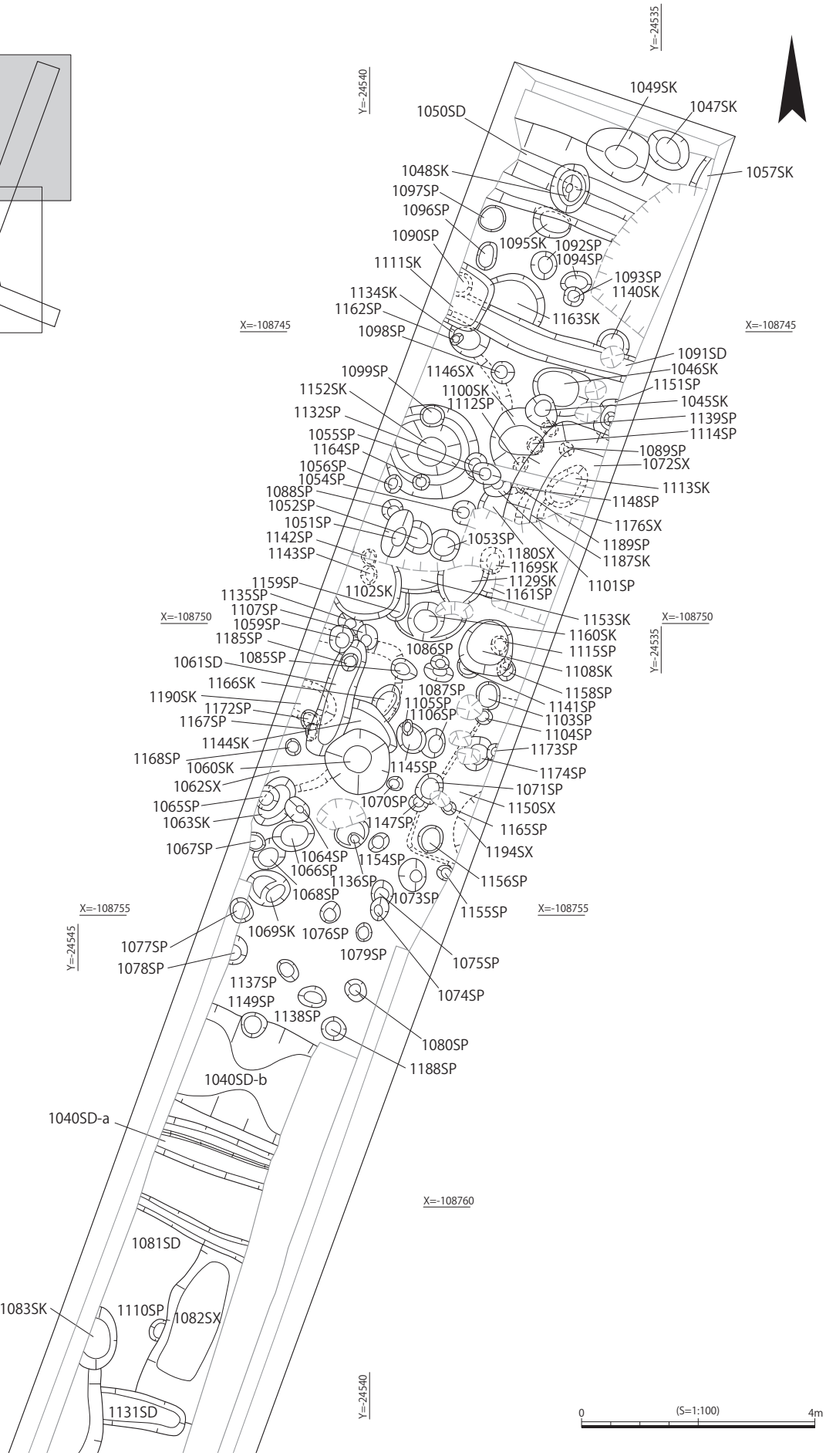
図版

図版1　遺構　1地点　調査区平面図（全体）

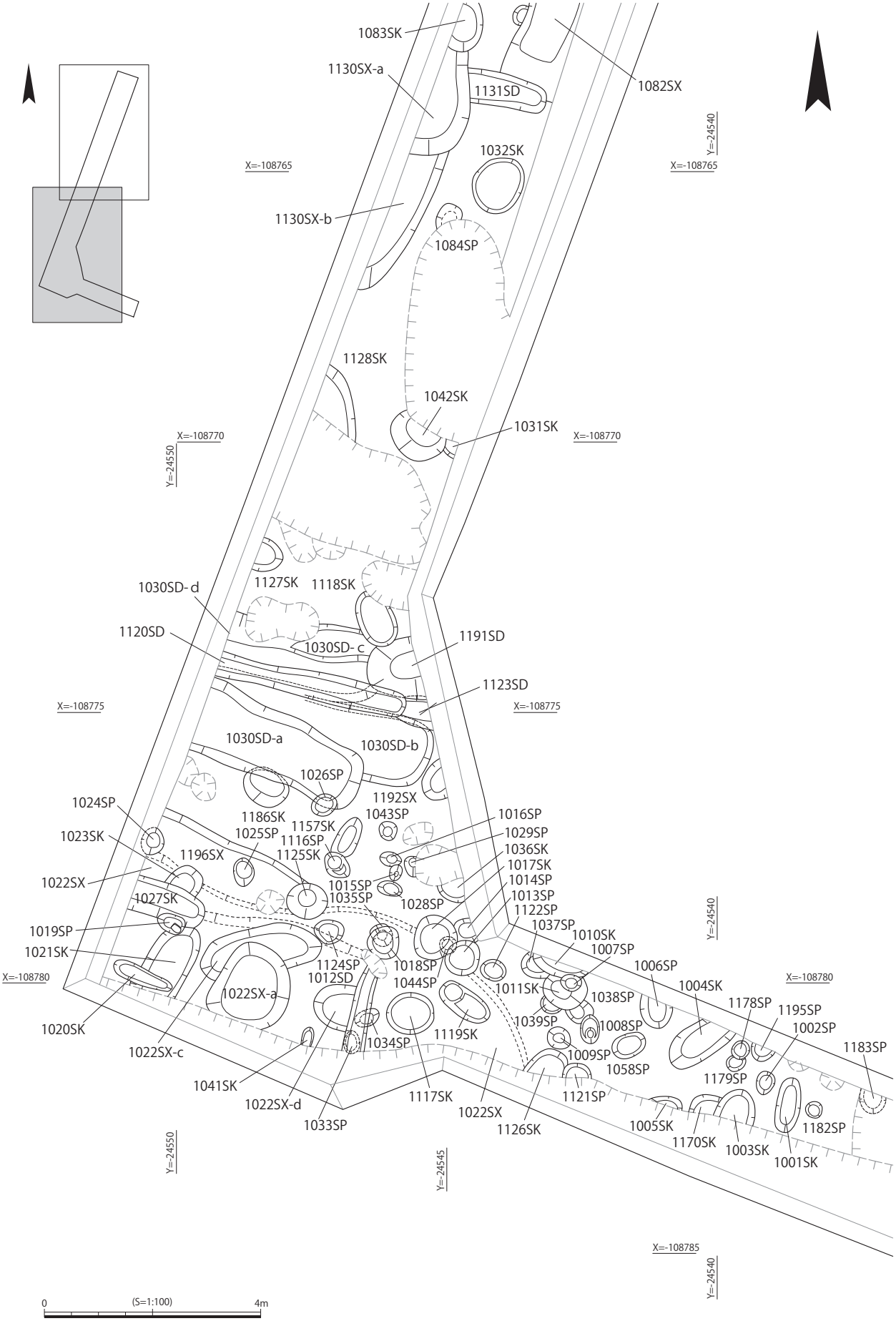


図版2　遺構　1地点　調査区平面図（北部）

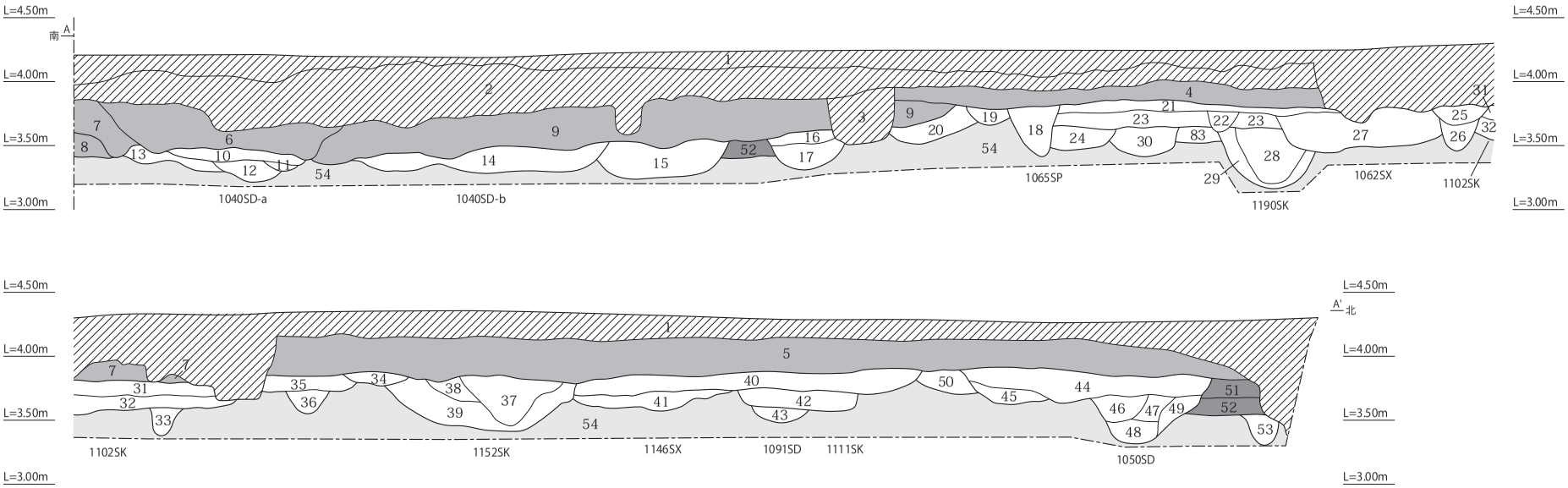




図版3　遺構　1地点　調査区平面図（南部）



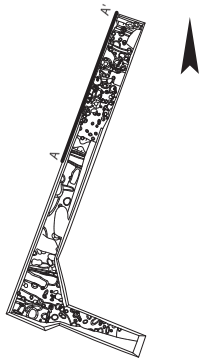
図版4 遺構 1地点 土層断面図1（西壁）

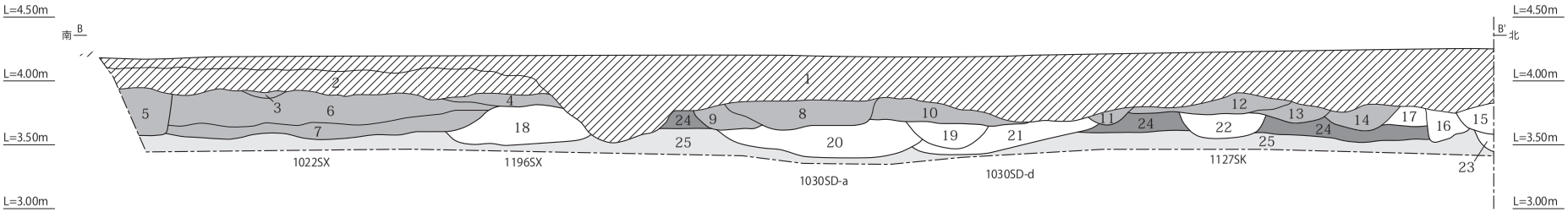


1, 表土・現代撹乱
2, にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂　焼土片含む
3, 暗褐色(10YR3/4)細粒砂
4, 暗褐色(10YR3/4)細粒砂
5, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂
6, 褐色(10YR4/6)中粒砂
　近世～近代溝
7, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　貝殻片多量に含む
　1081SD
8, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
9, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
　Ⅱ層か?
10, オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂
　1040SD上層
11, 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂
　1040SD-a
12, 黄褐色(2.5Y5/3)中粒砂
　1040SD-a
13, 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂
　1040SD-a
14, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
　1040SD-b
15, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
16, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
17, 黒褐色(10YR3/2)中粒砂
18, 黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂　Ⅴ層含む
　1065SP
19, 黒褐色(2.5Y3/1)中粒砂
20, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
21, 暗褐色(10YR3/3)細粒砂
　1062SX
22, 暗褐色(10YR3/3)細粒砂
23, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
　1062SX
24, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
25, 暗褐色(10YR3/3)細粒砂　Ⅴ層含む
26, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
27, 暗褐色(10YR3/4)中粒砂　焼土片多量含む
　1062SX
28, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
　1190SK
29, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　Ⅴ層含む
　1190SK
30, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
31, 暗褐色(10YR3/3)細粒砂
　1102SK
32, 暗褐色(10YR3/3)細粒砂　Ⅴ層含む
　1102SK
33, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　Ⅴ層含む
34, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　Ⅴ層含む
35, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
36, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
37, 褐色(10YR2/1)中粒砂
　1152SK
38, 黒褐色(10YR2/1)中粒砂　褐色(10YR4/3)中粒砂含む
　1152SK
39, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂と
　黒褐色(10YR2/1)中粒砂の斑土　1152SK
40, 黒褐色(10YR3/2)中粒砂
41, 黒褐色(10YR3/2)中粒砂　Ⅴ層含む
　1146SX
42, 黒褐色(10YR3/2)中粒砂
　1111SK
43, 黒褐色(10YR3/2)中粒砂　Ⅴ層含む
　1091SD
44, 暗褐色(10YR3/3)中粒砂
　1050SD
45, 暗褐色(10YR3/3)中粒砂　Ⅴ層含む
　1050SD
46, 暗褐色(10YR3/4)中粒砂
　1050SD
47, 暗褐色(10YR3/4)中粒砂　Ⅴ層含む
　1050SD
48, 暗褐色(10YR3/3)中粒砂　Ⅴ層含む
　1050SD
49, 黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂　Ⅴ層含む
　1050SD
50, 黒褐色(10YR3/2)中粒砂
51, 黒褐色(10YR3/2)中粒砂
52, 褐色(10YR4/4)中粒砂
　Ⅲ層
53, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂
54, 明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
　Ⅴ層

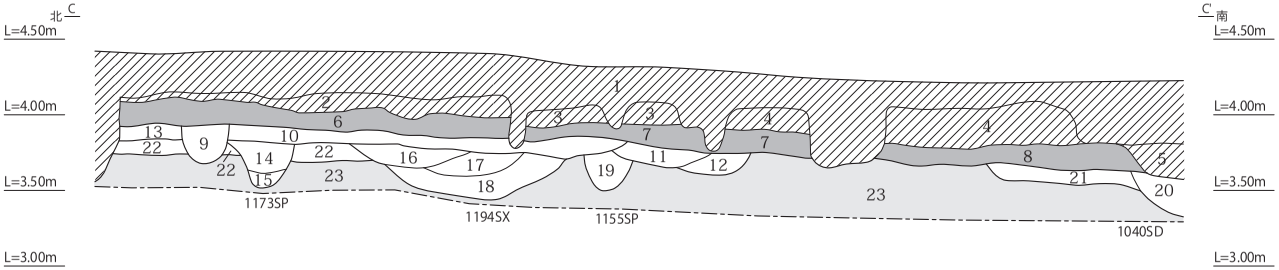
0 (S=1:50) 1m

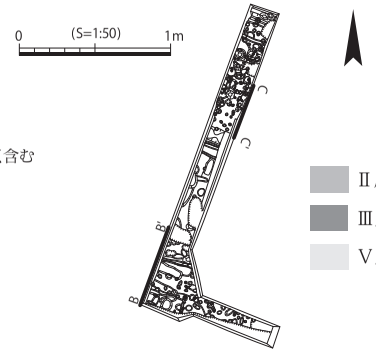
Ⅱ層・近世遺構ほか
Ⅲ層（包含層）
Ⅴ層（基盤層）





1, 表土・現代撹乱
2, オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂　2～5mm程度の小礫含む
3, 暗褐色(10YR3/4)細粒砂　しまり強い
4, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
5, 暗褐色(10YR3/3)細粒砂　貝殻片含む
6, 暗褐色(10YR3～4/4)細粒砂　貝殻片大量に含む
　1022SX
7, 暗褐色(10YR3～4/4)細粒砂　Ⅴ層、貝殻片含む
　1022SX
8, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
9, 黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂
10, 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂
11, 暗褐色(10YR3/4)中粒砂
12, 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂
13, にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂　2～5mm程度の小礫含む
14, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　2～5mm程度の小礫含む
15, 褐色(10YR4/4)中粒砂　Ⅴ層、貝殻片含む
　1128SK
16, 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂
17, 黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂　Ⅴ層、貝殻片含む
18, 暗褐色(10YR3～4/4)中粒砂　Ⅴ層含む
　1196SX
19, 黒褐色(10YR3/1)細粒砂
　1120SD
20, 褐色(10YR4/4)中粒砂
　1030SD-a
21, 褐色(10YR4/4)中粒砂　Ⅴ層含む
　1030SD-d
22, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
　1127SK
23, 褐色(10YR4/4)中粒砂　Ⅴ層多く含む
24, 褐色(10YR4/4)中粒砂
　Ⅲ層
25, 明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
　Ⅴ層



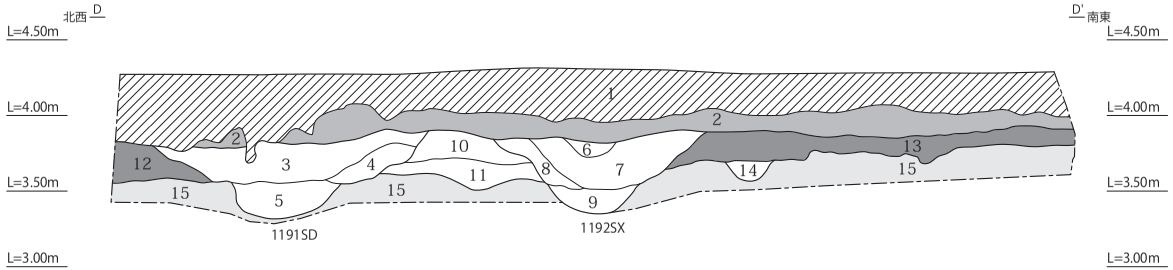


Ⅱ層・近世遺構ほか
Ⅲ層（包含層）
Ⅴ層（基盤層）

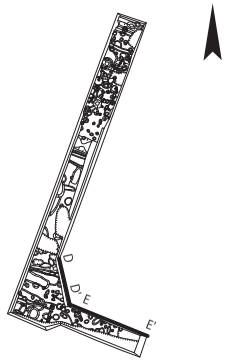
1, 表土・現代撹乱
2, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂多く含む
　Ⅱ層
3, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂
　Ⅱ層
4, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂多く含む
　Ⅱ層
5, オリーブ褐色(2.5Y4/6)中粒砂
　近世～近代溝
6, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂
　Ⅱ層
7, 褐色(7.5YR4/3)にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
　Ⅱ層
8, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
　Ⅱ層
9, 褐色(10YR4/4)中粒砂
10, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層含む
　1150SX
11, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層含む
12, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層多く含む
13, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層含む
14, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層含む
　1173SP
15, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層多く含む
　1173SP
16, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
　1194SX
17, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
　1194SX
18, にぶい黄褐色(10YR4/3)中細粒砂　Ⅴ層多く含む
　1194SX
19, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
　1155SP
20, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
　1040SD-b
21, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
　1040SD
22, 褐色(10YR4/4)中粒砂
　Ⅲ層もしくは1150SX下層
23, 明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
　Ⅴ層

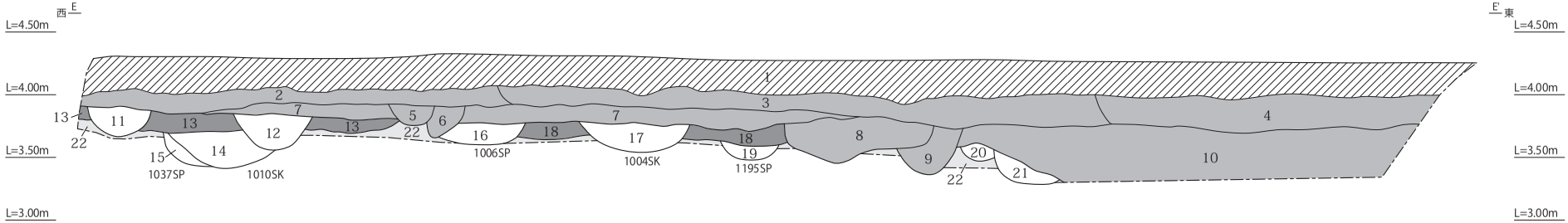
図版5　遺構　1地点　土層断面図2（北部東壁・南部西壁）

図版6 遺構 1地点 土層断面図3（南東部北壁・南部東壁）



1, 表土・現代攪乱
2, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂
Ⅱ層
3, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
1191SD
4, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層の小ブロック含む
1191SD
5, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
1191SD
6, 明黄褐色(10YR7/6)中粒砂　にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂含む
1192SX
7, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
1192SX
8, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層含む
1192SX
9, 暗褐色(10YR3/4)細粒砂
1192SX
10, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
1123SDか?
11, 褐色(10YR4/4)中粒砂　焼土片含む
1123SDか?
12, にぶい黄褐色(10YR4/3～4)中粒砂
Ⅲ層か?
13, 褐色(10YR4/4)中粒砂
Ⅲ層か?
14, 褐色(10YR4/4)中粒砂
15, 明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
Ⅴ層



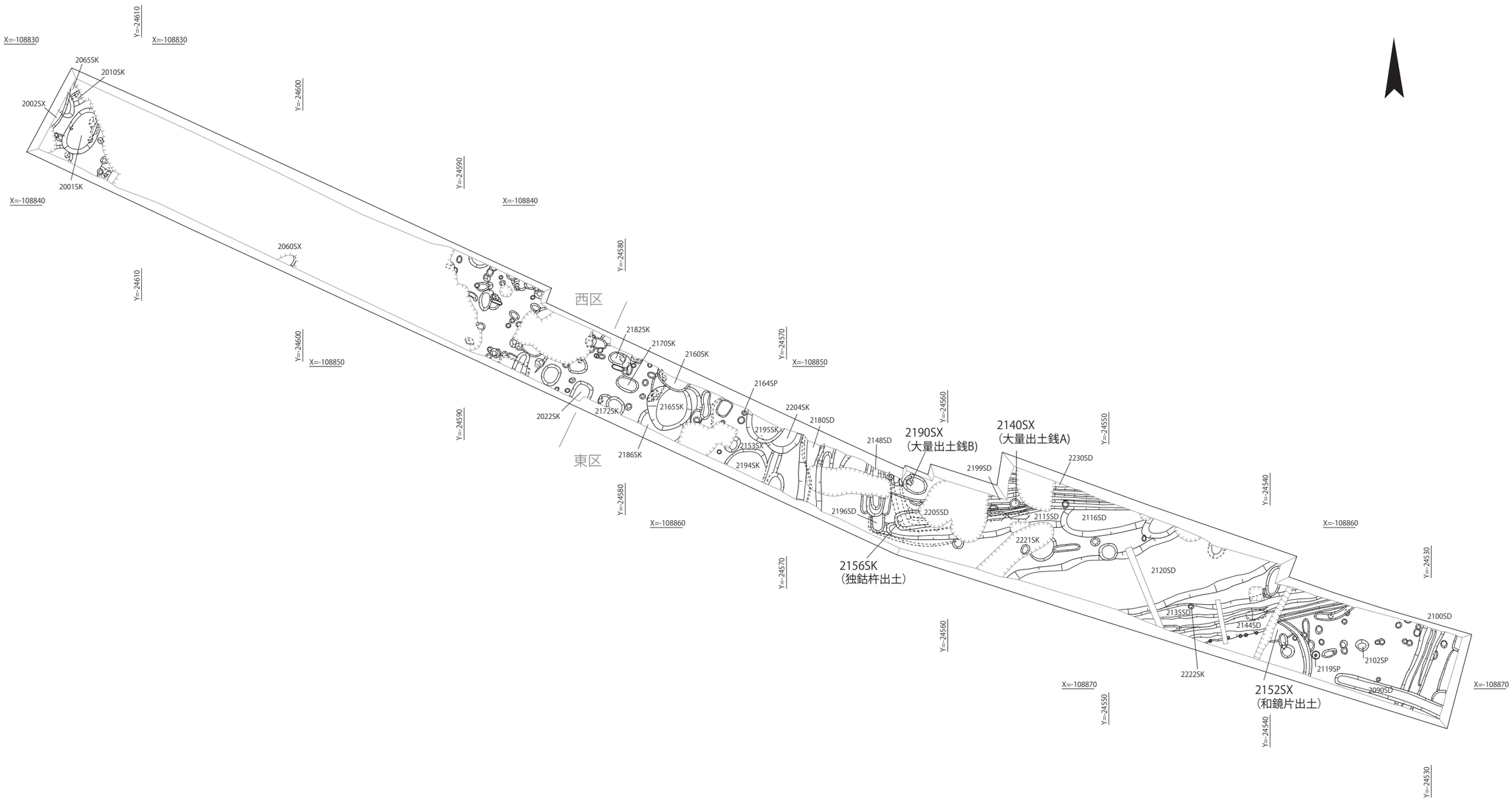


1, 表土・現代攪乱
2, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂
3, オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂　2が二次的に変色した層
4, 灰オリーブ色(5Y5/2)細粒砂　2、3が二次的に変色した層
5, オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂　しまり強い
6, オリーブ褐色(2.5Y4/6)細粒砂　褐色(10YR4/4)中粒砂含む　しまり強い
7, 黒褐色(10YR3/2)細粒砂　焼土片含む
8, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　炭化物焼土片含む　しまり強い
9, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　しまり強い
10, 黄灰色(2.5Y5/1)
11, 褐色(10YR4/4)中粒砂
12, 褐色(10YR4/4)中粒砂
13, 褐色(10YR4/4)中粒砂　Ⅴ層含む　Ⅲ層か
14, 暗褐色(10YR3/4)中粒砂
1010SK
15, 暗褐色(10YR3/4)中粒砂　Ⅴ層含む
1037SP
16, 暗褐色(10YR3/3)中粒砂
1006SP
17, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂
1004SK
18, にぶい黄褐色(10YR4/3～4)中粒砂
Ⅲ層
19, 暗褐色(10YR3/4)中粒砂　Ⅴ層含む
1195SP
20, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
21, 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂
1183SPか?
22, 明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
Ⅴ層

0 (S=1:50) 1m

Ⅱ層・近世遺構ほか
Ⅲ層（包含層）
Ⅴ層（基盤層）

図版7　遺構　2地点　調査区平面図（全体）

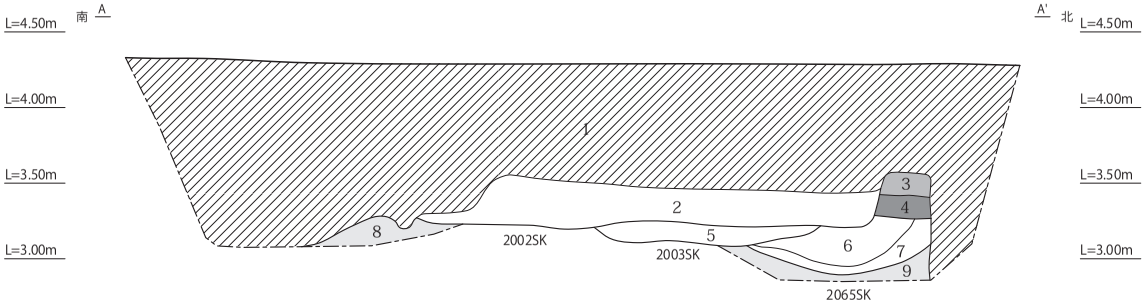


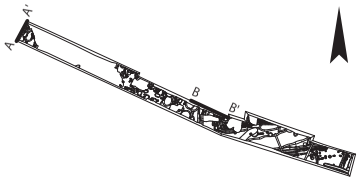
図版8　遺構　2地点　調査区平面図（西1）

図版9　遺構　2地点　調査区平面図（西2）

図版10　遺構　2地点　調査区平面図（東1）

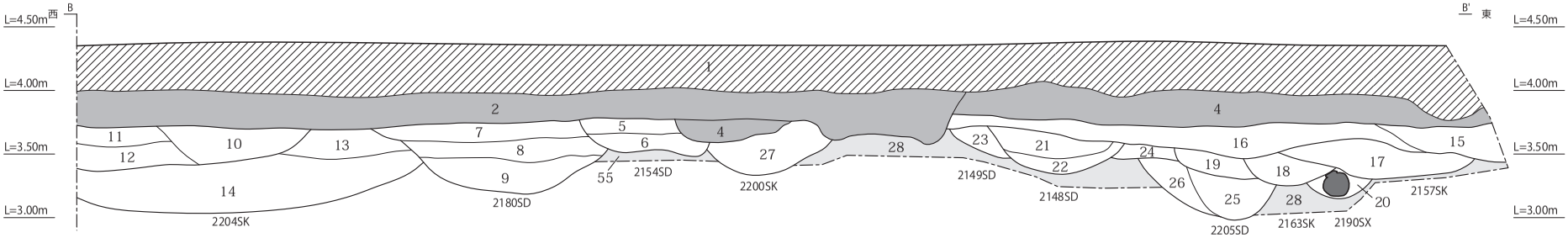
図版11　遺構　2地点　調査区平面図（東2）





Ⅱ層・近世遺構ほか
Ⅲ層（包含層）
Ⅴ層（基盤層）

1, 表土・撹乱
2, 褐色(10YR4/4)細粒砂　貝殻多量に含む
　2002SK
3, 褐色(10YR4/6)細粒砂
　Ⅱ層
4, 褐色(10YR4/4)細粒砂
　Ⅱ層もしくはⅢ層
5, 黒褐色(10YR2/3)細粒砂　オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂とⅤ層含む
　2003SK
6, 黒色(10YR2/1)中粒砂
　2065SK
7, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　黒色(10YR2/1)中粒砂含む
　2065SK
8, 明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
　Ⅴ層
9, にぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒砂
　Ⅴ層

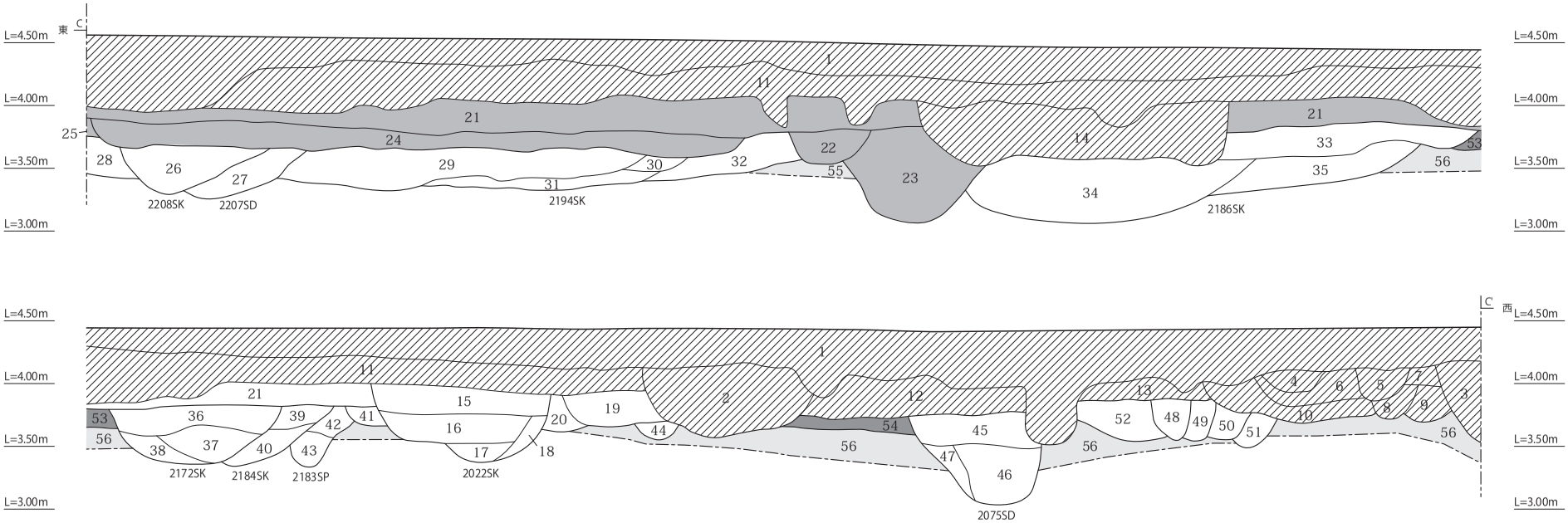


1, 表土・撹乱
2, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂
　Ⅱ層
3, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂
　Ⅱ層
4, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂　にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂と貝殻含む
5, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
　2154SD
6, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
　2154SD
7, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
　2180SD
8, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
　2180SD
9, 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂
　2180SD
10, 暗褐色(10YR3/4)細粒砂
　2195SK
11, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂　貝殻多量に含む
　2195SK
12, 黒褐色(10YR3/2)細粒砂
　2195SK
13, 暗褐色(10YR3/3)中粒砂
　2204SK
14, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　径2mmほどの小礫含む
　2204SK
15, にぶい黄橙色(10YR6/4)中粒砂
　2150SX
16, 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂
　にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂含む　2150SX
17, 暗褐色(7.5YR3/3)細粒砂　貝殻含む
　2157SK
18, 褐色(7.5YR4/4)細粒砂　貝殻含む
　2163SK
19, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
　2210SP
20, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層多く含む
　2190SX（大量出土銭B）
21, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
　2148SD
22, 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂　Ⅴ層含む
　2148SD
23, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
　2149SD
24, 褐色(7.5YR4/3)中粒砂
25, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
　2205SD
26, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　Ⅴ層含む
　2205SD
27, 黒色(10YR2/1)中粒砂　Ⅴ層含む
　2200SK
28, 明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
　Ⅴ層

0 (S=1:50) 1m

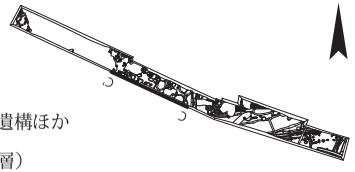
図版12 遺構 2地点 土層断面図1（西壁・中央部北壁）

図版13 遺構 2地点 土層断面図2（中央部南壁）

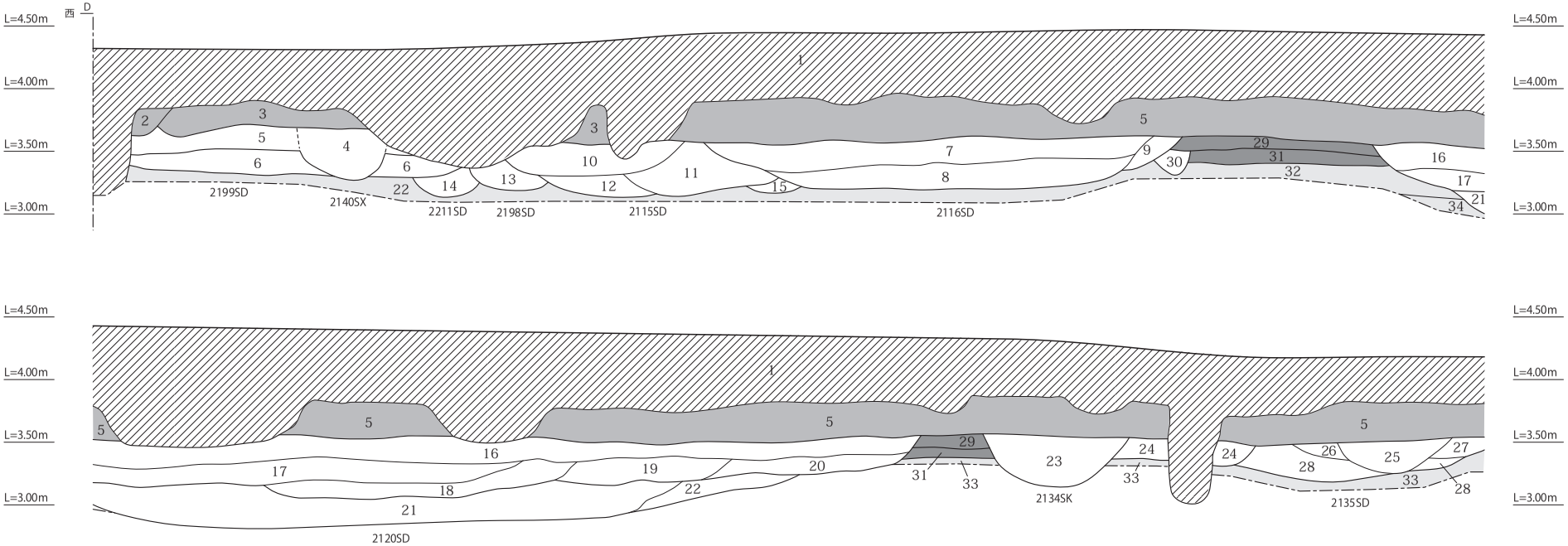


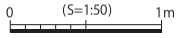
1, 表土・撹乱
2, オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂
3, オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂
4, オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂
5, 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂　粘土塊含む
6, 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂
7, 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂
8, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
9, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
10, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
11, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂
　Ⅰ層
12, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂
　Ⅰ層もしくはⅡ層
13, 灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂
　Ⅰ層もしくはⅡ層
14, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂
　近代撹乱
15, 暗褐色(7.5YR3/4)細粒砂
　2022SK
16, 褐色(7.5YR4/4)細粒砂
　2022SK
17, 褐色(10YR4/4)細粒砂
　2022SK
18, 褐色(10YR4/4)細粒砂　Ⅴ層含む
　2022SK
19, 褐色(10YR4/4)細粒砂
　Ⅱ層
20, 褐色(10YR4/6)細粒砂
　Ⅱ層
21, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂
　Ⅱ層
22, 暗褐色(7.5YR3/4)細粒砂
23, 暗オリーブ色(5Y4/4)細粒砂とⅤ層の斑土　貝殻含む
24, 灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂
　2153SX上層(近世に撹拌された層)
25, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂
　Ⅱ層
26, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層、貝殻少量含む
　2208SK
27, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂　貝殻少量含む
　2207SD
28, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂　Ⅴ層、貝殻少量含む
29, 黒褐色(10YR3/2)細粒砂　貝殻多量に含む
　2194SK
30, オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂
　2194SK
31, オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂と黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂とⅤ層の斑土
　2194SK
32, オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂とⅤ層の斑土
　2194SK
33, 暗褐色(10YR3/3)細粒砂
　2186SK上層
34, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　褐色(7.5YR4/4)粗粒砂含む
　2186SK
35, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
　2186SK
36, 褐色(10YR4/4)中粒砂
　2172SK
37, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
　2172SK
38, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
　2172SK
39, オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂　明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
　2184SK
40, 明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
　2184SK
41, 褐色(10YR4/4)中粒砂
42, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
　2183SP
43, オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂　明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
　2183SP
44, 褐色(10YR4/4)中粒砂
45, 褐色(10YR4/4)中粒砂
　2075SD
46, オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂
　2075SD
47, オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂　Ⅴ層含む
　2075SD
48, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
49, 褐色(10YR4/4)中粒砂
50, 褐色(10YR4/6)中粒砂
51, 褐色(10YR4/4)中粒砂
52, 褐色(10YR4/4)中粒砂
53, 黒褐色(10YR3/2)中粒砂
　Ⅲ層か?
54, 褐色(10YR4/4)中粒砂
　Ⅲ層
55, 明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
　Ⅴ層
56, 明黄褐色(10YR6/6)中粒砂
　Ⅴ層

0 (S=1:50) 1m

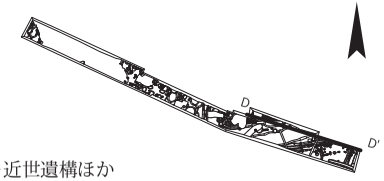


Ⅱ層・近世遺構ほか
Ⅲ層(包含層)
Ⅴ層(基盤層)





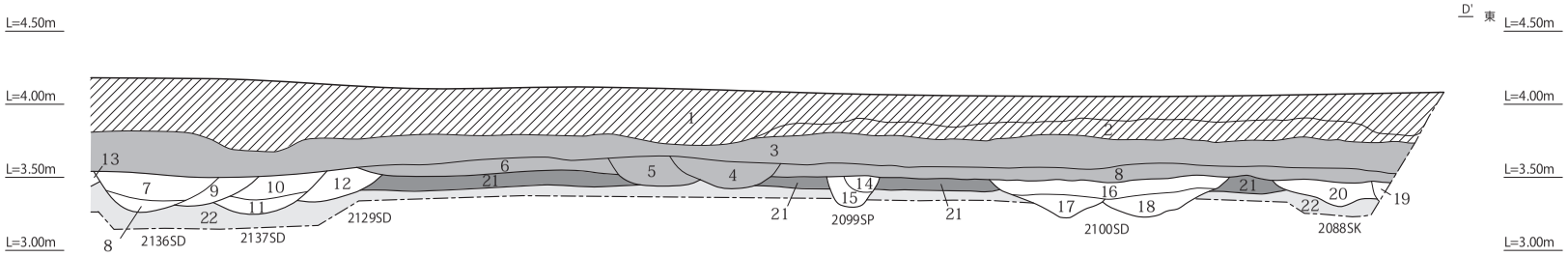
1, 表土・攪乱
2, 褐色(7.5YR4/4)細粒砂
3, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂
Ⅱ層
4, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
2140SX(大量出土銭A)
5, 褐色(10YR4/4)中粒砂
2199SD上層
6, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
2199SD下層
7, 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂
2116SD
8, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
2116SD
9, 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂　Ⅴ層含む
2116SD
10, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
2115SD
11, 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂
2115SD
12, 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂　Ⅴ層少量含む
2115SD
13, 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂
2198SD
14, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
2211SD
15, 黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂
16, オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂
2120SD最上層a
17, 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂
2120SD最上層b
18, 黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂
2120SD上層1
19, 黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂　酸化鉄含み赤味帯びる
2120SD上層2
20, 黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂
2120SD中層
21, オリーブ黒色(5Y3/2)中～粗粒砂
2120SD下層1
22, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
2120SD下層2
23, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
2134SK
24, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
25, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
2135SD
26, 褐色(10YR4/4)中粒砂
2135SD
27, 褐色(10YR4/4)中粒砂
2135SD
28, 黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂　径5～10mmの小礫含む
2135SD
29, 褐色(10YR4/4)中粒砂　径5～10mmの小礫含む
Ⅲ層
30, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
下層遺構か
31, オリーブ褐色(2.5Y4/4)中粒砂　Ⅴ層含む
Ⅳ層か
32, 明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
Ⅴ層
33, にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂　径5～10mmの小礫含む
Ⅴ層
34, 黄褐色(2.5Y5/3)粗粒砂
Ⅴ層



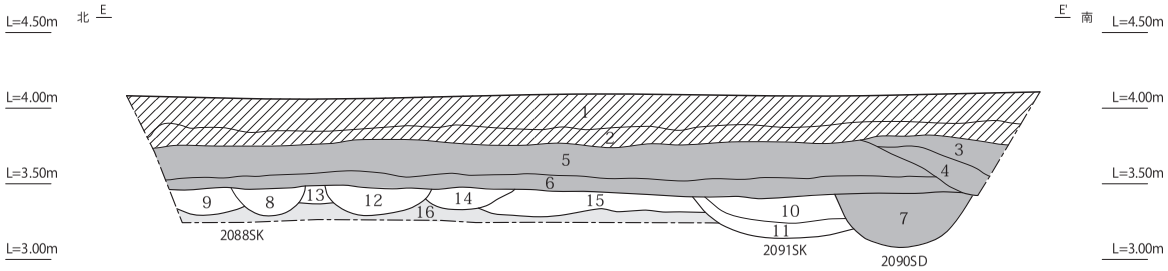
Ⅱ層・近世遺構ほか
Ⅲ層・Ⅳ層（包含層）
Ⅴ層（基盤層）

図版14　遺構　2地点　土層断面図3（東部北壁）

図版15 遺構 2地点 土層断面図4（東部北壁・東壁）

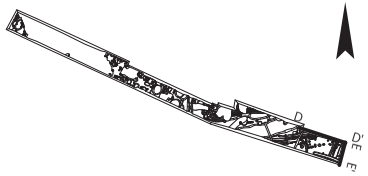


1, 表土・撹乱
2, 褐色(10YR4/4)細粒砂
3, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂
Ⅱ層
4, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂
5, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂
6, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂　径5mmほどの小礫含む
7, 褐色(10YR4/4)中粒砂
2136SD
8, 黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂　径３～5mmの小礫含む
2136SD
9, 褐色(10YR4/4)中粒砂　黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂含む
2136SD
10, 褐色(10YR4/4)中粒砂
2137SD
11, 黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂　径5～10mmの小礫含む
2137SD
12, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂
2129SD
13, 褐色(10YR4/4)中粒砂
2135SD
14, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
2099SP
15, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　Ⅴ層含む
2099SP
16, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
2100SD上層
17, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
2100SD
18, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
2100SD
19, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
2088SK
20, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
2088SK
21, 褐色(10YR4/4)中粒砂
Ⅲ層
22, にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂　径5～10mmの小礫含む
Ⅴ層



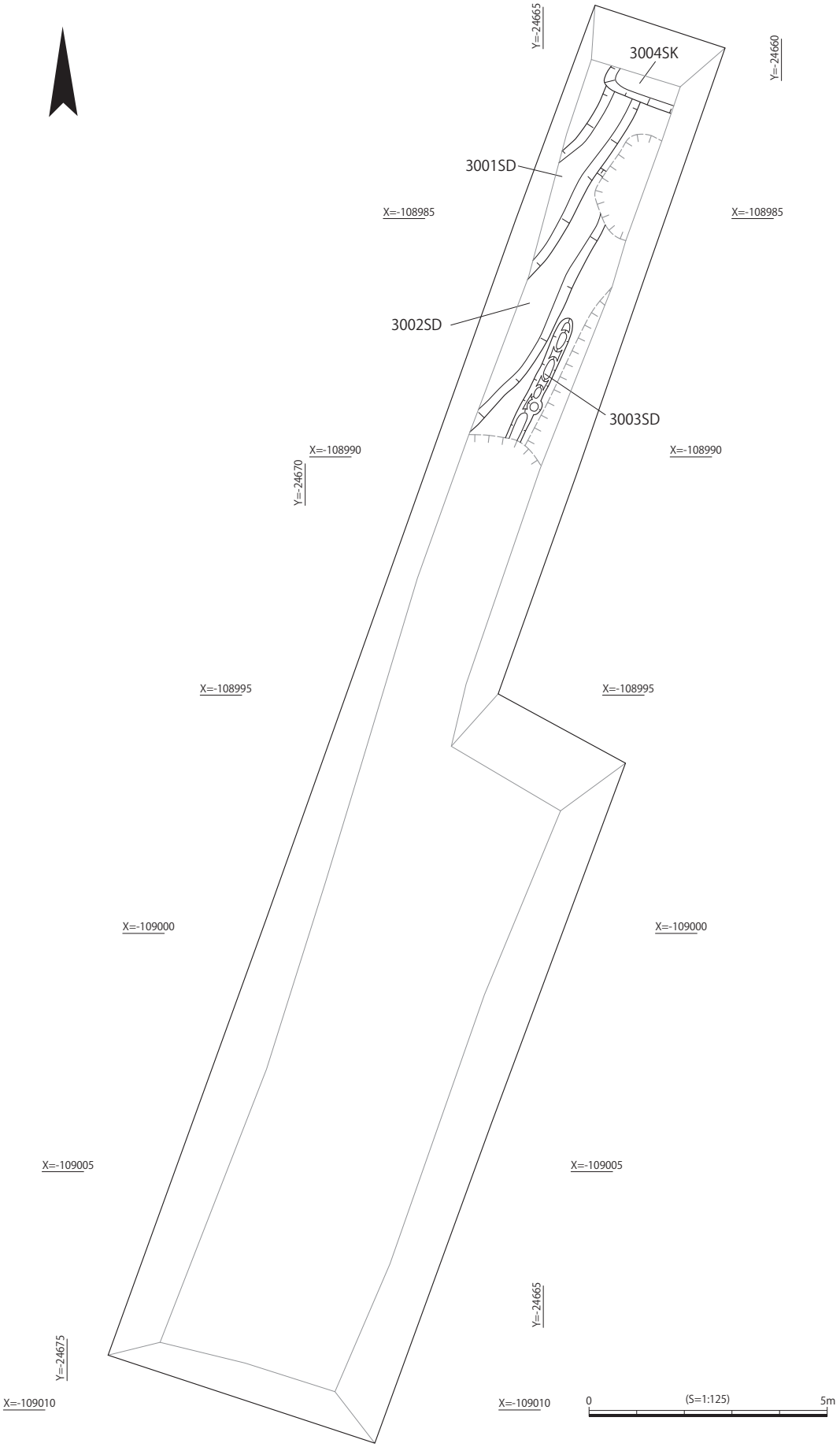
1, 表土・撹乱
2, 褐色(10YR4/4)細粒砂
3, 灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂
4, 暗褐色(10YR3/3)細粒砂　貝殻多量に含む
5, 褐色(7.5YR4/4)細粒砂
6, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂　径5mmほどの小礫含む
7, 黄灰色(2.5Y4/1)中粒砂　貝殻、近世陶器多量に含む
2090SD
8, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
2088SK
9, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
2088SK
10, 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中粒砂
2091SK
11, 黒褐色(2.5Y3/2)中粒砂　貝少量含む
2091SK
12, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂
13, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
14, オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
15, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂　Ⅴ層含む
16, にぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂　径5～10mmほどの小礫含む
Ⅴ層

0 (S=1:50) 1m

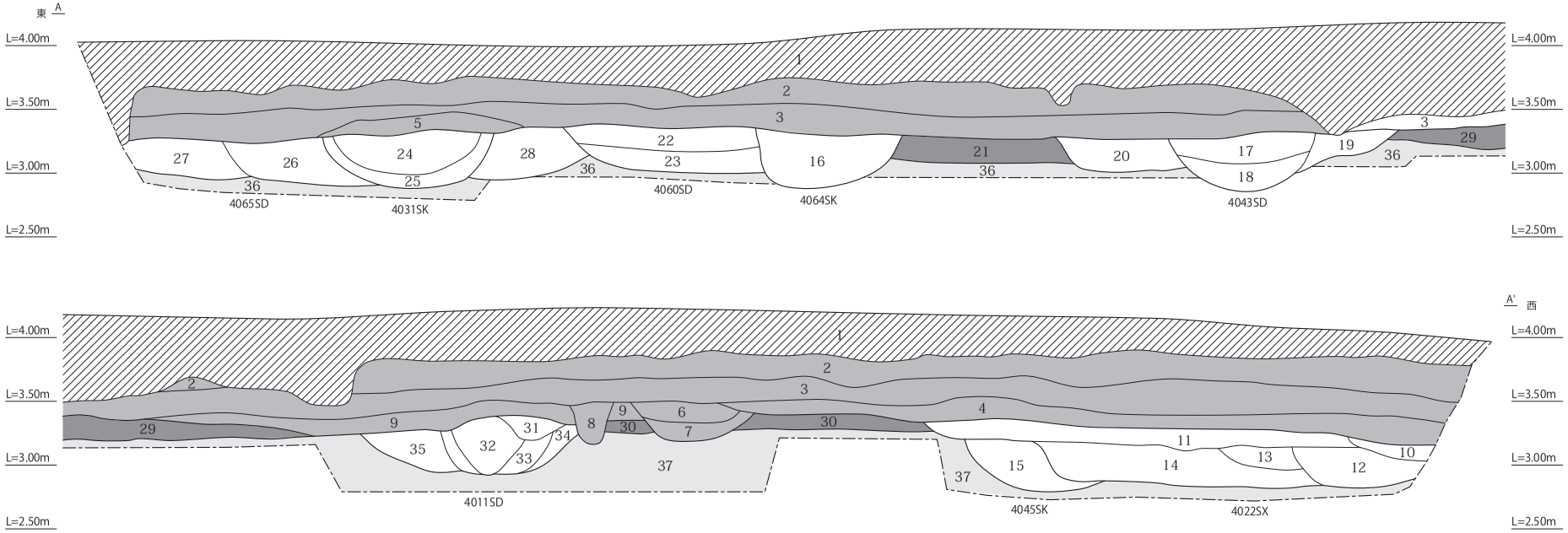


Ⅱ層・近世遺構ほか
Ⅲ層（包含層）
Ⅴ層（基盤層）

図版16　遺構　3地点　調査区平面図

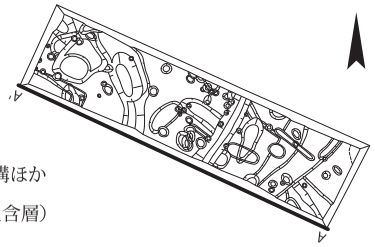


図版17　遺構　4地点　調査区平面図



1, 表土・現代攪乱
2, 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂
Ⅱ層
3, 暗褐色(7.5YR3/4)細粒砂
Ⅱ層
4, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
Ⅱ層
5, 黒色(10YR2/1)中粒砂　暗褐色(7.5YR3/4)細粒砂多く含む
6, 褐色(7.5YR4/4)中粒砂
7, 褐色(7.5YR4/4)中粒砂　Ⅴ層含む
8, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
9, 褐色(10YR4/4)中粒砂
Ⅱ層
10, 暗褐色(7.5YR3/4)中粒砂　粘土ブロック含む
4022SX
11, 暗褐色(10YR3/4)中粒砂
4022SX
12, 暗褐色(10YR3/3)中粒砂　粘土ブロック含む
4022SX
13, 暗褐色(10YR3/3)中粒砂　暗褐色(10YR3/4)中粒砂含む
4022SX
14, 暗褐色(10YR3/3)中粒砂　暗褐色(10YR3/4)中粒砂　粘土ブロック含む
4022SX
15, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂
4045SK
16, 褐色(10YR4/4)中粒砂　しまりあり
4064SK
17, 褐色(7.5YR4/4)中粒砂　Ⅴ層含む
4043SD
18, 褐色(10YR4/4～6)中粒砂　Ⅴ層含む
4043SD
19, 褐色(10YR4/4～6)中粒砂　Ⅴ層含む
4043SD
20, 褐色(10YR4/6)中粒砂　Ⅴ層含む
4050SKか
21, 褐色(10YR4/4～6)中粒砂　Ⅴ層含む
Ⅲ層
22, 褐色(10YR4/6)中粒砂　しまりあり
4060SD
23, 黄褐色(10YR5/6)中粒砂
4060SD
24, 黒色(10YR2/1)中粒砂　にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂含む
4031SK
25, 黒色(10YR2/1)中粒砂　褐色(10YR4/4)中粒砂とにぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂含む
4031SK
26, 暗褐色(10YR3/4)中粒砂　Ⅴ層含む
4065SD
27, 黒色(10YR2/1)中粒砂　暗褐色(10YR3/4)中粒砂とⅤ層含む
4065SD
28, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
29, 褐色(10YR4/6)中粒砂　Ⅴ層含む
Ⅲ層
30, 褐色(10YR4/4～6)中粒砂　Ⅴ層含む
ⅢもしくはⅣ層
31, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂
4011SD
32, 黒色(10YR2/1)中粒砂　にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂含む
4011SD
33, 褐色(10YR4/4)中粒砂
4011SD
34, 褐色(10YR4/4)中粒砂　Ⅴ層多く含む
4011SD
35, にぶい黄褐色(10YR5/4)中粒砂
4011SDか?
36, 明黄褐色(10YR7/6)粗粒砂
Ⅴ層
37, 明黄褐色(10YR6/6)中～粗粒砂
Ⅴ層

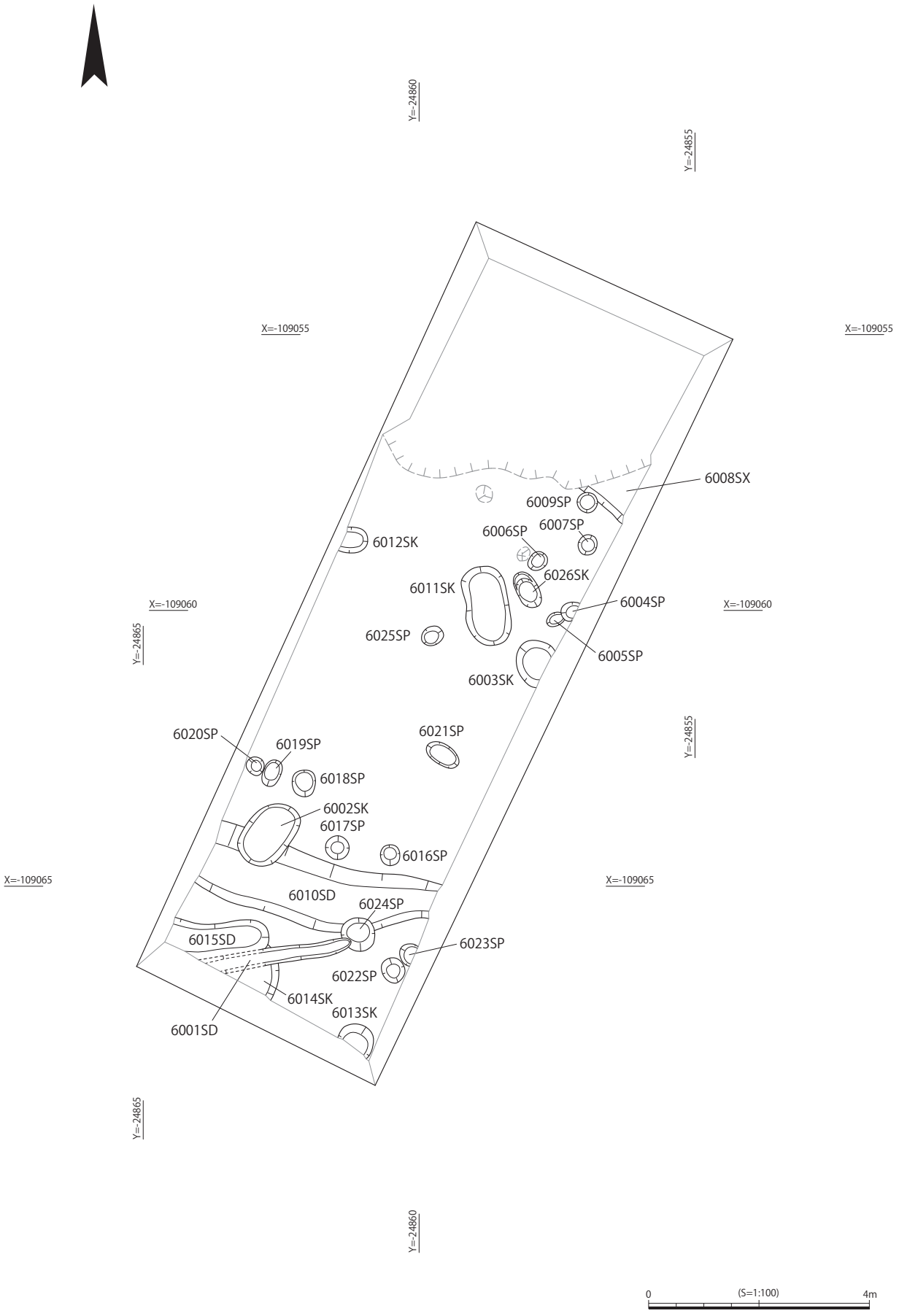
0 (S=1:50) 1m

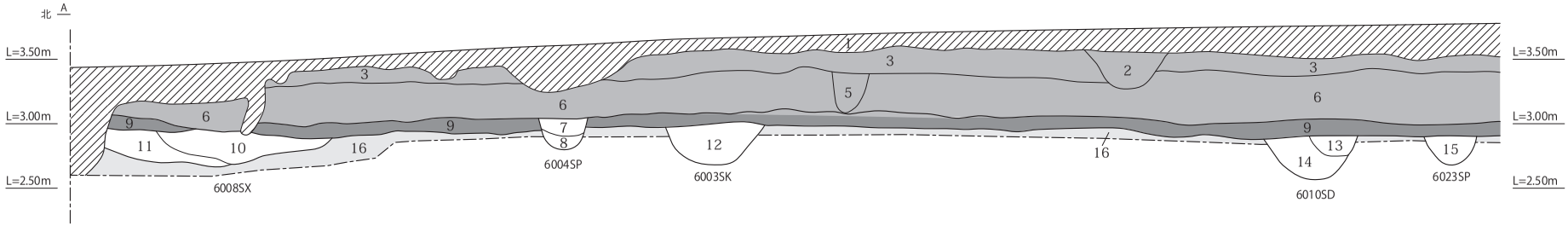


Ⅱ層・近世遺構ほか
Ⅲ層・Ⅳ層(包含層)
Ⅴ層(基盤層)

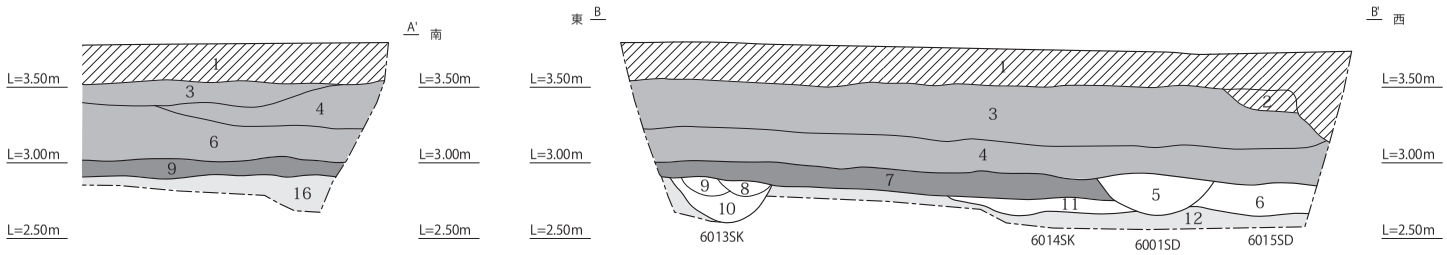
図版18 遺構 4地点 土層断面図(南壁)

図版19　遺構　6地点　調査区平面図

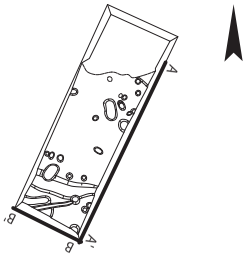




1, 表土・現代撹乱
2, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
3, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂
Ⅱ層
4, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂　5mmほどの小礫含む
Ⅱ層
5, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
6, 暗褐色(7.5YR3/4)細粒砂
7, 褐色(10YR4/6)中粒砂
6004SP
8, 黄褐色(10YR5/6)中粒砂
6004SP
9, 褐色(10YR4/4)中粒砂　Ⅴ層含む
Ⅲ層
10, にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂
6008SX
11, 褐色(10YR4/4)中粒砂
6008SX
12, にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂
6003SK
13, にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂　Ⅴ層含む
6010SD
14, にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂
6010SD
15, 褐色(10YR4/4)中粒砂
6023SP
16, 明黄褐色(10YR6/6)中～粗粒砂



Ⅱ層・近世遺構ほか
Ⅲ層（包含層）
Ⅴ層（基盤層）

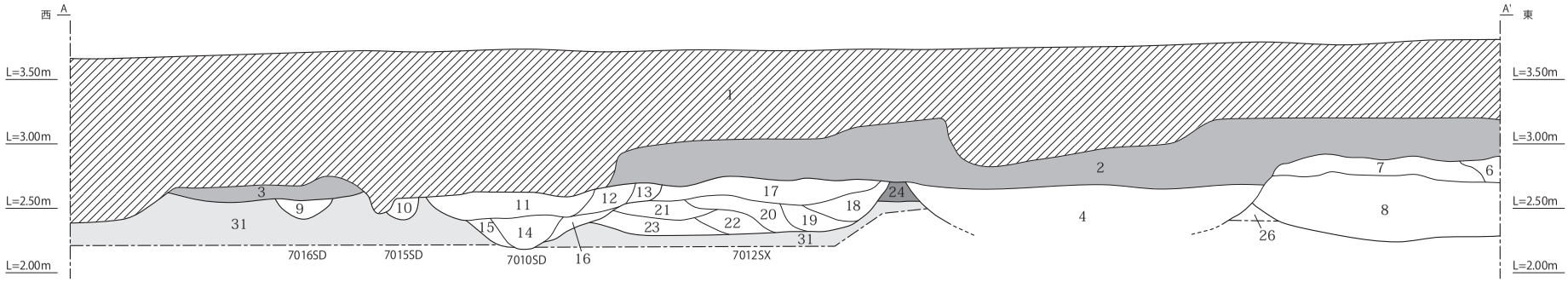


0 (S=1:50) 1m

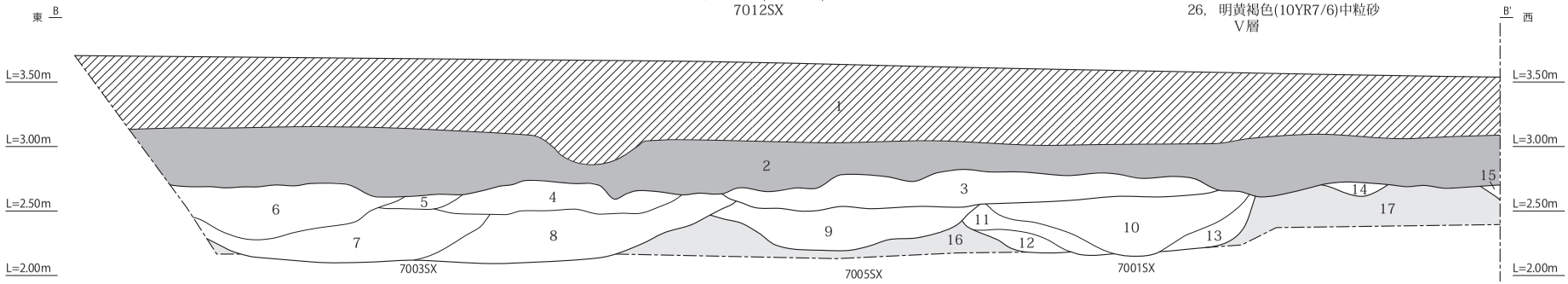
1, 表土・現代撹乱
2, 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂
3, 褐色(7.5YR4/3)細粒砂　5mmほどの小礫含む
Ⅱ層
4, 暗褐色(7.5YR3/4)細粒砂
Ⅱ層
5, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂
6001SD
6, にぶい黄褐色(10YR5/3)中粒砂
6015SD
7, 褐色(10YR4/4)中粒砂　Ⅴ層含む
Ⅲ層
8, 暗褐色(10YR3/4)中粒砂
6013SK
9, 褐色(10YR4/4)中粒砂
6013SK
10, にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒砂　Ⅴ層含む
6013SK
11, 褐色(10YR4/4)中粒砂
6014SK
12, 明黄褐色(10YR6/6)中～粗粒砂
Ⅴ層

図版20
遺構
6地点
土層断面図
（東壁・南壁）

図版21　遺構　7地点　調査区平面図



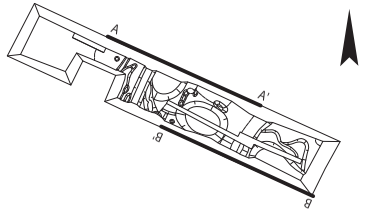
1, 表土・現代攪乱
Ⅱ層
2, 褐色(7.5YR4/4)細粒砂
Ⅱ層
3, 黒褐色(7.5YR3/1)極細粒砂　貝殻片含む
4, 黄褐色(10YR5/6)粗粒砂
6, 灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂　貝殻片、粘土片含む
7, 暗褐色(10YR3/3)極細粒砂　貝殻片多量に含む
8, 黄褐色(5Y5/3)極細粒砂　にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
明黄褐色(10YR6/6)粘土の斑土
9, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
7016SD
10, 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂
7015SD
11, 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂
7010SD
12, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
7010SD
13, 褐色(10YR4/4)細粒砂
7010SD
14, 暗灰黄色(2.5Y4/2)中粒砂
7010SD
15, オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗～中粒砂
7010SD
16, オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗～中粒砂　にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂含む
7010SD
17, 褐色(10YR4/4)細粒砂　径5～10mmの小礫　Ⅴ層含む
7012SX
18, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
7012SX
19, 黄橙色(10YR7/8)粗粒砂
7012SX
20 にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
7012SX
21, 灰褐色(7.5YR4/2)細粒砂
7012SX
22, にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂　Ⅴ層多量に含む
7012SX
23, 褐色(7.5YR4/4)細粒砂
7012SX
24, 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂　Ⅲ層か?
25, にぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒砂
Ⅴ層
26, 明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
Ⅴ層



1, 表土・現代攪乱
2, 褐色(7.5YR4/4)細粒砂
Ⅱ層
3, 暗褐色(10YR3/3)極細粒砂　貝殻多量に含む
7001,7005SX上層
4, 暗褐色(10YR3/3)極細粒砂　貝殻大量に含む
7003SX
5, 灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂
7003SX
6, 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂　明黄褐色(10YR6/8)粘土多く含む
7003SX
7, 灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂　貝殻片少量含む
7003SX
8, 灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂
7003SX
9, 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂
7005SX
10, 黒褐色(10YR3/2)極細粒砂　明黄褐色(10YR6/8)貝殻多量に含む
7001SX
11, 灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂
7001SX
12, 灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂　明黄褐色(10YR6/8)粘土含む
7001SX
13, 灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂　Ⅴ層含む
7001SX
14, 褐色(10YR4/4)細粒砂　Ⅴ層含む
15, 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂
7008SK
16, にぶい黄色(2.5Y6/4)粗粒砂
Ⅴ層
17, 明黄褐色(10YR7/6)中粒砂
Ⅴ層

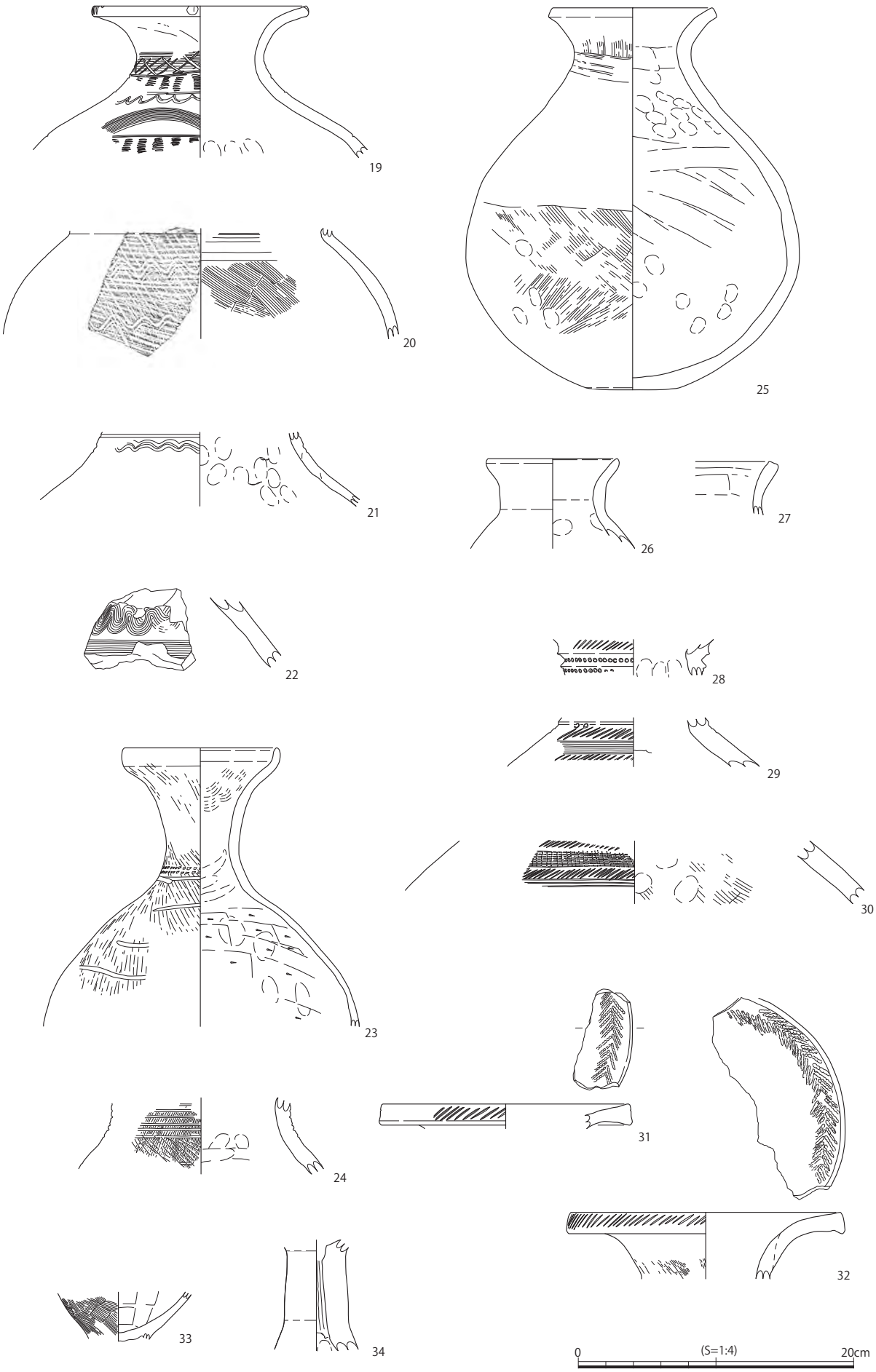
0 (S=1:50) 1m

Ⅱ層・近世遺構ほか
Ⅲ層(包含層)
Ⅴ層(基盤層)

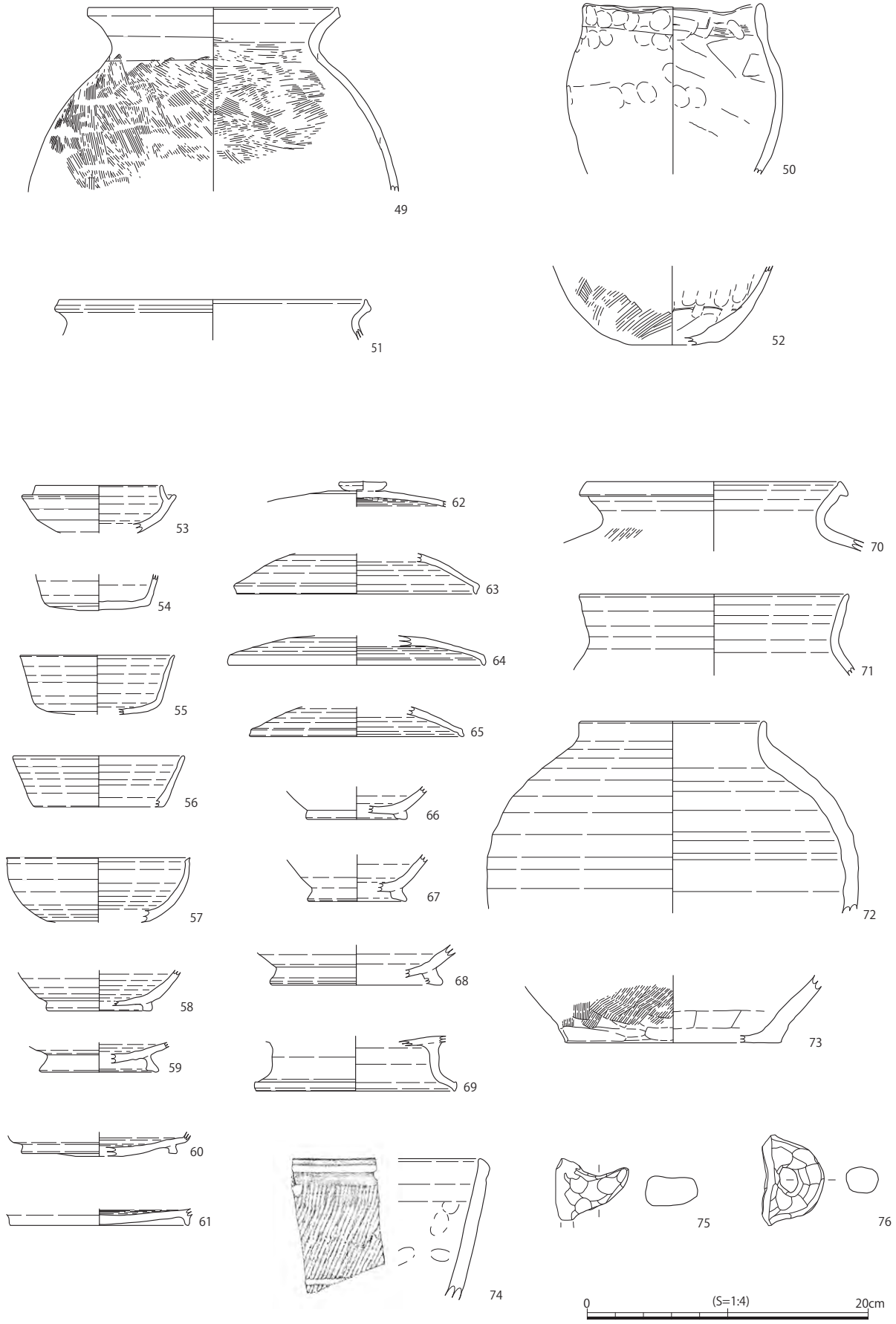


図版22　遺構　7地点　土層断面図（北壁・南壁）

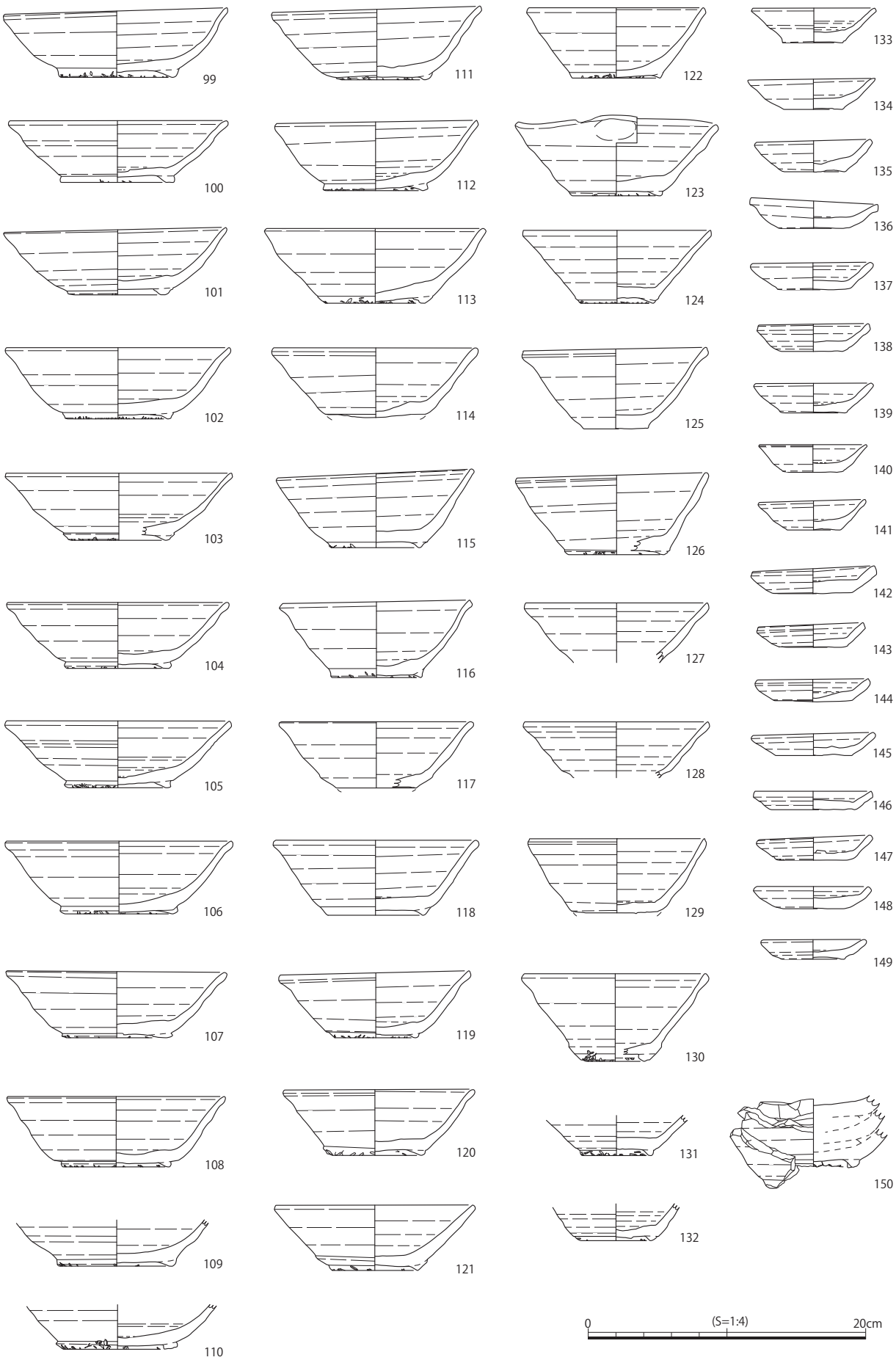
図版23　遺物　弥生時代の土器



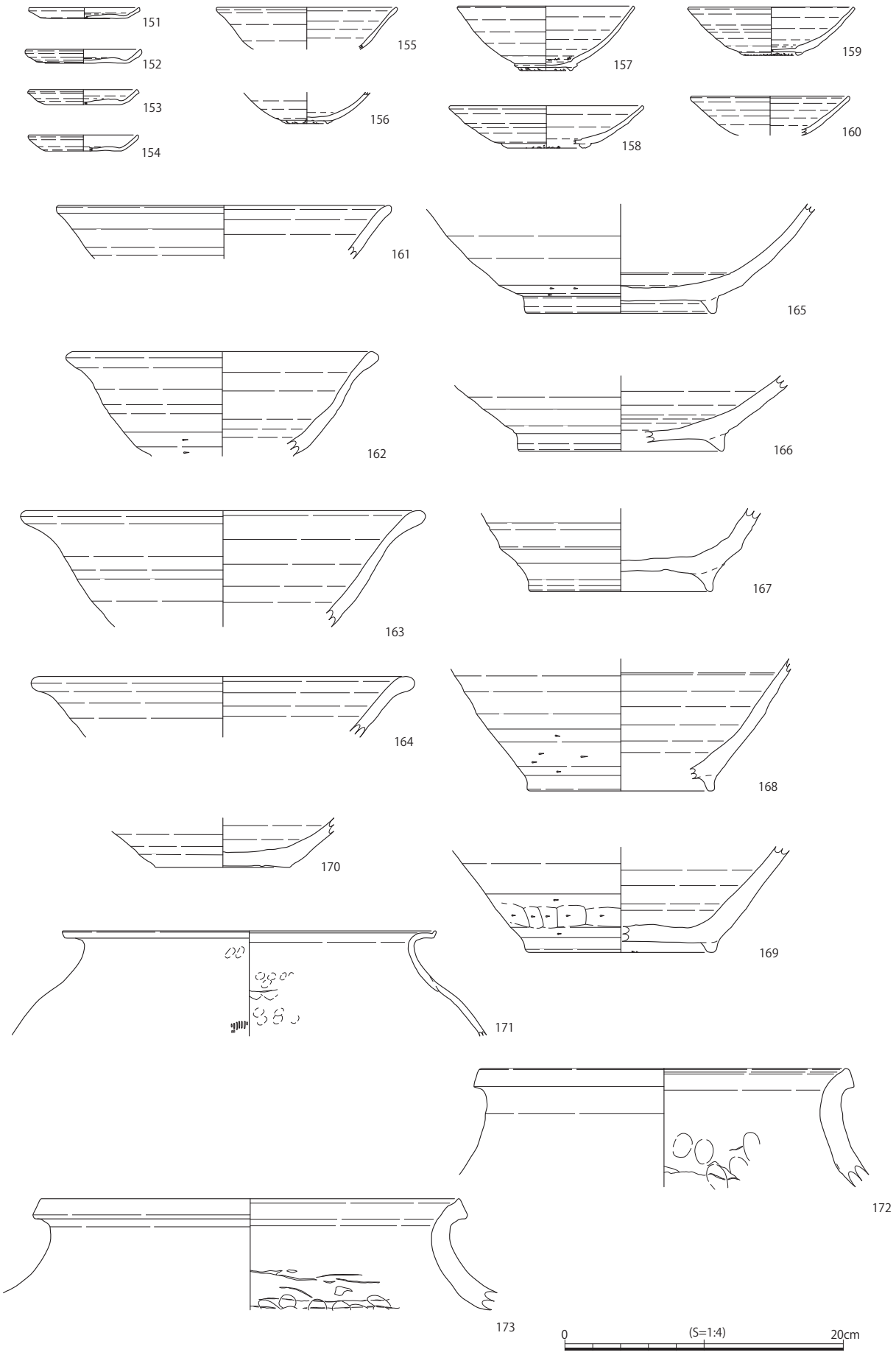
図版24　遺物　古代の土師器・須恵器



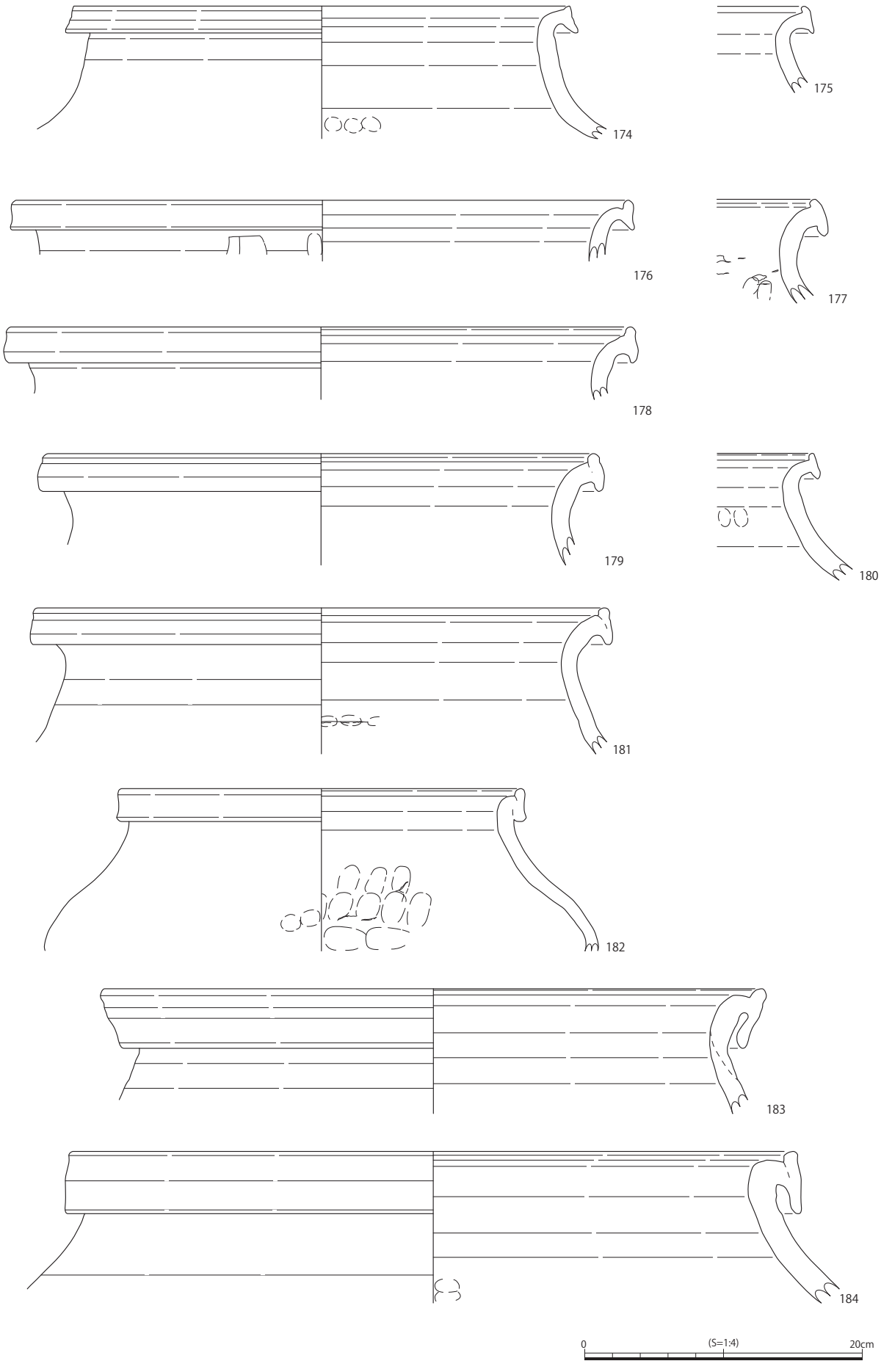
図版25　遺物　2120SD出土の土器・陶磁器



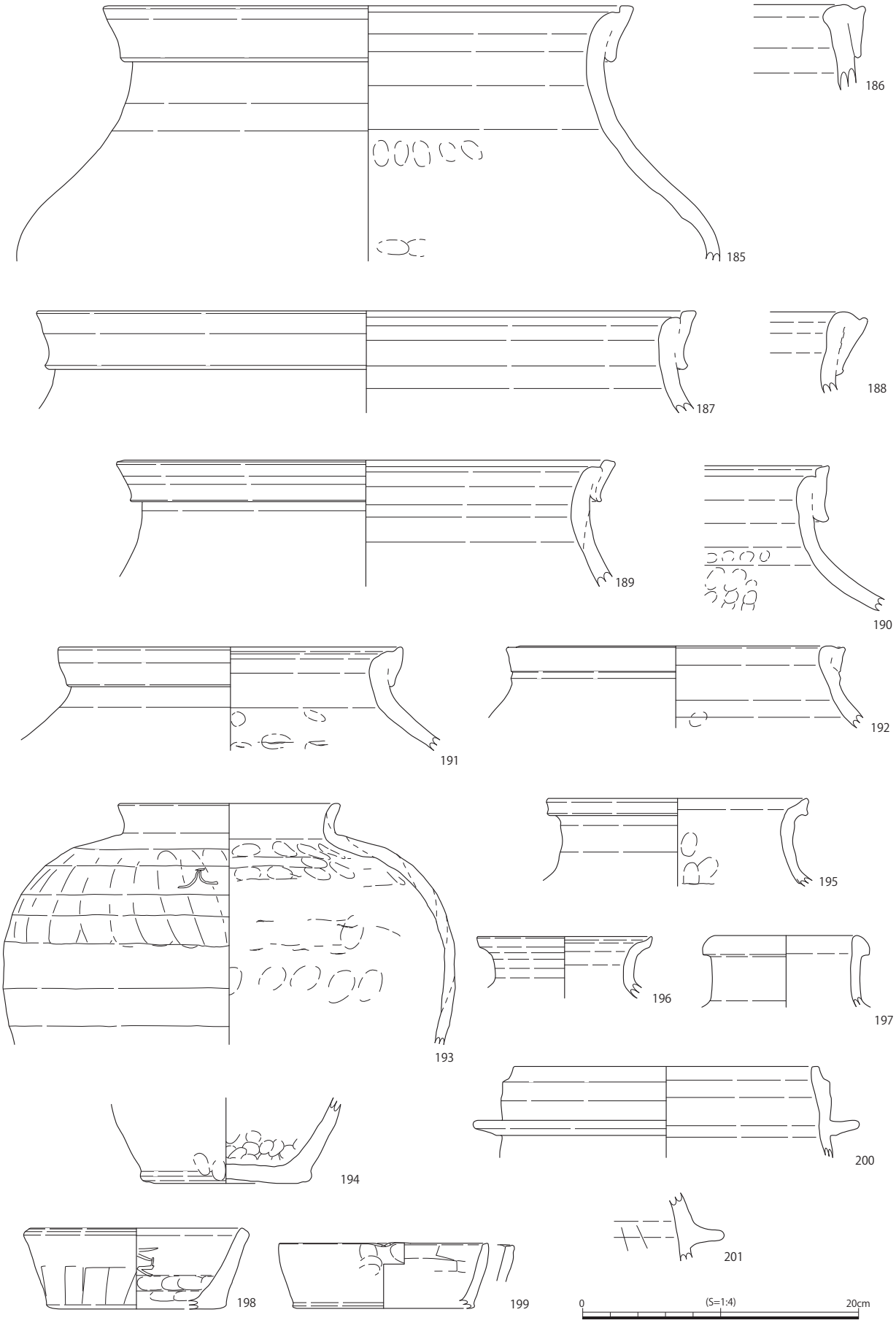
図版26 遺物 2120SD出土の土器・陶磁器



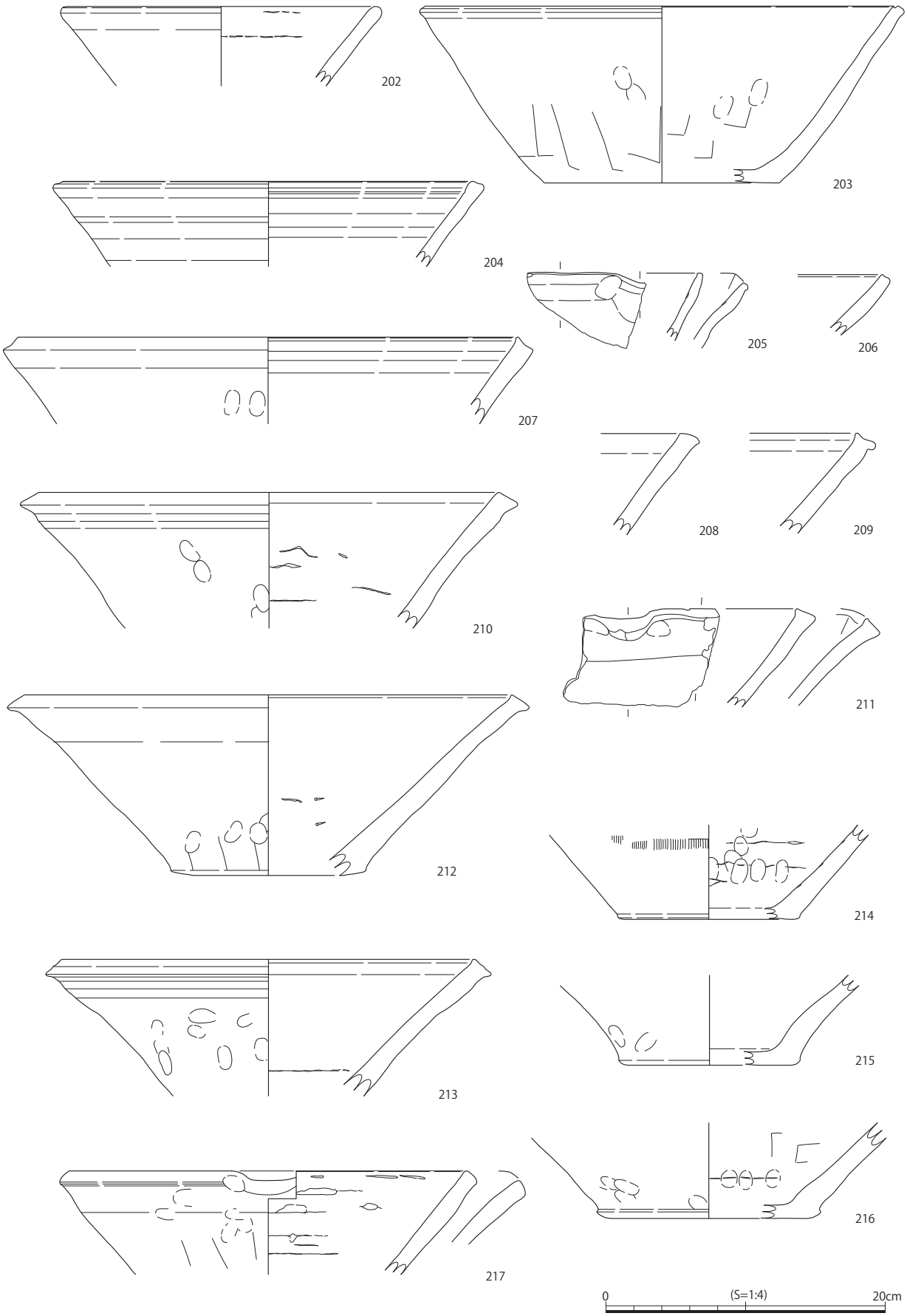
図版27　遺物　2120SD出土の土器・陶磁器



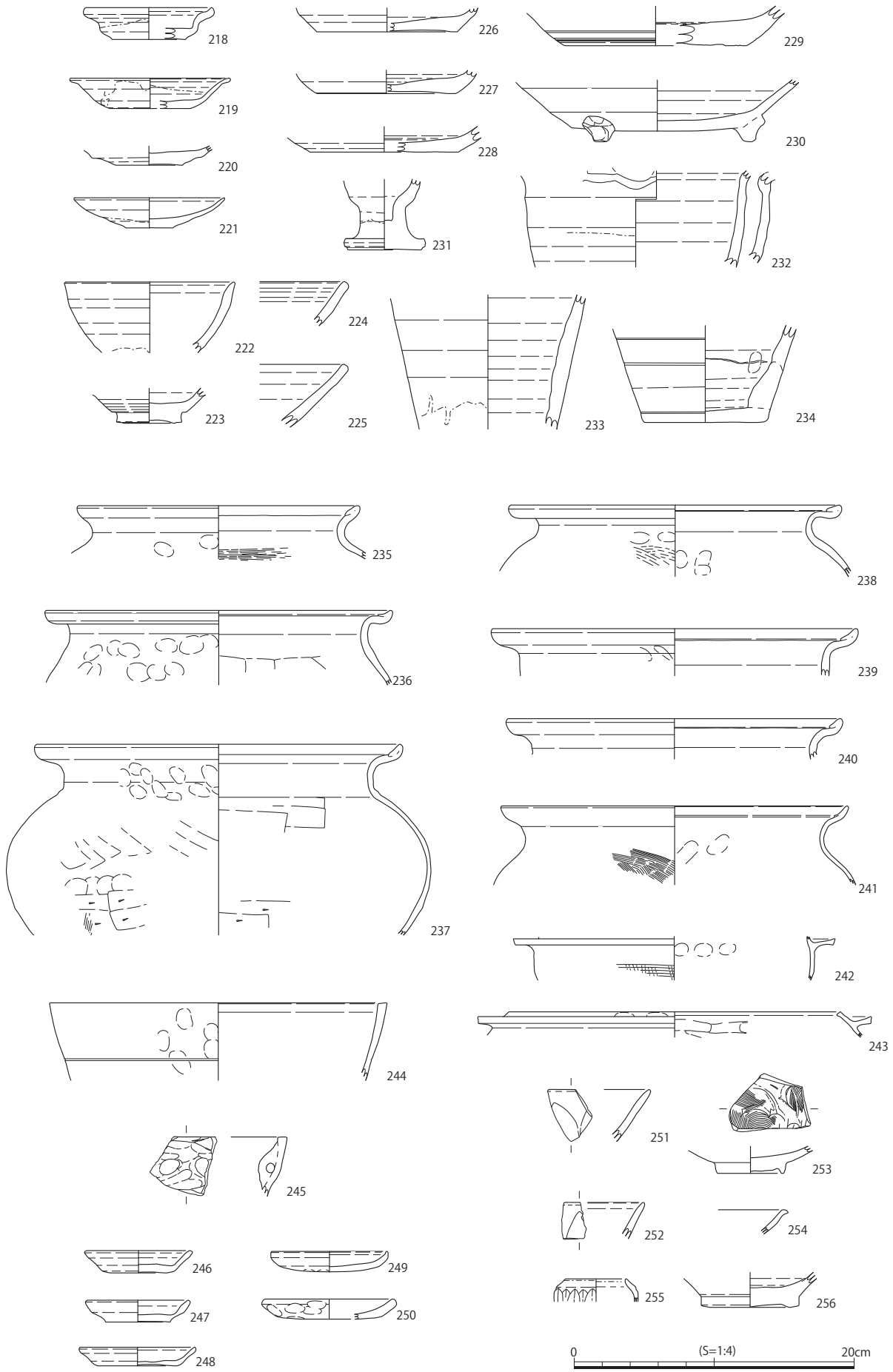
図版28　遺物　2120SD出土の土器・陶磁器



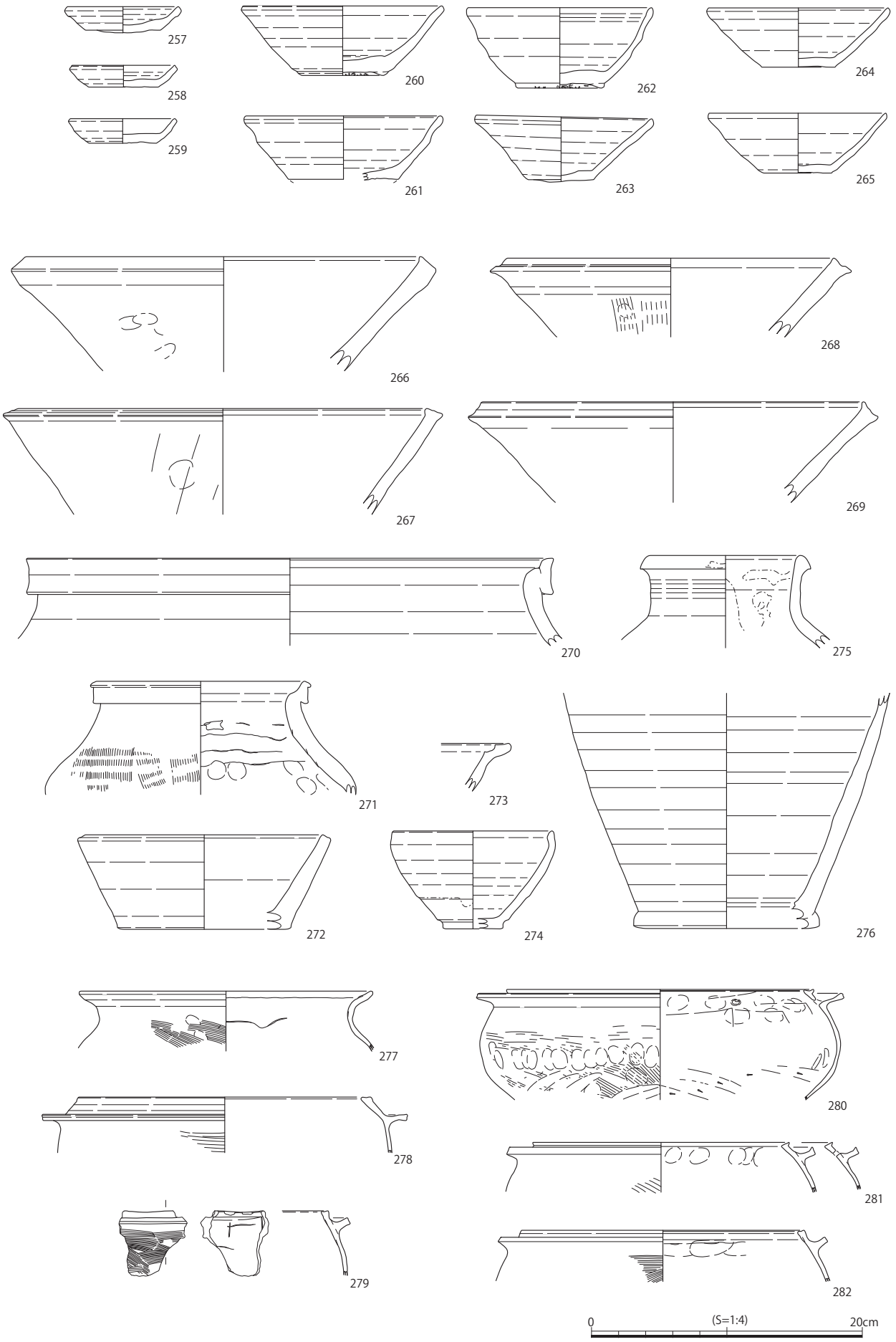
図版29　遺物　2120SD出土の土器・陶磁器



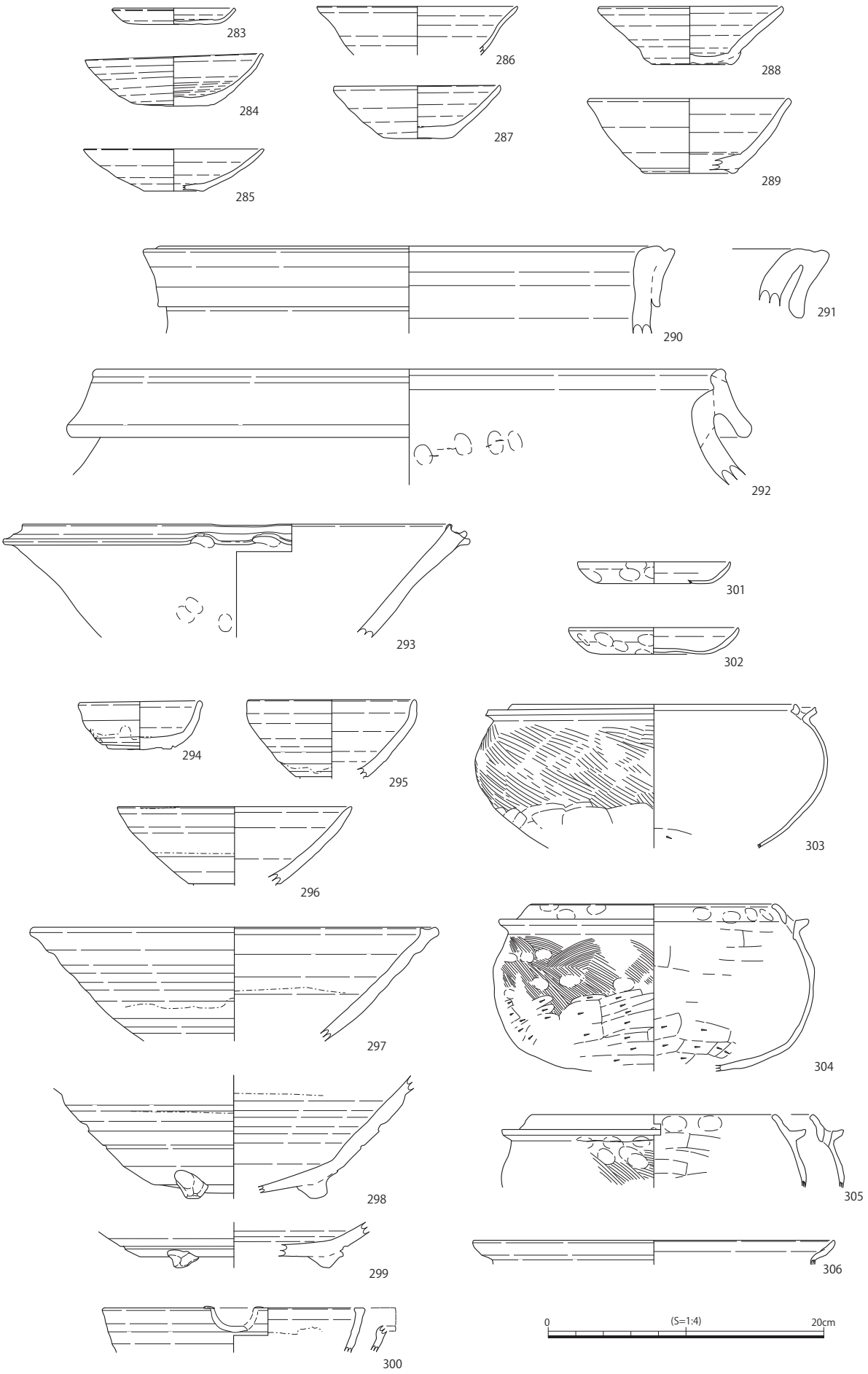
図版30　遺物　2120SD出土の土器・陶磁器



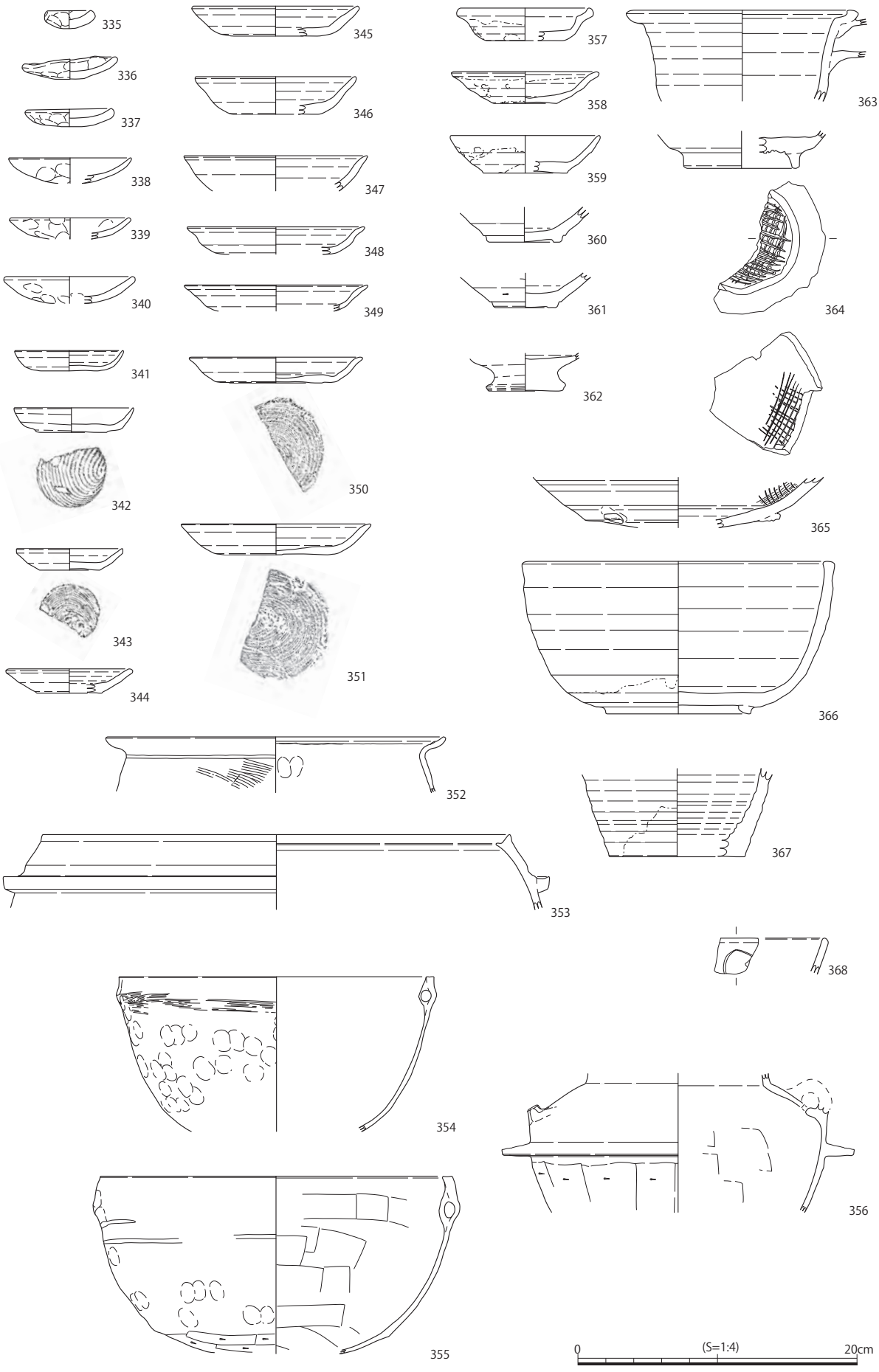
図版31　遺物　2180SD出土の土器・陶磁器



図版32　遺物　2153SX遺構群出土の土器・陶磁器



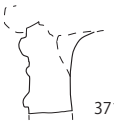
図版33　遺物　中世の土器・陶磁器

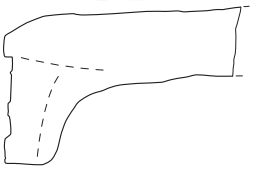


図版34　遺物　瓦（2120SD）

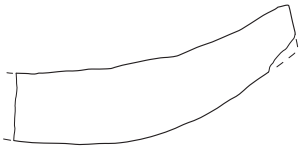
369

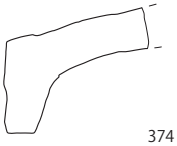
370


371

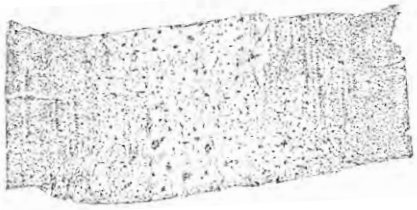
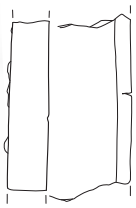


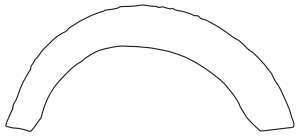
372

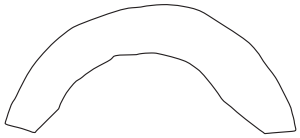

373


374

375

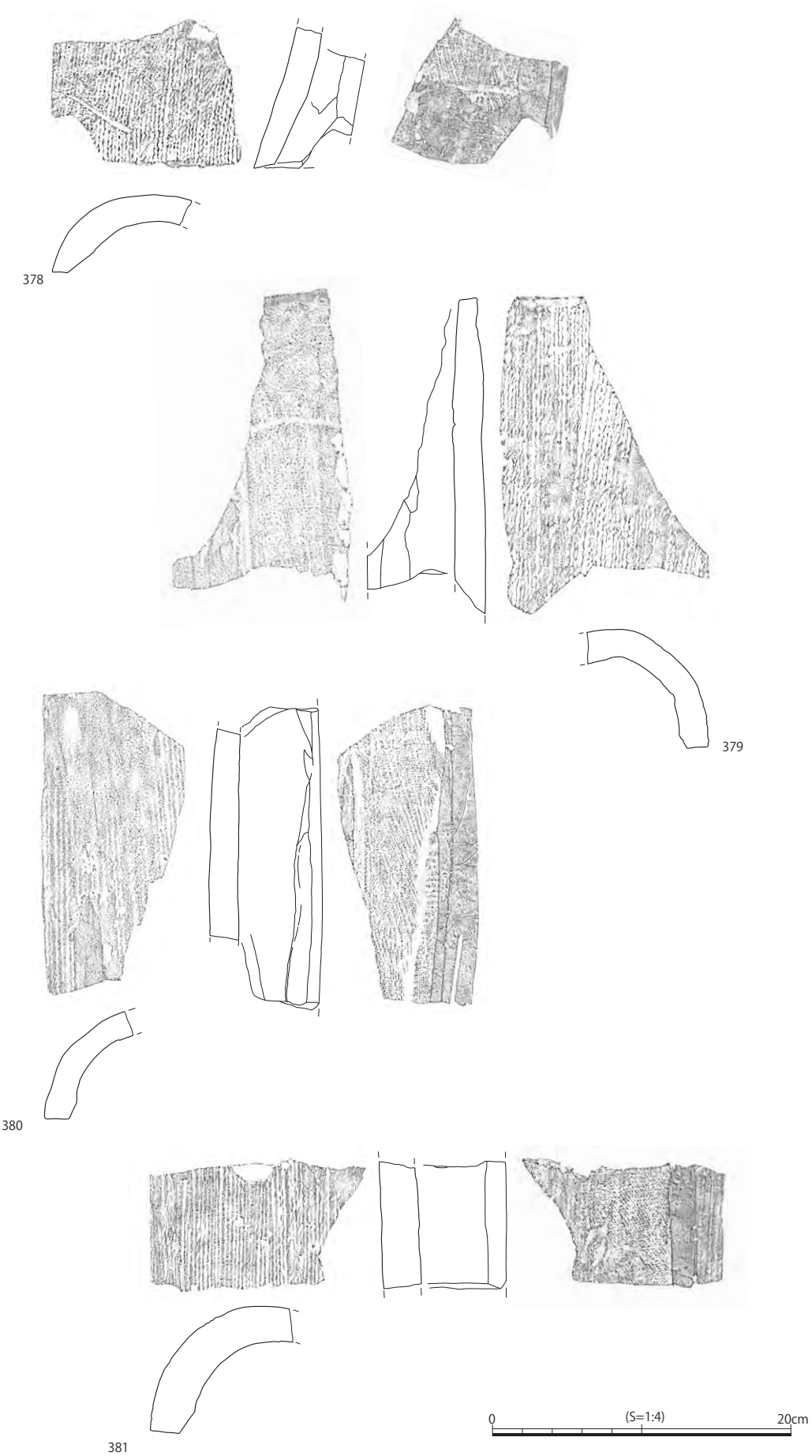



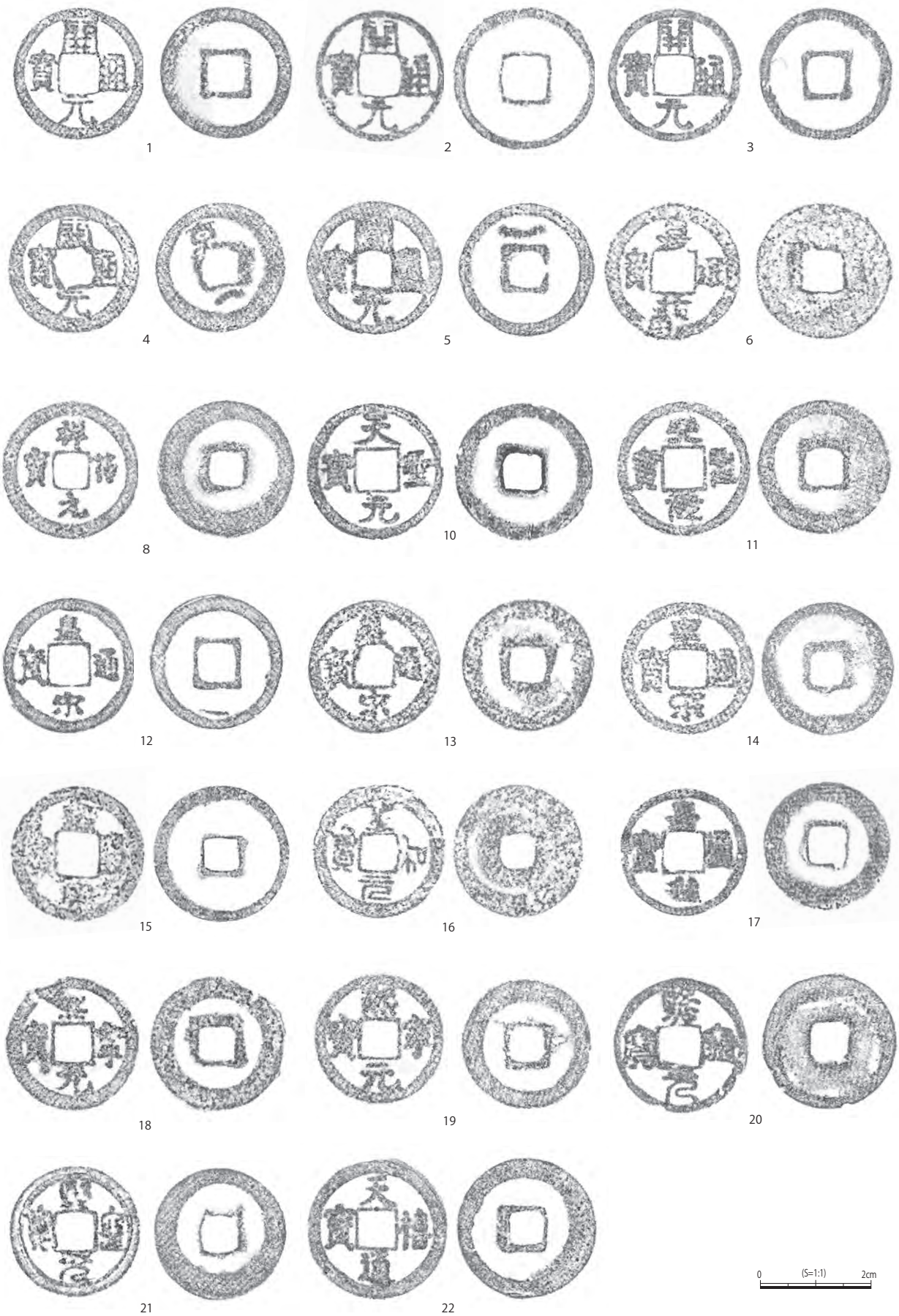

376


377

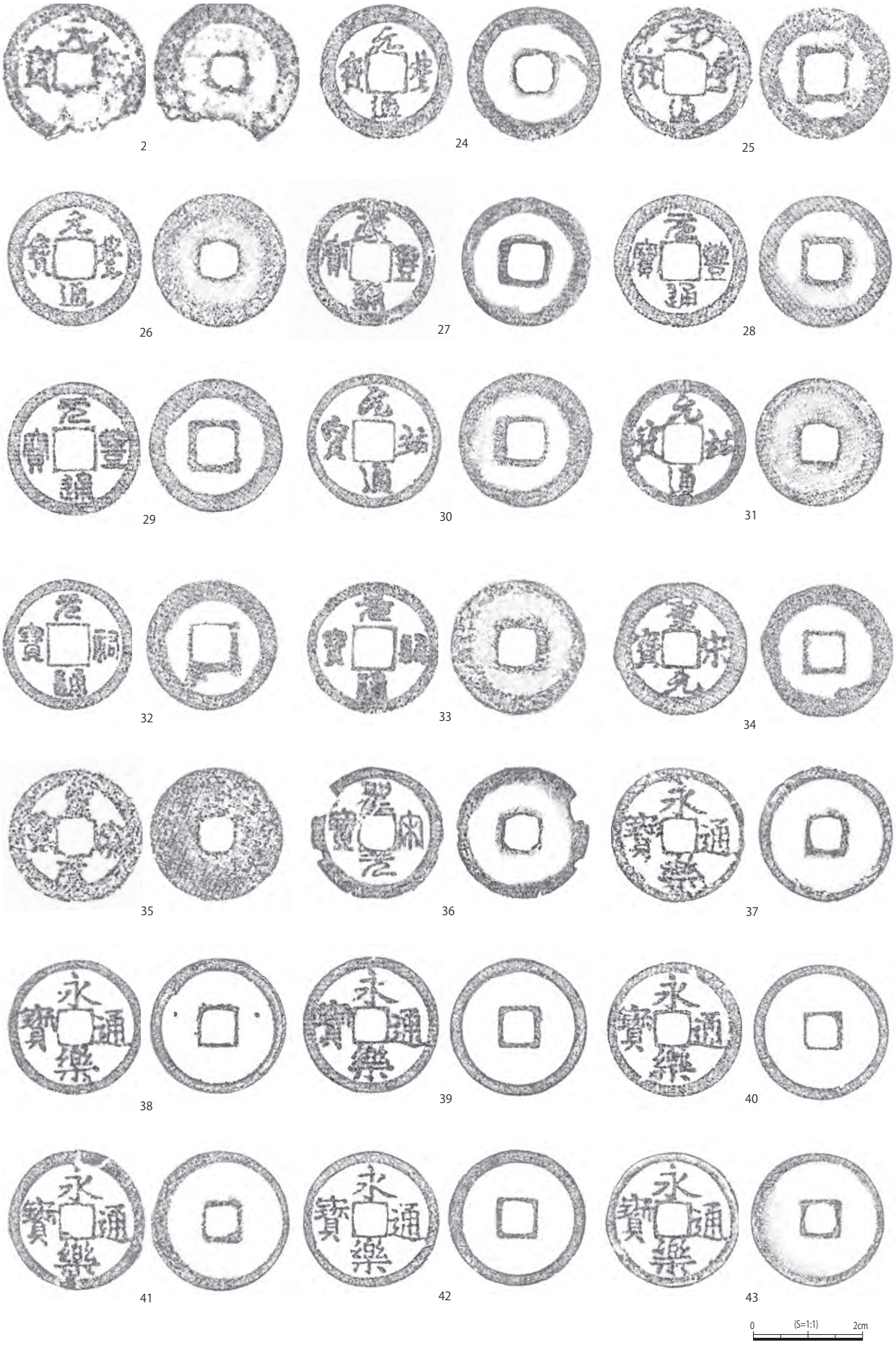
0　(S=1:4)　20cm

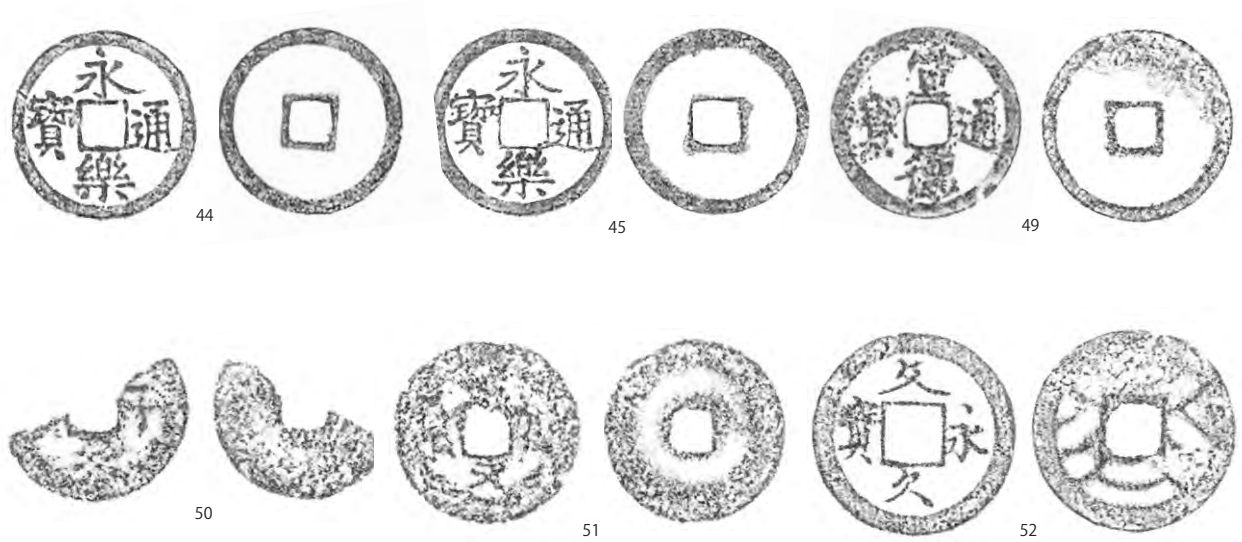
図版35　遺物　瓦（21 20 SD）

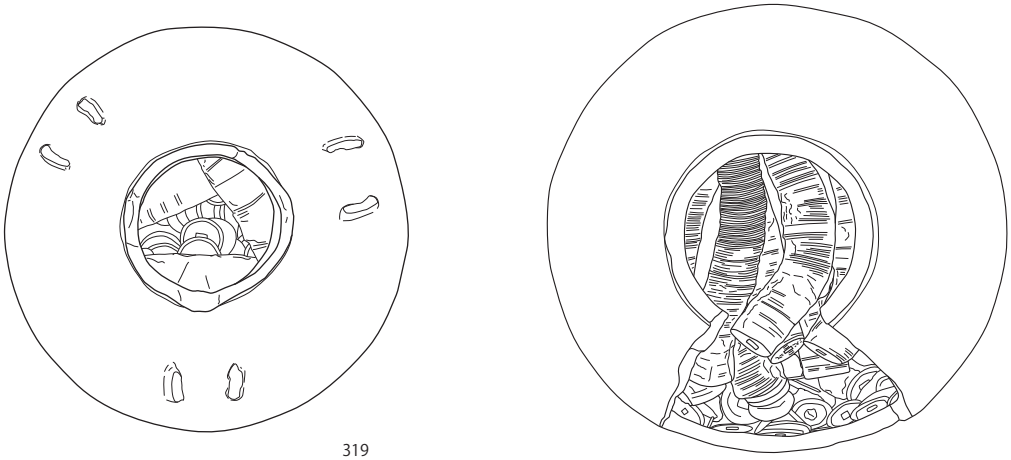


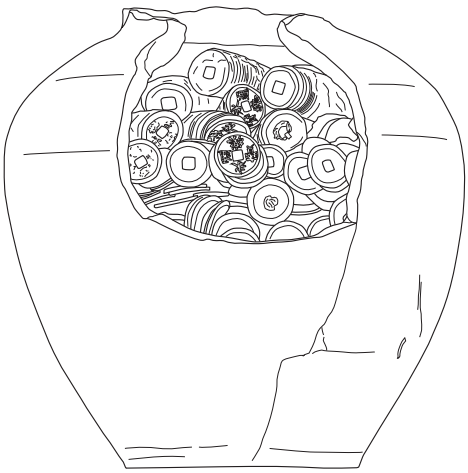

1
2
3
4
5
6
8
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
0
(S=1:1)
2cm

図版37　遺物　金属製品（銭貨）



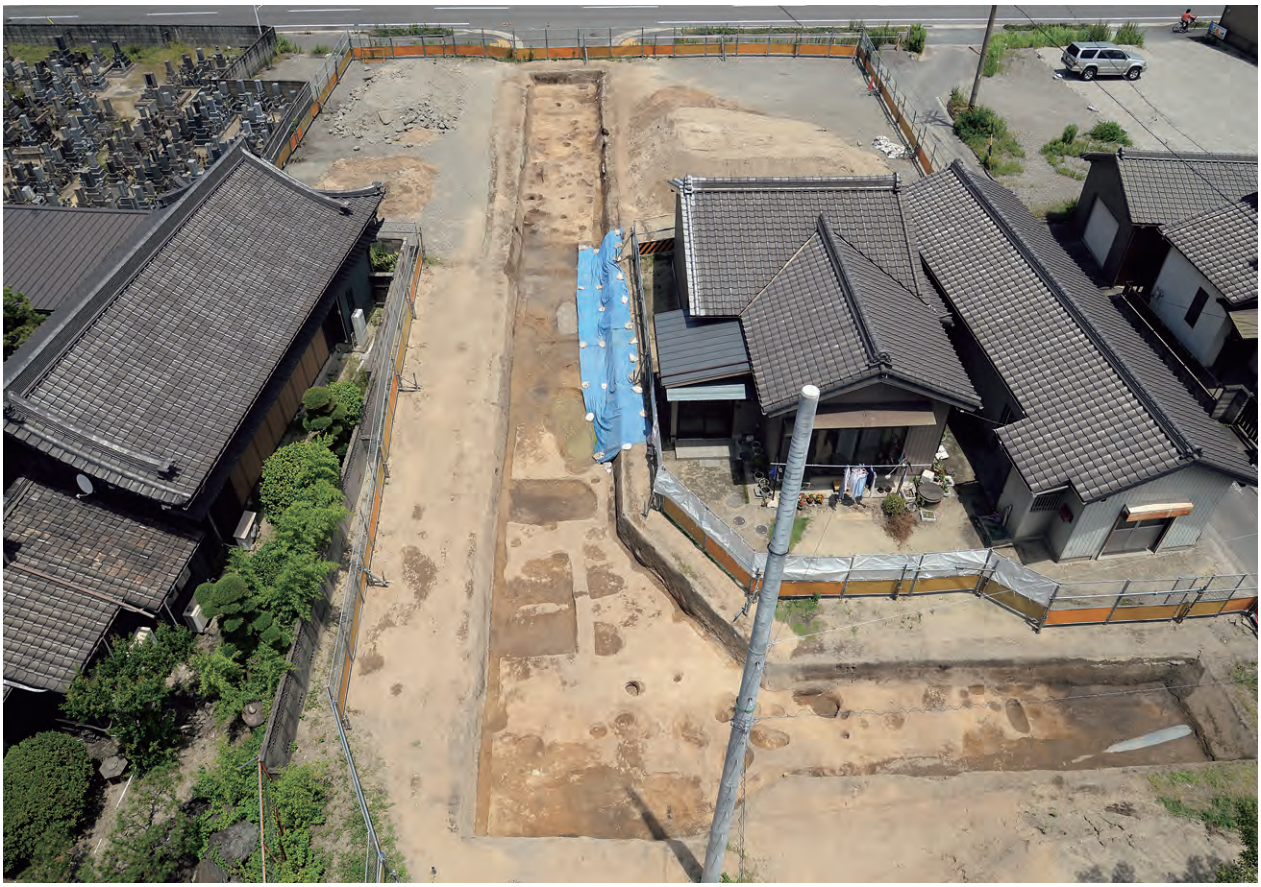






大量出土銭 A・B 壺内銭貨

写真図版



1　1地点全景（南から）

2　1地点全景（北部）（北東から）

写真図版２　遺構　畑間遺跡（１地点）

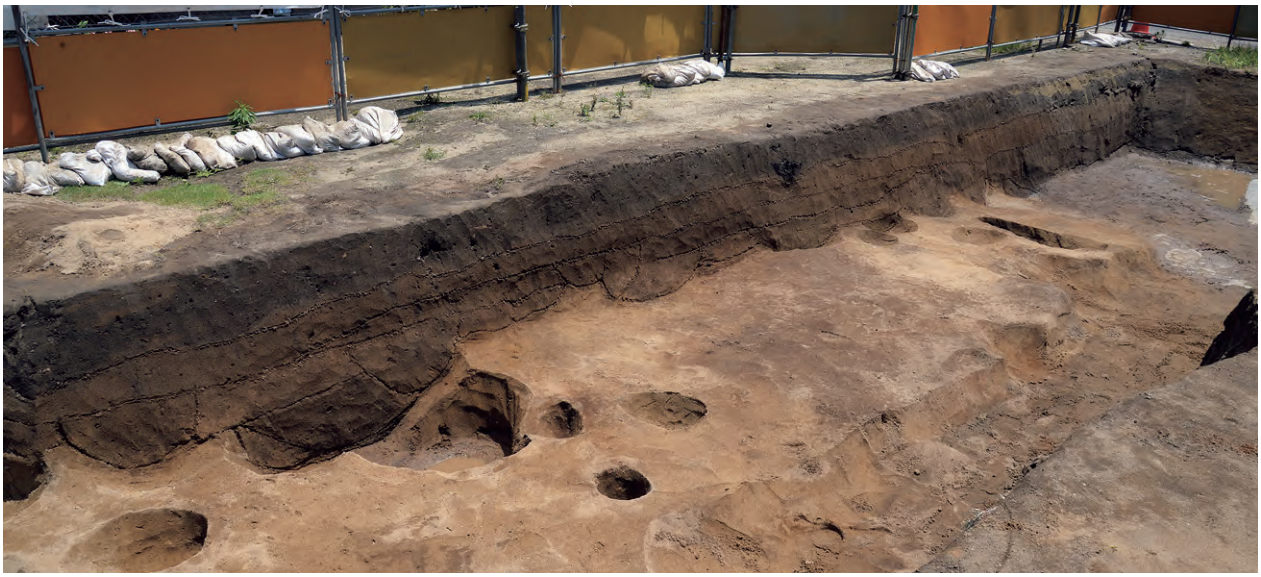
１　１地点西壁（北端）

２　１地点西壁（北部）

３　１地点東壁（北部）

1　1地点西壁（南部）

2　1地点東壁（南部）



3　1地点南東部北壁

写真図版４　遺構　畑間遺跡（１地点）

1　1030SD（北西から）

2　1030SD 検出（北西から）

1　1040SD（北西から）

2　1050SD（東から）

1　1060SK（西から）

2　1060SK 遺物出土状況（西から）

1　1152SK（南から）

2　1160SK（東から）

写真図版８　遺構　畑間遺跡（１地点）

1　1180SX（東から）

2　1186SK（北西から）

１　２地点東区全景（西から）

２　２地点東区全景（東部）（西から）

1　2地点東区全景（西部）（西から）

2　2地点西区全景

1　2地点西区西壁

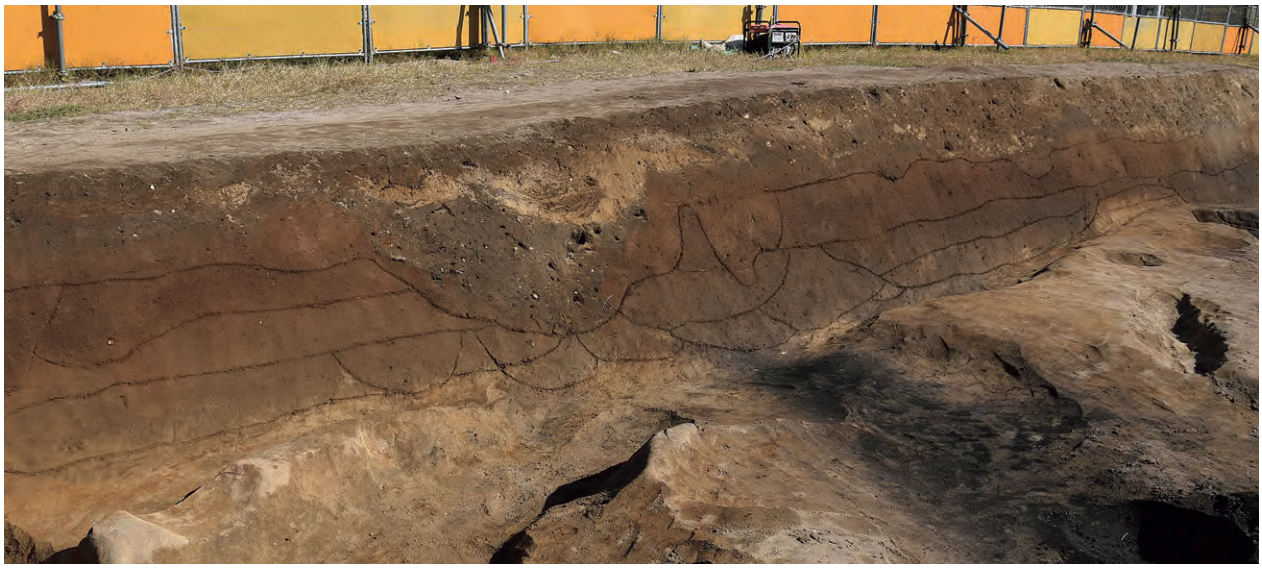
2　2地点西区北壁

3　2地点西区南壁

写真図版12　遺構　畑間遺跡（2地点）

1　2地点東区東壁

2　2地点東区北壁（東部）



3　2地点東区北壁（中央部）

1　2地点東区北壁（西部）

2　2地点東区南壁（西部）

3　2地点東区南壁（西部）

1　2090SD・2100SD・東部柱穴列検出（西から）

2　2100SD（南西から）

1　2120SD 検出（北東から）

2　2120SD 遺物出土状況（南西から）

1　2120SD 遺物出土状況（南西側）（北東から）

2　2120SD 遺物出土状況（北東側）（南西から）

1　2120SD 遺物出土状況（北東側）（東から）

2　2120SD 遺物出土状況（杏葉唐草文軒平瓦）（東から）

1　2120SD 断面（南西から）

2　2120SD 断面（北西から）

1　2135・2144SD ほか検出（北東から）

2　2135・2144SD ほか（南西から）

1　方形区画溝群と大量出土銭B（西から）

2　方形区画溝群南西部検出（2115SD・2156SK・2196SDほか）（南から）

1　2148SD（南から）

2　2115SD（東から）

3　方形区画溝群と大量出土銭Ｂ（南西から）

1　2115・2199SD ほか断面（南西から）

2　2205SD 断面（南から）

3　2205SD 遺物出土状況（南東から）

4　2205SD 遺物出土状況（南東から）

1　2180SD（南東から）

2　大量出土銭Aと方形区画溝群検出（西から）

1　大量出土銭A（2140SX）（南から）

2　大量出土銭A（2140SX）（南から）

1　大量出土銭B（2190SX）（南から）

2　大量出土銭B（2190SX）（南から）

1　大量出土銭Ｂ（2190SX）（南東から）

2　大量出土銭Ｂ（2190SX）（南東から）

1　2156SK 独鈷杵出土状況（北から）

2　2156SK 独鈷杵出土状況（東から）

1　2153SX 遺構群検出（南から）

2　2153SX 遺構群断面（南東から）

1　2010・2065SK（東から）

2　2200SK（南から）

1　3地点北部全景（南西から）

2　3地点北部検出（南東から）

1　4地点全景（南西から）

2　4地点全景（中央部）（南から）

1　4地点西壁

2　4地点南壁（西部）

3　4地点南壁（東部）

1　4011SD 検出（南東から）

2　4011SD（南東から）

1　4011SD 断面（南から）

2　4030・4052SK（北東から）

1　6地点全景（北から）

2　6地点検出（北西から）

1　6地点南壁

2　6地点東壁

3　6地点東壁（北部）

1　6010SD（北西から）

2　6010SD 遺物出土状況（西から）

1　7地点全景（東から）

2　7010・7011SD・7012SXほか（北西から）

1　7地点北壁

2　7地点南壁

1　7地点検出（中央部）（北東から）

2　7001SX（北から）

19

23

38

37

25

36

35

写真図版42　遺物　畑間遺跡（土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗）

49

50

53

77

72

93

95

87

85

84

86

99

100

106

107

112

113

114

115

116

119

120

169

写真図版44　遺物　畑間遺跡（山茶碗）

123

122

125

126

157

150

263

265

325

283

284

331

152

136

142

149

139

147

138

135

193

185

334

写真図版46　遺物　畑間遺跡（古瀬戸・土師器皿）

358

294

234

302

343

335

295

274

366

337

336

236

418

303

354

237

280

356

355

1　弥生土器

2　弥生土器

3　製塩土器

1　古代の須恵器

2　灰釉陶器

3　山茶碗（瀬戸産・東濃型）

1　2120SD 出土遺物（常滑焼）

2　2120SD 出土遺物（鉢類）

1　2120SD 出土遺物（古瀬戸・土師器ほか）

2　方形区画溝群出土遺物

1　2180SD 出土遺物

2　2153SX ほか出土遺物

1　土師器皿

2　古瀬戸

3　土製品（加工円盤ほか）

369
370
371
372

373

374

384

375

377
383
379
376
382

320
319

319

319

319

写真図版56　遺物　畑間遺跡（大量出土銭B・壺と蓋）

320

出土銭Bの蓋（鉢の破片）

320

320

1
2
3
4
5
6
8
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
49
50
51
52

写真図版58　遺物　畑間遺跡（和鏡・独鈷杵）

1　和鏡

2　独鈷杵

報告書抄録

ふりがな	へいせい28ねんど　はたまいせきはっくつちょうさほうこく
書名	平成28年度　畑間遺跡発掘調査報告
副書名	
巻　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	中村毅（編）　安津由香里　小林克也　竹原弘展　藤根久
編集機関	株式会社アコード　名古屋営業所
所在地	〒498-0021　愛知県弥富市平島町大脇12-3-202　℡　0567-65-6082
発行機関	愛知県東海市教育委員会
所在地	〒476-8601　愛知県東海市中央町１丁目１番地　℡　052-603-2211
発行年月日	2018年（平成30年）３月30日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
畑間遺跡	愛知県 東海市 大田町	23222 43050	35 01 11	136 53 42	20160608 ～ 20170123	1239.4	土地区画 整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畑間遺跡	集落	弥生時代 古代 中世	土坑・溝 柱穴・土坑 柱穴・土坑・溝	弥生土器・須恵器 中世陶磁器 金属製品（銭貨ほか） 自然遺物（貝・骨）	２基の中世大量出土銭 独鈷杵・和鏡片出土

要約	畑間遺跡は、愛知県東海市に位置する縄文時代晩期から近世に至る集落遺跡である。平成28年度の調査では、主に弥生時代、古代、中世の遺構・遺物を検出した。弥生時代と古代の遺構・遺物は少ないが、方形周溝墓の可能性がある溝を検出した。報告の大部分は中世の遺構・遺物である。 中世の遺構としては、集落を横断する大溝や方形区画を形成する溝群などを検出した。中世段階の本遺跡の集落構成を復元する上で重要な成果である。また、２基の大量出土銭が見つかったことは特筆に値する。古瀬戸三耳壺と常滑焼壺の内部に大量銭が納められていた。これらは、上述の方形区画を形成する溝の埋没後に埋められており、近接する土坑からは密教法具の独鈷杵も出土した。大量出土銭が発掘調査において出土したのは調査時点で愛知県下初であり、遺構との検討も可能な貴重な事例である。

愛知県東海市
平成 28 年度
畑間遺跡発掘調査報告

平成 30 年 3 月 10 日印刷
平成 30 年 3 月 30 日発行

編集　株式会社アコード名古屋営業所
〒498-0021　愛知県弥富市平島町大脇 12-3-202
TEL0567-65-6082
発行　愛知県東海市教育委員会
〒476-8601　愛知県東海市中央町 1 丁目 1 番地
TEL052-603-2211
印刷・製本　株式会社明新社
〒630-8141　奈良県奈良市南京終町 3 丁目 464 番地
TEL0742-63-0661